

柏原市

大県郡条里遺跡 5

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年1月

公益財団法人 大阪府文化財センター

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第299集

柏原市

大県郡条里遺跡 5

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

本書は、当センターが柏原市法善寺4丁目で平成30年度から令和元年度に実施した寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大県郡条里遺跡の所在する柏原市は、大和川と石川が合流するところにあり、古来より交通の要所でした。遺跡の東側、生駒山西麓の扇状地には、多くの遺跡が立地しており、縄文時代早期より集落が営まれていました。古墳時代後期には平尾山古墳群が築かれ、府内屈指の鉄器生産遺跡であります大県遺跡、大県南遺跡で集落が営まれています。古代には、東高野街道に沿うように「河内六寺」と称される寺院が建立されて、その景観は華やかなものだったことでしょう。

当遺跡は、このような多くの遺跡が立地する扇状地と旧大和川水系である玉串川の自然堤防に挟まれた低地部に位置します。低地部は各時代の厚い堆積層で覆われており、あまり実態が分かっていないところでしたが、この多目的遊水地に伴う調査で、当センターの調査も今回で5次にわたるものとなり、過去の調査では縄文時代の河川や集落、古墳時代から奈良時代の用水路などが発見され、当時の環境を考える上でも重要な成果となりました。

また、大県郡条里遺跡はその名にあるように、条里型地割が現地表に良好に残る地域でもあります。調査では条里型地割にもとづく水田が平安時代中期に遡る事が分かり、その後の変遷も明らかになりつつあります。現在も隣接地で調査を継続しており、今後の成果に期待されるところです。

最後になりましたが、調査にあたり、地元の皆様をはじめ、大阪府都市整備部、八尾土木事務所、大阪府教育庁、柏原市教育委員会など関係諸機関、ご指導、ご助言を賜りました多くの方々に感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和2年1月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府柏原市法善寺4丁目地内に所在する大県郡条里遺跡18-1調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴い、大阪府八尾土木事務所から委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。

[発掘調査・整理作業]

受託契約名

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その5）発掘調査

受託契約期間 平成30年4月2日～令和2年1月31日

現地調査期間 平成30年4月2日～平成31年2月28日・平成31年4月1日～令和元年5月31日

整理期間 平成31年3月1日～平成31年3月31日・令和元年6月1日～令和元年10月31日

調査体制 平成30年度 事務局次長兼調整課長 岡本茂史 調査課長 三好孝一

調査課長補佐 亀井聡 副主査 三宮昌弘

平成31年度・令和元年度 事務局次長兼調整課長 岡本茂史 調査課長 岡戸哲紀

調査課長補佐 佐伯博光 副主査 三宮昌弘

4. 現場写真撮影は三宮が、遺物写真撮影は、中部調査事務所写真室がおこなった。
5. 整理にあたっては、出土木器6点に関し、以下の委託処理を実施した。
出土木製品保存処理（トレハロース含浸法） 株式会社 古環境研究所
6. 本書の執筆、編集は三宮がおこなった。
7. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
2. 座標は世界測地系を使用し、平面直角座標系第Ⅵ座標系に準拠する。座標単位は全てmであるが、図中では単位を省略している。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北に対して、磁北は6° 47′ 18″ 西へ、真北は0° 12′ 42″ 東へそれぞれ偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、調査区・遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後遺構の種類を標記した。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を1区は400分の1、2区は200分の1とし、遺構図を20分の1、40分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。また遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とし、打製石器は3分の2とした。
遺物図面は、須恵器・陶器・黒色土器は断面を黒色とし、瓦器・瓦質土器は灰色、磁器・土師器・弥生土器・縄文土器は白抜きとした。また打製石器の欠損部は、黒色とした。その他、漆付着範囲などをアミカケして示す。土器表面で調整境は0.5mm 開け破線、異種は一つ開け、同種は二つ開けとする。屈曲ラインは、鋭いものは実線、緩いものは1mm以上の二つ開き破線とする。
8. 本文中、既往の調査については、以下の報告書のものは調査・調査区・内容について、以下の略称で記載する。

大阪府教育委員会	2005	『大県郡条里遺跡確認調査概要』	略称：府教委試掘
(公財)大阪府文化財センター	2013	『大県郡条里遺跡』	略称：(その1)
(公財)大阪府文化財センター	2015	『大県郡条里遺跡2』	略称：(その2)
(公財)大阪府文化財センター	2016	『大県郡条里遺跡3・山ノ井遺跡』	略称：(その3)
(公財)大阪府文化財センター	2017	『大県郡条里遺跡4・山ノ井遺跡2』	略称：(その4)
9. 遺物番号は挿図のならびの通し番号であり、写真図版にも同一の番号を付与している。

目 次

序文／例言／凡例／目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と結果	1
第2節 調査・整理の方法	1
第2章 位置と環境	5
第3章 1区の調査成果	8
第1節 基本層序	8
第2節 各遺構面の調査成果	14
第1項 第2－4 a面	14
第2項 第3 a面	27
第3項 第4－1 a面	30
第4項 第5 a面	33
第5項 第6 a面	36
第6項 第7－1 a面	40
第7項 第7－4 a面	44
第8項 第9 a面	48
第9項 第10－1 a面	51
第10項 第11－1 a面	56
第11項 第12面	59
第4章 2区の調査成果	66
第1節 基本層序	66
第2節 各遺構面の調査成果	70
第1項 第3 a面	70
第2項 第4 a面	71
第3項 第5 a面	73
第4項 第7 a面	73
第5項 第8 a面	75
第6項 第10 a面	77
第7項 第11 a面	78
第8項 第12 b面	80
第9項 第13 a面	82
第5章 まとめ	84

報告書抄録／奥付

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図・地区割り図	2	図 25	1区第9 a面全体図	49
図 2	調査位置図	3	図 26	1区第9層出土遺物	51
図 3	遺跡分布図	4	図 27	1区第10-1 a面全体図	52
図 4	1区東・西壁断面図	15、16	図 28	1区第10-1 a面遺構断面図	54
図 5	1区北壁断面図	17	図 29	1区第10層出土遺物	56
図 6	1区南壁断面図	17	図 30	1区第11-1 a面全体図	57
図 7	1区第2-4 a面全体図	24	図 31	1区第12面遺構・第11層出土遺物	59
図 8	1区第2-4 b面遺構断面図	25	図 32	1区第12面全体図	61
図 9	1区第2-4 b層出土板材	26	図 33	1区第12面遺構断面図(その1)	62
図 10	1区第3 a面全体図	28	図 34	1区第12面遺構断面図(その2)	63
図 11	1区第3 a面遺構断面図	29	図 35	1・2区出土サヌカイト製石器	65
図 12	1区第3 a層出土遺物	30	図 36	2区北壁断面図	68
図 13	1区第4-1 a面全体図	31	図 37	2区東壁断面図	69
図 14	1区第4-1 a面63溝出土遺物	32	図 38	2区第3 a面全体図	71
図 15	1区第4層出土遺物	33	図 39	2区第4 a面全体図	72
図 16	1区第5 a面全体図	34	図 40	2区出土遺物	73
図 17	1区第5層出土遺物	36	図 41	2区第5 a面全体図	74
図 18	1区第6 a面全体図	37	図 42	2区第7 a面全体図	75
図 19	1区第6層出土遺物	39	図 43	2区第8 a面全体図	76
図 20	1区第7-1 a面全体図	41	図 44	2区第10 a面全体図	77
図 21	1区第7-1 a層～第7-3 a層出土遺物	43	図 45	2区第11 a面全体図	79
図 22	1区第7-4 a面全体図	45	図 46	2区第12 b面全体図	80
図 23	1区第7-4 a面遺構断面図	46	図 47	2区第12 b面遺構断面図	81
図 24	1区第7-4 a層～第8-2 b層出土遺物	48	図 48	2区第13 a面全体図	82

挿 表 目 次

表 1-1～5	1区断面図(図4～5)土色	18～22
表 2	1区と既往の調査の基本層序対照表	23
表 3	2区と(その1)調査区の基本層序対照表	70

写真図版目次

図版 1

- 1 1区第2-4 a面全景(南東から)
- 2 1区第2-4 b面 23 土坑断面(西から)
- 3 1区東壁断面第0~3 a層 17 土坑断面(西から)
- 4 1区西壁第4-1 a~6 a層(東から)
- 5 1区西壁第7-1 a~9 b層(東から)

図版 2

- 6 1区第3 a面北側全景(北東から)
- 7 1区第3 面全景(南東から)

図版 3

- 8 1区第4-1 a面全景(南東から)
- 9 1区第4-1 a面全景(北東から)

図版 4

- 10 1区第5 a面全景(北東から)
- 11 1区第6 a面中央付近耕作具痕(東から)

図版 5

- 12 1区第6 a面足跡・耕作具痕(東から)
- 13 1区第6 a面掘削具痕個別
- 14 1区第6 a面掘削具痕個別
- 15 1区第6 a面掘削具痕個別
- 16 1区第7-1 a面全景(南東から)

図版 6

- 17 1区第7-4 a面全景(南東から)
- 18 1区第7-4 a面北側全景(北東から)

図版 7

- 19 1区第9 a面南側残存部全景(北東から)
- 20 1区第10-1 a面全景(南東から)

図版 8

- 21 1区第10-1 a面北側全景(北東から)
- 22 1区第10-1 a面 145 ピット断面(西から)
- 23 1区第10-1 a面 140 溝断面(南東から)
- 24 1区第10-1 a面 143 ピット断面(南西から)
- 25 1区第11-1 a面 148 土器1 出土状況(東から)

図版 9

- 26 1区第11-1 a面北側全景(北東から)

- 27 1区第11-1 a面全景(南東から)

図版 10

- 28 1区第12 面北側全景(北東から)
- 29 1区第12 面全景(南東から)

図版 11

- 30 1区第12 面 158 溝断面(南東から)
- 31 1区第12 面 159 溝断面(南東から)
- 32 1区第12 面 186 溝断面(東から)
- 33 1区第12 面 176 流路断面(東から)
- 34 1区第12 面 162 土坑(南東から)
- 35 1区第12 面 167 ピット断面(南から)
- 36 1区西壁第10~12層 166 流路断面(東から)
- 37 1区西壁第10-1 a~12-1層

図版 12

- 38 2区第3 a面全景(南から)
- 39 2区第4 a面全景(南から)
- 40 2区第5 a面全景(南から)
- 41 2区第7 a面全景(南から)

図版 13

- 42 2区第8 a面全景(南から)
- 43 2区第10 a面全景(南から)
- 44 2区第11 a面全景(南から)
- 45 2区第12 b面全景(南から)

図版 14

- 46 2区第12 b面 236 土坑断面(南から)
- 47 2区第12 b面 238 溝断面(南西から)
- 48 2区第13 a面全景(南から)
- 49 2区北壁第2-4 a~7 a層(南から)
- 50 2区東壁第2-4 b~4 a層(西から)
- 51 2区東壁第5 a~9-2層(西から)
- 52 2区東壁第10 a~13 a層(西から)

(以下遺物、挿図通し番号)

図版 15-3・2・11・19・12・15・22・21

図版 16-36・37・38・41・31・23・44・45・59・67・

62・68

図版 17 - 72・74・79・80・84・81・86・132 (写真の
み)・94・104・98・101

図版 18 - 88・107 ~ 109・111・112・110・113・
114・116

図版 19 - 115・117・118・131・130・129

図版 20 - 125・123・122・127・120・119・126・
121・128・124

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

本調査は恩智川法善寺多目的遊水地の建設に伴うものである。恩智川法善寺多目的遊水地は、寝屋川流域総合治水対策事業の一つとして計画され、豪雨時に恩智川の水を計画的に貯留し、河川下流域の水量を調整し、平常時には公園などとして有効活用される。予定地は柏原市法善寺、八尾市神宮寺に位置し、恩智川東岸に沿う。約 114,000 m²と広範におよび、本調査地を含む大県郡条里遺跡、山ノ井遺跡にまたがる。そこで、平成 14 年度・15 年度の 2 カ年にわたり、大阪府教育委員会による確認調査がおこなわれた。確認調査では古墳時代～中世の遺構・遺物が確認されたのに加え、中世の包含層より、縄文時代や弥生時代前期の遺物が出土することから、下層にさらに古い遺構、遺物が存在すると予想された。

この成果を受け、公益財団法人大阪府文化財センター（以下「センター」と略称）では遊水地の建設に先立って平成 23 年 6 月 1 日から平成 24 年 11 月 30 日まで大県郡条里遺跡（その 1）発掘調査（センター 2013）、平成 25 年 4 月 10 日から平成 26 年 9 月 30 日まで大県郡条里遺跡（その 2）発掘調査（センター 2015）、平成 27 年 8 月 3 日から同年 11 月 9 日まで大県郡条里遺跡（その 3）・山ノ井遺跡（その 1）発掘調査（センター 2016）、平成 28 年 12 月 1 日から平成 29 年 2 月 21 日まで大県郡条里遺跡（その 4）・山ノ井遺跡（その 2）発掘調査（センター 2017）と 4 次にわたる発掘調査をおこなっている。

今回の調査地は大阪府柏原市法善寺 4 丁目地内に所在する。遊水地予定地南西端付近の本体部分 1,136 m²（1 区）と、遊水地予定地西辺北端の排水門建設予定部分 163 m²（2 区）の 2 カ所である（図 2）。

調査に際しセンターは、平成 30 年 4 月 2 日付けで、大阪府八尾土木事務所と「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その 5）発掘調査」として、委託契約を締結、大阪府教育委員会の指導のもと発掘調査をおこなうこととなった。

現地調査は平成 30 年 4 月 2 日～平成 31 年 2 月 28 日に 1 区を、平成 31 年 4 月 4 日～令和元年 5 月 31 日に 2 区をおこなった。平成 31 年 3 月 1 日～同年 4 月 3 日と、2 区の調査後令和元年 6 月 3 日～同年 10 月 31 日に整理作業をおこない、令和 2 年 1 月 31 日、本書の刊行をもって一連の調査は終了した。

第2節 調査・整理の方法

調査は当センターの『遺跡調査基本マニュアル』平成 22 年度版（以下「マニュアル」と略称）に準拠しておこなった。

当センターでは大阪府全域を統一基準で区画できるよう、世界測地系に基づく平面直角座標系第 VI 系を基準とした第 I～VI 区画の 6 段階の地区割りを設定している（図 1）。今回は 1 区が G 6-3-3 I・3 J（第 I～III 区画）の範囲にあり、2 区が G 6-3-3 H（第 I～III 区画）の範囲にある。

調査は盛り土と近世以降の層を重機で掘削し、それ以下は人力で掘削、遺構の検出、遺物の収集をおこなった。1 区では主要遺構面 3 面でクレーンによる写真測量を実施し、遺構全体図は、50 分の 1 縮尺（100 分の 1 縮小編纂図）で図化した。その他の遺構面は平板測量で全体図を作成した。個別遺構や遺物出土状況図は、10 分の 1 縮尺で手実測をおこなった。4 級基準点は 1 区際に 2 点設置し、そこ

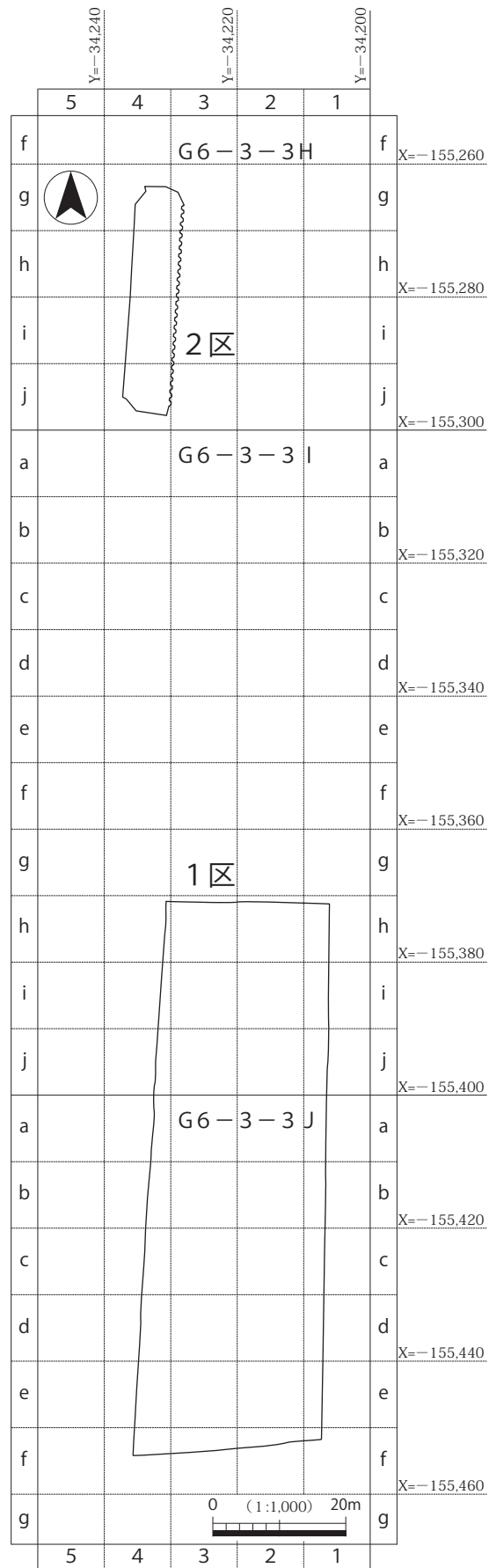
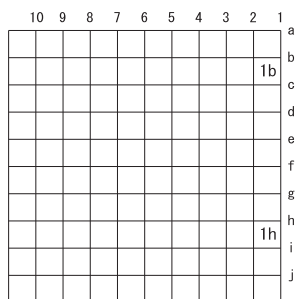
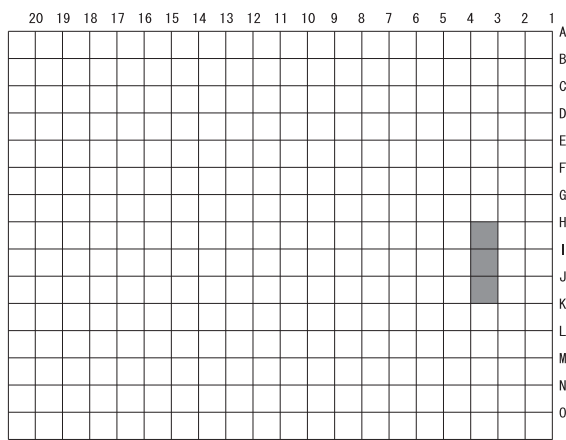
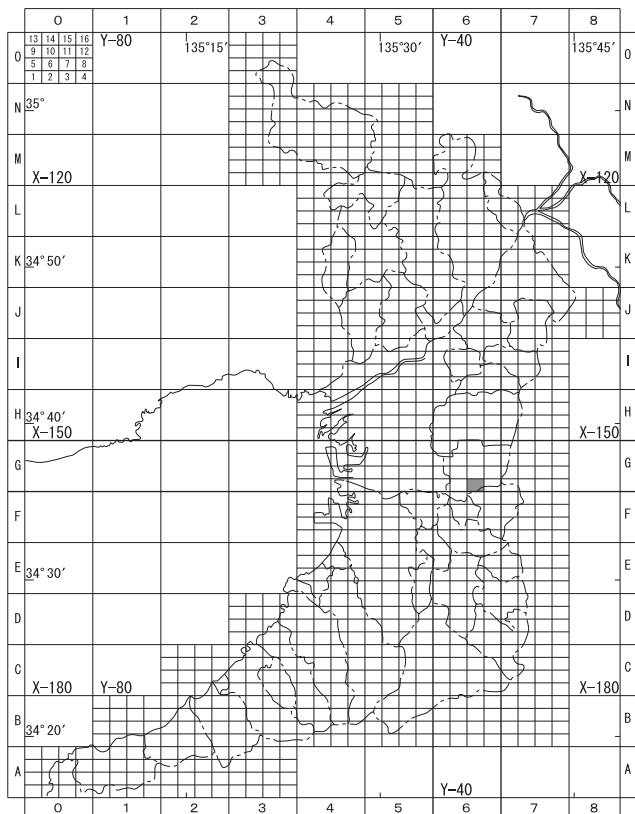


図1 調査区配置図・地区割り図

から調査地内に基準杭を設定した。平板測量・手実測は、それら基準杭を使用した。出土遺物は層ごとに取り上げ、登録番号を付与した。また調査期間中現場詰所にて、遺物洗浄・注記作業等の基礎的な整理作業を並行して実施した。土層断面図は、1区では調査区東西南北四周の壁面で、2区では調査区北壁面と東辺矢板際に設定したセクション壁面で作成した。各壁面で分層・写真撮影・実測・土質記載をおこなった。水準測量の際に用いた標高はT.P.値（東京湾平均海面）で、北は全て座標北を示す。

各遺構面全景・土層断面・遺構などの写真は中型カメラ（6×7、白黒）・35mmカメラ（白黒・カラーリバーサル）・デジタルカメラを用いて、調査担当者が撮影した。全景写真は高所作業車を使用した。

遺構名の記載方法は、通し番号を付与し、「遺構番号（アラビア数字）－遺構種類」とした。遺構番号100番の遺構が土坑なら、遺構名称は「100土坑」となる。

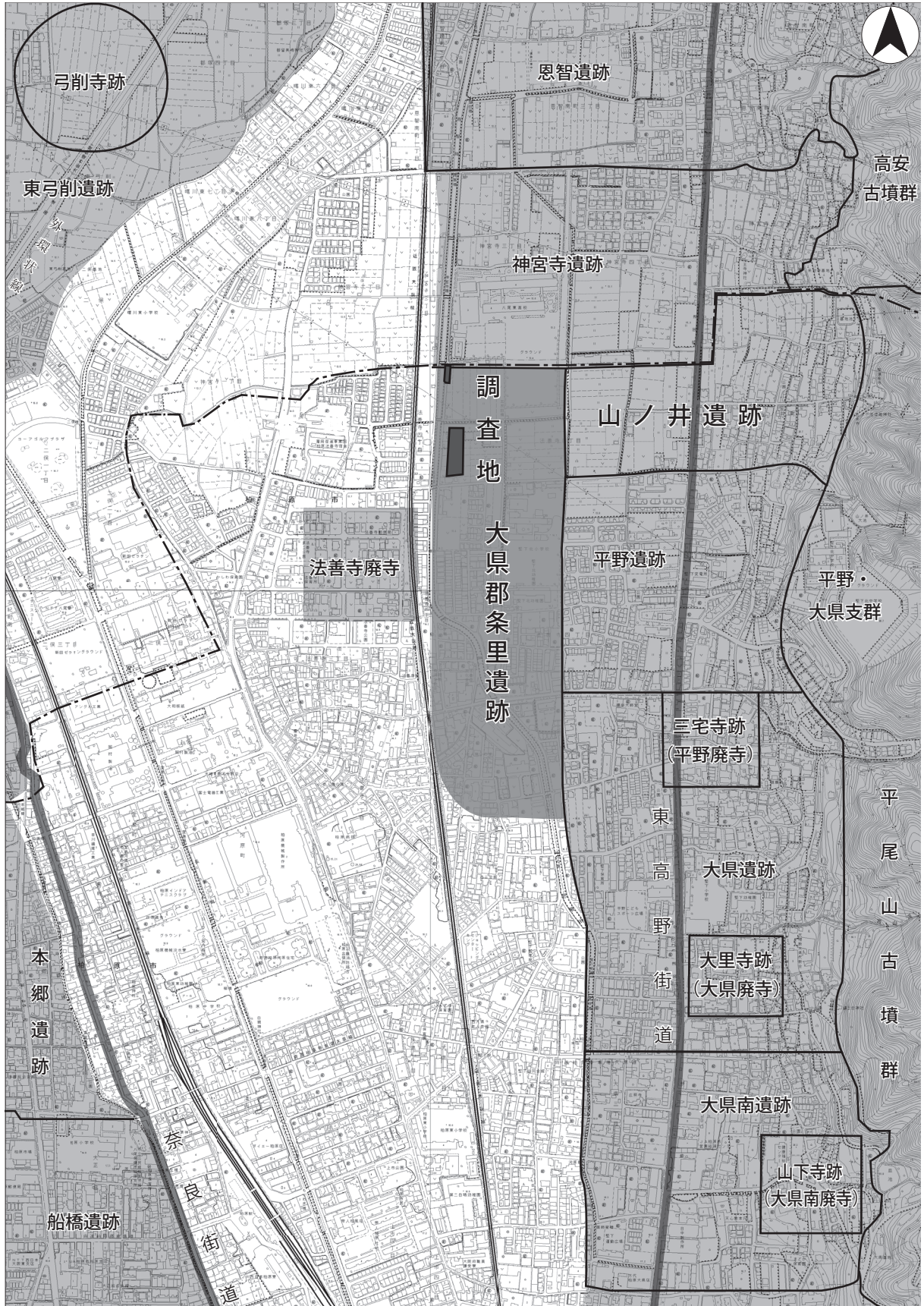
現地調査は令和元年5月31日に完了した。最終調査面積は1,299㎡である。発掘調査期間中ならびに1区・2区の発掘調査終了時には、適宜大阪府教育庁文化財保護課の立会を受けた。

図面台帳・遺物登録台帳・写真台帳は、マニュアルに準拠して作成した。遺物は洗浄・注記後、接合・石膏復元をして、重要・図化可能なものを選別し、実測図を作成し、レイアウト・トレースをおこない遺物図面を作成した。遺構面・遺構・断面の図面も整理・編集・トレースをおこない図面を作成した。実測対象遺物の一部は、写真担当職員が撮影し、選定した現場写真と共に編集し報告書の写真図版とした。以上を経て、調査担当者が原稿執筆・編集をおこない調査報告書を作成した。木器類の内、重要性和脆弱性を考慮して6点を選別し、株式会社古環境研究所に委託して保存処理をおこなった。

最終的に遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外とに分類して収納した。なお掲載遺物は、基本的に報告書記載の遺物番号順に収納している。



図2 調査位置図



大阪府地図情報システムの地図データをもとに加筆。

0 (1:10,000) 500m

図3 遺跡分布図

第2章 位置と環境

大県郡条里遺跡は柏原市の北端、八尾市との市境から南側の柏原市法善寺2・4丁目から平野1丁目に所在する遺跡で(図3)、大和川と石川の合流地点から約1.8km北に位置している。

現在の大和川は宝永元年(1704)年に付け替えられたもので、それ以前は玉串川・長瀬川・平野川などに分岐し中河内地域を北流していた。長瀬川と玉串川に分岐点は当遺跡の西側600mほどで「二俣」の地名が残る。長瀬川・玉串川は自然堤防がよく発達し、両岸で幅300mはある微高地を成している。

遺跡の東側の生駒山地西麓には、流下する小河川により形成された扇状地が南北に連続している。遺跡付近の扇状地扇端部は、現地形では東高野街道(旧国道170号)西側付近である。

遺跡の南半を蛇行し、北半西辺を北流する恩智川は、元々は生駒山地から流下した幾つもの小河川が集まり北へ流れる河川であったのだろう。遺跡南半までの蛇行は自然河川の趣を残す。しかし、遺跡北半では、戦後の流路改修以前は、遺跡北端から一つ南の坪境で直角に曲がり、東へ2坪行き、また北側に直角に曲がり、3坪分北上した後、北西に斜めに伸び現流路に戻っていた。その形は条里型地割に合わせた人工河川となっている。

また、遺跡から北に1kmほどでは、古い恩智の集落がのる扇状地が大きく西に張り出し、西からは玉串川が東に蛇行する。恩智川は恩智の扇状地と玉串川の自然堤防の間、幅100m足らずの部分抜けていく。遺跡は恩智川沿いで、生駒山地西麓の扇状地と玉串川の自然堤防に挟まれた低地に立地し、北側に狭隘部があるため、時として排水不良となるような立地といえる。

遺跡周辺では東の扇状地帯と西の自然堤防上に多くの遺跡が存在している。

当遺跡南東の柏原市大県遺跡では、縄文時代早期の押型文土器や石器が出土、縄文時代後期には集落の存在が推定される。縄文時代後期末～晩期前半にも東高野街道付近に集落がある。当遺跡北東の八尾市恩智遺跡でも恩智川沿いで縄文時代前期～後期の遺物が出土し、恩智神社御旅所「天王ノ杜」周辺では晩期中葉～末葉の土器が多く出土し、扇状地上に集落があったようだ。

当遺跡では(その1)調査区で、縄文時代後期後葉～晩期中葉の流路が検出され、流路埋積層上面でほぼ完形の縄文時代晩期中葉の浅鉢が出土している。縄文時代晩期末葉には(その2)調査区で竪穴建物らしき遺構が確認され、集落が存在していたようである。

弥生時代に入ると恩智遺跡が、前期から後期に至るこの地域の拠点的な集落として位置づけられる。恩智遺跡の東端付近の山地では、外縁付鈕式流水紋銅鐸と扁平鈕式袈裟襷紋銅鐸が出土している。

弥生時代中期～後期には八尾市神宮寺遺跡・柏原市大県遺跡など、生駒山地西麓に恩智遺跡を中核として集落分布が広がる。弥生時代後期には高尾山山頂遺跡に高地性集落が現れる。

一方、当遺跡から南西700m、玉串川を隔てた本郷遺跡では、弥生時代後期後半に集落があり、その南の船橋遺跡は弥生時代前期～後期の土器が出土し、弥生時代を通し集落が存在した可能性が高い。

当遺跡では、弥生時代中期・後期の土器片が確認されるが、少量である。(その1・2)調査区で検出された溝群の一部が弥生時代に遡る可能性が指摘されるが、根拠は薄い。

古墳時代初頭の庄内式期には、当遺跡北西500mの東弓削遺跡を含む「中田遺跡群」が、大集落であった可能性が高く、庄内式土器を生産し、各地に搬出していたと考えられる。

古墳時代中期～後期には、大県遺跡の集落が最盛期を迎える。隣接する柏原市大県南遺跡を含めて、鍛冶工房や鍛冶関連遺物が多く出土し、また韓式系土器が多く出土することから、鉄器生産に関わる渡来系鍛冶技術者集団の集落と考えられている。なお、大県南遺跡ではガラス玉の鋳型も出土し、鉄器以外の生産もおこなっていた事が分かる。

生駒山地には巨大な群集墳である平尾山古墳群が形成される。その平野・大県支群ではかんざしやミニチュア炊飯具など渡来系集団と関わりの深い副葬品と、鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土し、大県遺跡との関連が指摘されている。

当遺跡では、古墳時代前期の遺物は少なく、古墳時代中期～後期の遺物が一定数出土するのは大県遺跡・大県南遺跡との関連であろう。先述の溝群の多くは古墳時代のものとされるが、確定はできない。弥生時代から古墳時代の当遺跡は集落周辺地域の様相であり、耕作地の存在も不明である。

当遺跡は古代の行政区画では大県郡大里郷に属する。大県郡は大和川と石川の合流点の北側に広がっていた。合流点は水運だけでなく、大津道に比定される長尾街道、長岡京遷都以降南海道となった東高野街道、渋河路に比定される奈良街道などが交わり、古くから交通の要衝の地であった。

飛鳥・奈良時代には生駒山地西麓に多くの寺院があり、『続日本紀』天平勝宝八年（756年）2月条には、孝謙天皇の「河内六寺」行幸の記事がある。「河内六寺」とは鳥坂寺、家原寺、智識寺、山下寺、大里寺、三宅寺である。鳥坂寺は「鳥坂寺」の墨書のある10世紀初頭の南河内型椀の出土から高井田廃寺に、家原寺はその位置関係から安堂廃寺に、智識寺は推定地東に残る観音寺が「天冠山智識寺中門」と号する事などから太平寺廃寺に、山下寺は「山下脊川」の墨書がある10世紀の南河内型土師器椀が出土した事から大県南廃寺に、大里寺は「大里寺」と墨書がある土師器把手付き鍋が出土した事から大県廃寺に、ほぼ確実に比定される。それらの創建年代も出土瓦などから7世紀後半頃と考えられている。しかし、三宅寺は平野廃寺に比定する説以外に、法善寺廃寺説・教興寺説など諸説あり、平野廃寺自体も度重なる調査でも寺院の存在は確認できず、推定範囲と異なる位置にあるとの説もある。

当遺跡の恩智川対岸には法善寺廃寺（法禪寺跡）がある。創建年代不明だが、平安時代には大伽藍があり、14世紀後半の兵火で焼亡した。現在はその地に元和3年（1617年）創建と伝わる壺井寺がある。境内の観音堂本尊の銅造菩薩立像は飛鳥時代後半のもので、地元では「避雷観音」と呼ばれる。

南西の船橋遺跡では飛鳥Ⅱ期のガラス小玉鋳型・漆壺・鉄滓・鞆の羽口などが出土した建物群があり、船橋廃寺創建時の工房ではないかと推測されている。また、東弓削遺跡では奈良時代の火葬墓・土葬墓で、「卍」を線刻した須恵器小壺の副葬が確認されている。

当遺跡でも少ないながらも古代の瓦・漆の付着した土器・刀子の木型などが出土し、寺院との関連と考えられる。ただ、東側で一番近い寺院跡である平野廃寺は存在自体が不明確である。（その1・2）で検出された放射状に広がる溝群は、ほぼこの時期のものではないかと考えられる。

遺跡周辺の神社は、河内国二宮である恩智神社から南に、常世岐姫神社（八王子神社、神宮寺）、若倭姫神社（山ノ井）、若倭彦神社（平野）、鐸比古鐸比賣神社（ぬでひこぬでひめ、大県）、石神社（太平寺）、二宮神社（ふたみや、安堂）と、生駒西麓の扇状地上にならぶ。特定の古代の「氏」集団との関連がありそうなものもあるが、実態は明確ではない。現在の、ほぼ一つの町域に一つの割合で神社が見られる形は近代以降に各町で整備されたものようである。

調査地周辺は条里型地割が現代の土地区画に良く残るが、坪境がやや乱れるものが意外と多い。遺跡付近の南北方向坪境は北方向が東に振るが、東に直線的に走る東高野街道とは角度が異なる。さらに東

西方向坪境は、東方向がやや北に振る。つまり、一つの坪は正四角形ではなく菱形になる。当遺跡より広い範囲で、このやや歪な条里型地割は広がるが、(その3・4)の調査で坪境の移動が指摘され、地割施行以後の変形の可能性もある。文献での大県郡条里関連の語句は、「日本紀略」寛平元年(889年)に「大県郡大丸岐山小野三百町」とあり、承平7年(937年)の「信貴山寺資材帳写」に「大県郡山上二条」とあるが、文献上の「町・条」などの記載と、実際に現地に条里型地割があるかは別の問題である。

院政期白河法皇の北面の武士となった源康季は大県郡坂門牧を本拠とした文徳源氏の一流坂戸源氏で、坂門牧は雁多尾畑一带に比定される。康季は康和6年(1104年)先述の法禅寺に大般若経を奉納し、興国4年(1343年)その子孫の源康政は「大方郡家原里」の田地を観心寺(現河内長野市)に寄進している。南北朝の頃には神宮寺氏・恩智氏などの国人・地侍層が台頭し、恩智神社参道南側の山腹には、楠正成に従った恩智左近の城と言われる恩智城跡が遺構を残す。

中世では、大県南遺跡で土坑墓が検出されており、山下寺跡の調査では14世紀の掘立柱建物や土坑などが検出され、寺院の廃絶後に集落が営まれていることが分かる。神宮寺遺跡でも室町時代の井戸やピットが、山ノ井遺跡では整地層らしき土層が確認されるなど、集落の一端が分かりつつある。

低地部では当遺跡を含めた法善寺多目的遊水地の調査で耕作地の変遷が把握できる。対象地のほぼ全域で中世の遺物が確認されており、加工木も洪水堆積層に多く含まれている。近い位置に集落が存在し、そこから遺物が流されてきたと考えられる。中世末頃、洪水砂の堆積が増加し、その処理が行き詰まり、耕作地の一角に積み上げ、それを畑として利用する島島が成立する。

その後も、大和川旧流路の水害は深刻で、延宝2年(1674年)の洪水では、二俣の玉串川河口法善寺前二重堤が決壊し、その後、玉串川流域の洪水が多発・広域化した。それも一つの契機となり、大和川の付け替えが計画され、宝永元年(1704年)完成を見る。

洪水後の耕作地復旧のため、貴重な水田の一部を潰して畑とした島島は、当遺跡ではその後も近世に拡大するが、今回の調査でも第2-2・3層の島島拡大を大和川付け替え以前、再び平坦化が進行する第2-1層以上を大和川付け替え以降と想定する事も可能かも知れない。島島は近世に拡大して木綿栽培に利用され、その河内木綿は良質な商品作物として名声を博し、木綿の花咲く島島は河内の名勝として知られるようになる。

第3章 1区の調査成果

今回の調査では、1区と2区が、70m強離れるだけでなく、条里型地割では南北の異なる坪に位置し、恩智川旧流路の右岸・左岸に分かれ、さらに2区は縄文時代流路が埋積した微高地上に立地し、1区はその流路が切り込む、水平堆積が繰り返されてきた基盤層の上に立地しているという違いがある。

そのため、今回は両調査区の調査成果を別々の章立てで報告する事とする。

第1節 基本層序 (図4～6、図版1-4・5、11-36・37、表1・2)

既往の調査では、氾濫堆積層とその上部の耕作土層を含む土壌化層をセットとして層序を述べる例が多い。耕作土層を含む土壌化層をa層とし、直下の氾濫堆積層をb層と表す事を基本とする。今回もそれに従い、(その3・4)調査区(以後、既往の調査の「調査区」を略す)との連続を重視した。

今回は氾濫堆積層だけでなく、止水堆積層を含む水成堆積層と、それらを利用した盛り土・整地土・洪水後の復旧作業時に攪拌された層もb層とした。それらの堆積・形成後は、層内に包含遺物が追加されない事を重視した。耕作土層は、形成後も耕作期間は遺物が包含され続ける点を重視してa層とした。畦畔などの遺構も、どの面での検出かよりどの耕作土層に伴うかが重要で、層が耕作土として機能した期間を「第○層時点」とする。また、古土壌層は堆積層ではなく、土壌化の進行で遺構の切り込みが失われる事があり、層包含遺物に、上面遺構の遺物が含まれる可能性がある。また、上面遺構が下面でしか検出できない事もある。それを重視して、耕作土層に準じてa層とした。また、確定できないものはa・bを層名に付さない。既往の調査の基本層序とのつながりも考察したが、堆積層の質や数は部分によりかなり異なる(表2)。だが、1区の位置する坪内の代表的な基本層序を把握する事はできたとと言える。

なお、1区の土層断面図は、調査区の四周東西南北の壁面で実測した。ただし、緩い傾斜の法面で、断面図上、遺構が歪む事や、上部が断面にない遺構が切り込む事もある。さらに、表層水の流入や、地下水の浸出が激しく、特に東壁は常にほぼ全面が濡れている状況であった。そのため、堆積層と似た埋土の遺構、特に小畦畔などは、確認できていない場合も多い。西壁は水の浸出が比較的少なく、断面図実測も遺構面検出後に実施したので、断面での遺構の検出が比較的容易であった。遺構と層序の関連を確認するには西壁面を主に参考していただきたい。

以下に1区の基本層序を述べる。既往の調査の層名は鍵括弧を付して記す。遺構面は層の上面を層と共通した名称とする。枝番号やa・bを付して分けた層を一括して言う場合は「第○層」とする。

第0層 現代の耕作土層である。北側にはその上に住宅盛り土が南北幅12mほど残されていた。

第1層 第1a層は、上部が10YR7/4にぶい黄橙色、その下は2.5Y5/2暗灰黄色の粗砂混じり細砂質シルトの耕作土層である。南側ではやや砂質が強まり、2.5Y5/3黄褐色の粗砂混じりシルト質細砂となる。

第1b層は2.5Y6/1黄灰色の中砂～細砂で一部ラミナ残るが、人為的に攪拌され、洪水堆積由来の整地土層である。厚さは5cm強ほど。(その3・4)では堆積時の構造を保ち最大厚90cmほどあった。

第1b面切り込み遺構で、南北方向に長い溝状土坑が東西に密集して並ぶ土坑群を2カ所で確認した(図7・図版1-1)。深さは第2-4b層まで達する。これらの土坑を「1b土坑」と通称しておく。

第2層（その1）ではa層が4層に分かれ、（その3・4）では基本2層、一部3層に分かれるとされ、その下に厚い洪水堆積層の「第2b層」があるとされる。a層はいずれも砂質であった。

1区では機械掘削の際北側で、三つ重なる第2a層の下で（その3・4）「第3面」と同じ高さに上面が酸化鉄で染まる粘質土層が現れ、南に進むとその下から砂層が立ち上がり次第に高さを増した。下の砂層が従来の「第2b層」と判明し、粘質土層を第2-4a層、直下の砂層を第2-4b層とした。

第2-1a層はわずかに粗砂の混じる2.5Y5/3黄褐色シルト質細砂で、平坦に堆積する耕作土層で、幾つかの段差を経て南に高くなる。対応するb層は部分的に薄く砂層が残る。

第2-2a層は2.5Y5/3～5/2黄褐色～暗灰黄色シルト質細砂である。島畠耕作土層として残るのはこの層がほとんどで、水田部分でも質が変わらない。この層成立時に拡張された島畠盛り土に砂層があり、それが第2-2b層となる。断面で層内に染付があるのが確認でき、近世以降の層である。

第2-3a層は2.5Y5/1～5/3黄灰色～黄褐色の細砂質シルトの耕作土層で、第2-4a層より砂質である。島畠間で第2-4a層上に累積する水田耕作土層だが、北端付近にはない。また、南端付近高所では第2-4b層直上のにり、畝立てがある。この層成立時点での島畠拡張盛り土の砂層や、一部砂層が第2-4a層直上を覆うものなどが第2-3b層である。この層が中世か近世かは確認できていない。

第2-4a層は上面が酸化鉄で7.5YR5/6明褐色に染まり、層自体は2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混じり細砂質シルトの水田耕作土層である。第2層内では粘質である。北側一帯と島畠間水田部分にのみ残り、第2-4b面が高い南側にはない。この層直下では第2-4b層が掘り込まれ、ややシルトを含む砂で埋め戻されている。それらの幅広溝状の土坑を「2-4b土坑」と通称しておく（図版1-2・3）。

この層上面から平面的調査を開始した。ただし、第2-4b層が立ち上がる島畠部分は上部に近世の耕作土層しか遺存していない事から、この層上面と同じ高さまで機械掘削をおこなった。結果として北側ではT.P. + 12.6m、南側ではT.P. + 13.0mほどの検出レベルとなった。

検出時に1b土坑群埋土を分別して掘削した結果、第2-4a層には近世遺物はなかった。包含遺物量は少ないが、それより土量も遺物量も少ない1b土坑群底部付近埋土の包含遺物でも近世後期の遺物があるので、第2-4a層が中世の水田耕作土層である事はほぼ確実と言える。中世末期16世紀頃か。

第2-4b層は10YR6/8～2.5Y7/3明黄褐色～浅黄色の中砂～細砂を主体とする洪水堆積層である。厚さは島畠基部として削り残された部分では50cm弱ほどある。最下部は厚さ5cmほどの灰色シルト層となる。他にその砂層を利用した島畠盛り土や整地層も第2-4b層とした。包含遺物に近世のものはなく、土師器小皿の特徴などから、中世末期、16世紀前半頃の堆積と推測される。

以上、第2層は層の累積状況は（その1）とほぼ一致する。ただし色・質は若干異なり、（その1）の方が各層粗い粒子が多い。（その3・4）では第2-4a層がなく、部分的に三つに分かれる「第2a層」も最下層が1区第2-3a層と同層かは不明である。しかしその「第2b層」と1区の第2-4b層は同一層として問題なく、第2-1・2a層も共通する。

第3a層 5Y5/1灰色のわずかに中砂を含む細砂質シルトの耕作土層である。第2-4b層最下部のシルトに覆われる。上面はほぼT.P. + 12.4mで極めて平坦である。15世紀後半頃の耕作土か。第4a面にわずかに細砂の入る人・牛の足跡が認められ、南側の溝群にも砂が入る。それが第3b層となる。

（その1）では「第3a層」が3層、最下に細砂のb層がある。（その2）「第1層」に当たる。これらが1区第3a層に相当する。（その3・4）の同じ坪内の「第3a層」は1区と共通する。

第4層 二つに分かれる a 層とその下で上半細砂、下半シルトの b 層からなる。

第4-1a層は 10Y4/1 灰色中砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。第4-2a層は 10Y4/1～10GY4/1 灰色～緑灰色中砂混じりシルトの耕作土層である。これらもおおよそ 15 世紀後半頃の耕作土層と推測される。

第4-2b層は上部が 7.5Y6/2～10BG5/1 灰オリーブ色～青灰色細砂、下部が細かい植物遺体を含む 5B3/1～10GY5/1 暗青灰色～緑灰色シルトで、洪水堆積層である。下部のシルト層には踏み込みが見られるが、それは上部砂層上面からのものである。第4-2a層は入らず、その層を作る復旧作業時の踏み込みであろう。下部シルト層上面に土壌化痕跡はなく、上下とも一回の洪水で連続した堆積である。

第4-2b層は(その3)では「第5層」とする。一旦断面観察から「自然堆積層」と考えたが、下部シルト層上面に足跡があったので、その面が地表面の可能性があると考えたようである。しかし上述のとおり、上下連続した洪水堆積層で、踏み込みは上部砂層上面からである。(その4)では第4-2b層と直下の砂層をまとめて「第5b層」とする。その直下の砂層とは今回第5層とした層で、残りが悪いが最上部に耕作土層があり畦畔などが検出されている。(その4)「第5a層」は第4-2a層の可能性もあるが部分的で、坪境周辺の遺構埋土にも思える。(その1)「第4層」、(その2)「第2層」が質は異なるが第4-1・2a層に対応する。ただし第4-2b層に比定できる層はない。

第5層 一見、全体で一つの洪水堆積層のようだが、最上部の砂粒の多い a 層と二つの b 層に分かれる。

第5a層は 10Y4/1 灰色細砂質シルトの耕作土層で、5Y6/2 灰オリーブ色細砂のブロックを含む。厚さは 5 cm 前後の部分が多く、砂層上部の土壌化のように見えるが、上面で畦畔・溝などが検出された。

第5b-1層は一見短いラミナが散在する砂層に見えるが、5Y6/2 灰オリーブ色細砂と 10Y4/1 灰色細砂質シルトの 1～3 cm のブロックからなり、ブロック内にラミナの残るものもある。直下の第6a面に切り込む耕作具痕・人・牛の踏み込みも多く、それらが下面を激しく凹凸する形状にしている。洪水後耕作土復旧の際に、下層の耕作土を採掘するため攪拌した作業の痕跡と推測される。

第5b-2層は第5層最下部で、耕作具痕や踏み込みの間に部分的に残る。10Y6/1～5/1 灰色で平行ラミナの残る細砂～中砂の洪水堆積層である。この層の残る部分は下面の乱れがない(図版1-4)。

第5a層が耕作土として機能した期間は 15 世紀前半頃か。

(その3)には第5層に対応する層はない。(その4)では先述の「第5b層」下部である。(その1)では第6a層直上層で「第5a層」が比定できるが、質は異なり b 層もわずかである。(その2)では上からの順では「第3層」となるが、暗色の粘土～シルト層で炭酸カルシウムの結核があるなど、(その1)「第6a層」と似た質で、つながりがよく分からない。後述の第6a層との比定も考えると、(その2)では「第3-1層・第3-2層・第4層」がこの層序付近に入るとしか言えない。

第6a層 わずかに細砂を含む 5B3/1 暗青灰色シルトの層で、耕作土層と思われる。この層以下はシルト～粘土主体の粘質土層がほとんどで、砂質土の層はわずかとなる(図版1-5)。

上面は激しく凹凸する。既往の調査で地震変形とする例があるが、第5項第6a面で後述するように人・牛の足跡・耕作具痕などの人為的な攪拌である。それでも層厚 20cm 以上の部分が多く、2層ほどの耕作土層が重なっていた可能性もある。時期は限定しにくいだが、14～15世紀頃であろう。

(その3・4)「第6a層」がつながるが、上面の凹凸を(その3)では地震変形と推測し、(その4)では「水稻耕作に伴う踏み込みに由来」と考えている。この構造は(その1)「第6a層」上面にもあり、

地震変形の可能性がある」とされる。だが、耕作土復旧作業として同時期になされた作業の痕跡である。(その2)では、(その1)「第6a層」につながるとされる「第4層」では「下位が地震のため下層とマーブル状に混交する。」上面は「微砂の流入があり、上層との境が明確である。」とされ、疑問が残る。「マーブル状に混交」が上述の第6a面の凹凸と同じなら、(その2)「第5層」が同じ層と比定できる。報告書で「第5層」出土の15世紀代の完形土師坏(皿としている)を「混入」とするが、完形なので「第5面」遺構内遺物の可能性がある。ならば、時期的にも(その2)「第5層」は1区第6a層に近い。

各調査区の層上面の高さは、1区でT.P. + 11.8 ~ 11.9m、(その1)でT.P. + 11.5 ~ 11.6m、(その2)でT.P. + 11.3 ~ 11.4mとなるが、遺跡周辺の地勢としては自然である。

第7層 a層は四つあるが、b層らしきものもある。最下には南側のみ砂層のb層が広がる。

第7-1a層は5B4/1 ~ 5Y4/2 暗青灰色~灰オリーブ色細砂質シルトで、わずかに中砂・細かい植物遺体を含む耕作土層である。下面にまばらに細砂の入った足跡が見られ、それが第7-1b層になる。

第7-2層は10Y4/1 灰色中砂混じりシルトで炭酸カルシウムの結核が上半部に多い。中砂が混じるのは耕作土層的だが、長さ10cm以上の植物遺体・加工木があり、層厚が部分的には30cmを越える事などから水成堆積層の可能性も大きい。今回はその上下面の調査をしていないので結論は出せない。

第7-3層は10Y4/1 灰色細砂混じりシルトで、細砂は層内に均等に混じるが、その量は南側が多いなど直下層の砂粒の含みに似て、巻き上げの可能性もある。また、第7-4a面の畦畔が頂部の削平を受けていない事などから、洪水堆積層の可能性が強いが、上面の調査をしておらず、結論は出せない。

第7-4a層は第7-4b層の存在する南側では2.5GY4/1 ~ 5Y4/1 暗オリーブ灰色~灰色粗砂混じりシルト質細砂の耕作土層で、第6a層以下で唯一砂質のa層となる。だが、第7-4b層の途切れる第7-4a面99・101畦畔以北は、耕地区画毎に粘質となり、北端では直下の第8-1a層より粘質である。しかしわずかに粗砂は混じる。南から順にダッシュを付し、四つに分類した。

第7-4b層は5B5/1 ~ 7.5Y7/2 青灰色~灰白色粗砂~細砂で、洪水堆積時の構造を保つ部分はほとんどなく、かなり人為的に攪拌されているようである。調査区南側にのみ遺存する。

第7層は上層より包含遺物が若干増える。それらから、第7-1a~3層は13世紀前葉から14世紀前半頃、第7-4a層は12~13世紀初頭頃の耕作土層と考えられる。

(その3)「第7-1a~2a層」が1区第7-1a~3層に対応する。第7-4a層対応層はない。「第7-2b層」が第7-4b層に対応する。(その4)「第7-1a~2a層」が第7-1a~3層に対応するが、「第7-3a層」は「オリーブ黒色細砂~粗砂」で第7-4a層対応の可能性が高い。第7-4b層に対応するのは「第7-3b層」だが、遺構埋土にしか遺存しない。(その1)「第7a層」が南側で「第7b層」を伴い上下層より砂質が強く、第7-4a層対応の可能性が高い。しかし、第7-1a~3層に対応する層はない。(その2)では(その1)「第6・7層」の続きが分別できない「同一層」の「第4層」となるとするが、(その2)「第4・5層」は(その1)と対応がとれていないとしか言えない。質も高さも異なる。上層までの検討では1区第7層全体は2区「第5層」より下位のはずである。

第8層 第8-1a層は5GY4/1 ~ 7.5Y4/1 暗オリーブ灰色~灰色中砂混じり細砂質シルトの耕作土層で、わずかに粗砂が混じる。

第8-2a層は5B4/1 ~ 7.5Y4/1 暗青灰色~灰色粗砂混じりシルトの耕作土層で、1区南端付近には遺存しないが、第9a面が北に下がり始める付近から第8-1a層直下にあり、以北には全面的に残る。

第8-2b層は10BG5/1 青灰色細砂混じりシルトで、第9a層が侵蝕で失われた北側や侵蝕痕内に

第9a層とほぼ同じ高さで堆積する。粒子の淘汰は悪いが水成堆積層と考えられる。しかし、第9a層を侵蝕する洪水堆積物としては細粒で、侵蝕痕が溝状になる部分にも砂層はない。第9a面検出時にはこの層を第9a層の一種と認識し、層上面を検出したが、畦畔などの遺構が検出されず、本来の第9a層の残存部の輪郭が不定形な事などから水成堆積層と判明した。

今回の調査では、第8層で平面的調査をしなかったが、最古の条里型地割を踏襲した第9a面と、第7-4a面の地割の差は大きく、結果的には面的調査をする必要があったと言える。

層の時期は、第8-2b層の堆積が11世紀前葉頃、第8-1a層が耕作土として機能していた期間が11世紀後半～12世紀頃と考えられる。

(その3)「第8層」は a層が粗砂層を挟んで分かれる部分や「粗砂～細礫」の「第8b層」が部分的にあるなど、質も1区と異なる。むしろ東隣坪(その3)「2区」の「第8a層」が1区に近い質である。坪境付近で部分的な堆積が多いのか(その4)調査区も似た状況である。(その1)では青灰色「細砂混じり粘質シルト」の「第8a層」1層のみである。質的には第8-2b層に近いが畦畔が上面で検出された耕作土層で、第8-1a層に対応すると考えられる。(その2)では(その1)「第8・9層」が「第5層」に対応するとされるが、高さも質も異なる。対応不明である。

第9層 第9a層は小礫が若干混じる10GY5/1 緑灰色粗砂混じり粘土質シルトの耕作土層で、粘質の高い中に粗めの砂粒が混じる。北側や東壁沿いは侵蝕で遺存せず、第8-2b層が堆積している。

第9b層は5Y6/3～5/1 オリーブ灰色～灰色細砂混じり粗砂質中砂の洪水堆積砂層で、第9a層直下のみ遺存する。堆積時の構造は崩れ、上面から踏み込まれた砂粒を埋土とした足跡が第10a面に多く残る。洪水後の耕作土復旧作業時のものであろう。

第9層は瓦器出現以前と考えられ、第10層が10世紀初頭頃の遺物を包含し10世紀前半頃と考えられるので、第9a層が耕作土として機能していた期間は10世紀後葉～11世紀前半頃と考えられる。

(その3・4)では「第9a層」・「第9b層」が対応するが、b層の遺存度は低い。(その1)「第9-1a層」・「第9-2a層」は植物遺体を多く含むなど1区と異なる。また、瓦器を包含し、12世紀前半まで下る。1区第9a層に合うのは「第9-2a層」で、「第9-1a層」は第8-2a層と対応する可能性がある。(その2)では「第5層」が(その1)の「第8・9層」に対応するとされ、2層に分かれるとされる。その「第5層下層」がほぼ第9a層に対応するものと思われる。

第10層 第10-1a層は10GY4/1 暗緑灰色粗砂混じり細砂質シルトの耕作土層である。上面は第9b層上面踏み込みの足跡や第8-2b層の侵蝕でやや荒れ、小畦畔の頂部は失われていた。

第10-1b層は5Y6/4～10GY4/1 オリーブ黄色～暗緑灰色シルト混じり中砂質粗砂で第10-1a層直下に散在する足跡などに若干残された洪水由来の砂層である。

第10-2a層は10GY4/1 暗緑灰色粘土質シルトで、層内に細砂～中砂の降下、植物の根の痕跡がある。第10-2b層上部が土壌化した部分で、耕作による攪拌はない。

第10-2b層は10BG4/1 暗青灰色シルト質粘土で、わずかに炭化物・微小な植物遺体を含む。北側は厚さ10cmほどだが、南側は厚さ40cm近い。ラミナもなく、級化構造もないので徐々に堆積した止水堆積と思われ、一定期間水域化した可能性もある。下面は南下がりなのに上面はやや北下がりである。

包含遺物のほとんどは第10-2b層から出土した。最新の遺物は9世紀末～10世紀初頭頃のもので、1区の最古の条里型地割耕作土層である第10-1a層は10世紀前葉～中葉頃のものとして推測される。

(その3)「第10a層」が第10-1a層に対応する。しかし1区の坪内では層途中で調査限界深度に達する。(その4)「第10a層」は場所により質が異なるが第10-1a層に対応する。(その1)「第10層」は「10-1a層」と「第10-2a層」に分けられ、質は1区に似るが色はかなり違う。「第10-2a層」はブロック土混じりで第10-2a層には対応しない。整地土層か。最古の条里型地割が検出されている点で、第10-1a層に「第10-1a層」が対応する。第10-2b層に対応する層が(その1)にないのは、立地が微高地上だからだろう。遺跡内でも水域化した部分としなかった部分があったと考えられる。(その2)では「第6層」が(その1)「第10層」に対応するとされるが、下の「第7面」でも条里型地割が検出されており疑問である。「第6層」に10世紀末～11世紀初頭頃の遺物があるのも1区第10-1a層より時期的に新しい。最古の条里型地割の耕作土層で、9世紀遺物を含む「第7層」が対応するだろう。

第11層 粘質の強い黒色帯となる自然土層で、a層は二つに分かれる。

第11-1a層は細砂～中砂をわずかに含むN4/0～3/0灰色～暗灰色シルト質粘土である。黒色帯といっても色が薄い。団粒状構造が発達し、層内の遺構はほとんど見えないが、幾つかの流路(侵蝕痕)の切り込みは断面で確認できる。しかし、第11-1a面で輪郭を迫る遺構は第10-2b層を埋土としたもののみであった。上面遺構が大部分埋没した後も土壌化が進行し、その後冠水状態で第10-2b層が堆積して上面から砂粒・シルトが降下し、有機分が溶脱し、明色化したと考えられる。

第11-2a層はN3/0～2/0暗灰色～黒色シルト質粘土で第11-1a層より黒みが強い。層内に植物根痕が多くある。遺構の切り込みはほとんど見えず、層下面より深い遺構のみが下面で確認できる。

2層に分けたが、土壌化層なので時期の違いはない。包含遺物も切り込みが失われた遺構の遺物の可能性がある。縄文時代～古墳時代後期の遺物を含むが、南に行くほど新しい時期のものがない傾向がある。第11層は縄文時代晩期～古墳時代後期の非常に長い間に発達してきた古土層層といえる。

(その3)では東隣坪に「第11-1a層」・「第11-2a層」があるが、その層は西に下がり、1区の坪内では調査深度内にない。粒子はやや粗いが「黒色の帯として認識できる」とされ、1区第11-1a層・第11-2a層に対応する。奈良時代の遺物を含み、1区でも直上層に奈良時代の遺物があるので、第11-1a面の下限が奈良時代まで下る可能性もある。(その4)で部分的にある「第11a層」は明色過ぎたり、上に細砂の薄層がのるのが疑問だが、高さは第11-1a層に対応する。(その1)で黒色帯となる層は「第11a層」・「第12a層」の二つで、同じ古土層層である事や、色・質の点で第11-1a層・第11-2a層に対応する。「第11a層」が奈良時代の遺物を含むのが逆に、第11-1a面の下限が奈良時代まで下る証左となる。(その2)では「第7層」が(その1)「第11a層」に対応とするが、「第8-1層」が(その1)「第11a層」に対応し「第8-2・3層」が(その1)「第12a層」に対応するだろう。

第12層 原則的には第11-2b層と呼ぶべきだが、上面が調査最終面となった事と無遺物層である事などから第12層とした。確認できた範囲内では2層に分かれる。

第12-1層は5BG5/1青灰色シルトで生痕内への第11層の降下が激しい。生痕はほとんどが草本植物根痕で、木本植物らしき太いものも混じるが、動物の巣穴などはない。下部に細砂～中砂が混じり、第12-2層と堆積の途切れがあるようだが生痕のため不明確である。水成堆積層である。

第12-2層は10GY5/1緑灰色の細砂混じりシルトで、第12-1層よりかなり生痕が減り、若干酸化鉄の沈着がある事で分けられる。しかし上面が地表化した痕跡はない。

両層で50cm以上の厚さで、側溝掘削の限りでは無遺物層、風化も激しく、古い堆積と判断し、層上面で平面的調査を終了した。面の高さは北側でT.P. + 10.7mほど、南側でT.P. + 10.3mほどである。

(その1)では縄文時代流路に侵蝕されながら調査区南側に「第15a層」以下暗色帯を挟む水平堆積の連続が残る。1区ではその状況が高い位置まで残り、最上部が第12層だと推測され、「第12b層」は色・質共に第12層に酷似する。その下、縄文時代流路埋没後の「第13-1a面」で完形に近い縄文時代晩期中葉の浅鉢が出土している。1区第11層最古の土器片は縄文時代晩期末葉であり、そこまで遡らない。縄文時代流路埋没後、1区第12層と(その1)「第12b層」が同一層として堆積した可能性も残る。

1区では調査後、遊水地計画底面まで機械掘削がおこなわれた。おおよそT.P. + 9.5mの深さである。詳細な観察は不可能だったが、第12面以下は3層の暗色帯を挟む水平堆積が重なり、計画底面付近は低湿地的な黒色粘土質シルト層があった。少ない見聞ではあるがやはり無遺物であったようである。

基本層序まとめ

1区付近では低湿地的な堆積が繰り返された後、やや南下がりの地表面が形成され、その面は縄文時代晩期末葉～奈良時代という長期間存続し、分厚い土壌層が形成される。それが第11層である。

その後、一時的に水域化し、その時の堆積でわずかに北下がりの面が形成され、そこに条里型地割が施行される。しばらく洪水規模は小さく、中砂以上が堆積するのも第9b層・第7-4b層程度で、南側の一部に限られる。第9a面の侵蝕の形からも、洪水堆積物は南側から来ている事が分かる。

その次の面期は第5b層堆積である。洪水堆積は粒子も粗く、厚くなる。また、広範囲に広がるものが増える。南北壁断面からは幾つかの洪水堆積層は西から来たと分かる。恩智川の天井川化が進行し、そこから直接的に洪水が来るようになったのだろう。対する耕作地の復旧は第5層時点で洪水砂の下から耕作土を掘り上げる努力がなされる。その後の洪水堆積砂層もほとんどが復旧時に攪拌される。

最大の洪水堆積は第2-4b層で、そこで遂に一部水田復旧を諦め、水田復旧部分で除去した砂を盛上げ、小高い畑地とする「島島」の成立を見る。

第2節 各遺構面の調査成果

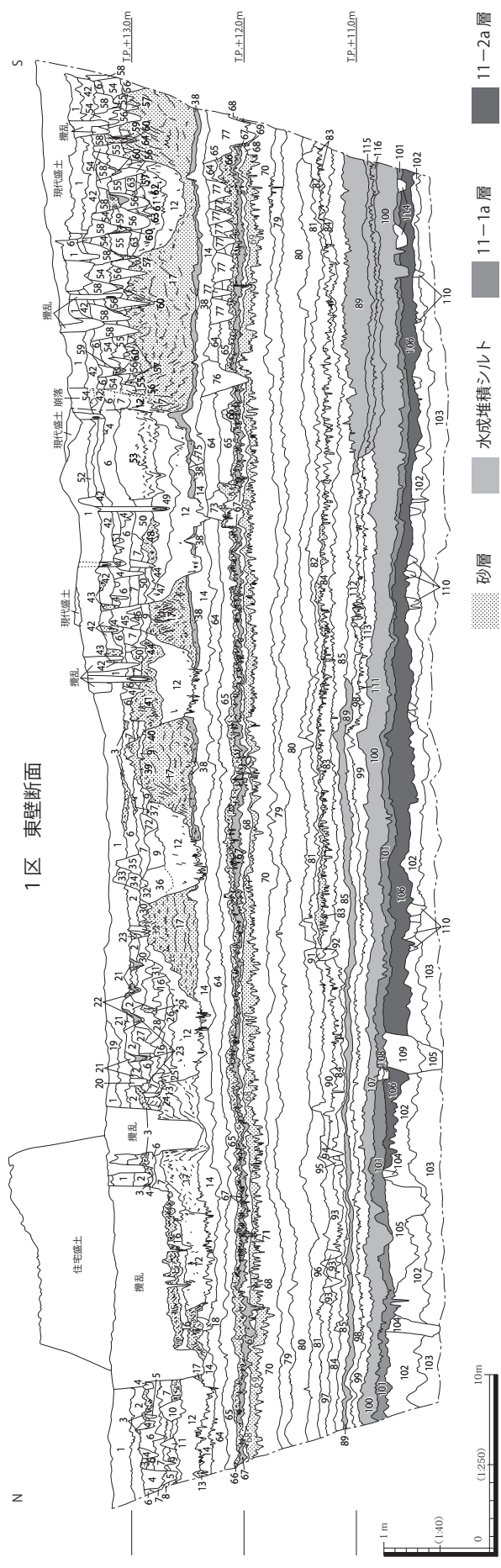
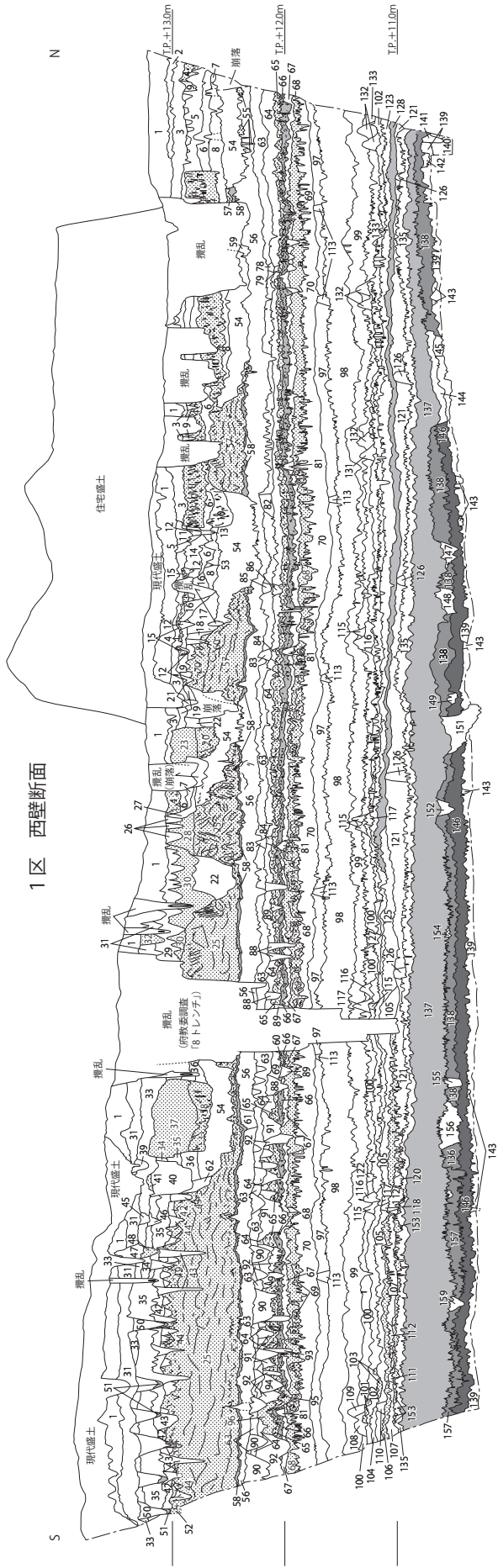
第1項 第2-4a面(図7、図版1-1)

今回中世に遡る面であると分かり、同時に当遺跡の島島出現も中世からである事が明らかになった。島島は第2-4b層の洪水砂層を削り残し、さらに砂を積み上げるが、上部に残る耕作土層はほとんどが近世耕作土層の第2-2a層であり、機械掘削時は残る第2-4a面の高さまで削平した。しかし19「1b土坑」群より南は第2-4b面に多数の溝があったので、削平せず検出した。

1・19「1b土坑」群 第1b面切り込みの南北に長い溝状土坑が、東西に密集してならぶ土坑群がこの面まで残り、南北2カ所で検出した。どちらも第2-4a層を掘り抜き2-4b層に達して止まる。

1「1b土坑群」は幅0.8～1.2m、長さ9.4～9.9mの土坑が0.2～0.5mの間を空けて並ぶ。埋土は第1b層由来の中砂～粗砂にわずかに耕作土のブロックも混じる。2畦畔・9畦畔間に位置するが、第2-2a層成立時削平の7島島上も通るので、第2-2a層時点以降の水田部分に掘られていると分かる。

19「1b土坑」群は幅0.8～1.4m、長さ5.5～6.1mほどの土坑が0.3～0.7m間隔で並ぶ。埋土は1「1b土坑」群と同じ。第2-4b面35土坑直上に第2-4a層がある水田部分に位置する。



砂層
 水成堆積シルト
 11-1a層
 11-2a層

図4 1区東・西壁断面図

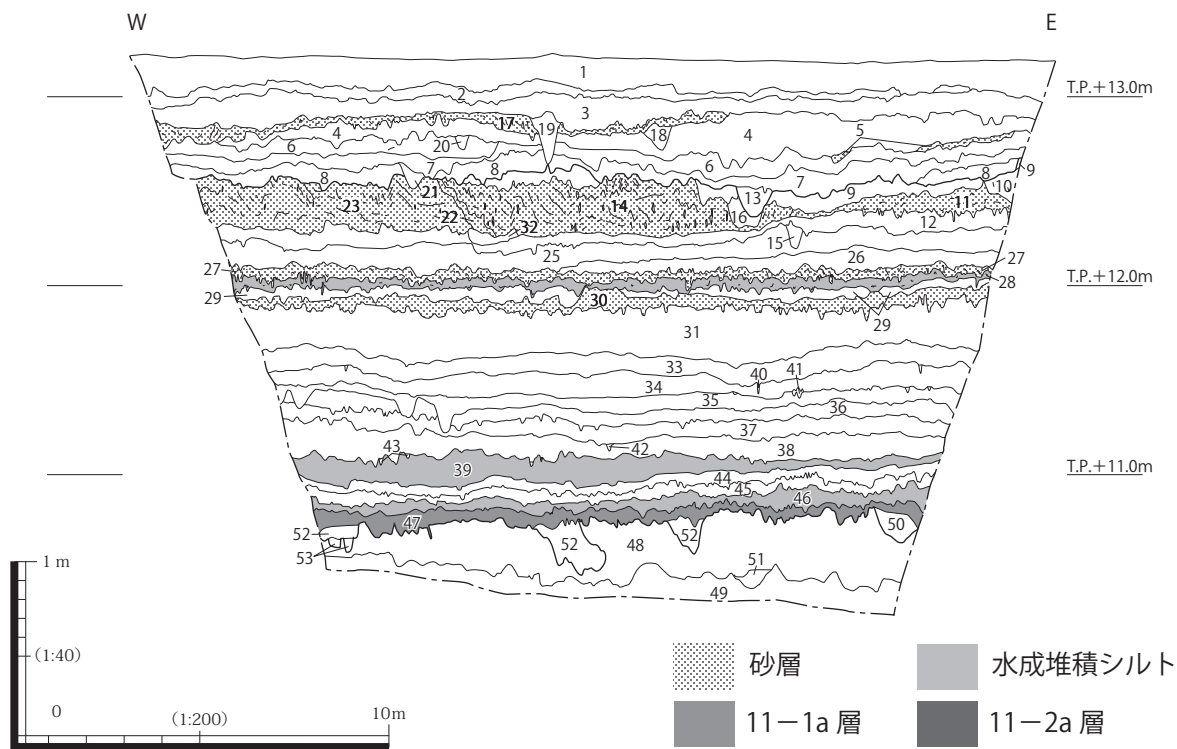


図5 1区北壁断面図

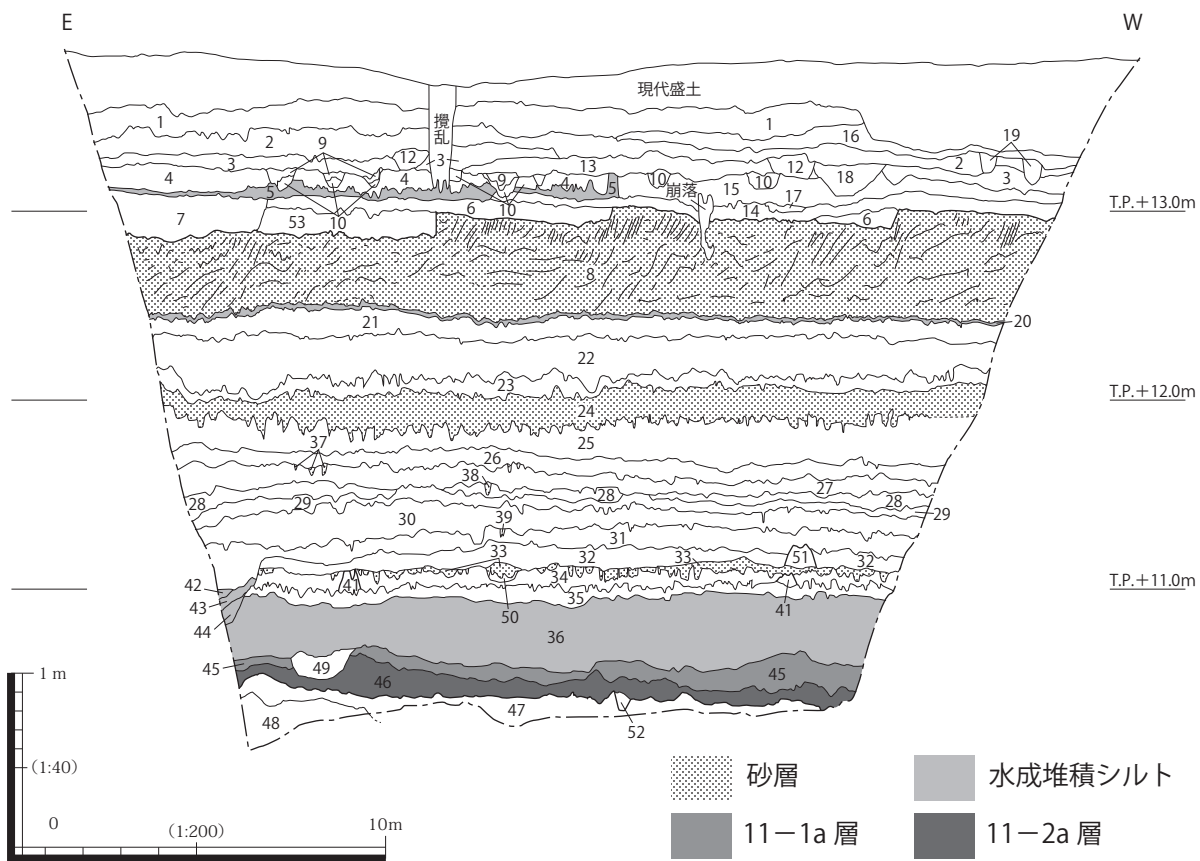


図6 1区南壁断面図

1区 西壁断面土色 - 1

- 1 2.5Y3/1 ~ 4/1 黒褐~黄灰 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、下部に2のブロック若干あり。0層。
- 2 10YR6/6 ~ 6/4 明黄褐~にぶい黄橙 細砂~粗砂混じりシルト 数枚の薄層に分かれる。0層床土。
- 3 10YR7/4 にぶい黄橙(上部) 2.5Y5/2 暗灰黄(本体) 粗砂混じり細砂質シルト。上部Feあり、Mn粒若干あり。1a層。
- 4 5Y7/2 灰白 シルト~細砂 ラミナあり。洪水堆積、1b層。
- 5 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、Fe斑あり、Mn粒わずかにあり。耕作土、2-1a層。
- 6 2.5Y6/2 灰黄 中砂混じり細砂質シルト 中砂わずか、Fe斑あり、5より粘質。耕作土、2-2a層。
- 7 5Y5/2 灰オリーブ シルト質細砂 Fe斑あり。耕作土、2-3a層。
- 8 7.5YR3/2 ~ 5/6 黒褐~明褐(上部) 大部分は2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じり細砂質シルト 2-4a層、耕作土。
- 9 5・2・1のブロック(5が多い) 1a層下面遺構。
- 10 上半2.5Y7/3 ~ 6/2 浅黄~灰黄 下半7.5YR3/2 ~ 10YR7/3 黒褐~にぶい黄橙 中砂~細砂 乱れたラミナあり。2-4a層上面近くから下にFe濃い。「1b土坑」埋土、人為的な流し込み。東壁の15に同じ。
- 11 3のブロック。
- 12 2.5Y7/3 浅黄 細砂混じりシルト Fe・Mn斑あり。
- 13 10YR6/1 褐灰 粗砂混じりシルト質細砂。溝8埋土。
- 14 10YR6/2 灰黄褐(一部7.5Y6/2 灰オリーブ) 粗砂混じりシルト質細砂 Fe斑あり、2~5cmのシルトのブロック若干あり。2-1層時点島島拡張盛土。
- 15 4とほぼ同質だが直下の12と共に1a層下面の遺構埋土。
- 16 「5Y6/2 灰オリーブ シルト質細砂」内に「2.5Y6/4 にぶい黄 細砂質シルト」の1~4cmのブロック、Fe斑あり。2-2層時点島島拡張盛土。
- 17 「2.5Y6/2 灰黄 細砂質シルト」のブロック(3~7cm)の間に中砂。Fe斑あり。2-4a層時点島島拡張盛土。
- 18 「10YR6/4 にぶい黄橙 細砂質シルト(にぶい黄橙) Feあり」の3~6cmのブロック間に「5Y6/2 灰オリーブ 中砂~シルト」2-4a層時点島島盛土。
- 19 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂混じりシルト質細砂 Mn粒あり。2-4a層時点島島盛土?
- 20 7.5YR5/6 明褐~2.5Y7/4 浅黄 中砂~細砂 ラミナあり、Feあり。洪水堆積、2-4b層(新) 島島拡張契機。
- 21 19のブロック。
- 22 2.5Y6/2 灰黄 シルト混じり細砂質中砂 ラミナなし、1cmほどの「2.5Y6/1 黄灰 シルト~細砂」のぼやけたブロックあり。「汚れた砂」2-4b面切込溝状土坑埋土。54と同じ。
- 23 2.5Y7/3 ~ 5/3 浅黄~黄褐 中砂~細砂 ラミナなし、Mn若干あり。島島拡張盛土(2-4a層時点)。
- 24 5Y6/2 灰オリーブ(部分的に10YR5/4 にぶい黄褐) 中砂~細砂 一部ラミナあり。人為的か、17土坑埋土。
- 25 20と同色・同質。2-4b(古) 57と同層。
- 26 19のブロック。
- 27 10YR5/3 ~ 5/2 にぶい黄褐~灰黄褐 中砂混じりシルト質細砂 Mn粒、Fe斑あり。2-4a層時点島島当初側面盛土。
- 28 2.5Y6/4 ~ 4/3 にぶい黄~オリーブ褐 中砂~細砂 Mn粒・Mn斑多し。島島盛土。
- 29 2.5Y5/3 黄褐 中砂混じりシルト質細砂 Mn・Fe斑あり。2-1a層?(畑の畝溝の切り合い?)耕作土。下部形状から多くの遺構切り合いと思われるが、切り込みは見えず。南隣の2-4a時点島島と同じ高さになる。2-2a層時点で、これより南側が段差上がりの平坦地となる(大型の島島?)。
- 30 2.5Y6/6 ~ 5/4 明黄褐~黄褐 中砂~細砂 Feあり、Mn斑若干あり、ラミナなし。整地盛土(2-4a層以後、2-1a層以前?)。
- 31 2.5Y6/2 ~ 5/2 灰黄~暗灰黄 粗砂混じりシルト質細砂 南側1a層(北側と違い、2層系より砂質)。
- 32 2.5Y5/3 黄褐 中砂~細砂 有機物含むか。1a面遺構。
- 33 2.5Y5/3 黄褐 シルト質細砂 わずかに粗砂あり、Fe・Mnあり。2-1a層、耕土層。
- 34 2.5Y5/3 ~ 5/2 黄褐~暗灰黄 シルト質細砂 Fe・Mnあり。2-2a層、耕土層。
- 35 「2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト質細砂」の5~12cmのブロック間に「2.5Y6/2 ~ 7/1 灰黄~灰白 中砂~細砂」あり。2-2b層、整地土。
- 36 5Y5/1 灰(上面7.5YR4/6 褐) 細砂質シルト 粗砂わずかにあり。上面Fe多くMn粒あり。2-4a層、耕作土。
- 37 10YR6/2 ~ 5/4 灰黄褐~にぶい黄橙 中砂~細砂 わずかに粗砂あり、Fe・Mnあり、ラミナなし。「1b土坑」埋土上部。
- 38 10YR6/1 ~ 5/6 褐灰~黄褐 中砂~細砂 わずかに粗砂あり、部分的にFeあり、乱れたラミナあり。「1b土坑」埋土下部(流し込み)。
- 39 31(1a層)のブロック。1a面遺構。
- 40 35とほぼ同質。ブロックが7~30cmと大きく、砂が多い2-2面遺構。
- 41 2.5Y7/2 灰黄 中砂 2-1b層(洪水堆積?)。
- 42 2.5Y5/1 ~ 5/3 黄灰~黄褐 細砂質シルト Fe・Mn若干あり。36より砂質。耕作土。2-3a層。
- 43 42と同質、切り合いのみ見える。畝溝。2-3a面。
- 44 42と同質、若干25の砂混じる。鋤溝。2-3a層下面(2-4b面)。
- 45 33のブロック。
- 46 34のブロック。
- 47 31のブロックと粗砂~小礫。1a層~0層時点畦畔盛土。
- 48 2.5Y7/1 灰白 粗砂~細砂 ラミナなし。2-1a面遺構?
- 49 34(2-2a層)・35(2-2b層)の混濁。2-2a層床面遺構。
- 50 31・32の7~15cmのブロックと「2.5Y7/1 灰白 中砂~細砂」1b面遺構(畝溝?)。
- 51 2.5Y6/1 黄灰 シルト Fe斑若干あり。1b面遺構(畝溝?)。
- 52 2.5Y5/1 ~ 5/3 黄灰~黄褐 シルト混じり細砂質中砂。1b遺構(畝溝?)。
- 53 2.5Y6/2 灰黄 シルト質細砂 Fe斑あり。
- 54 「2.5Y5/1 黄灰 中砂混じりシルト質細砂」内に「10YR7/4 にぶい黄橙 中砂~細砂」の1~4cmのブロックあり。人為的埋土(洪水砂由来)、「2-4b土坑」埋土。
- 55 10YR7/4 にぶい黄橙 中砂~細砂 洪水砂、主に足跡に入るか。
- 56 5Y5/1 灰 細砂質シルト わずかに中砂あり、Fe斑(管状?)あり。3a層。
- 57 10YR6/8 ~ 2.5Y7/3 明黄褐~浅黄 中砂~細砂 ラミナあり。洪水堆積、2-4b層。
- 58 N5/0 ~ 4/0 灰 シルト ラミナあり。2-4b層。
- 59 56内に57のブロック(1~12cm)あり。29溝埋土。
- 60 19・18の混濁。
- 61 5Y5/1 ~ 5/2 灰~灰オリーブ 中砂混じり細砂質シルト。36溝埋土。
- 62 25内に「5Y5/2 灰オリーブ 細砂質シルト」の3~10cmのブロック。2-4a層時点段差面盛土。
- 63 北壁断面の25に同じ。4-1a層。耕作土。
- 64 10GY4/1 暗緑灰 細砂質シルト わずかに粗砂あり、Fe斑(管状?)あり。4-2a層、耕作土。
- 65 7.5Y6/2 ~ 10BG5/1 灰オリーブ~青灰 細砂~シルト ラミナあり。4-2b-1層、66と同時の洪水堆積。
- 66 5B3/1 ~ 10GY5/1 暗青灰~緑灰 シルト~細砂 細かい植物遺体あり、ラミナわずかにあり。4-2b-2層 65と同時の洪水堆積。
- 67 10Y4/1 灰 細砂質シルト 「5Y6/2 灰オリーブ 細砂」の1cmのブロックわずかにあり。5a層 耕作土。
- 68 「N4/0 灰 シルト」と「5Y6/2 灰オリーブ 細砂」の1~3cmのブロック。5b-1層 人為的攪拌層。(69由来)。
- 69 10Y6/1 ~ 5/1 灰 細砂~中砂 ラミナあり。5b-2層、68の攪拌を免れた洪水砂層。
- 70 北壁断面の31に同じ。6a層 耕作土層? 上面、足跡(牛・人)・掘削具痕多し(火炎状構造ではない)。
- 71 5B4/1 ~ 5Y4/2 暗青灰~灰オリーブ 細砂質シルト わずかに中砂あり、わずかに細かい植物遺体あり。7-1a層、耕作土層。97と同層(北側)。
- 72 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト Caの結核上半にあり、締まりよし。7-2層、水成層? 98と同層(北側)。
- 73 10Y4/1 灰 細砂混じりシルト 80より軟。7-3層、水成層? 99と同層(北側)。
- 74 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト 粗砂若干あり。南の7-4b層(133)よりさらに粘質、しかし粗砂は少しある。むしろ下の8-1a(37)の層が砂質。7-4a層 耕作土。
- 75 5GY4/1 ~ 7.5Y4/1 暗オリーブ灰~灰 中砂混じり細砂質シルト わずかに粗砂あり。8-1a層、耕作土層。102と同層(北側)。
- 76 5B4/1 ~ 7.5Y4/1 暗青灰~灰 粗砂混じりシルト。8-2a層、耕作土層。123と同層(北側)。
- 77 10BG5/1 青灰 細砂混じりシルト 8-2b層、混濁した洪水堆積。128と同層(北側)。
- 78 63とほぼ同質、切り合いのみ見える。43畦畔盛土。(4a面検出、4-1a併存)。
- 79 64とほぼ同質、切り合いのみ見える。畦畔盛土(4-2a層併存)。
- 80 68内に67の2~5cmのブロック若干あり。5a面溝埋土。
- 81 67・68・70のブロック、5a層内畦畔盛土。
- 82 ほぼ63に同じ。若干細砂多し。畦畔盛土?
- 83 56のブロック間に細砂。4-1a層内畦畔盛土。
- 84 57のブロック間に細砂。4-2a層内畦畔盛土。
- 85 56・63の混濁。4-1a面溝(45溝)埋土。

表1-1 1区断面図(図4~5)土色

1区 西壁断面土色 - 2

- 86 63・64の混濁。4-2 a面溝埋土。
 87 67・68・70のブロック。
 88 63内に64～67の2～4cmのブロック若干あり。4-1 a層床面溝？
 89 64～66の混濁。4-2 a層床面溝？
 90 63の3～6cmのブロック間に「2.5Y7/3～6/6 浅黄～明黄褐 粗砂～中砂」若干あり。4-1 a面溝埋土（南側の溝群。畝溝ではない）。
 91 63・64の3～7cmのブロック間に64・68の砂混じる。4-1 a層下面遺構。
 92 91より砂多し、特に下半分。
 93 「5Y6/1 灰 細砂～中砂」内に66・67の3cm前後のブロック若干あり。4-2 b-1面遺構埋土。
 94 「10YR5/8～6/3 黄褐～にぶい黄橙 粗砂～中砂」内に「5GY5/1 オリーブ灰 シルト」の5～11cmのブロック若干あり。4-2 b-1面遺構埋土。
 95 「2.5GY5/1 オリーブ灰 細砂」内に「5GY5/1 オリーブ灰 シルト」の凸凹激しいラミナあり。4-2 b-1面遺構？
 96 「10YR6/6～10YR7/2 明黄褐～にぶい黄橙 中砂～粗砂」内に「7.5GY5/1 緑灰 シルト」の1～4cmのブロック、下部にラミナ。4-2 b相当整地土。
 97 7.5Y4/1 灰（酸化 5Y4/2 灰オリーブ）シルト 細砂若干あり。7-1 a層、耕作土層。
 98 10Y4/1 灰（酸化 2.5Y4/3 オリーブ褐）下部、粘土質シルト、上部シルト 逆級化あり、Caの結核中にあり、わずかに粗砂あり。止水堆積？7-2層。
 99 N4/0 灰（酸化 7.5Y4/1 灰）細砂混じり粘土質シルト 粗砂～中砂若干あり、わずかに部分的にラミナあり。7-3層、泥流状に混濁して堆積した洪水堆積？
 100 5Y4/1 灰 粗砂～中砂混じりシルト 北に行く程砂多く「粗砂～中砂混じりシルト質細砂」になる。7-4 a層、耕作土層。
 101 2.5Y7/3～4/2 浅黄～暗灰黄 シルト混じり中砂～粗砂 102の9 a層の1cm前後のブロックあり。7-4 b層、洪水砂と一部人為的攪拌層。
 102 7.5Y4/2～4/1 灰オリーブ～灰 細砂質シルト 中砂わずかにあり。ブロック状構造あり。8-1 a層、耕作土層。
 103 5Y6/2 灰オリーブ 中砂～細砂 8-1 b層、洪水砂の残り。
 104 7.5Y4/1 灰 シルト 粗砂～中砂わずかにあり。8-2 a層、耕作土層。
 105 10GY5/1 緑灰 粗砂混じり粘土質シルト 小礫若干あり。9 a層、耕作土層。
 106 5Y6/3～5/1 オリーブ黄～灰 細砂混じり粗砂質中砂 小礫若干あり。9 b層、洪水砂。
 107 10GY4/1 暗緑灰 粗砂混じり細砂質シルト 10-1 a層、耕作土層。
 108 100（7-4 a）・101（7-4 b）のブロック 畦畔盛土。
 109 100のブロック状構造、下部に大型植物遺体（木の枝）多し。畦畔盛土。
 110 105内にわずかに106のブロック。畦畔盛土。
 111 ほぼ107と同質、切り合いのみ見える。畦畔盛土。
 112 10GY5/1 緑灰 粗砂混じり細砂質シルト 下部に砂礫多し。
 113 ほぼ97と同質、若干土壌化強い。畦畔盛土。
 114 5Y7/2 灰白 細砂。
 115 100とほぼ同質、ブロック状構造、畦畔盛土。
 116 100と101のブロック。畦畔盛土。
 117 102とほぼ同質、ブロック状構造、畦畔盛土（8-1 a層時点）。
 118 105とほぼ同質、畦畔盛土。
 119 5Y6/3～5/1 オリーブ黄～灰 粗砂～細砂 溝内流水堆積。（9 b面、10 a面上洪水後の水抜き溝？）
 120 107・121に似る、砂粒の混じりは両者の中間、畦畔盛土。
 121 10GY4/1 暗緑灰 細砂質シルト 10-1 a層、耕作土。
 122 100とほぼ同質、やや細砂多い、切り合いのみ見える。7-4 a面溝？
 123 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト 粗砂～中砂若干あり（9 a層からの巻上げか）。耕作土、8-2 a層。
 124 115・116の混濁。
 125 10GY5/1 緑灰 粗砂混じり粘土質シルト 105（9 a層）に似るが小礫なく砂粒もより少ない。9 a層の二次堆積か。
 126 121（10-1 a）とほぼ同質、切り合いのみ見える。畦畔盛土。
 127 100（7-4 a）とほぼ同質、細砂やや多し。7-4 a面遺構？
 128 5B5/1 青灰 粘土質シルト わずかに細砂～中砂あり。8-2 b層、水成堆積。
 129 5Y7/3 浅黄 細砂 7-1 b層、洪水砂の残り。
 130 5Y4/1 灰 中砂混じりシルト 粗砂若干あり。7-4 a'層、99・101畦畔をはさみ100の7-4 a層よりやや砂減る。
 131 130のブロック状構造。畦畔盛土。
 132 130と133のブロック状構造。畦畔盛土。
 133 10Y4/1 灰 細砂混じりシルト 中砂～粗砂若干あり。130の7-4 a'層よりさらに砂粒減った7-4"層、耕作土。
 134 99と132の混濁。92溝埋土。
 135 10GY4/1 暗緑灰 粘土質シルト 細砂～中砂の降下あり、植物根痕あり。自然土壌層、B層的、10-2 a層（10-2 b層上部の土壌化か）。
 136 5Y6/3 オリーブ黄 中砂～細砂。
 137 10BG4/1 暗青灰 シルト粘土 わずかに炭化物・微小な植物遺体含む。止水堆積、10-2 b層。
 138 N4/0～3/0 灰～暗灰 シルト質粘土 細砂～中砂若干含む、団粒状構造あり。11-1 a層、自然土壌、11-2 a層上部が更に土壌化進行したものか。
 139 「5BG5/1 青灰 シルト」に生痕（主に植物根痕）で「N3/0 暗灰 シルト（11-2 a層系）」多く入る、下部に細砂～中砂あり。土壌化（B層）した水成堆積、12-1層。
 140 10GY5/1 緑灰 細砂混じりシルト 粗砂あり、植物根痕あり（139よりかなり少ない）
 淘汰悪いが、上面に土壌化の痕跡ない。混濁した水成層？12-2層。
 141 138（11-1 a層）内に139（12-1層）の7～2cmのブロック若干あり。
 142 138と139の混濁。
 143 10GY3/1～4/1 暗緑灰 シルト質粘土 11-2 aに似る。遺構埋土。
 144 10GY4/1 暗緑灰 シルト混じり粘土 11-1 aに似る。166流路上層（11-1 a層相当部）。
 145 5GY4/1～3/1 暗オリーブ灰 シルト混じり粘土 166流路下層。
 146 5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト質粘土 11-2 a層。
 147 10GY4/1 暗緑灰 シルト混じり粘土 11-1 a層に似る。12面検出176溝埋土か。
 148 10Y4/2～10GY3/1 オリーブ灰～暗緑灰 粗砂混じりシルト質粘土 Feあり。遺構埋土。
 149 138の4～6cmのブロック間に146。遺構埋土。
 150 5Y6/3 オリーブ黄 シルト混じり中砂 足跡等に残る、若干混濁した洪水砂。10-2 b層。
 151 N4/0 灰 シルト混じり粘土 炭化物若干あり。12面186溝埋土。
 152 「10BG5/1 青灰 シルト混じり粘土」内に138・146の1～3cmのブロック若干あり。11-1 a面「仮G」埋土？
 153 5Y6/4～10GY4/1 オリーブ黄～暗緑灰 シルト混じり中砂質粗砂 足跡等に残る、若干混濁した洪水砂。10-1 b層。
 154 137内に138の2～4cmのブロック。
 155 10Y4/1 灰 シルト質粘土 遺構埋土？
 156 10GY4/1 暗緑灰 シルト質粘土 上部にFeあり「7.5Y4/2 灰オリーブ」を呈す。
 157 太い植物根痕多く（木本植物）136（11-1 a層）がブロック状になり、146のブロックも混じる。11-1 a層。
 158 10Y5/1 灰 シルト質粘土 11-1 a面 153溝埋土。
 159 10GY4/1 暗緑灰 シルト質粘土 炭化物わずかにあり。11-1 a面遺構？埋土。

1区 東壁断面土色 - 1

- 1 2.5Y3/1～4/1 黒褐～黄灰 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、下部に2のブロック若干あり。現代耕作土、0層。
 2 10YR7/4 にぶい黄橙（上部）2.5Y5/2 暗灰黄（本体）粗砂混じり細砂質シルト。上部Feあり、Mn粒若干あり。1 a層。
 3 「2.5Y6/1 黄灰 中砂～細砂」・「2.5Y5/1 黄灰 シルト」が混ざる。部分的にラミナあり。洪水砂由来の整地層か、1 b層。
 4 3内に2のブロック。
 5 3内に6のブロック。
 6 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、Fe斑あり、Mn粒わずかにあり。耕作土、2-1 a層。
 7 2.5Y6/2 灰黄 中砂混じり細砂質シルト 中砂わずか、Fe斑あり、6より粘質。耕作土、2-2 a層。
 8 「5Y6/1 灰 シルト Fe斑あり。」の3～6cmのブロック間に中砂～細砂あり。整地土、2-2 b層。
 9 2.5Y6/2 灰黄 シルト質細砂 Fe斑・Mn斑多く、一部上面7.5YR/4 にぶい褐に染まる、締まりよし。2-4 a層、耕作土？
 10 5Y6/1 灰 粗砂混じりシルト Fe斑あり、2層時点畦畔盛土。
 11 2.5Y6/2 灰黄 シルト Fe・Mn斑あり。2-4 a層時点畦畔盛土？

表1-2 1区断面図（図4～5）土色

1 区 東壁断面土色 - 2

- 12 5Y6/1 灰 (上部 7.5YR4/4 ~ 5/6 褐~明褐) シルト混じり中砂質細砂 上部 Fe 多し、ラミナ部分的のみ。洪水砂由来の人為的埋土、「2-4 b 土坑」埋土
 13 「2.5Y7/1 灰白 中砂~細砂 一部 Fe に染まる」と「2.5Y6/1 黄灰 シルト」のラミナ。洪水砂、2-4 b 層。
 14 5Y5/1 ~ 5GY5/1 灰~オリープ灰 中砂混じりシルト 管状 Fe あり、部分的にブロック状中砂~粗砂混じる。耕作土、3 a 層。
 15 10YR7/1 ~ 7.5YR4/4 灰白~褐 中砂~細砂 ラミナあり、Fe あり、主に 2 層系の 1~3 cm のブロック若干あり。1 b 土坑埋土、洪水砂の流し込み。
 16 10Y5/1 灰 中砂混じり細砂質シルト 上面 Fe 斑あり、中砂ブロック状に混じる。2-4 a 層、耕作土層。
 17 2.5Y7/2 ~ 8/1 灰黄~灰白 中砂~細砂 ラミナあり。2-4 b 層、洪水堆積。
 18 5BG5/1 青灰 細砂質シルト わずかに粗砂あり。斑状 Fe あり。29 溝埋土。
 19 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずが。現代耕土、0 層。
 20 1 のブロック
 21 6 と同質、ブロック土。1 a 面畝溝か。
 22 7.5Y6/1 灰 シルト 1 a 面畝溝か。
 23 5Y7/1 灰白 細砂~中砂 ラミナあり。1 a 面畝溝か。
 24 7 と同質、ブロック土。
 25 16 と 12 のブロック。2-2 a 層時点畦畔盛土か。
 26 10YR5/6 ~ 5Y6/1 黄褐~灰 シルト質細砂 Fe 多し、Mn 若干あり、16 の 2~4 cm のブロックわずかにあり。12 上部の整地層か。2-4 b 層相当。
 27 5Y5/2 灰オリープ 細砂質シルト Fe 斑あり、Mn 粒わずかにあり。2-1 a 面遺構？
 28 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質細砂 Fe 斑あり、上部に粗砂若干あり。2-2 a 層時点鳥島盛土 (北端斜面)。
 29 2.5Y7/2 灰黄 シルト」と「2.5Y6/1 黄灰 細砂~中砂」のラミナ。洪水砂。28 の拡張原因、2-2 b 層。
 30 5Y6/2 灰オリープ シルト質細砂 わずかに粗砂あり、Fe 斑あり。鳥島耕土、2-3 a 層。
 31 30 と同質のブロック土 16 の 1~2 cm のブロック若干あり。鳥島盛土。2-3 a 層時点。
 32 34 のブロック。
 33 10YR7/3 にぶい黄橙 粗砂混じり細砂質シルト。0 層時点畦畔盛土。
 34 10YR6/3 にぶい黄橙 粗砂混じり細砂質シルト。2-1 a 層？
 35 10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり細砂質シルト。ブロック土、1 a 層時点畦畔盛土。
 36 12 とほぼ同質、若干暗色、ラミナなくブロック土。2-4 a 層時点 (中世) 鳥島盛土か。(12 との層境、不明確)
 37 2.5Y6/1 ~ 5/6 黄灰~黄褐 細砂~中砂 Fe あり。2-1 b 層。
 38 10Y5/1 灰 細砂混じりシルト ラミナあり。17 と一連の洪水堆積。2-4 b 層。
 39 2.5Y7/3 ~ 7.5YR5/4 浅黄~にぶい褐 細砂~中砂 Fe あり。2-2 b 層。
 40 7.5YR4/3 ~ 6/1 褐~褐灰 シルト質細砂 Fe・Mn 多し。
 41 上面 7.5YR3/2 ~ 4/4 黒褐~褐 「10YR5/6 ~ 7/1 黄褐~灰白 中砂~細砂」と「5Y6/1 灰 シルト~細砂」のラミナ。洪水堆積。2-3 b 層。
 42 2.5Y5/3 黄褐 粗砂混じりシルト質細砂。1 a 層。2 層系より明色だが、北側の 1 a 層 (2) より砂質。耕作土。
 43 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂 シルト若干あり。ラミナあり。
 44 7 のブロック土。2-2 面 遺構埋土。
 45 7 のブロック土。2-2 ~ 2-1 a 層時点畦畔盛土か。
 46 9 のブロックと細砂。2-2 ~ 2-1 a 層時点畦畔盛土か。
 47 50 のブロック。2-3 b 層、整地土。
 48 2.5Y5/6 ~ 6/1 黄褐~黄灰 シルト質細砂 上面 7.5YR3/2 ~ 5/6 (黒褐~明褐)、ラミナあり。2-3 b 層、洪水堆積。
 49 「5Y5/1 灰 シルト」の 4~9 cm のブロック間に「10YR6/4 にぶい黄橙 細砂」。整地土、2-4 b 層相当。
 50 2.5Y5/4 ~ 6/2 黄褐~灰黄 シルト質細砂 Fe・Mn 斑あり。耕作土、2-3 a 層。
 51 4 と 42 の混濁 1 a 層下面遺構。
 52 1 と 42 のブロック。0 層。
 53 上半 2.5Y5/2 暗灰黄 Mn 斑あり、下半 10YR6/6 ~ 6/1 明黄褐~褐灰 ラミナあり、細砂~中砂、法面にかかった「1 b 土坑」埋土 (1 b 面切り込み)。
 54 「2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト質細砂 Fe・Mn 斑若干あり」の 2~12 cm のブロック間に「2.5Y7/2 灰黄 中砂~細砂」あり。2-2 b 層、整地層。
 55 5Y5/2 灰オリープ シルト質細砂 わずかに粗砂あり、Fe 斑若干あり。耕作土。2-3 a 層。
 56 55 とほぼ同質、若干中砂多し、切り合いのみ見える。2-3 a 面畝溝。
 57 55 とほぼ同質、若干中砂多し、切り合いのみ見える。2-3 a 層床面跡溝。(2-4 b 面でもある)。
 58 42 (1 a)・6 (2-1 a)・54 (2-2 b) の混濁。1 b 面畝溝埋土。
 59 2.5Y7/4 浅黄 粗砂~中砂 ラミナあり、Fe あり。1 b 面畝溝埋土。
 60 7.5Y6/1 灰 シルト Fe 斑若干あり。1 b 面畝溝埋土。
 61 55 と 62 のブロック。2-4 b 層系整地土。
 62 7.5YR5/6 明褐・7.5Y5/1 灰・10BG5/1 青灰 シルト~細砂 ラミナあり 還元・酸化で位置により色変わる。流水堆積。
 63 55 のブロック。2-3 b 層系整地土。
 64 10Y4/1 灰 中砂~細砂混じりシルト 部分的には 3 a 層 (14) より明。耕作土、4-1 a 層。
 65 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト 下部細砂多し。耕作土、4-2 a 層。
 66 7.5Y6/2 ~ 10BG5/1 灰オリープ~青灰 細砂~シルト ラミナあり。洪水堆積、4-2 b-1 層 67 と同時堆積。
 67 5B3/1 ~ 10GY5/1 暗青灰~緑灰 シルト~細砂 細かい植物遺体あり、ラミナわずかにあり。洪水堆積、4-2 b-2 層 66 と同時堆積。
 68 10Y4/1 灰 細砂質シルト 「5Y6/2 灰オリープ 細砂」の 1 cm のブロックわずかにあり。耕作土、5 a 層。
 69 「N4/0 灰 シルト」と「5Y6/2 灰オリープ 細砂」の 1~3 cm のブロック。整地層、5 b 層。
 70 5B3/1 暗青灰 シルト わずかに細砂あり。北壁の 31 に同じ。耕作土、6 a 層。
 71 5Y6/2 灰オリープ 細砂 ラミナあり。
 72 5Y6/3 オリープ黄 シルト質細砂。
 73 5Y4/2 灰オリープ 細砂質シルト Fe 斑わずかにあり。4-2 a ~ 4-1 a 層時畦畔？
 74 5Y5/3 灰オリープ 細砂 わずかにシルトあり、ラミナあり。4-2 a 層時溝？
 75 5Y4/1 灰 シルト質細砂 中砂若干あり。3 a 面 36 溝埋土。
 76 「5Y5/2 ~ 2.5GY5/1 灰オリープ~オリープ灰 細砂質シルト」と「5Y6/3 ~ N6/0 オリープ黄~灰 細砂」の 1~8 cm のブロック。
 77 76 のブロックと「10Y4/1 灰 粗砂混じり細砂質シルト (4-1 a 層?)」の 2~8 cm のブロック。
 78 5GY6/1 オリープ灰 中砂~細砂 6 b 層 洪水砂。
 79 5B4/1 ~ 5Y4/2 暗青灰~灰オリープ 細砂質シルト わずかに中砂あり、わずかに細かい植物遺体あり。7-1 a 層、耕作土。
 80 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト Ca の結核上半にあり、締まりよし。7-2 層、水成層？
 81 10Y4/1 灰 粗砂混じりシルト 80 より軟。7-3 層、水成層？
 82 2.5GY4/1 ~ 5Y4/1 暗オリープ灰~灰 粗砂混じりシルト質細砂 細かい植物遺体わずかにあり。7-4 a 層、耕作土。
 83 5B5/1 ~ 7.5Y7/2 青灰~灰白 粗砂~細砂 シルト若干あり。7-4 b 層、洪水砂が踏み込まれたもの。
 84 5GY4/1 ~ 7.5Y4/1 暗オリープ灰~灰 中砂混じり細砂質シルト わずかに粗砂あり。8-1 a 層、耕作土。
 85 5B4/1 ~ 7.5Y4/1 暗青灰~灰 粗砂混じりシルト。耕作土 8-2 a 層。
 86 ~ 88 欠番
 89 10BG5/1 青灰 細砂混じりシルト 8-2 b 層。
 90 5Y4/1 ~ 2.5GY4/1 灰~暗オリープ灰 粗砂~中砂混じりシルト 北側の直下に 7-4 b 層 (83) がある 7-4 a 層 (82) より粘質、耕作土、7-4 a' 層。
 91 82・90 の混濁。
 92 82・90・84・85 のブロック。
 93 2.5GY4/1 暗オリープ灰 粗砂混じり粘土質シルト 南の 7-4 a' 層 (90) よりさらに粘質、耕作土 7-4 a'' 層。
 94 2.5GY5/1 オリープ灰 細砂混じり粘土質シルト。
 95 84 の二次堆積、粗砂若干あり。
 96 93・84 のブロック。
 97 2.5GY4/1 暗オリープ灰 粘土質シルト 粗砂若干あり。南の 7-4 b'' 層 (93) よりさらに粘質、しかし粗砂は少しある。むしろ下の 8-1 a 層 (84) の方が砂質。耕作土、7-4 a 層。
 98 10GY4/1 暗緑灰 (酸化 5Y4/2 灰オリープ) 細砂混じりシルト 粗砂わずかにあり。10-1 a 層、耕作土層。
 99 5GY4/1 暗オリープ灰 (酸化 5Y4/1 灰) 細砂混じり粘土質シルト 10-2 a 層、自然土壌層。
 100 10BG4/1 暗青灰 シルト粘土 わずかに炭化物・微小な植物遺体含む。10-2 b 層、止水堆積。

表 1-3 1 区断面図 (図 4~5) 土色

1区 東壁断面土色 -3

- 101 N4/0 ～ 3/0 灰～暗灰 シルト質粘土 細砂～中砂若干含む、団粒状構造あり。11-1 a層、自然土壌、11-2 a層上部が更に土壌化進行したものが。
- 102 「5BG5/1 青灰 シルト」に生痕(主に植物根痕)で「N3/0 暗灰 シルト(11-2 a層系)」多く入る、下部に細砂～中砂あり。風化した水成堆積、12-1層。
- 103 10GY5/1 緑灰 細砂混じりシルト 粗砂あり、植物根痕あり(48よりかなり少ない) 淘汰悪いが、上面に土壌化の痕跡ない。風化した水成堆積 12-2層。
- 104 「N3/0 暗灰 シルト質粘土 わずかに炭化物あり」内に102の1～4cmのブロックわずかにあり。遺構埋土。
- 105 N4/0 灰 シルト質粘土 細砂～中砂わずかにあり。12面166流路埋土。
- 106 N3/0 ～ 2/0 暗灰～黒 シルト質粘土 細かい植物根痕(草本?)多し。11-2 a層、自然土壌。
- 107 100に101の1cmのブロック若干。
- 108 100と101の混濁。
- 109 N5/0 灰 粘質シルト 中砂～細砂若干あり。遺構埋土。
- 110 102と106の混濁。遺構埋土?植物根の攪乱?
- 111 5Y6/3 オリーブ黄 細砂～粗砂 10-1 b層、足跡に残る洪水砂。
- 112 10Y5/1 灰 粗砂混じりシルト 9 a層、耕作土。
- 113 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト混じり粗砂～中砂 9 b層、足跡に残る洪水砂。
- 114 100(10-2 b層)と101(11-1 a層)の混濁。
- 115 10GY8/1 明緑灰 細砂混じりシルト 9 a面侵蝕痕内埋土か、8-2 b層相当。
- 116 10GY5/1 緑灰 シルト 細砂若干あり 9 a面侵蝕痕内埋土か、8-2 b層相当。

1区 北壁断面土色

- 1 2.5Y3/1 ～ 4/1 黒褐～黄灰 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、下部に2のブロック若干あり。0層。
- 2 10YR6/6 ～ 6/4 明黄褐～にぶい黄橙 細砂～粗砂混じりシルト 数枚の薄層に分かれる。0層床土。
- 3 10YR7/4 にぶい黄橙(上部) 2.5Y5/2 暗灰黄(本体) 粗砂混じり細砂質シルト 上部 Fe あり、Mn 粒若干あり。1 a層。
- 4 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、Fe 斑あり、Mn 粒わずかにあり。耕作土、2-1 a層。
- 5 2.5Y7/1 灰白 細砂～中砂 ラミナあり。2-1 b層。
- 6 2.5Y6/2 灰黄 中砂混じり細砂質シルト 中砂わずか、Fe 斑あり、5より粘質。耕作土、2-2 a層。
- 7 「2.5Y6/2 灰黄 細砂質シルト」の4～9cmのブロック間に「2.5Y6/6～6/3 明黄褐～にぶい黄 細砂～中砂」あり。整地土、2-2 b層。
- 8 5Y5/2 灰オリーブ シルト質細砂 Fe 斑あり。2-3 a層?
- 9 2.5Y6/2 灰黄 シルト質細砂 Fe 斑・Mn 斑多く、一部上面7.5YR5/4 にぶい褐に染まる、締まりよし。耕作土、2-4 a層。
- 10 5Y6/1 灰(上部7.5YR4/4～5/6 褐～明褐) シルト混じり中砂質細砂 上部 Fe 多し、ラミナ部分的のみ。洪水砂由来の人為的埋土、2-4 b(人為)層。
- 11 「2.5Y7/1 灰白 中砂～細砂 一部 Fe に染まる」と「2.5Y6/1 黄灰 シルト」のラミナ。洪水砂、2-4 b(流水)層。
- 12 5Y5/1 ～ 5GY5/1 灰～オリーブ灰 中砂混じりシルト 管状 Fe あり、部分的にブロック状中砂～粗砂混じる。耕作土、3 a層。
- 13 7と9のブロック。2-2 b下面遺構。
- 14 5Y7/1 ～ 2.5Y5/4 灰白～黄褐 粗砂～中砂 上部10YR4/4～5/6 褐～黄褐に染まる。ラミナあり、12の14～4cmのブロック若干あり。破堤的洪水堆積、2-4 b層。
- 15 14の1～3cmのブロック間に「7.5Y5/1 灰 シルト質細砂」。3 a層下面遺構。
- 16 14の砂内に「10Y5/1 灰 細砂質シルト」の3～14cmのブロック。
- 17 5Y7/2 灰白 シルト～細砂 ラミナあり。洪水堆積、1 b層。
- 18 4と同質、ブロック土。2-1 a面遺構。
- 19 4・6・7・8の4～7cmのブロック間に17。1 b面遺構。
- 20 土色は6に、土質は4と同質。2-1 a層下面遺構。
- 21 7と同質、ブロック土。
- 22 10Y5/1 灰 シルト質細砂 ラミナあり。2-4 b層だが、これの東西で堆積の途切れ?洪水堆積
- 23 14とほぼ同質、極粗砂～小礫わずかにあり。ブロック土少ない。2-4 b層、洪水堆積。
- 24 7.5Y5/1 灰 シルト混じり粗砂質中砂 「10Y5/1 灰 細砂質シルト」の2～5cmのブロックあり。2-4 b層内土礫の集まり。
- 25 10Y4/1 灰 中砂～細砂混じりシルト 3 a(12)より明。耕作土、4-1 a層。
- 26 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト 下部細砂多し。耕作土、4-2 a層。
- 27 7.5Y6/2 ～ 10BG5/1 灰オリーブ～青灰 細砂～シルト ラミナあり。洪水堆積、4-2 b-1層、28と同時堆積。
- 28 5B3/1 ～ 10GY5/1 暗青灰～緑灰 シルト～細砂 細かい植物遺体あり、ラミナわずかにあり。洪水堆積、4-2 b-2層、27と同時堆積。
- 29 10Y4/1 灰 細砂質シルト 「5Y6/2 灰オリーブ 細砂」の1cmのブロックわずかにあり。耕作土、5 a層。
- 30 「N4/0 灰 シルト」と「5Y6/2 灰オリーブ 細砂」の1～3cmのブロック。整地層、5 b層。
- 31 5B3/1 暗青灰 シルト わずかに細砂あり。耕作土、6 a層。
- 32 12(3 a層)の2～6cmのブロック。
- 33 5B4/1 ～ 5Y4/2 暗青灰～灰オリーブ 細砂質シルト わずかに中砂あり、わずかに細かい植物遺体あり。7-1 a層 耕作土。
- 34 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト Caの結核上半にあり、締まりよし。7-2層、水成層?
- 35 10Y4/1 灰 細砂混じりシルト 80より軟。7-3層、水成層?
- 36 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト 粗砂若干あり。南の7-4 b"層よりさらに粘質、しかし粗砂は少しある。むしろ下の8-1 a(37)の層が砂質。7-4 a層 耕作土。
- 37 5GY4/1 ～ 7.5Y4/1 暗オリーブ灰～灰 中砂混じり細砂質シルト わずかに粗砂あり。8-1 a層 耕作土。
- 38 5B4/1 ～ 7.5Y4/1 暗青灰～灰 粗砂混じりシルト。8-2 a層 耕作土。
- 39 10BG5/1 青灰 細砂混じりシルト 8-2 b層、混濁した洪水堆積。
- 40 5GY6/1 オリーブ灰 中砂～粗砂 7-1 b層。
- 41 7.5Y7/1 灰白 中砂～粗砂 7-2 b層。
- 42 7.5Y7/2 灰白 中砂～細砂 8-1 b層。
- 43 7.5Y7/1 灰白 中砂～細砂 8-2 b層。洪水砂(足跡内)。
- 44 10GY4/1 暗緑灰(酸化 5Y4/2 灰オリーブ) 細砂混じりシルト 粗砂わずかにあり。10-1 a層、耕作土
- 45 5GY4/1 暗オリーブ灰(酸化 5Y4/1 灰) 細砂混じり粘土質シルト 10-2 a層、自然土壌層。
- 46 10BG4/1 暗青灰 シルト粘土 わずかに炭化物・微小な植物遺体含む。10-2 b層、止水堆積。
- 47 N4/0 ～ 3/0 灰～暗灰 シルト質粘土 細砂～中砂若干含む、団粒状構造あり。11-1 a層、自然土壌、11-2 a層上部が更に土壌化進行したものが。
- 48 「5BG5/1 青灰 シルト」に生痕(主に植物根痕)で「N3/0 暗灰 シルト(11-2 a層系)」多く入る、下部に細砂～中砂あり。風化した水成堆積、12-1層。
- 49 10GY5/1 緑灰 細砂混じりシルト 粗砂あり、植物根痕あり(48よりかなり少ない) 淘汰悪いが、上面に土壌化の痕跡ない。風化した水成層、12-2層。
- 50 N3/1 暗灰 シルト 細砂～中砂若干あり。遺構埋土、現在は11-2 a面切込みだが、元は11-1 a面だったかもしれない。
- 51 10GY5/1 緑灰 細砂混じりシルト。49の粗砂がないもの、49の二次堆積?
- 52 「N3/0 暗灰 シルト質粘土 わずかに炭化物あり」内に48の1～4cmのブロックわずかにあり。遺構埋土。
- 53 52に48のブロック多し。

1区 南壁断面土色 -1

- 1 2.5Y3/1 ～ 4/1 黒褐～黄灰 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、下部に2のブロック若干あり。現代耕作土、0層。
- 2 2.5Y5/3 黄褐 粗砂混じりシルト質細砂。1 a層。2層系より白色だが、北側の1 a層より砂質。耕作土、1 a層。
- 3 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じり細砂質シルト 粗砂わずか、Fe 斑あり、Mn 粒わずかにあり。耕作土、2-1 a層。
- 4 2.5Y7/4 浅黄 粗砂～中砂 ラミナあり、Fe あり。1 b面切り込み畝溝埋土。1 b面畝溝埋土。
- 5 2.5Y8/1 灰白 粘土質シルト Fe 斑あり。東壁60、1 b面畝溝埋土と同じ。1 b面畝溝埋土。
- 6 5Y5/2 灰オリーブ シルト質細砂 わずかに粗砂あり、Fe 斑若干あり。耕作土。2-3 a層。
- 7 6とほぼ同質、若干中砂多し、切り合いのみ見える。2-3 a面畝溝埋土。
- 8 2.5Y7/2 ～ 8/1 灰黄～灰白 中砂～細砂 ラミナあり。洪水堆積、2-4 b層、20と同時堆積。

表1-4 1区断面図(図4～5)土色

1区 南壁断面図土色-2

- 9 13と4の混濁。2-2a層床面遺構か。
- 10 5Y6/1 灰 シルト質細砂 Fe若干あり。2-2a層床面遺構か。
- 11 「10YR5/6～7/2 黄褐～にぶい黄橙 中砂～細砂 Feあり、ラミナなし。」内に6の3～15cmのブロック若干あり。これも畝溝埋土？(2-4b面)。
- 12 3のブロック。2-1a面遺構。
- 13 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト質細砂 Mn若干あり。2-1a層系？2-2a層系？耕作土。
- 14 2.5Y5/1 黄灰 シルト質細砂 Mn斑あり。2-3a層。
- 15 「2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じりシルト質細砂 Fe斑あり」のブロックにわずかに「2.5Y7/2 灰黄 中砂」のブロックあり。2-2b層、整地土。
- 16 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト質細砂。0層系。
- 17 2.5Y7/3 浅黄 中砂～細砂 Feあり、2-2b層、洪水堆積。
- 18 12・15のブロック。2-1a面遺構。
- 19 2のブロック。1a面遺構。
- 20 10Y5/1 灰 細砂混じりシルト ラミナあり。2-4b層、洪水堆積、8と同時堆積。
- 21 5Y5/1～5GY5/1 灰～オリブ灰 中砂混じりシルト 管状Feあり、部分的にブロック状中砂～粗砂混じる。3a層、耕作土。
- 22 「5Y5/2～2.5GY5/1 灰オリブ～オリブ灰 細砂質シルト」と「5Y6/3～N6/0 オリブ黄～灰 細砂」の1～8cmのブロック。と「10Y4/1 灰 粗砂混じり細砂質シルト」の2～8cmのブロック。4-1a面遺構(溝)埋土。
- 23 10Y4/1 灰 細砂質シルト 「5Y6/2 灰オリブ 細砂」の1cmのブロックわずかにあり。5a層、耕作土。
- 24 「N4/0 灰 シルト」と「5Y6/2 灰オリブ 細砂」の1～3cmのブロック。5b層、整地土。
- 25 5B3/1 暗青灰 シルト わずかに細砂あり。6a層、耕作土。
- 26 5B4/1～5Y4/2 暗青灰～灰オリブ 細砂質シルト わずかに中砂あり、わずかに細かい植物遺体あり。7-1a層、耕作土。
- 27 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト Caの結核上半にあり、締まりよし。7-2層、水成層？
- 28 10Y4/1 灰 細砂混じりシルト 80より軟。7-3層、水成層？
- 29 2.5GY4/1～5Y4/1 暗オリブ灰～灰 粗砂混じりシルト質細砂 細かい植物遺体わずかにあり。7-4a層、耕作土。
- 30 5GY4/1～7.5Y4/1 暗オリブ灰～灰 中砂混じり細砂質シルト わずかに粗砂あり。8-1a層、耕作土。
- 31 5B4/1～7.5Y4/1 暗青灰～灰 粗砂混じりシルト。8-2a層。
- 32 10BG4/1 暗青灰 粗砂混じりシルト 9a層、耕作土。
- 33 2.5Y6/6～N5/0 明黄褐～灰 シルト混じり粗砂～中砂 9b層、二次的攪拌を受けた洪水堆積。
- 34 5B4/1 暗青灰 中砂～粗砂混じりシルト 10-1a層 耕作土。
- 35 10BG5/1～4/1 青灰～暗青灰 中砂～細砂混じりシルト。10-2a層、自然土壌、B層的。10-2b層上部とも言える。
- 36 上部5B5/1 青灰 下部N5/0 灰 粘土質シルト わずかに炭化物あり。止水堆積、10-2b層。
- 37 2.5GY7/1 明オリブ灰 中砂～細砂 7-1b層、足跡に残る洪水砂。
- 38 2.5Y7/3～7/1 浅黄～灰白 粗砂～中砂。足跡に残る洪水砂、7-2b層。
- 39 5Y7/2 灰白 中砂 足跡に残る洪水砂、8-1b層。
- 40 2.5Y7/3 浅黄 粗砂～細砂 足跡に残る洪水砂、8-2b層。
- 41 34の10-1層のブロック状構造。10-1a層畦畔盛土。
- 42 10BG5/1 青灰 細砂混じりシルト 8-2b層。
- 43 10GY8/1 明緑灰 細砂混じりシルト 9a面侵蝕痕埋土？8-2b層相当。
- 44 10GY5/1 緑灰 シルト 細砂若干あり 9a面侵蝕痕埋土？8-2b層相当。
- 45 N4/0～3/0 灰～暗灰 シルト質粘土 細砂～中砂若干含む、団粒状構造あり。11-1a層、自然土壌、11-2a層上部が更に土壌化進行したものか。
- 46 N3/0～2/0 暗灰～黒 シルト質粘土 細い植物根痕(草本?)多し。11-2a層、自然土壌。
- 47 「5BG5/1 青灰 シルト」に生痕(主に植物根痕)で「N3/0 暗灰 シルト(11-2a層系)」多く入る、下部に細砂～中砂あり。風化した水成堆積、12-1層。
- 48 10GY5/1 緑灰 細砂混じりシルト 粗砂あり、植物根痕あり(47よりかなり少ない)淘汰悪いが、上面に土壌化の痕跡ない。風化した水成層、12-2層。
- 49 36(10-2b層)と45(11-1a層)の混濁。11-1a面、遺構埋土？木の根の攪乱？
- 50 34と33の混濁。10-1a面溝埋土。
- 51 32(9a層)のブロック状構造。9a層時点畦畔盛土。
- 52 47(12-1層)と46(11-1a層)の混濁。遺構埋土？植物根の攪乱？
- 53 6とほぼ同質、若干中砂多し。2-3a層床面鋤溝埋土。

表1-5 1区断面図(図4～5)土色

「1b土坑」群出土の遺物は、陶器10片(碗5・白泥象嵌鉢1・備前すり鉢3)・磁器16片(染付碗6・染付蓋1・染付鉢1・染付猪口1・青磁碗4)・瓦器碗1片・須恵器3片(甕1・壺2)・土師9片(小皿1・高坏1)である。土坑底部付近包含のもののみで、第2-4b層より掘削土量も遺物量も少ないが、近世遺物が含まれ、近世遺物を包含しない第2-4b層が中世の層である事の証左となる。

2 畦畔 調査区北端の東西方向畦畔である。直上第2-2a層も同位置に畦畔が存在する。断面で畦畔頂部が確認できたが、平面検出時には削平してしまった。しかし、畦畔に伴う北側に落ちるわずかな段差は検出できた。幅は0.3～0.6m、2カ所に水口がある。方位性は東西正方位である。この面で正方位の遺構はこれだけで、他はほぼE→3°→Nの方位性に統一されている。

5・6・24 溝 1「1b土坑」群の土坑間に残る溝である。直線的に東西に伸びるが、土坑間は強めに削平した部分が多く、東西壁断面には1b土坑がかかり、溝の長さは不明、調査区東西幅を越えた可能性もある。第2-2a層床面遺構で、埋土は第2-2b層の砂に第2-4a層のブロックが少し入る。幅は0.2m程度、深さは0.1m弱、壁が直立し、長い。砂詰め暗渠か。

7 島島 24溝付近で南北幅3.1～4.4m、東西方向帯状に第2-4b層が露出する。島島の基部である。盛り土は残らず、削り出された洪水堆積層のみ残る。層厚は最大0.34m。他の島島が拡大するのに対し、この島島は第2-2a層成立時に削平されている。北側水田部分が拡大しているとも言える。

8 溝 一見9畦畔関連の溝のようだが、壁断面で見ると第2-1a面で掘られ、第1a面まで存続した溝である。幅0.37m、深さ0.24mほど。性格は不明だが、耕地区画に近い溝とすれば、9畦畔の区画

(その4)	(その3)	今回の調査1区	(その1)	(その2)
第0層	第0層	第0層	第0層	
第1a層	第1a層	第1a層	第1a層	
第1b層	第1b層	第1b層	第1b層	
第2a層	第2a層	第2-1a層	第2-1a層	
		第2-1b層		
第2a層	第2a層	第2-2a層	第2-2a層?	
盛り土第2a層		第2-2b層	第2-2b層	
第2a層	第2a層	第2-3a層	第2-3a層	
		第2-3b層		
		第2-4a層	第2-4a層	
第2b層	第2b層	第2-4b層	第2-4b層	ここまで第0層
		第3a層	第3-1a層	
			第3-2a層	第1-1層?
			第3-3a層	
			第3-3b層	第1-2層
		第4-1a層	第4a層	第2層
		第4-2a層		
第5b層	第5層	第4-2b層		
第5b層		第5a層	第5a層	第3-1層?
第5b層		第5b層	わずかに砂層	第3-2層?
				第4層?
第6a層	第6a層	第6a層	第6a層	第5層?
第7-1a層	第7-1a層	第7-1a層		
第7-2a層	第7-2a層	第7-1b層		
		第7-2a層		
		第7-3層洪水?		
第7-3a層?		第7-4a層	第7a層	不明
第7-3b層	第7-2b層	第7-4b層	第7b層	
第8-1a層?	第8a層?	第8-1a層	第8a層	不明
第8-2a層?		第8-2a層	第9-1a層	
	第8b層?	第8-2b層	(2区第9層?)	
第9a層	第9a層	第9a層	第9-2a層	第5層下層?
第9b層	第9b層	第9b層		わずかに砂層
				第6層?
第10a層	第10a層	第10-1a層	第10-1a層	第7層
第10b層		第10-1b層	第10-2a層?	
		第10-2a層		
		第10-2b層		
第11a層	第11-1a層	第11-1a層	第11a層	第8-1層?
	第11-2a層	第11-2a層	第12a層	第8-2・3層
		第12-1層	第12b層	
		第12-2層	第12b層	
			第13-1a層	第9層
			第13-2a層	第10層
			第13b層	
			第14a層	第11層
			第14b層	

不確定なものは「?」を付す。

表2 1区と既往の調査の基本層序対照表

がその後もあまり移動していない可能性がある。瓦器椀が1片のみ出土している。

9・10 畦畔、11～14 溝 9 畦畔は2 畦畔との芯芯距離 21.3～22.2m で、109m 四方の坪一辺を10 分割した 10.9m 単位の2 区画分に近い。7 島畠・15 島畠間幅 6.5m ほどの水田部分を二分割する。

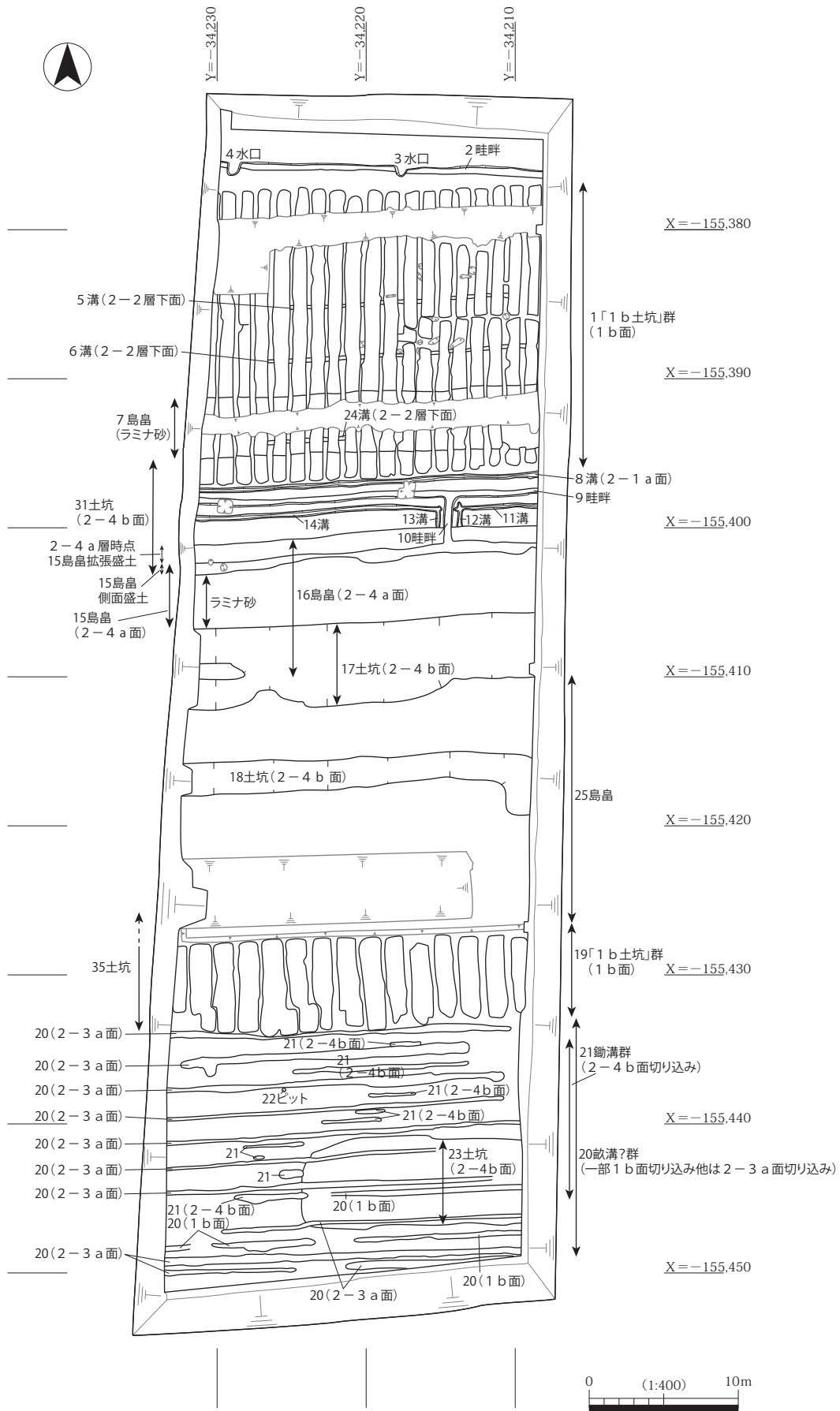


図7 1区第2-4a面全体図

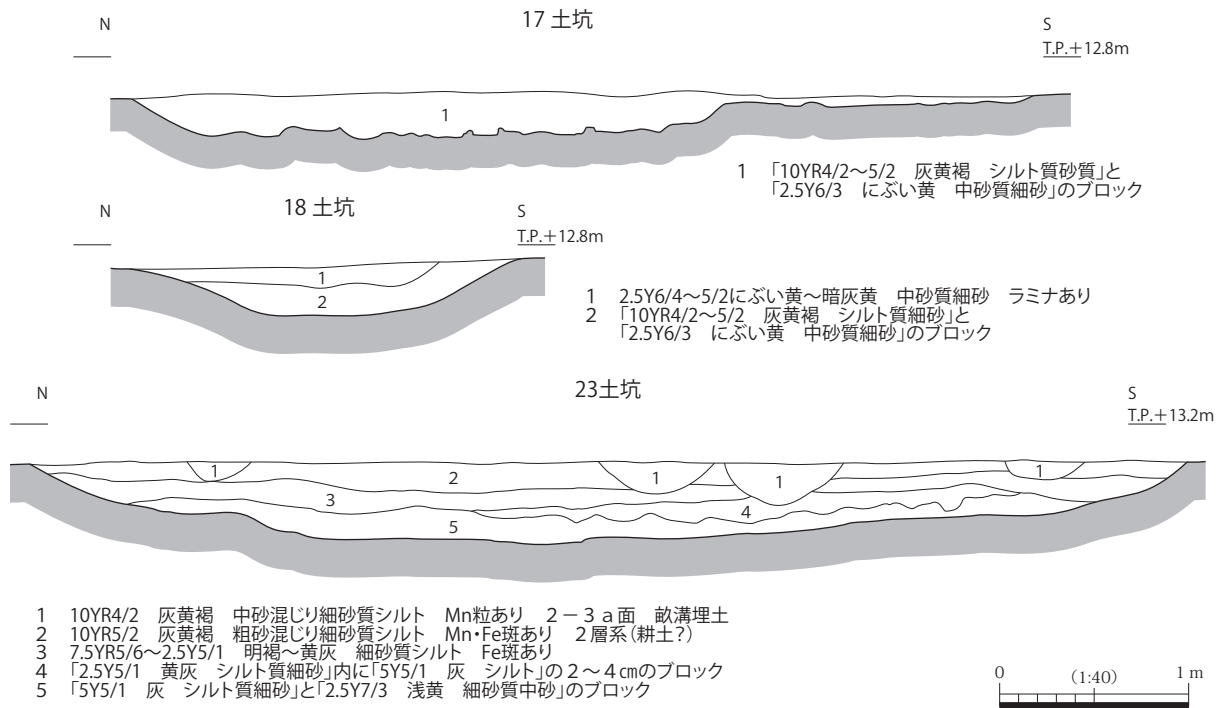


図8 1区第2-4b面遺構断面図

北側水田区画が幅3mほど、南側が幅3.5mほどとなる。畦畔頂部は第2-2a層成立時点拡張の島島裾部となり遺存していたが、検出時に削平してしまい、南に落ちる段差は検出できた。幅0.3～0.7mほどである。

9畦畔から南に伸びるのが10畦畔である。15島島の側面盛土につながり、第2-4a層時点で15島島を拡張した16島島成立後も存続していたようである。幅0.5mほどである。

11～14溝はそれら畦畔沿いに走る。11溝と12溝、14溝と13溝は切り合いなく交わる。14溝は調査区西壁付近の面を掘りすぎ削平したが、西壁断面で確認できる。12・13溝は拡張された16島島裾で止まるので、これらの溝は島島拡張後に掘られたものであろう。

15・16島島 15島島は幅3.8～4.6mの第2-4b層露出と、北側斜面盛土が確認された。削り出した第2-4b層の最大厚は0.52m。第2-4a層時点で拡張され16島島となる。北側1.2mほど、南側2.8mほど拡張される。第2-2a層成立時に北側に3mほど拡張され、9畦畔のラインが島島の裾となる。

25島島 17土坑南側から19「1b土坑」群の重なる水田の北側までが25島島となる。18土坑より北側には第2-4a層成立時砂層盛土も残る。その後、18土坑埋土を覆う砂層盛土がなされ、耕作土層が成立するが、第2層のどの時点かは不明である。第2-2a層成立時点では島島の北端が0.2mほど北に下がる段差となり、そこから19「1b土坑」群南側までが一つの平坦面になる。

島島? 19「1b土坑」群より南は洪水堆積第2-4b層がどの島島より高く残り平坦面が形成され、第2-3a層時点の畝溝や鋤溝が残されていた。この部分も南北幅19mを越える島島である可能性が高い。しかし、この付近は条里型地割各面で常に最も高い位置である。島島かどうかは、さらに南側の耕地区画や、坪境との間の状態が明らかにならないと結論できない。

「2-4b土坑」16～18・23・31・35土坑他 第2-4a層が残る水田部分は、直下に第2-4b面切り込みの東西方向大溝状土坑が必ず掘削されていた(図8・図版1-2・3)。いずれも壁面は緩く落ち、



図9 1区第2-4b層出土板材

底部は凹凸があり、埋土の主体は第2-4b層にややシルトが混じり、壁や底面に部分的にラミナがある。深さが第3a層に達しない部分も多く、旧耕作土を掘り出すものではない。水田の水抜きを緩める工夫かと推測される。これらの土坑を「2-4b土坑」と通称しておく。

7島島より北側の水田下にも二つの「2-4b土坑」があった。7島島の北側肩部から始まり幅9mほど、もう一つはそれから3.5mほど北に南側肩部があり、北は調査区外に伸びる。この付近は第2-4b層も薄く、二つの土坑の深さも0.2mほどで、わずかに第3a面を削る。

31土坑は7・15島島間水田下にある。幅7mほど、深さ0.4mほどで、第3a面を0.1mほど削る。底部に幅1.4m、長さ4.8mほどの長方形の凹部を残す。木製品9片が出土している。

17土坑は15・25島島間で、北側肩部は直線的、南側肩部の形は乱れる。幅4.2~5.7m、深さ最大0.38mほど。底部は凹凸あり北側でわずかに第3a面を削る。埋土直上に第2-4a層時点の洪水堆積砂層があり、第2-4a層は残存せず。一部第2-2a層水田耕作土層が上に残存し、第2-4a層時点から水田だったと推測できる。瓦質土器甕1片・土師器4片(こね鉢1)・須恵器甕1片が出土している。

18土坑は幅が狭い。東壁付近は広いが、それ以外は幅1m程度、深さは0.35mほど、第3a面には届かない。ただ、東端は幅4.5mほどで、西壁断面でも上部を侵蝕されても幅2.5mほどあり元は東端と同幅の可能性もある。その幅なら水田があったとしてもおかしくはない。

35土坑は19「1b土坑」群に切られる水田部分直下にある。北側肩部は府教委試掘8トレンチの攪乱で不明だが、幅6.7m以上はある。深さは最大0.4m以上で、東側では第3a面を若干削る。

23土坑は調査区最南端の2-4b土坑で、唯一西端部が調査区内で確認できた。幅5.6mほど、深さ最大0.5mほどで、第3a面に達する部分はない。第2-3a層時点で畝溝・鋤溝が埋土上面を通り、その時平坦化している。埋土内に第2-4a層相当耕作土の可能性があり、調査区南側の高い島島状耕地区画の一部を掘り下げ、水田とした可能性がある。無釉陶器甕2片・土師器5片(小皿1・甕2)・須恵器3片(すり鉢1・甕1)が出土している。図化できるものはなかった。

1 20畝溝群・21鋤溝群 調査区南側第2-4b面が露出した平坦面には多くの東西方向溝がある。ほとんどが東西壁断面で切り込み面が分かる。21鋤溝群は第2-4b面切り込み、埋土に第2-3a層が入る、第2-3a層床面遺構である。20畝溝群の溝は、多くが第2-3a面

切り込みだが、1b面のものもある。第2-3a面のは溝同士の芯芯距離が2m以上、溝幅が上部で0.5m以上が多く、深さは0.3m以上ある。第1b面のは上端幅0.7m以上あり、底部に流水堆積のシルト層と砂層のセットがある。

20畝溝群のうち、第2-3a面切り込みのものからは信楽すり鉢1片・瓦質土器甕1片・瓦器1片・土師器8片(坏1・甕2)・須恵器3片(高台坏1・高台鉢1・壺1)が出土している。第1b面切り込みのものからは染付碗1片・陶器2片(碗1・備前甕1)が出土している。この結果から、第2-3a層の耕作期間が近世に下らない可能性が高いとは言えるが、量的に少ないので断言はできない。

出土遺物 第2-4b層からは以下の遺物が出土している。瓦質土器甕片1・瓦器椀10片・土師器45片(小皿9(へそ皿系3)・甕6(ナデ4・ハケ2))・須恵器13片(飛鳥時代坏5・高坏1・甕1・壺6)・砥石1・木製品4片(板材3・杭1)である。図化できたのは木製板材1点のみである。

図9-1は木製板材、厚さ2.1cmの柁目材である。片面に75個、もう片面に44個の孔が開くが、貫通するものは一つで、孔の径は平均3mm、中には四角いものもある。側面には鋸引きの痕跡あり。

古代～中世の遺物を含むが、近世遺物はない。土師器へそ皿系小皿には定型化した15世紀頃のものがあり、それが第2-4b層堆積時期の上限となる。第2-3a層も中世の層である可能性が高いので、第2-4b層の堆積から第2-4a層の耕作期間が16世紀前半頃と見てよいだろう。

小結 第2-2a層以上は近世以降の層で、第2-3a層は決定的な材料がないが、中世の可能性が高い。第2-4a面は調査開始面であり、上層遺構の残りも多かったが、切り込み面の特定ができた。そのため各遺構の時期分けができ、中世の島畠成立から、拡大過程が明らかにできた。遺構の方位性が2畦畔以外全てE→3°→Nとなるのは南北の坪境の方位性に基づくと考えられる。南側坪境を踏襲した現代道路は東が若干北に振り、それが耕地区画の基本の方位性となる。しかし、北側恩智川旧流路を踏襲した現代水路は南に弯曲し、坪北辺で正方位となる。2畦畔はその方位性に合わせているのだろう。

第2項 第3a面(図10・図版2-6・7)

第3a面では、この面に達した「2-4b土坑」底部も確認・図化したが、第3a層時点の畦畔・溝・段差なども検出した。畦畔盛土は耕作土層と同質で、断面で切り合いラインを確認できなかった。

26・27溝 どちらも埋土が第3a層とほとんど同じである。26溝は鋤溝状で深さは0.05m以下、27溝は幅0.2～0.5m、深さ0.05m強で、調査区を横断するが、東西壁断面で確認できず。この付近は第3a面がわずかに2-4b土坑底部に削られ、土坑底部掘削の痕跡である疑いもある。

28畦畔 頂部は2-4b土坑の攪乱で削平され、耕作土層との切り合いのみ見えたが、途中で途切れる。幅は0.2～0.4mほど、E→3°→Nの方位性である。調査区東西壁断面では確認できなかった。

29溝 芯芯距離で28畦畔から南へ5.7m、30畦畔から北に7.1m、一耕地区画の中央付近を通る。西側が細いのは2-4b土坑の削平を受けたもので、本来の幅は0.5～0.8m、深さは0.1mほどである。底部高は東西ほぼ同じ。埋土に第2-4b層の砂がブロック状に入り、洪水時には開いていたようだ。

30畦畔 芯芯距離で、29畦畔から12.8mほど、33畦畔とは16.8～17.2mで、西側で長さ2.5mほど検出できない部分がある。洪水による流失か。幅は0.3～0.6mほど、耕作土上面より0.05m前後突出している。これから41畦畔までの方位性はE→1～2°→Nである。畦畔両側の面の高さは、北側は東が高い形でT.P.+12.36～12.32m、南側も東が高い形でT.P.+12.41～12.35mで、畦畔を挟み南が高い。

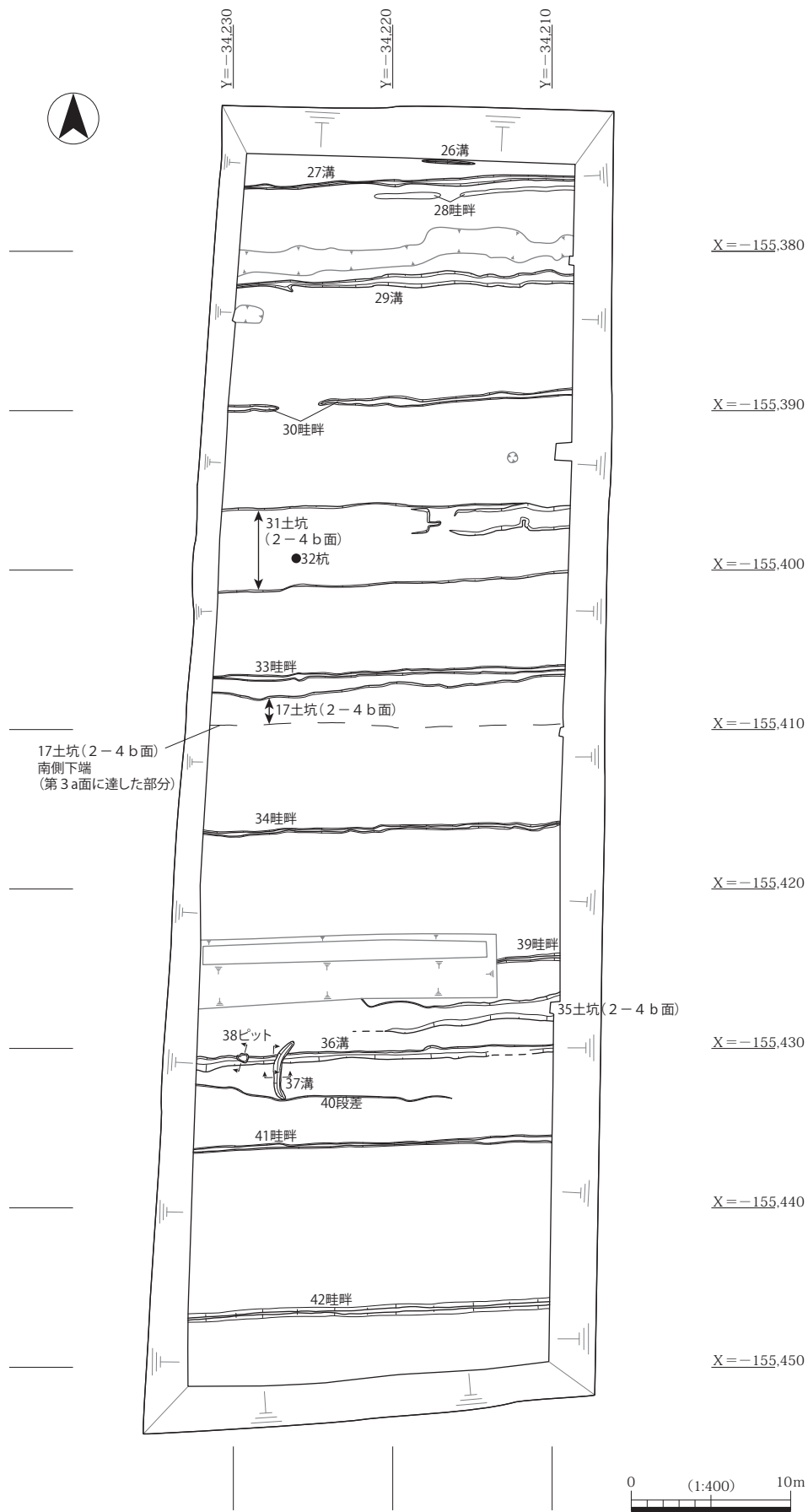


図 10 1区第3a面全体図



図 11 1区第3a面遺構断面図

33 畦畔 南の34 畦畔とは芯芯距離で9.8mほどである。幅0.3～0.6m、面から0.1mほど突出する。畦畔より南の面は東がT.P. + 12.43mほど、西がT.P. + 12.39mほどで、北側の面よりやや高い。

34 畦畔 南の39 畦畔とは芯芯距離で8.4mほど、幅0.3～0.4m、高さ0.1m弱突出する。南側の面は東西の高低ほとんどなくT.P. + 12.38mほどで、北側よりやや低い。

39 畦畔 府教委試掘8トレンチに攪乱され、4mほどの長さのみ検出された。芯芯距離で南側36溝まで5.3mほど、41 畦畔まで11.2mほど。幅0.3～0.5m、高さ0.1mほど突出する。南側の面は東西の高低差はなく、T.P. + 12.41mほど。北側よりやや高い。

36 溝 (図 11) 幅0.3～0.6m、深さ0.1m弱ほど。ほぼ39・41 畦畔間中央に位置する。底部レベルは西が低い。この溝を切る37 溝・38ピットがあるが、37 溝は洪水侵蝕か。また、南側に南に0.03mほど落ちる不定形な40 段差を検出したが、これも洪水の侵蝕かもしれない。

36 溝からは土師器ハケ甕1片・須恵器こね鉢1片が、37 溝からは須恵器こね鉢1片が出土している。

41 畦畔 南の42 畦畔との芯芯距離は10.4～10.6m。幅0.25～0.5m、0.1m弱突出する。南側の面は東側がT.P. + 12.43m、西側がT.P. + 12.4mほどで、北側よりわずかに高い。

42 畦畔 南端の畦畔で、幅0.5～0.6m、0.1mほど突出する。方位性はE→3°→Nで、北端29 畦畔に近い。南側の面の高さは、東がT.P. + 12.45mほど、西がT.P. + 12.41mほどで北側より若干高い。

出土遺物 第3層の出土遺物は以下の通り。

常滑甕2片・瓦質土器甕3片・瓦器椀、外面ミガキあり5片・黒色土器A類椀1片・土師器59片(小皿7(へそ皿系5)・椀10・甕8・すり鉢2・高坏1)・須恵器11片(坏H1・こね鉢1・甕2・壺3)・須恵質平瓦5片・漆喰1片・木製品9片(板材1・棒状1・栓?1)である。

図化できた遺物は図 12 にある。2は東播系須恵器こね鉢片、残存率10%以下、復元径は不確定、内外面横ナデ、外面に2条の棒状工具による凹線あり。12世紀末～13世紀初頃か。3は土師器すり鉢片、残存率10%、外面から口縁内面ヨコナデ、内面体部ナデ後カキ目入。二次的被火で焼きハゼあり。13世紀以降か。4は土師器すり鉢片、残存率10%以下、外面ケズリ後ナデ、内面ナデ後カキ目、15世紀以降か。5は土師器小皿片、残存率20%、外面体部下半はコビオサエ、他はヨコナデ、精良な胎土、へそ皿と思われる。15世紀頃か。6も同タイプの土師器小皿片、残存率20%である。7は土師器小皿片、残存率10%、底部外面粗いナデ、他はヨコナデ、精良な胎土である。8は木製品、柄杓の柄末端か。9は角材を杭状に再加工したもの。上端折れ面に釘穴残る。10は板状木製品、一筋、刃物の刻み目が入る。片方の側面に二つの釘穴あり、片方には木釘の先が残る。

古代～中世の遺物を含むが、へそ皿系土師器小皿が15世紀頃の特徴を有する。瓦質土器を含む第7-1～3a層以降で、第2-4b層以前とすれば、耕作期間は15世紀後半頃と考えられよう。

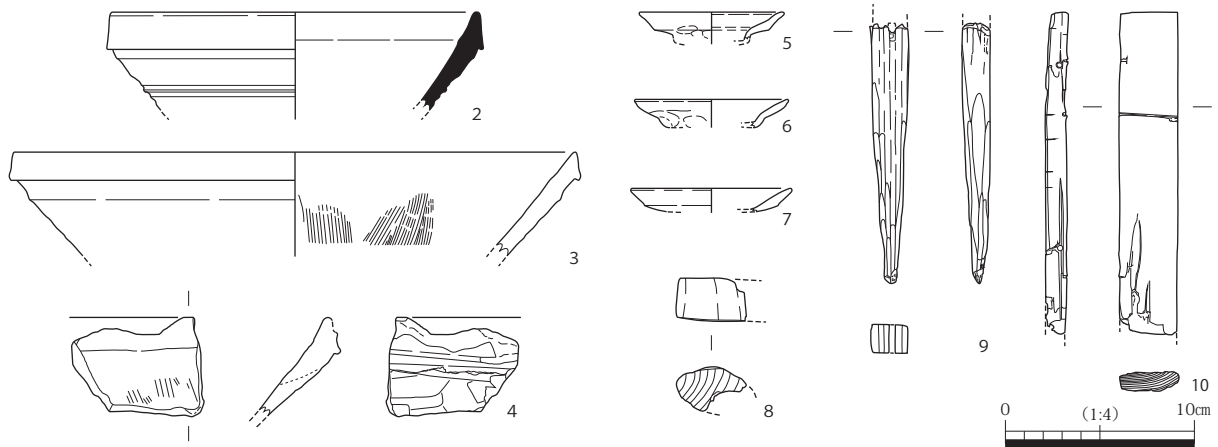


図12 1区第3a層出土遺物

小結 畦畔の間隔は、10.9mとの差が1m以内なのは39・41畦畔間、41・42畦畔間のみ、最大は30・33畦畔間の16.8～17.2m、最小は34・39畦畔間の8.4mである。29・36溝は一つの耕地区画のほぼ中央を伸びる。耕地区画の高さは基本南が高いが、34・39畦畔間のみ北側より低い。南北両端畦畔の方位性が他より東が北に振るのは、斜行坪境への対応と推測されるが、ならばなぜ、他の畦畔は正方位に近いのかは不明である。第2－4a面と比較すると、28畦畔が2畦畔とほぼ同位置にあり、33畦畔が15島畠南裾ラインに近い、34畦畔が18土坑北側肩部ラインに近いなど、踏襲されたものもある。ただし、2畦畔と28畦畔の方位性は違い、この面の北側坪境の方位性は、南側坪境と平行していた可能性もある。

第3項 第4－1a面（図13・図版3－8・9）

第4－1a面は直上層が耕作土層なので、畦畔頂部は削平され、切り合いのみ確認できる。畦畔盛土は耕作土層と同質である。東西方向の畦畔と溝が検出されたが、南側に溝が集中していた。

43 畦畔 最北端の畦畔で、第3a面29溝の0.4mほど南に位置する。44畦畔との芯芯距離は13.1～13.3m、幅は0.3～0.4mで方位性はE→2°→Nである。畦畔両側の面はT.P. + 12.26mほどである。

44 畦畔 第3a面に残る31土坑底部北側下端とほぼ同位置である。芯芯距離で45溝と5.1～5.3m、46畦畔と9.6～9.8m、幅0.3～0.5m、方位性はE→1°→Nである。畦畔南側の面の高さは東が高い傾向があり、T.P. + 12.26～12.21m、それも45溝に向い少し低くなる。わずかに北側より低い。

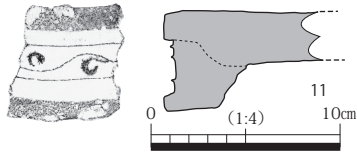
45 溝 44・46畦畔間のほぼ中央に走る。幅0.2～0.4m、深さ0.05m前後、底部レベルに一定の傾斜はない。埋土は第4－1a層より明色でやや砂粒が多い。31土坑底部南側下端ラインに近い位置にある。溝肩部近くの面の高さは、44・46畦畔間の平均的高さより0.03～0.04mほど低い。一耕地区画内の排水用溝か。この溝から59溝までの遺構は全て方位性が東西正方位である。

46 畦畔・47 溝 46畦畔南沿いに47溝が伸びる。46畦畔と48畦畔の芯芯距離は10.3～10.9mである。畦畔の幅は0.2～0.4m、溝の幅は0.2～0.5m、深さは0.1m弱ほどで底部レベルはわずかに西に傾斜する。溝埋土は第3a層が直接入る。46畦畔は第3a面33畦畔より1.7mほど北側に位置する。47溝の南側の面の高さはT.P. + 12.24m前後で東西の傾斜はなく、北側面とほぼ同じ高さである。

48 畦畔・49 溝 48畦畔の南0.6～1.1mに49溝が伸びる。48畦畔は幅0.3～0.5m、その南の耕地区画に関連すると思われる50溝との芯芯距離は9.3mほどとなる。第3a面34畦畔より1.1mほど北



图 13 1区第4-1 a面全体图



側に位置する。49 溝は幅 0.3～0.6m、深さ 0.05m 強、底部レベルは調査区中央付近が下がり、東西にわずかに上がる。溝埋土は第 3a 層が直接入る。南側の面の高さは北側の面とほぼ同じである。

50～63 溝 50 溝が北端で、以南に広がる東西方向溝群である。

図 14 1 区第 4-1 a 面 63 溝出土遺物 幅 0.5m 前後と 1 m 前後のものがあり、深さは 0.1～0.2m ほどが多く、肩部ラインが直線的でない、若干蛇行するものがあるなどの特徴がある。底部レベルは、51 溝のみ東へ下がり、他は緩い凹凸を成す。埋土は共通で第 4-1 a 層のブロック間に粗砂～中砂が入る。多くの溝は第 4-2 b 層まで掘り込むが、その層は細砂のみで、埋土の砂は別由来で第 3 b 層に該当し、これらの溝は第 3 a 層成立時に一斉に掘られた可能性が高い。第 3 a 面 41 畦畔が 55 溝に、42 畦畔が 62 溝に、平面位置で重複する事も畦畔成立以前に掘られた事を示す。この溝群は上下層の畝溝ではなく、耕作土復旧作業の痕跡であろう。60 溝は 59・61 溝に切られ、その付近で溝の方位性も変化する。59 溝以北は東西方向正方位だが、60・61 溝は E→2°→N、62・63 溝は E→5°→N となる。これは 62 溝上にある第 3 a 面 42 畦畔の北側畦畔との方位性の違いと共通する。この溝群内には 2 本以上の第 4-1 a 層時点畦畔が存在した可能性が高いが、溝群の攪乱のため確認できない。溝間の面の高さは T.P. + 12.3m 前後で 50 溝以北より高く、南端 62・63 溝間は T.P. + 12.33m ほどとさらに高い。他に、51・52 溝間に 3.4～3.8m ほどの無遺構部分がある事、最南端の 63 溝が、東壁断面で幅 3 m を越えても南側肩部が見えず、深さも 0.4m を越える大きな溝である事などが注目される。

50 溝から瓦器 2 片（椀、外面ミガキあり 1・小皿 1）・土師器 1 片、51 溝から土師器甕 1 片、58 溝から瓦質土器こね鉢 1 片・瓦器椀内面ミガキ粗 1 片・土師器 2 片（椀 1）、61 溝から瓦質土器 1 片、62 溝から土師器 4 片（小皿 2・坏 1）・砥石 1、63 溝から土師器 1 片・須恵質軒平瓦 1 片・土師質丸瓦 1 片・付け木 4 片が出土している。図 14-11 は 63 溝出土須恵質軒平瓦片である。上面は布目を消す粗いナデで前縁部ケズリ後ナデ、下面は全面ナデ、胎土に石英・長石・角閃石が入る。14 世紀以降のものか。

出土遺物 第 4-1 a 層から第 4-2 b 層までの包含遺物は以下の通り。

青磁 2 片（碗 1）・無釉陶器 2 片（すり鉢 1）・瓦質土器 5 片（こね鉢 4・火鉢 1）・瓦器椀、外面ミガキあり 1 片・灰釉陶器蓋つまみ 1 片・土師器 26 片（小皿 10（へそ皿系 7）・甕 4・三足羽釜 1・壺 1）・須恵器 16 片（坏 1・こね鉢 1・甕 7・壺 6）・いぶし丸瓦 2 片・須恵質平瓦 2 片・砥石 1 片・木製品 12 片（円形板 1・板材 2・角材 3・扁平角材 3・札状 3）・炭 5 片・桃核 1 片・木の実の皮 2 片である。

図 15 に図化遺物を載せる。12 は瓦質土器片、火鉢か、残存率 10% 以下、内外面ヨコナデ、外面は 2 条一組の沈線二つの間に長方形と放射状線を組み合わせた印紋が連続する。14 世紀後半～15 世紀前半頃か。13 は土師器小皿片、残存率 10%、口縁部ヨコナデ、外面ユビオサエ残る。15 世紀頃のへそ皿か。14 も土師器小皿片、残存率 10%、内面～外面口縁部ヨコナデ、体部下半ユビオサエ、精良な胎土、13 と同時期か。15 は青磁碗片、残存率 10% 以下、釉の発色は 10Y6/2 オリーブ灰色、丸みある体部と外反口縁の形は 14 世紀初頭～15 世紀前半頃か。16 は東播系須恵器こね鉢片、残存率 10% 以下、外面～内面口縁ヨコナデ、内面体部右下がりナデ、口縁部外面は自然釉かかる、12 世紀末～13 世紀初頭頃か。17 は瓦質土器すり鉢片、残存率 10% 以下、体部外面ケズリ、他ヨコナデ、内面カキ目あり、14 世紀後半頃か。18 は須恵器甕片、残存率 10%、口縁回転ナデ、体部外面平行タタキ、内面同心円タタキ、奈良時代頃か。19 は円板状木製品片、半分弱が欠ける、中心の孔は一辺 1.6cm ほどの

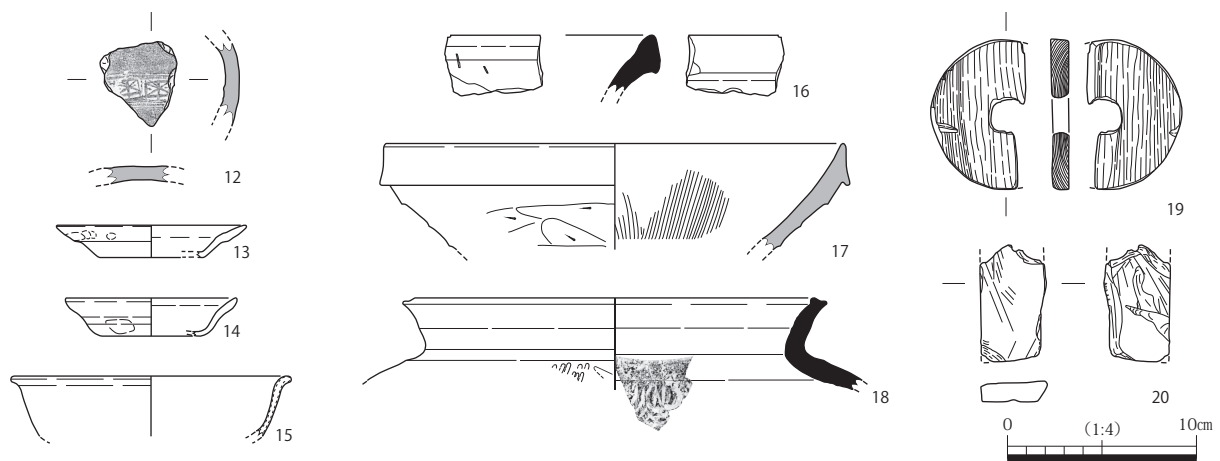


図 15 1区第4層出土遺物

正方形か、用途不明である。20は粘板岩製砥石片、片方の側面が磨滅により斜めになる、石目に沿った剥離あり。

土師器へそ皿系小皿が定型化し、瓦質土器奈良火鉢の破片も見られ、第4-1a層耕作期間の下限は15世紀頃である。第5a層以下ではへそ皿系土師器小皿が見られなくなる事から、第4-2b層の堆積が15世紀前半頃、第4-1a層の耕作期間が15世紀後半頃に収まると見てよいだろう。

小結 46・48畦畔間がほぼ10.9mで、44・46畦畔間も10.9mに近い。その南も、50・51溝間に畦畔があったと仮定すれば10.9mに近く、さらに2区画分21.8m南は規模が格段に大きい63溝内に達する。しかし、北側43・44畦畔間は13mを越え不均等である。各耕地区画の面の高さは、第3a層耕作の削平を受けるが、50溝以北は平坦で、45溝周辺がやや低い程度である。しかし50溝以南は南に向かって高くなる傾向にある。なお、第4-2a面は面的調査をしていないが、西壁断面で43畦畔下0.1mほど南にずれて畦畔が、45溝直下にほぼ同規模の溝が、46畦畔直下に畦畔が、48畦畔下北に0.15mほどずれて畦畔があるを確認しており、ほぼ第4-1a面と同様の耕地区画が存在したと推測できる。

第4項 第5a面 (図16・図版4-10)

第5a層は砂層上部の土壌化に見えるが耕作土層で、上面が洪水堆積層に覆われていたため、畦畔も突出した形態を残し、水口や洪水侵蝕痕も検出された。断面で調査区南側に第4-2a面・第4-2b面切り込みの溝が幾本かあるのを確認したが、それらの内、この面まで達したものを図化して加えた。

65溝・66畦畔 北端の遺構である。66畦畔北裾に沿い65溝が掘られる。溝幅0.3～0.4m、深さ0.1mほど、底部レベルに明確な傾斜はない。埋土は第5b-1層内に第5a層のブロックが入る。

66畦畔は幅0.4～0.6m、高さ0.05m強突出する。盛土は第5a層と同質で、西壁断面で突出は明瞭だが耕作土層との切り合いは確認できず。南の69畦畔との芯芯距離は10.3～10.7m、方位性はE→2°→N、第4-1a面43畦畔より芯芯距離で0.3mほど南にずれる。65溝北側の面の高さはT.P. + 11.95mほど、66畦畔南側の面はT.P. + 11.97m前後で、わずかに北側より高い。

西側で、3mほどの距離で二つの水口が畦畔と溝を切る。どちらも南側の面から底部が北に下り、65溝を横切る部分で一段下がり、溝の北側に突出する。その形態から、南から北へ水を流すと思われるが、近い位置に二つある意味は不明である。どちらも第5a層と似るが、やや砂粒多い埋土である。

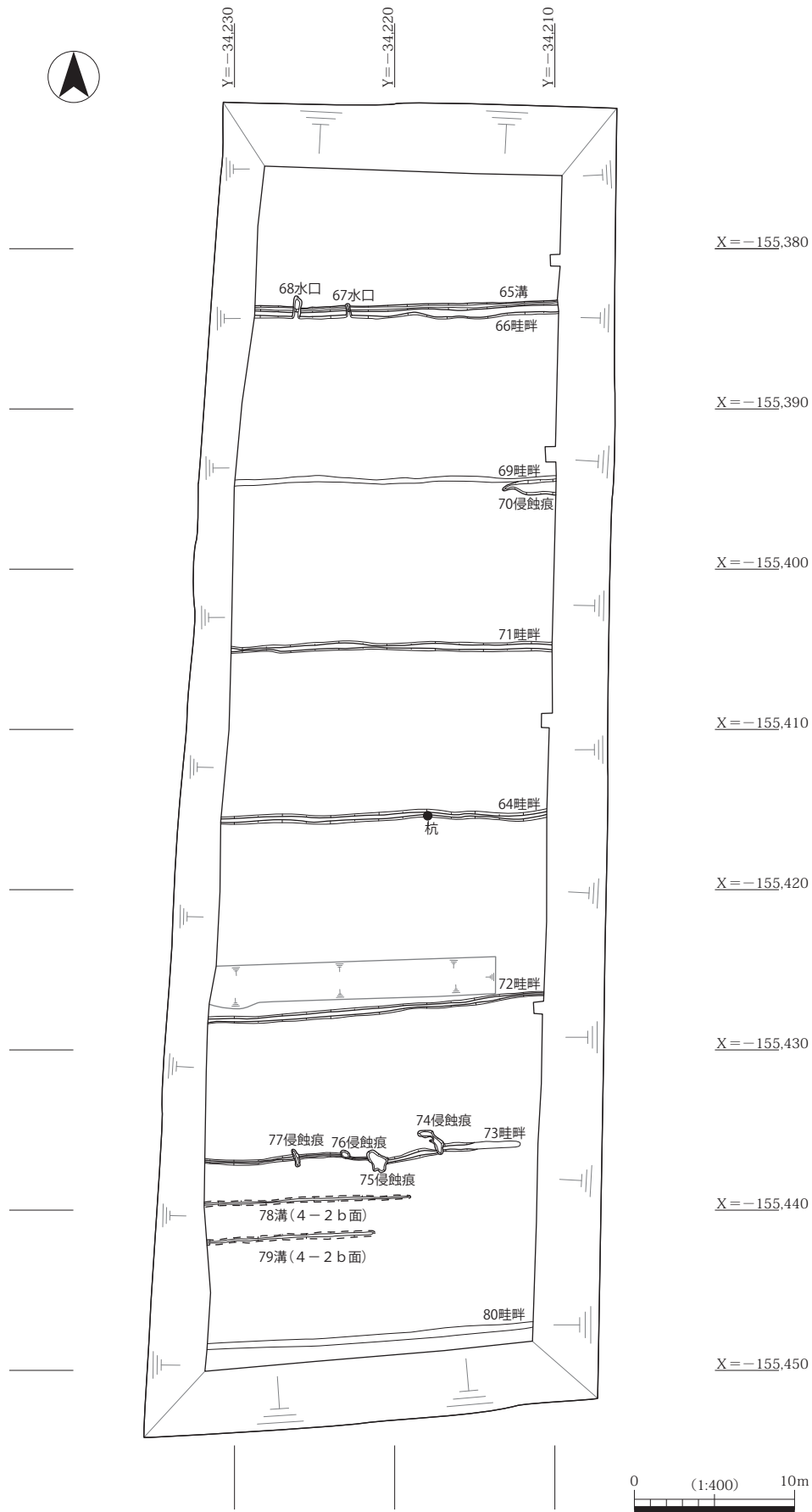


图 16 1区第5 a面全体图

69 畦畔 西壁断面で耕作土との切り合いと0.05m強突出した頂部を確認したが、平面では不明確で耕作土との切り合いのみを検出、盛土は第5a層と同質である。幅0.2～0.4mで、方位性は東西正方位である。南側71畦畔との芯芯距離は10.3～10.5m、第4-1a面44畦畔より芯芯距離で1.3～1.7m北にある。畦畔南側の面は東でT.P.+12m、西でT.P.+11.93mほど、平均すれば北側とほぼ同じ高さか。

調査区東端、畦畔南側沿いに70侵蝕痕がある。東壁断面にはなく、長さ4mほどか。深さ0.1m弱で西端は浅くなり終わる。埋土は中砂～細砂に第5a層のブロックが混じる。

71 畦畔 西壁断面で耕作土との切り合いと突出した頂部も確認した。平面的には幅0.3～0.6m、突出する頂部の高さ0.1m弱だが、東側では検出時頂部を削平しすぎた。盛り土は表面が第5a層に似るが、第5a・b層のブロックから成る。部分的に細いのは洪水の侵蝕か。方位性はほぼ東西正方位である。南側64畦畔との芯芯距離は10.4～10.7mで、第4-1a面46畦畔から芯芯距離で0.3mほど北にずれる。畦畔南側の面は東西高低差もなく、T.P.+11.98mほどの高さで、北側よりわずかに高い。

64 畦畔 西壁断面で耕作土との切り合いと頂部の突出を確認、幅0.4～0.5m、突出する頂部の高さ0.1m弱ほど、盛土は71畦畔と同じである。わずかに蛇行するが方位性はE→1°→Nとなる。第4-1a面48畦畔より芯芯距離で南に0.2mほどずれる。調査区中央からやや東の部分で、南側肩部に1本の杭を検出した。直径5cm程度の丸木杭である。南の72畦畔との芯芯距離は11.2～12.4mである。畦畔南側も面の高さはやや凹凸あるがT.P.+11.98mほどで、北側の面と変わらない。

72 畦畔 幅0.3～0.5m、突出頂部の高さ0.1mほど、盛土は64・71畦畔に同じ、方位性はE→3～5°→Nで、東ほど北に曲がる。73畦畔との芯芯距離は8.7～9.4mである。第4-1a面51溝北肩部に沿う位置で、形が良く合うため、51溝は溝北側壁面でこの畦畔を確認しつつ掘られた可能性もある。畦畔南側の面の高さは、部分的に侵蝕らしき凹部はあるが、それ以外は北側の面とほぼ同じである。

73 畦畔 幅0.2～0.5mだが、細い部分は侵蝕で蛇行形状になったか。頂部突出は0.04mほど、東側は侵蝕で高さを失い途切れる。盛土は64・71・72畦畔に同じ。調査区中央付近で四つの侵蝕痕が畦畔を切る。方位性は侵蝕による蛇行を是正すればE→3°→Nとなる。南の80畦畔との芯芯距離は10.9～11.6mである。第4-1a面55溝南肩部に沿う形になるが、55溝は第5a面まで達していないので関連性はなかろう。畦畔南側の面はT.P.+11.99mほどの高さで、北側とほとんど同じと言える。

80 畦畔 西壁断面で突出する頂部の形を確認できたが、平面的には頂部を削平した状態でしか検出できなかった。幅は0.4～0.5m、盛土は64・71～73畦畔に同じ。方位性は東ほど北に振り、E→3～5°→Nで、72畦畔と同じである。畦畔南側の面は北側と高さは変わらない。

78・79 溝 どちらも第4-2b面の溝である。64畦畔より南に2m以南は、第4-2a面と第4-2b面の遺構が多いのは西壁断面で見え、掘削中にほとんどは東西方向溝と判明した。東壁まで伸びるものはない。第4-1a層と第4-2a層の床面遺構である。溝の規模や間隔に規則性はない。埋土は基本的に掘り抜いた層のブロックからなるが、第4-2b面溝の中には、砂が多いものもある。78・79溝は第4-2b面の、埋土に砂の多い溝で、この2本のみ壁が直立し底部が平坦な断面形を持つ。78溝は幅0.3mほど、79溝は幅0.25mほど、どちらも深さは0.25mほどで、第5a面を0.05mほど掘り込む。底部レベルに傾斜はなく、この面では調査区中央付近で浅くなり終わる。

出土遺物 第5a・b層は、特に第5b層から植物遺体の出土が多かった。出土遺物は以下の通り。

瓦器椀、内面ミガキ密2片・土師器12片(小皿3・坏1・甕1・こね鉢1)・鉄製品1片・木製品

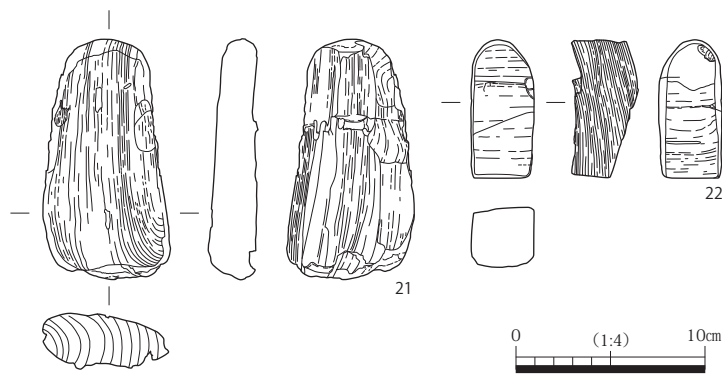


図17 1区第5層出土遺物

20片（扁平角材3・棒状1・札状4・板材2・木端4・塊状1・削り物1）である。

図17－21は塊状木製品、扁平な木片で、片面は丸みを持ち、もう一方は粗く割り削る。層内で似た大きさ、形態の木片が5個ほど出土した。用途不明。22の木製品も用途不明、全面が加工面である。

第5a層の耕作期間は比較的短いと推定されるが、時期を限定できる要素は少ない。根拠は薄いですが、この層もまだ14世紀までには遡らず、15世紀前半頃に耕作期間があると考えたい。

小結 耕地区画は北側66畦畔～64畦畔の3区画が、10.9mより若干狭い間隔で揃う。南側は間隔が乱れるが、狭いのは72・73畦畔間で、64畦畔～80畦畔3区画の平均値は10.3～11.1m、80畦畔は均等間隔の位置にある。第4－1a面と比較すると、66・71・64畦畔がわずかなずれで踏襲されるが、69畦畔が44畦畔へ移動し、不均等さが増す。各耕地区画の面の高さは、わずかに南が高いが高低差が少ない。ただ、部分的に緩い凹部があり、南側に侵蝕痕が多いので、面的な侵蝕が南側で強く、本来の高低差が消滅した可能性もある。各畦畔の方位性は中央付近が正方位、南北で東がやや北に振る傾向は第4－1a面と同じだが、斜行する範囲は第4－1a面より北側は狭く、南側は広い。

第5項 第6a面（図18・図版4－11～5－15）

この面は断面で激しい凹凸がほぼ全面に認められ、畦畔や溝などが遺存する可能性はほとんどないと予測できた。ただし既往の調査では地震痕跡とする考えや、耕作に伴う踏み込みとする考えが示されたが、どちらも妥当でないと思われ、全面検出して状況を確認する事にした。凹凸はその上下幅が10cmを越える部分が多いため、上部を強めに削り、個々の凹部の形状が明確になる高さまで下げた。全体に検出状況が均等になるように高さを調節した。よって、検出レベルは本来の遺構面の高さではない。

断面の状況 この面は砂層の第5b層に覆われるが、その層は上下2層に分けられる。上層第5b－1層は乱れた短いラミナがあり、第6a層の剥片状のブロックが若干混じる。第6a面の激しい凹凸の凹部には必ずこの層が入り、ラミナの状況で、第6a面凹部はこの層上面から刻まれている事が分かる。下層第5b－2層はラミナが明確に残る洪水堆積砂層である。西壁断面南半に比較的多いが、全体的には遺存部分が少ない。この層が接する第6a面は、第5b－1層が接する部分のような激しい凹凸はない。

第6a面の断面形状は、凸部分は上方に尖る火炎状構造に似た形もあるが、上下層のずれにより火炎状構造先端部分が同方向に曲がるような形はない。第6a層内には地震変形で層内の転動により形成される「C」字形、「S」字形の短いラミナもない。また凸部分上端が、平坦面を残す部分が多く見られる。凹部は大別して、幅10cm未満で垂直か斜めに下がるものと、上幅が20cm前後で、断面形がピット状のものや、それが重なり各々深さが違う底部形を成すものがある。地震変形で生じる加圧痕のように凹部が袋状に広がるものは少ない。加圧痕なら壁面に平行するラミナが形成されるが、ここでは砂が流れ込む形状のラミナしかない。以上からこの凹凸が地震変形である可能性は否定されたと考える。

平面の状況 検出した大多数は牛と人の足跡である。動線を追えるものもあり、上下面の耕地区画と

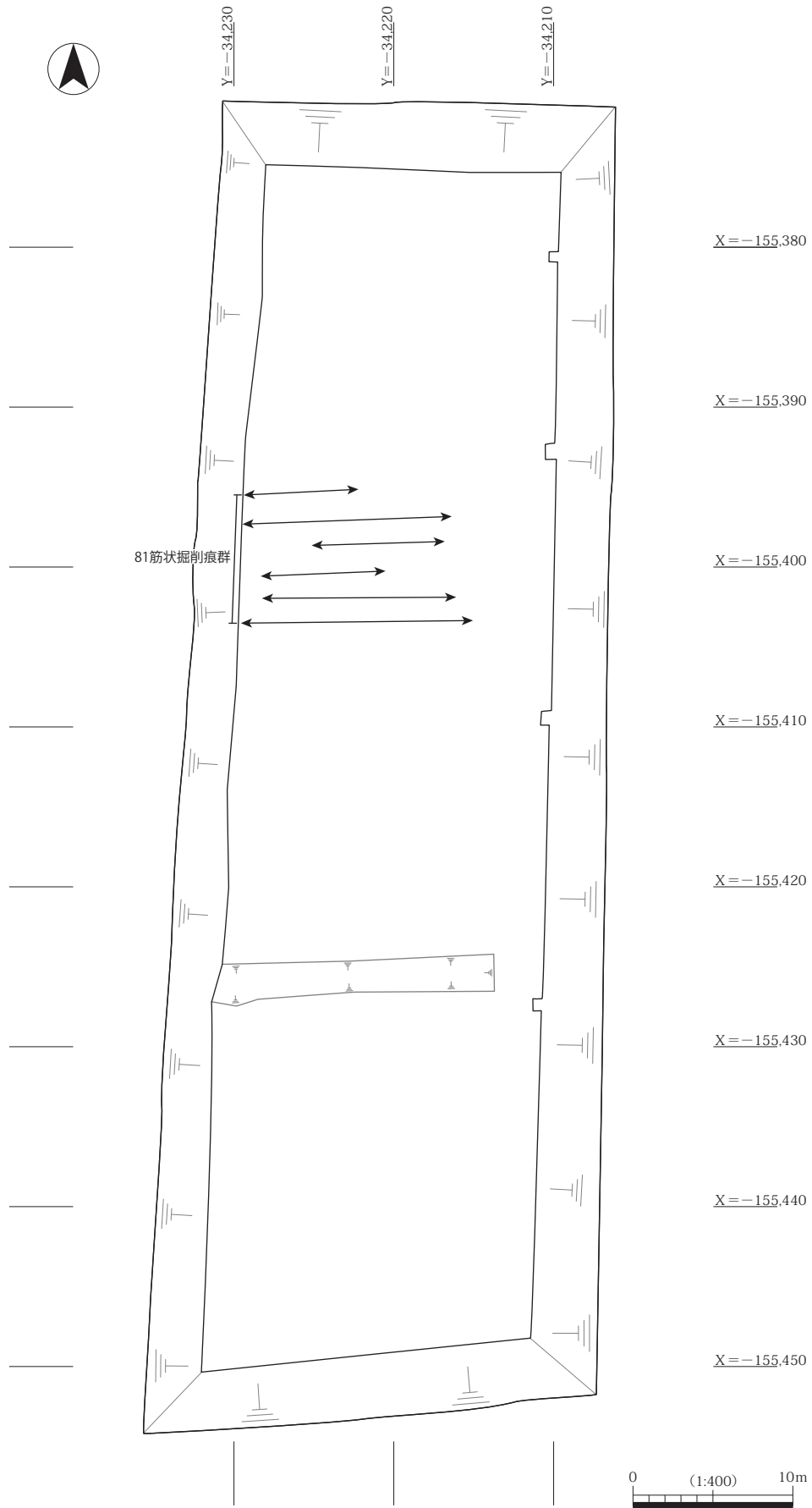


图 18 1区第6 a面全体图

無関係に無秩序な動きを示す。その他に長さ 0.2m 前後の長方形で、長辺片方は直線的、もう片方はやや膨らむものがあり、鋤か鍬の刃先の痕と考える（図版 5 - 13 ~ 15）。それも並ぶものはなく、異なる方向で散在する。また、何らかの耕作具を直線的に引いた痕跡を数条検出した（図版 4 - 11・5 - 12）。溝状の輪郭は成さず、持ち上げられた部分に砂が流入した形状である。足跡も耕作具痕も埋土は全て第 5b - 1 層である。断面でもこれらは砂層上面から切られ、大きいものに若干第 6a 層のブロックが入り、第 5a 層のブロックはない事、また、無秩序な事などから、耕作に伴う踏み込みである事も否定できる。

第 6a 面形状の成因 第 5b - 1 層に乱れたラミナがあり、それが凹部に流れ込む形状であるので、第 5b - 2 層堆積の洪水後、水が引ききらない状況で何らかの作業があったと考えられる。人と牛が入り、掘削具が使用される。大きい方の凹部の形状や、第 5b - 1 層内の剥片状の第 6a 層ブロックから、その作業が第 6a 層上部を掘削した事は確実である。ならばこれは砂層を堆積させた洪水の後、その砂層の下から耕作土を掘り上げ、砂層の上に耕作土層を復旧する作業の痕跡と考えるのが最も妥当であろう。

81 筋状掘削痕群 前述した「何らかの耕作具を直線的に引いた痕跡」は調査区中央からやや北寄りに集中する。間隔も方向性もわずかに異なる。3 本が西壁以西に続くが、東側は東壁に達する前に終わる。直線的形状から唐鋤を使用したと思われるが、唐鋤で砂層下の土を掘り上げる事が可能だろうか。

この掘削痕群を上下面耕地区画と照合すると、下層第 7 - 1a 面の 84・85 畦畔間と重複するが、北端 1 本が 84 畦畔北側外に出て、2 本目が畦畔に一部重なる。南側は 85 畦畔との間に 3m 以上の間が空く。上層第 5a 面では 69・71 畦畔間にぴったり収まる。他の足跡や掘削具痕は耕地区画と関連なく無秩序だが、これらの掘削痕だけは復旧後の耕地区画が現地で明示された後形成されたと考えられる。

出土遺物 第 6a 層以下は包含遺物がやや多くなる。第 6a 層出土遺物は以下の通り。

瓦器 85 片（椀 84（外面ミガキあり 2・内面ミガキ密 3・内面ミガキやや密 16・内面ミガキ粗 50）・小皿 1）・黒色土器 A 類椀 1 片・土師器 168 片（小皿 23・皿 6・椀 14・坏 27・甕 7（外面ハケ 1）・高坏 4）・須恵器 19 片（坏 4（奈良 3・5 世紀 1）・甕内面すり消しなし 7・壺 8（長頸 1・平瓶 1・提瓶 1））・瓦 4 片（いぶし平 1・土師質丸 1・須恵質平 2）・石製埴 1 片・木製品 16 片（下駄 1・定規 1・板材 1・棒状 6・角材 2・扁平角材 2・付け木 5）・炭 2 片・桃核 1 片・骨 1 片である。

図 19 - 23 ~ 43 は第 6a 層出土図化遺物である。23 は瓦器椀片、残存率 20%、内面～外面口縁ヨコナデ、外面体部ユビオサエ、内面ミガキ粗、2.5Y7/1 灰白色を呈し、和泉型 IV - 4、14 世紀前葉か。24 は土師器小皿片、残存率 15%、口縁内外面ヨコナデ、内面底部一定方向ナデ、外面底部粗いナデ、精良な胎土だが角閃石あり、形態が瓦器小皿に類似し 11 世紀頃か。25 も土師器小皿片、残存率 15%、口縁内外面ヨコナデ、内面底部板ナデ、外面底部粗いナデ、胎土に石英とチャートあり、時期不明。26 も土師器小皿片、残存率 10%、口縁内外面ヨコナデ、内面底部磨滅、外面底部粗いナデ、胎土に角閃石あり、時期不明。27 も土師器小皿片、残存率 10%、内外面ヨコナデ、外面底部は磨滅、胎土は生駒西麓産、10YR6/1 褐灰色を呈する、へそ皿系の定型化以前、14 世紀頃か。28 も土師器小皿片、残存率 10%、内面～外面口縁ヨコナデ、外面体部ユビオサエ、へそ皿系定型化以前、14 世紀頃か。29 は土師器皿片、残存率 15%、口縁内外面ヨコナデ、内面底部一定方向ナデ、外面底部粗いナデ、河内地域器種区分再編期 10 世紀後葉頃か。30 も土師器皿片、残存率 10%、口縁内外面ヨコナデ、外面底部ハケ、胎土は生駒西麓産、時期不明。31 は土師器坏片、残存率 25%、口縁内外面ヨコナデ、内面底部不定方向ナデ、外面下半ユビオサエ後粗いナデ、精良な胎土に角閃石の細砂あり、11 世紀頃か。32

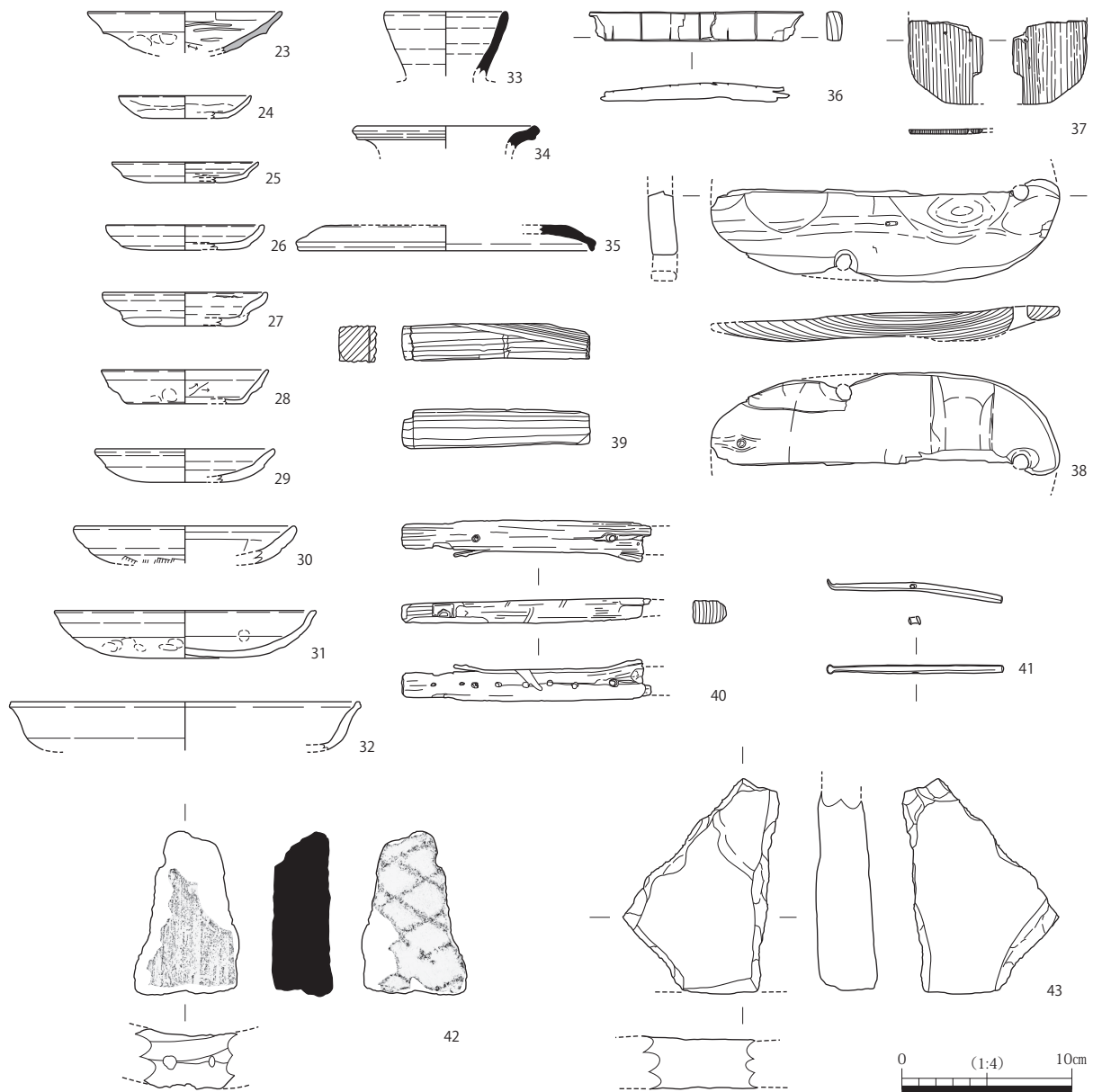


図19 1区第6層出土遺物

も土師器坏片、残存率15%、口縁内外面ヨコナデ、やや磨滅、精良な胎土、8世紀後葉頃か。33は須恵器平瓶口縁片、口縁周残存率25%、内外面回転ナデ、6世紀後葉頃か。34は須恵器壺口縁片、口縁周20%残存、内外面回転ナデ、古代か。35は須恵器坏蓋片、残存率10%、内外面回転ナデ、8世紀前葉頃か。36は木製物差し、両端を欠く、幅1.2cm、厚さ0.9cm、残存部に3本の全幅の刻み目あり、間隔は一寸3.3cm、その間に5分を示す幅半分の長さの刻み目あり。37は折敷底板片、厚さ3mmの柾目板で、折敷角部分が残る。38は木製下駄片、全長20.5cm、鼻緒孔二つ残り、上面は足型にややくぼみ、下面はかなりすり減る削り出しの前歯が残る。39は角材状木製品、一方の端部に削り込みあり、そこから側面にほぞ穴にはめた痕跡あり、他方の削り痕は出土時の欠損である。40は木製品片、図右側は欠損、図下の面は径3mm深さ1.3cmほどの孔が1.4～1.8cm間隔で6個ならび、中に竹ひご状のもの残り、径4mmの孔が二つ貫通、図中央の面は丸みあり、左側に長方形に窪めた中に径5mmの孔が貫通、図上の面は図下の面から貫通した孔が2個ある。鳥籠の扉か。41は真鍮製耳かき状製品、柄は反り、中央付近に径3mmの孔、筭か。42は須恵質平瓦片、上面板ナデ、下面斜格子タタキ、端

部へラ切り、胎土に流紋岩小礫あり、厚みが 30.5cm あり、奈良時代頃か。43 は砂岩製磚片、図左の面が平滑で上面か。

耕作期間の下限は 14 世紀以降としか言えないが、中河内地域での土師器へそ皿系小皿の上限は良く分からない。最も多い内面ミガキ粗の瓦器椀片より後とすれば 14 世紀後半頃の耕作土層であろう。

小結 第 6 a 面の激しい凹凸は、既往の調査で坪の範囲を越え広がる事が知られ、認識しやすく、同時期遺構面のつながりを考える点で重要である。今回その形成原因を明らかにできた。

第 6 項 第 7 - 1 a 面 (図 20・図版 5 - 16)

第 6 a 層は上部を掘削されても層厚 20cm を越える所が多く、水成堆積層の疑いもあった。しかし耕作土復旧の土を採取されている事と、この第 7 - 1 a 面検出畦畔が頂部を削平されていた事が、第 6 a 層が耕作土層である事を証明する。二つの耕作土層が重なっていた可能性もある。

この面では耕作土層との切り合いのみ残る畦畔の他は、水口らしい畦畔の途切れが一カ所検出された。

82 畦畔 北端の東西方向畦畔である。西壁断面で耕作土との切り合いと、頂部を削平され平坦化した状況を確認した。幅 0.3 ~ 0.6m、方位性は大部分が東西正方位だが、東側が南に曲がり、E → 6° → S まで傾く。盛土は第 7 - 1 a 層と同質だが、若干土壌化が強い。南側の 83 畦畔との芯芯距離は 4.7 ~ 5.2m である。畦畔の南北の面はどちらも T.P. + 11.7m ほどで高低差はない。

83 畦畔 断面状況と盛土は 82 畦畔と同じ。幅 0.2 ~ 0.5m、方位性は西半分が E → 2° → S で、東半分は正方位。南側 84 畦畔との芯芯距離は 10.7 ~ 11m である。第 5 a 面 66 畦畔からは南へ 1.2 ~ 1.9m 離れる。畦畔南側の面の高さは T.P. + 11.71m ほどでわずかに北側より高いか。

84 畦畔 断面状況と盛土は 82・83 畦畔と同じ。幅 0.4 ~ 0.5m、方位性は E → 2° → S で、南側 85 畦畔との芯芯距離は 10.7 ~ 10.8m、第 5 a 面 71 畦畔から南へ 1.7 ~ 2.7m ずれる。畦畔南側の面の高さは東がやや高く T.P. + 11.76m、西が T.P. + 11.72m で北側より若干高い。

85 畦畔 断面状況および盛土は 82 ~ 84 畦畔と同じ。幅 0.3 ~ 0.6m、方位性は E → 2° → S で、南側 86 畦畔との芯芯距離は 10.9 ~ 11m、第 5 a 面 71 畦畔から南に 1.7 ~ 2.7m ずれる。畦畔南側の面の高さは T.P. + 11.78m ほどで北側より若干高い。

86 畦畔 断面状況および盛土は 82 ~ 85 畦畔と同じ。幅 0.15 ~ 0.3m、方位性は E → 2° → S で、南側 87 畦畔との芯芯距離は 9.2 ~ 10.7m、第 5 a 面 64 畦畔から南に 2.2 ~ 3.2m ずれる。畦畔南側の面の高さは北側と同じ。

87 畦畔 断面状況および盛土は 82 ~ 86 畦畔と同じ。幅 0.3 ~ 0.5m、方位性は E → 2 ~ 3° → N と他と異なる。南側 89 畦畔との芯芯距離は 11.1 ~ 12.1m、第 5 a 面 72 畦畔から南へ 0.4 ~ 1.2m ずれる。中央やや西寄りの位置で 0.4m ほど畦畔が途切れ、水口と思われる。畦畔南側の面の高さは西がやや高く T.P. + 11.81m ほど、東が T.P. + 11.77m ほど、わずかに北側より高いか。

89 畦畔 断面状況および盛土は 82 ~ 87 畦畔と同じ。幅 0.3 ~ 0.6m、方位性は E → 2° → S、畦畔南側の面は T.P. + 11.8m ほどで、わずかに北側より高いか。

出土遺物 第 7 - 1 a 層~第 7 - 3 a 層は一括して遺物を取り上げた。上層よりさらに遺物量は増える。出土遺物は以下の通り。青磁 4 片 (碗 3・耳環? 1)・無釉陶器 8 片 (甕 6 (常滑 3・備前 1・信楽 1))・瓦質土器 9 片 (甕 1・こね鉢 1・三足羽釜 7)・瓦器 369 片 (椀 324 (内面ミガキ粗 241・内面ミガキやや密 61・外面ミガキあり 22)・小皿 3)・土師器 248 片 (小皿 68・皿 24・椀 14・坏 15・甕 20・



图 20 1 区第 7-1 a 面全体图

羽釜3・三足羽釜1)・須恵器28片(すり鉢、こね鉢11・甕6・壺3)・瓦9片(いぶし丸1・いぶし平2・土師質丸1・須恵質丸1・須恵質平4)・埴輪1片・漆器椀1片・木製品48片(刀子型1・板材24・棒状16・塊状1・付け木2)・炭6片・鉄製鎌1片である。

図21-44は刀子木型、茎の一部を欠く、最大幅1.5cm、厚さ3mm、厚さは一定、刀子発注時の見本か。45は漆器椀片、黒漆塗り、内面見込みに3筆の赤漆、高台は磨滅で明確でないが幅1cmほどか、高台内側には漆なし。46は土師器小皿片、残存率30%、底部外面粗いナデ、他はヨコナデで口縁内面右上がりナデ上げ、口縁端部に面あり、生駒西麓産胎土。47は完形土師器小皿、内面底部一定方向ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ユビオサエ、11世紀頃か。48も土師器小皿片、残存率25%、磨滅するがナデか、口縁外面に一つユビオサエ残る、時期不明。49も土師器小皿片、残存率25%、底部内面一定方向ナデ後、口縁内外面ヨコナデ、底部外面粗いナデ、精良な胎土、時期不明。50も土師器小皿片、残存率20%、底部内面不定方向ナデ後、口縁内外面ヨコナデ、生駒西麓産胎土、時期不明。51も土師器小皿片、残存率40%、内面ユビオサエ後底部一定方向ナデ、口縁内外面ヨコナデ、時期不明。52は土師器坏片、残存率15%、口縁内外面ヨコナデ、外面体部下半ユビオサエ、精良な胎土、京都編年環Nに似て、11世紀前葉頃か。53は瓦器小皿片、残存率20%、内外面口縁ヨコナデ後、内面見込み暗紋は格子、内面体部ミガキやや密、12世紀前半頃か。54も瓦器小皿片、残存率25%、底部内面一定方向ナデ、口縁内外面ヨコナデ、ミガキなし、12世紀後葉頃か。55は瓦器椀片、残存率20%、内面ヨコナデ後非常に粗いミガキ、外面口縁ヨコナデ、体部下半ユビオサエは放射状、高台なし、和泉型IV-3期13世紀末葉頃か。56も瓦器椀片、残存率20%、内面ヨコナデ後、非常に粗いミガキ、口縁外面ヨコナデ、体部下半ユビオサエは放射状、退化高台あり、復元径・器高やや不確か、高台とユビオサエからは和泉型IV-3、13世紀末葉~14世紀初頭頃か。57も瓦器椀片、残存率25%、内面ヨコナデ後粗いミガキ、外面は口縁ヨコナデ、体部ユビオサエ、まだ器高が高く、和泉型IV-2期13世紀後葉頃か。58も瓦器椀片、残存率20%、内面見込み暗紋なし、体部ミガキ粗、高台断面三角形、復元器高は不確かで、和泉型IV-1期、13世紀中葉頃か。59も瓦器椀片、残存率10%、高台は45%残存、内面、底部ナデ後体部ヨコナデ、見込み暗紋粗い平行線、体部ミガキ粗、外面ユビオサエ放射状、口径は14cmを越えるか、和泉型III-3期~IV-1期、13世紀前葉~中葉頃か。60も瓦器椀片、残存率15%、高台は40%残存、内面ミガキ密、体部分割ミガキ、外面ヨコナデ、和泉型I-3期、11世紀末葉~12世紀初頭頃か。61は瓦器片口鉢片、残存率10%以下、傾き不明、内面ヨコナデ後ミガキ、底部暗文らせん状、外面ユビオサエ後ヨコナデ、類例少ないが、ミガキ密度から12世紀頃か。62は瓦質土器三足羽釜脚部片、脚部半分ほど残存か、脚部タテナデ、器壁との接合部ユビオサエとユビナデ、器壁内面ヨコナデ、接合部に空間あるのが割れ面に見える。中世後半期。63も瓦質土器三足羽釜脚部片、脚部下半部分、タテナデで、端部ユビオサエでやや曲げる。中世後半期。64は土師器羽釜片、残存率10%以下、内外面ヨコナデ、内面煤付着、13世紀頃か。65も土師器羽釜片、残存率10%以下、内外面ヨコナデ、12世紀頃か。66は東播系須恵器こね鉢片、残存率15%、外面から内面口縁ヨコナデ、内面体部右下がりナデ、14世紀前半頃か。67は瓦質土器甕片、口縁周の15%残存、外面タタキは頸部まで入り、後に頸部外反成形、それより上と内面ヨコナデ、内面粘土継ぎ目あり、兵庫県神出窯須恵器の影響を受けた瓦質土器で、14世紀頃か。68は鉄製鎌、厚さ3mm、刃部から柄部への変化は緩やかで、柄端部は折り曲げる。69は砂岩製叩き石兼砥石、弥生時代遺物の可能性もあり、敲打痕2カ所あり、図上方端部は一撃で3片剥離する。図右面は緩く内弯し擦痕あり平滑、時期不明。70はいぶし

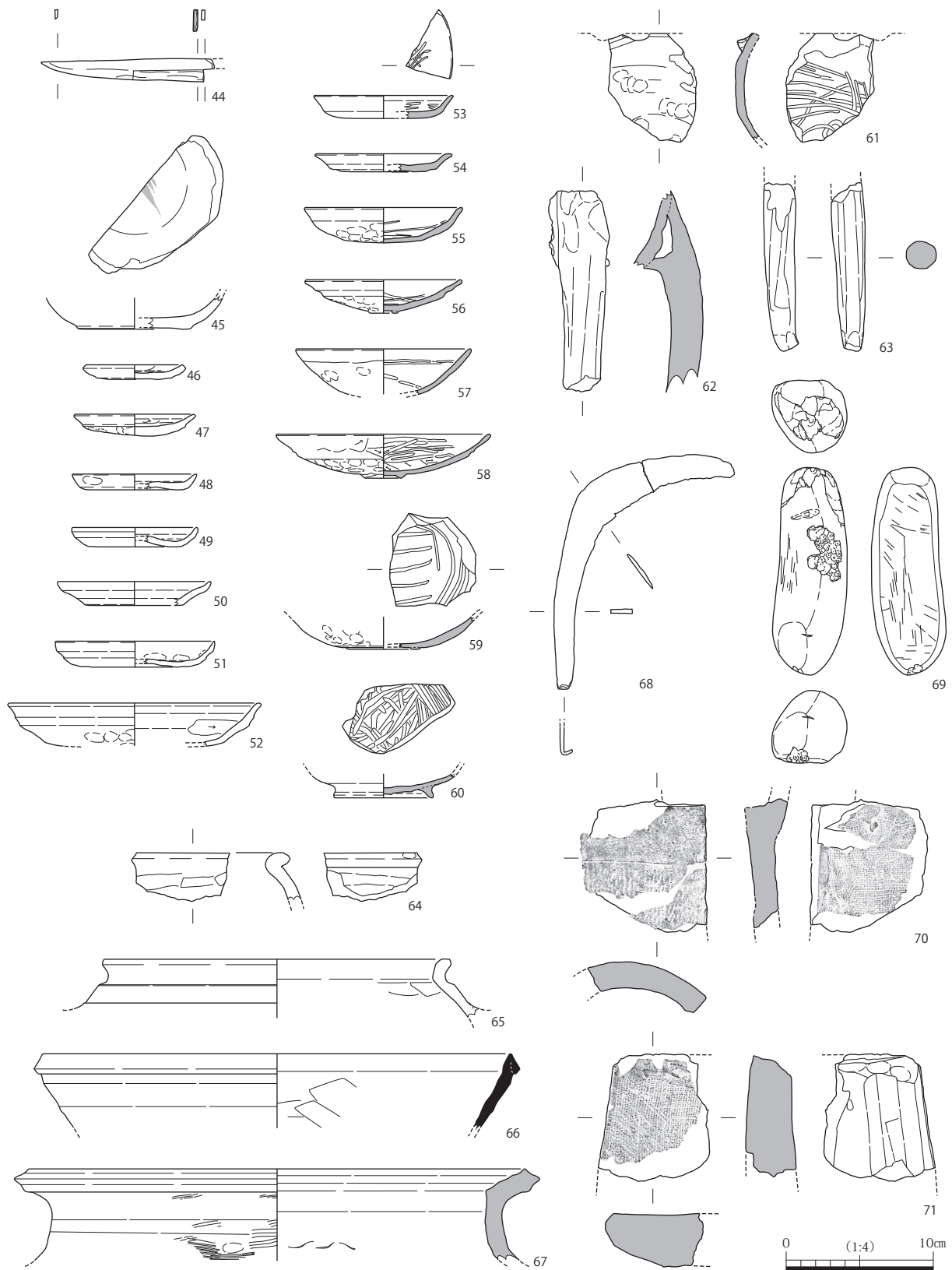


図21 1区第7-1a層～第7-3a層出土遺物

丸瓦片、下面布目、側面ヘラ切り、上面縄目タタキ後ナデ、内面布目の上からのユビオサエ残る。中世か。71はいぶし平瓦片、上面布目上にハケ、端部ユビナデ、後部端面上部ヘラケズリ下半ユビオサエ、側面ヘラケズリ、下面粗いヘラケズリ後ナデ、厚みからは古代か。

瓦器碗は内面ミガキの非常に粗いもの、ミガキないものもある。瓦質土器も3種ある。第7-1a層耕作期間が14世紀前半頃、第7-3層の堆積は13世紀前半頃まで遡る可能性がある。

小結 第6a層の耕作で削平され、各畦畔両側の高低差は明確ではないが、南側が高い傾向がある。畦畔間隔は82・83畦畔間が狭いが、10.9mの半分弱か。86～88畦畔間の間隔も87畦畔が少しずれのみで、2区画間の平均値は10.2～11.4mで10.9mに近く、他の区画もほぼ10.9mと言える。だが、ほとんどの畦畔で東が南に傾くのは上層の様相と異なる。東西方向坪境の方位も同じなら、現在残る南北方向坪境との直交性は高く、現在の東西方向坪境の斜行は後発的変化と言える。また、87畦畔のみ東が北に振り、第5a面72畦畔と近い位置にある。他は第5a面の耕地区画と大きくずれ、断絶が認められる。

第7項 第7-4a面 (図22・図版6-17・18)

畦畔・溝・水口が検出された。畦畔は頂部突出が残り、直上第7-3層が水成堆積層である事を示す。この面の特徴は耕地区画が2本一組の畦畔とその間の溝(図23)によりなる事である。第7-4a層は、南側の下部に砂層の7-4b層がある砂質土層から、北に行くに従い砂粒が減り粘質土化し、南から第7-4a層から第7-4a''層まで四つに分けられた。

90溝 調査区北端で溝として検出・掘削したが、西壁断面で、他の耕地区画と同じ2本の畦畔とその間の溝だと判明した。第7-4a層が最も粘質な部分で、北端で北側畦畔頂部を第7-4a面と誤認したようだ。溝として掘削した部分は本来の溝部分と南側畦畔盛土部分である。北側畦畔はほぼ半分の幅を北側側溝に切られる。西壁断面で北側畦畔幅は0.5mほど、南側畦畔幅は0.4mほど、間の溝は幅0.4mほど、深さ0.06mほど(畦畔幅は第7-4a面でのもの、溝幅は畦畔の溝側上端間、以下同)、畦畔盛土は両者第7-4a''層と同質のブロック土で、北側畦畔が南側畦畔盛土上にのる。溝埋土は第7-3層である。掘削した形が方位性では正しいならE→2°→Sである。南側91・93畦畔、92溝との芯芯距離は8.3～8.5m、第7-1a面82畦畔は南に芯芯距離で3.2～3.5m離れる。耕地区画より北側の面の高さは東西壁断面によればT.P.+11.36m、南側はT.P.+11.33mほどで、南がやや低いか。

91・93畦畔、92溝 西壁断面で91畦畔盛土が93畦畔盛土裾上にのり、92溝が93畦畔を若干削り込む。畦畔盛土は両方第7-4a''層と同質のブロック土である。92溝埋土は、上部は第7-3層が入り、下半は「灰色細砂質シルト中砂若干あり」である。91畦畔は幅0.4～0.7m、頂部は0.05mほど突出、中央東寄りに幅0.3mほどの94水口が開く。92溝は幅0.3～0.6m、深さ0.07mほど、底部レベルは東が低い。93畦畔は幅0.4～0.5m、頂部は0.05m弱突出するが、検出時に削平してしまった部分が多い。耕地区画の方位性はE→2°→S、南の95・97畦畔・96溝との芯芯距離は8.3～8.5m、第7-1a面83畦畔が92溝と同位置である。耕地区画南側の面の高さはT.P.+11.33mほどで、北側と同じ。

95・97畦畔、96溝 西側断面で95畦畔が97畦畔盛土裾にのり、畦畔間が96溝となる。この耕地区画が第7-4a'層と第7-4a''層との境で、95畦畔は両層のブロック土、97畦畔は第7-4a'層のブロック土を盛土とする。96溝は上部に第7-3層、下部に灰色細砂質シルトが堆積する。95畦畔は幅0.4～0.7m、頂部突出は東が高く0.14m、西側は0.08mほど。96溝は幅0.4～0.8m、深さ0.1mほどで底部レベルは西が低い。97畦畔は幅0.5～0.9m、頂部突出は東で0.1m強、西で0.05mほどと東が高いが、中央東寄りには高さが無い。洪水の侵蝕か。耕地区画の方位性は、中央部分が南にたわむが、ほぼ東西正方位、南の99・101畦畔・100溝との芯芯距離は10.4～10.9m、第7-1a面

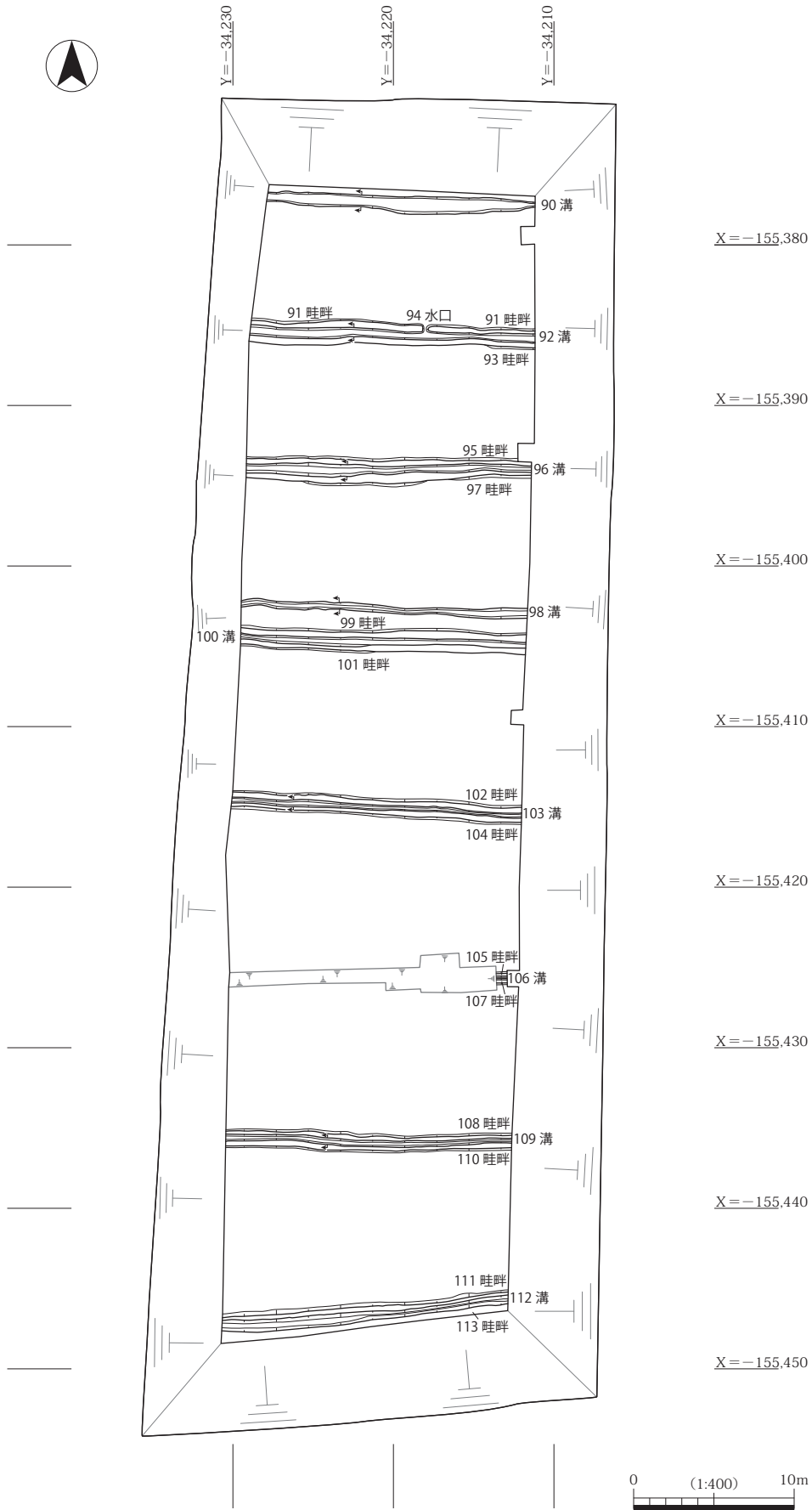


图 22 1区第7-4 a面全体图

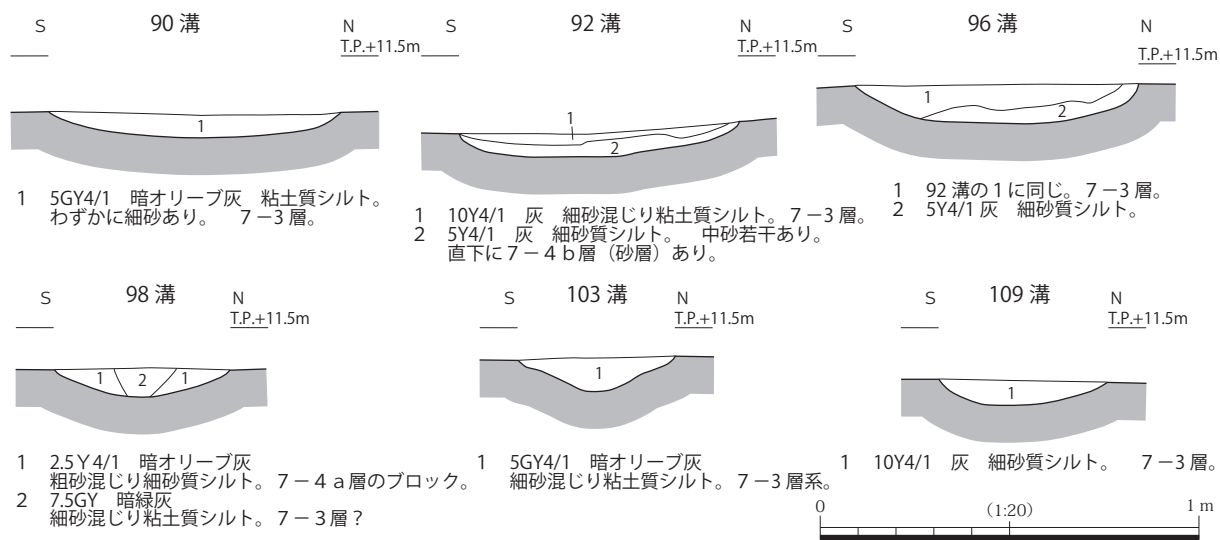


図 23 1区第7-4 a面遺構断面図

では84 畦畔が芯芯距離で南に2.2～2.8mに位置する。南側の面の高さはT.P. + 11.41mほどで北側より高い。

98 溝 99 畦畔から北に0.8～1.3mで東西に伸びる。幅0.3～0.6m、深さ0.08mほどで、底部レベルは西が低い。埋土断面で、細砂混じり粘土質シルトで埋没後、幅0.15mで掘り直され、第7-4 a層のブロックで埋まる。方位性はE→2°→Sである。耕地区画内に導水する時と排水する時に掘られたものか。

99・101 畦畔、100 溝 西壁断面で101 畦畔盛土裾が北側に伸び、上に99 畦畔盛土がのり。100 溝は101 畦畔を若干削る。101 畦畔盛土は第7-4 a層と第7-4 b層のブロック土、99 畦畔盛土は第7-4 a層のブロック土である。この耕地区画が第7-4 a層と第7-4 a'層の境目となる。100 溝埋土は畦畔盛土の二次堆積か。99 畦畔は幅0.5～0.7m、頂部突出は0.05m弱である。100 溝は幅0.3～0.6m、深さ0.06mほど、底部レベルは西が低い。101 畦畔は幅0.3～0.6m、頂部突出は西側で0.05mほどだが、東半分は判然とせず、削平状態で検出された。耕地区画の方位性はE→2°→S、102・104 畦畔・103 溝との芯芯距離は10.3～10.6m、第7-4 a面85 畦畔が芯芯距離で南へ2.6～2.9mに位置する。南側の面の高さは東がT.P. + 11.43mほど、西はT.P. + 11.37mほど、平均的に北側とほぼ同じである。

102・104 畦畔、103 溝 西壁断面で104 畦畔盛土裾に102 畦畔盛土がのり、103 溝は104 畦畔を若干削る。両畦畔盛土は第7-4 a層と同質だが、ブロック状構造がある。103 溝の埋土は、第7-3層と第7-4 a層の混濁か。102 畦畔直下に第8-1 a層時点畦畔が断面で確認された。102 畦畔は幅0.5～0.6m、頂部突出は0.07mほどである。103 溝は幅0.3～0.5m、深さ0.1m弱で底部レベルは西が低い。104 畦畔は幅0.4～0.6m、頂部突出は0.07mほどである。耕地区画の方位性はE→3°→Sで、105・107 畦畔・106 溝との芯芯距離は10.2mほどで、第7-1 a面86 畦畔は芯芯距離で南に3.1～3.5mである。南側の面の高さは東がT.P. + 11.41mほど、西はT.P. + 11.34mほどで、わずかに北側より低い。

105・107 畦畔、106 溝 府教委試掘8トレンチの攪乱で、東端付近長さ0.7mのみを検出したが、西側は攪乱が細く、西壁断面では確認できた。107 畦畔盛土裾に105 畦畔がのり、106 溝が107 畦畔を若干削る。107 畦畔盛土は第7-4 a層のブロック、105 畦畔盛土はそれに第7-4 b層のブロックが

若干混じる。106 溝埋土は畦畔盛土の二次堆積か。107 畦畔直下に、第 8-1a 層時点畦畔が遺存していた。105 畦畔は幅 0.35m、頂部は 0.08m ほど突出する。106 溝は幅 0.2m、深さ 0.05m ほどである。107 畦畔は幅 0.4m、頂部は 0.09m ほど突出する。東側検出部分と西壁断面位置から方位性を見ると E→4°→S で、108・110 畦畔、109 溝との芯芯距離は 10.1m で、第 7-1a 面 87 畦畔は芯芯距離で南に 2.2m に位置する。南側の面の高さは東が T.P. + 11.37m ほど、西が T.P. + 11.31m ほどで、北側より低い。

108・110 畦畔、109 溝 西壁断面で 110 畦畔盛土裾に 108 畦畔がのり、109 溝が 110 畦畔を若干削る。110 畦畔盛土は第 7-4a 層のブロックで、108 畦畔はそれに第 7-4b 層のブロックが加わる。109 溝埋土は第 7-3 層が直接入る。108 畦畔直下に第 8-1a 時点畦畔が頂部削平状態で遺存する。108 畦畔は幅 0.4～0.6m、頂部は 0.08m ほど突出する。109 溝は幅 0.3～0.4m、深さ 0.078m ほどで、底部レベルは西が低い。110 畦畔は幅 0.4～0.6m、頂部は 0.1m ほど突出する。耕地区画の方位性は E→2°→S で、111・113 畦畔、112 溝との芯芯距離は 9.9～11.6m、第 7-1a 面 89 畦畔が芯芯距離で南に 4～4.3m に位置する。南側の面の高さは東が T.P. + 11.35m ほど、西が T.P. + 11.26m ほどで、北側より低い。

111・113 畦畔、112 溝 調査区南端の耕地区画で、113 畦畔は南側肩部を側溝に切られる。ただし、検出形態に若干問題がある。掘削・精査・遺構検出を北側から始め、ここに調査が達した時、乾燥・ひび割れが進み、遺構検出が困難で、特に東側は乾燥の進行が著しかった。西端は西壁断面で確認でき、位置に問題ないが、東側は乾燥・ひび割れを遺構の形と誤認した可能性が高く、そのためこの耕地区画のみ極端に東側が北に振る形になったと思われる。東壁断面南端近くに 111 畦畔らしき突出を確認しており、これが 111 畦畔なら、検出形態は東端で 1.2m ほど北にずれている事となる。西壁断面で 113 畦畔盛土裾部に 111 畦畔がのり、112 溝は 113 畦畔を削る。113 畦畔盛土は第 7-4a 層と第 7-4b 層のブロック、111 畦畔盛土は第 7-4a 層のブロックのみで下部に植物遺体が多い。112 溝には第 7-3 層が直接入る。規模に関して、不確かな東側の形は除くと、111 畦畔は幅 0.5～0.7m、頂部は 0.1m 弱突出する。112 溝は幅 0.6～0.7m、深さ 0.1m 弱、底部のレベルは西に低くなる。113 畦畔は西壁断面での幅は 0.7m ほどで、頂部は 0.08m ほど突出する。東端が本当は 1.2m ほど南側なら、耕地区画の方位性は E→2°→S で、北側 108・110 畦畔、109 溝との芯芯距離は 11.1～11.6m、第 7-1a 面 89 畦畔は芯芯距離で北へ 7～7.3m にある。南側の面の高さは西壁断面で T.P. + 11.37m で、北側より高い。

出土遺物 第 7-4a 面では溝からわずかに遺物の出土がある。96 溝で弥生土器壺口縁 1 片、98 溝で内面ミガキやや密の瓦器椀 2 片、109 溝で土師器坏 2 片、112 溝で内外面ミガキありの瓦器椀 1 片・土師器高坏脚部 1 片である。図化できたものはない。

包含層は第 7-4a 層～第 8-2a 層の遺物を一括して取り上げた。内容は以下の通り。

瓦器椀 18 片 (内面ミガキやや密 6・外面ミガキあり 11)・土師器 96 片 (小皿 5 (ての字 3)・椀 1・坏 7・甕 21・高坏 1)・須恵器 19 片 (坏 3 (奈良 1・6 世紀 1・5 世紀 1)・甕 5 (内面すり消しなし 4・内面すり消しあり 1)・壺 4)・弥生水差し 1 片・木製品 13 片 (板材 4・棒状 7)・炭 2 片である。

図 24-72 は瓦器椀片、残存率 25%、高台 80% 残存、上部と接合部分わずかで、器高は図より高いか、内外面ナデ後密なミガキ、外面分割ミガキ、高台付近ヨコナデ、一部ユビオサエ残る。和泉型 I-2 期、11 世紀後葉か。73 は土師器高坏脚部片、脚柱部は全周残る、外面上部ヨコナデ下部タテナデ、裾部境

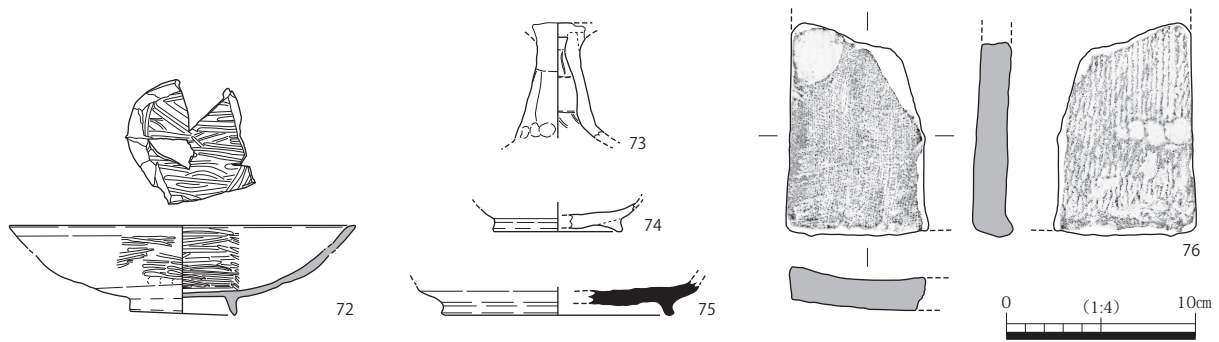


図24 1区第7-4a層～第8-2b層出土遺物

にコビオサエ、内面絞り痕中ほどにヨコナデ、古墳時代後期頃か。74は土師器碗片、残存率20%、高台90%残存、外面高台周辺ヨコナデ、内面磨滅するがナデか、中世か。75は須恵器坏片、高台40%残存、内外面回転ナデ、奈良時代か。76はいぶし平瓦片、上面布目で側端部ヘラ後ナデ、側面ヘラ切り、下面縄目タタキにコビオサエ、前端面下方に拡張しヘラ切り、中世頃か。

瓦質土器はなく、瓦器碗も内面ミガキ粗いもの・退化高台がない。そして、第8-2b層と第9a層には瓦器がない。そこから、第8-2b層が第9a層を侵蝕して堆積したのが11世紀前葉頃、第8-2a層の土壌化と第8-1a層の耕作期間が11世紀後半～12世紀頃、第7-4b層の堆積時期が限定しにくい、第7-4a層の耕作期間が12世紀～13世紀初頭頃までと考えられる。

小結 この面の耕地区画は、第7-1a面とは区画がずれ、不均等さが大きい。しかし、91・93畦畔・92溝の耕地区画のみ正確に83畦畔に踏襲される。位置を踏襲する区画が一つだけなのは、耕地区画再割り付けの基準ラインか。耕地区画の方位性は第7-1a面に踏襲される。95畦畔～110畦畔の耕地区画は10.9mより若干狭い幅で均等である。90溝～97畦畔までの二区画はそれより狭い8.3～8.5mで均等である。南側108畦畔～113畦畔の区画は、それらより広く、10.9mを越え、ここが一番低い区画である。この面では北から南にわずかに下がり、上下面とは傾向が異なる。しかし、113畦畔以南は高く、坪南端付近は高い地形かもしれない。この面最大の特徴は耕地区画が全て二つの畦畔とその間の溝で形成される事である。対になる二つの畦畔は全て北側の畦畔が後に作られる。間の溝は北側とはなだらかで、南側畦畔を若干削るのがほとんどで、北側畦畔と同時形成である。また、溝底部レベルが92溝以外は西に傾斜し、全体的に西へ水を流す形で作られ、94水口も溝が導水施設である事を示す。坪境との接続形態や、なぜこの面のみこの形態なのかが課題として残る。また、102畦畔以南は西壁断面で下層の畦畔がほぼ同位置で重なる事が確認できた。東西方向耕地区画は、第9a面以降、第8-1a面を通じてこの面まで踏襲された可能性が高い。だが、第8-1a面は南北方向畦畔の存在は不明である。今回は調査できなかったが、耕地区画の変遷で重要な面なので、今後は調査の必要があると提起しておきたい。

第8項 第9a面 (図25・図版7-19)

当初北側では、南側に残存する第9a層とほぼ同じレベルに堆積する第8-2b層を水平的に質が変化した第9a層と考えその上面を検出した。だが、第9a層残存範囲が不定形な輪郭で、第9a面検出畦畔がその輪郭斜面で途絶えるので、北側は洪水で侵蝕され、水成層が堆積していると判明した。第9a層残存範囲は調査区南端から20m足らずで、頂部が削平された畦畔が検出され、南北方向畦畔もある。また、第8-2b層堆積範囲には東端で、比較的大きな流路状の侵蝕痕が存在していた。

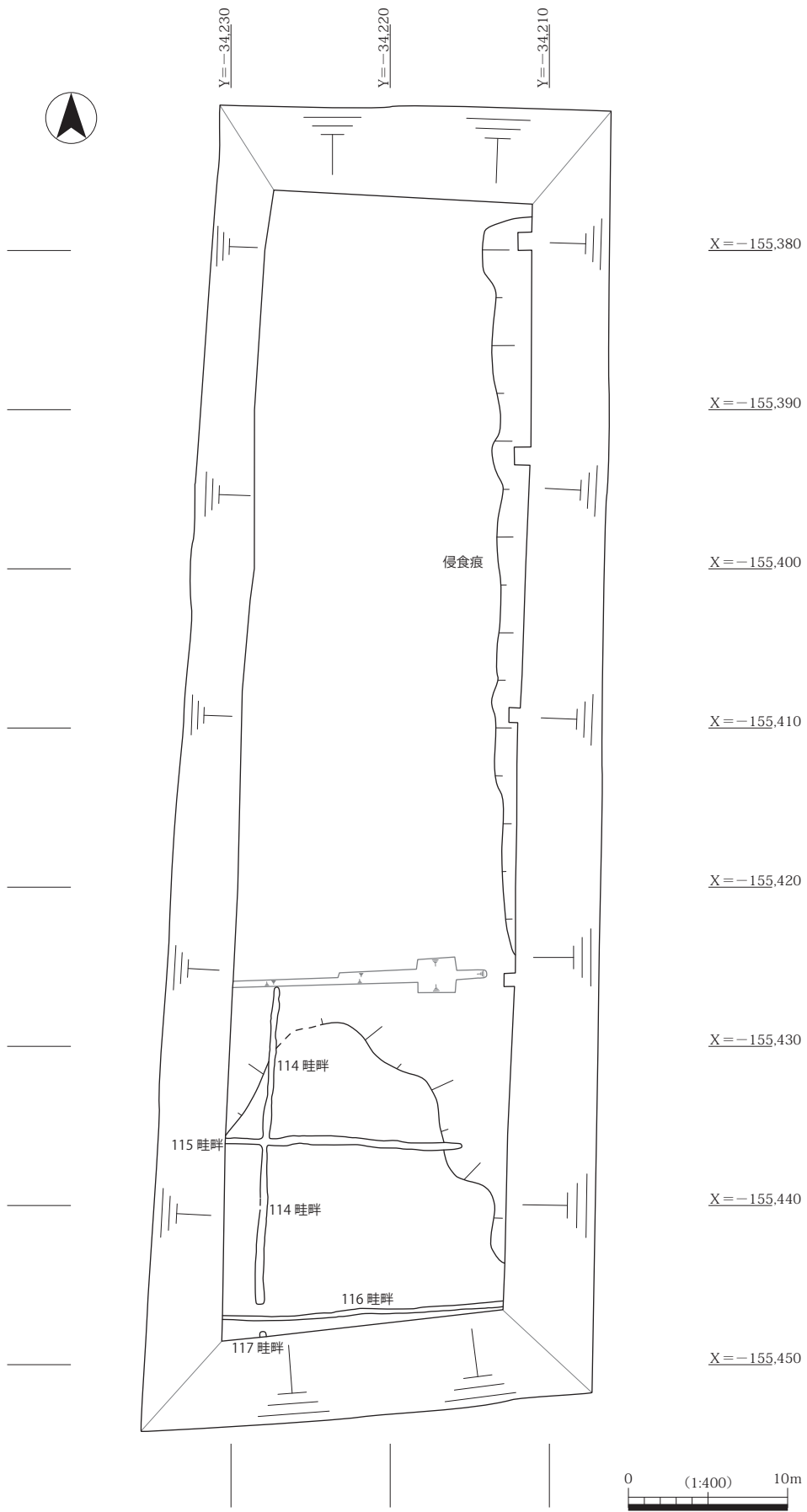


图 25 1 区第 9 a 面全体图

114 畦畔 南北方向畦畔である。南北方向畦畔は上層では、島島間水田を区切るものが第2 - 4a面にあった以外ない。頂部は削平され、耕作土との切り合いのみ確認、幅0.3 ~ 0.5m、南は116畦畔との間0.6mほど開く。115畦畔と直交し北に伸び、第9a層残存部の斜面で途切れる。方位性はN → 3° → Eである。南側は第10a面139畦畔と重なり、北は東にずれ北端で134畦畔より東に0.6mとなる。南北方向畦畔は、第9a層残存範囲にもう一つ東側の畦畔があってもよいはずだが、検出できなかった。

115 畦畔 114畦畔と直交する。頂部は削平され、幅0.3 ~ 0.5m、東側は第9a層残存部の斜面で途切れる。方位性は平均E → 2° → Sである。第7 - 4a面110畦畔は真上にあり。南側116畦畔との芯芯距離は10.2 ~ 11.1mほどである。第10a面137畦畔からは芯芯距離で南に1.1 ~ 1.4mずれる。

116 畦畔 調査区南端付近を東西に走る。頂部は削平され、幅0.2 ~ 0.3mで、方位性はE → 3° → Nである。第7 - 4a面111畦畔は0.2mだけ南にある。第10a面142畦畔からは南に1.3 ~ 1.6mずれる。

117 畦畔 116畦畔から南に0.7mでわずかに端部を検出したのみだが、114畦畔の延長線上に位置し、南北方向畦畔と判断した。幅0.4mほどか。第10a面147畦畔より芯芯距離で西へ0.3mずれる。

耕地区画各平坦面の高さ 114・115畦畔交点から、北東の面は、東がT.P. + 11.17mほど、西がT.P. + 11.12mほど、北西の面は遺存部狭いがT.P. + 11.12mほど、南東の面は南がT.P. + 11.19mほど、北はT.P. + 11.13mほど、南西の面はT.P. + 11.14mほどか。116畦畔より南は、177畦畔の東がT.P. + 11.21mほど、西がT.P. + 11.20mほどである。比較すれば、東が高く、南が高い傾向がある。

侵蝕痕 第9a層残存部より北側は第8 - 2b層が堆積し、その上面は北側でT.P. + 11.05mほど、南側第9a層残存部際でT.P. + 11.09mほどと平坦だが、調査区東辺沿いに、西から東へ0.1m前後下がる形がある。第9a面残存部東側形状もそれに続き南側に挟られ屈曲する。洪水の侵蝕痕と推測される。北側では侵蝕痕は東壁断面にかからず、調査時点の側溝上幅は壁法面が緩傾斜のため2m近くあり、侵蝕痕幅は4m以下と推測できる。東壁断面では南端から17mほど北側(X = -155.433付近)から、第8 - 2b層上面が南に下がり、その下に2層の水成堆積層があり、第10a層まで侵蝕する。この部分は第10a面検出範囲がなく、西側肩部が側溝内にあると推測される。この侵蝕痕は、坪南側高所を侵蝕して抜け、真北に進み、調査区北端付近で東に曲がる。規模が大きい深い部分でもシルトの堆積のみで砂粒がない。

出土遺物 包含遺物は第8 - 2b層と第9a層を一括した。第8 - 2b層は第9a層を侵蝕して堆積した洪水層で、包含遺物は第9a層耕作期間の下限を示すので、問題はない。出土遺物は以下の通り。

黒色土器A類椀8片・土師器316片(小皿4(ての字1)・椀1・坏30・甕39(タテハケ6・布留式1)・羽釜3・壺11・高坏6・竈2・甑1)・須恵器50片(坏11(奈良1・飛鳥1・6世紀2・5世紀1)・甕、内面すり消しなし18・壺20(長頸2・漆附着1))・鉄滓1片・鞆羽口1片・砥石1片・棒状木製品9片・桃核1片である。

図26 - 77は土師器小皿片、残存率15%、底部内面一定方向ナデ、口縁内外面ヨコナデ、底部外面磨滅、時期不明である。78は土師器坏片、残存率20%、内面ヨコナデ後放射状暗文、外面ヨコナデ後横ミガキ、精良な胎土、飛鳥I ~ III期、7世紀前半 ~ 中葉のもの。79は土師器椀片、残存率25%、内面体部斜めナデ、口縁ヨコナデで右上がりナデ上げ、外面口縁ヨコナデ、体部ユビオサエ放射状、9世紀後葉頃の南河内型椀である。80は土師器皿片、残存率15%、内外面ヨコナデ、精良な胎土、平城I ~ II期、7世紀末葉 ~ 8世紀前葉のもの。81は墨書土師器坏か皿片、残存率10%以下、精良な胎土、墨書はユビナデのある底部外面に「工」字形である。奈良時代か。82は須恵器坏蓋つまみ片、内外面回転ナデ、奈良時

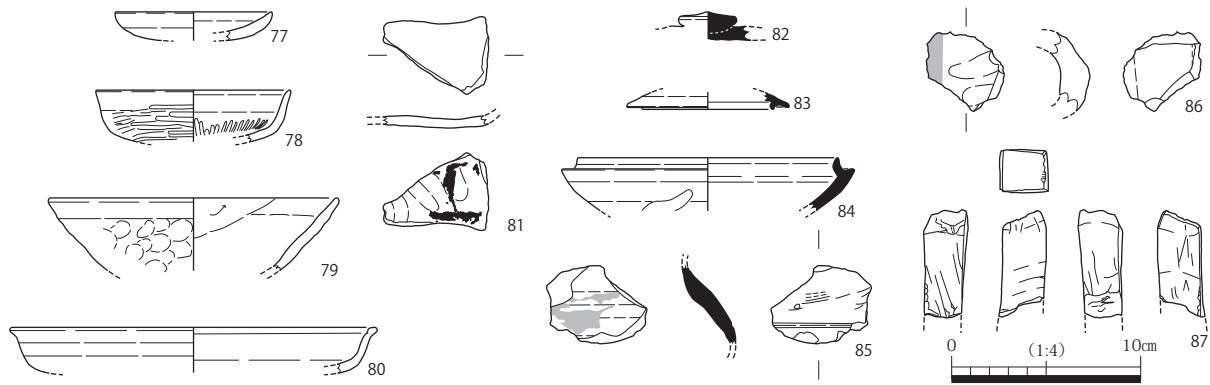


図 26 1区第9層出土遺物

代か。83は須恵器壺蓋片、外面回転ナデ、内面降灰痕、飛鳥Ⅲ期、7世紀後葉頃か。84は須恵器高坏身部片、身部の15%残存、回転ナデ、外面に一つ斜めナデ、6世紀後葉頃のもの。85は須恵器漆壺片、外面肩部ヨコハケ後回転ナデ、体部との境に沈線、内面回転ナデで漆附着、焼成悪く土師質、6～7世紀か。86は轆羽口片、外面ユビナデ、端部はガラス熔融して黒色、外径5cmほどか。87は凝灰岩製砥石片、図下部を欠く、角柱状の4面に擦痕あり。132（写真のみ、図版17）は鉄滓、最大長5.4cm、直交最大幅5.1cm、形状的には椀型滓の一部か。

瓦器碗がない。土師器では「て」の字状口縁の小皿があり、中河内地域では10世紀後葉以降に見られるものである。以上の事から第9a層の耕作期間は10世紀後葉～11世紀前葉頃と推測される。

漆壺・鉄滓・轆羽口・砥石が目に見える。寺院付随の工房に伴う遺物の可能性が高い。下層では出土せず、第9b層堆積の洪水時、上流側の工房跡が侵蝕され、流れてきたものか。

小結 この面は第10a面の格子状耕地区画を踏襲する。しかし、南北方向畦畔が東西方向より細め、交点で東西にずれる、などの第10a面耕地区画の特徴は踏襲しない。何より東西方向畦畔が第10a面より1.5m前後南にずれる。南北方向畦畔のずれは少なく不可解な状況である。それでも東西方向畦畔同士は10.9mに近い間隔を保ち、第7-4a面に踏襲される。畦畔の方位性も第7-1a面まで維持される。

第9項 第10-1a面（図27・図版7-20・8-21）

最古の条里型地割の耕作土上面である。全体に格子状の耕地区画が検出された。畦畔頂部は失われている。格子状だが、東西方向畦畔は交点を直線的に抜けるが、南北方向畦畔は交点で若干ずれ、幅も東西方向より若干細く、基本は東西方向長地型地割であると分かる。畦畔盛り土は第10a層と同質で、切り合いのみ確認できる。南側では第9b層堆積洪水時点と直後に形成された侵蝕痕・溝・ピット（図28・図版8）が畦畔を切り散在する。またその周辺では、第9b層を踏み込んだ足跡も多数検出された。

118 畦畔 120 畦畔より北側の2本の南北方向畦畔のうち、東側の畦畔である。これより各畦畔について東から西、北から南に順次述べる。幅は0.3～0.4m、ほぼ南北正方位である。

119 畦畔 幅0.3～0.4m、方位性はN→3°→Eである。118 畦畔との芯芯距離は9.2～9.9mほどである。

120 畦畔 幅0.3～0.5m、方位性はE→4°→Sである。

121 畦畔 120 畦畔との交点で118 畦畔よりわずかに東にずれる。幅0.2～0.4m、ほぼ南北正方位である。120 畦畔との交点から南4.5mの西側裾に杭が1本検出された。

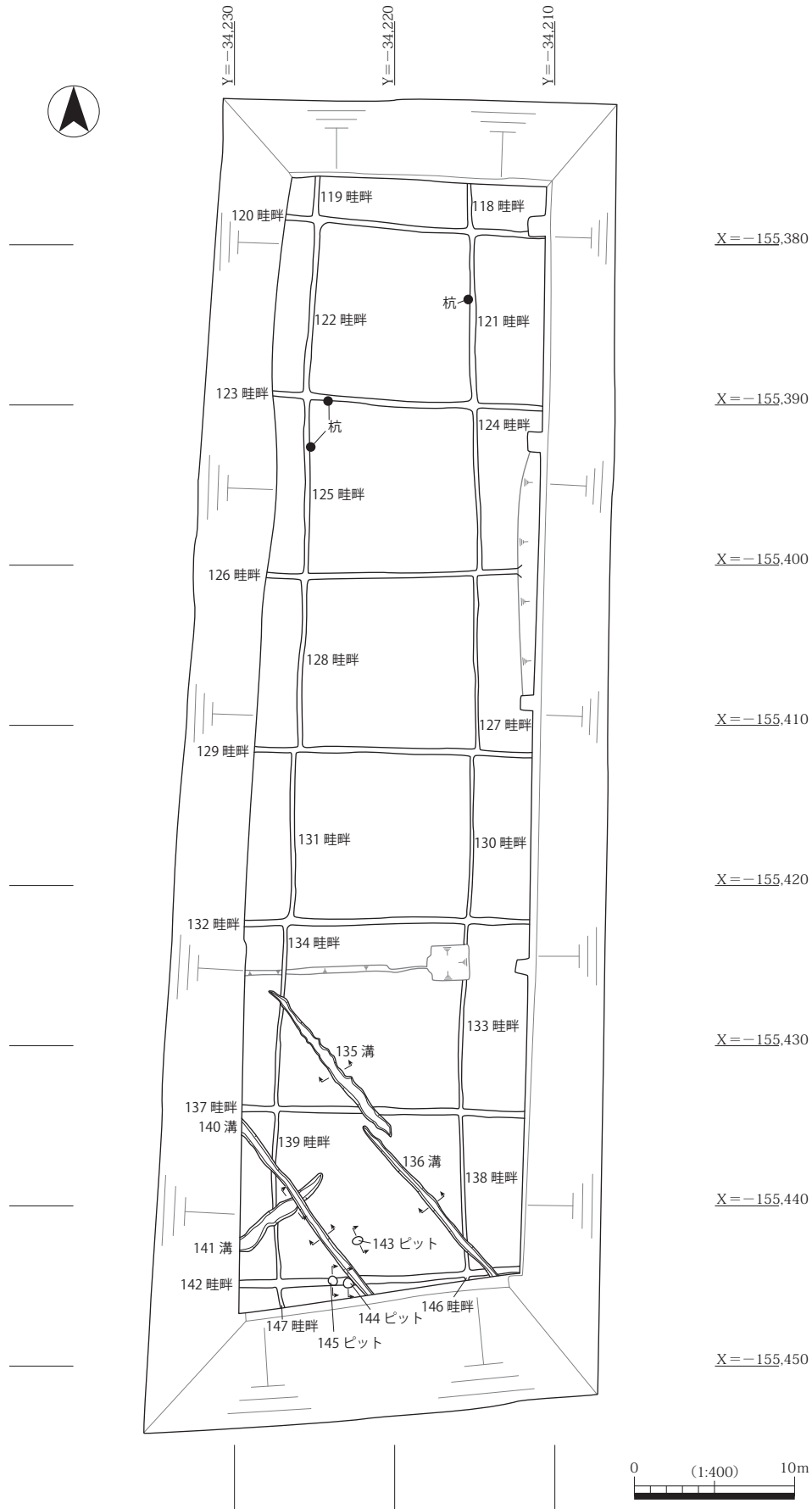


図 27 1 区第 10-1 a 面全体図

122 畦畔 120 畦畔との交点で、119 畦畔より 0.3m ほど東にずれる。幅 0.2 ~ 0.3m、方位性は N → 4° → E である。121 畦畔との芯芯距離は 9.8 ~ 10.7m である。

123 畦畔 幅 0.2 ~ 0.4m、東寄りでわずかに屈曲するが、平均の方位性は E → 3° → S である。120 畦畔との芯芯距離は 10.9 ~ 11.3m である。122 畦畔との交点から東 1.4m の南裾から杭が 1 本検出された。

124 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、123 畦畔との交点で 121 畦畔とずれなし。方位性は N → 2° → W となる。

125 畦畔 幅 0.2 ~ 0.4m、123 畦畔との交点で 122 畦畔より 0.1m ほど東にある。方位性は N → 1° → E である。123 畦畔から南 3.1m 東裾に杭が 1 本あった。124 畦畔との芯芯距離は 10.6 から 11.0m である。

126 畦畔 幅 0.3 ~ 0.5m、方位性はほぼ東西正方位で、123 畦畔との芯芯距離は 10.3 ~ 11.2m である。東端は第 9a 面からの侵蝕痕に削られ途切れる。

127 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、方位性は N → 1° → W、126 畦畔との交点で 124 畦畔より西に 0.4m ほどずれる。

128 畦畔 幅 0.3 ~ 0.4m、方位性は N → 3° → E、126 畦畔との交点で 125 畦畔より西に 0.1m ほどずれる。127 畦畔との芯芯距離は 10.7 から 11.1m である。

129 畦畔 幅 0.3 ~ 0.5m、方位性は E → 2° → S、126 畦畔との芯芯距離は 10.9 ~ 11.3m である。

130 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、やや東へ弯曲するが全体的な方位性は N → 2° → E である。129 畦畔との交点で、127 畦畔より 0.3m ほど西にずれる。

131 畦畔 幅 0.2m、方位性はほぼ南北正方位、129 畦畔との交点で 128 畦畔より 0.4m 西にずれる。130 畦畔との芯芯距離は 11.3 ~ 11.6m である。

132 畦畔 幅 0.3 ~ 0.5m、方位性はほぼ東西正方位、129 畦畔との芯芯距離は 10.5 ~ 10.8m である。

133 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、方位性は N → 2° → E、132 畦畔との交点で、130 畦畔より 0.2m 西にずれる。

134 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、方位性は N → 3° → E、132 畦畔との交点で、131 畦畔より 0.4m 西にずれる。中央よりやや北側で 135 溝に切られる。133 畦畔との芯芯距離は 11.5 ~ 11.7m である。

137 畦畔 幅 0.4 ~ 0.5m、方位性 E → 2° → S、132 畦畔と芯芯距離は 11.6 ~ 12.2m、135 溝に切られる。

138 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、方位性 N → 2° → W、137 畦畔との交点で 133 畦畔より 0.1m 西にずれる。136 溝に切られる。

139 畦畔 幅 0.2 ~ 0.3m、西に弯曲するが平均的な方位性は N → 2° → E、137 畦畔との交点で 134 畦畔とずれなし。138 畦畔との芯芯距離は 11.8 ~ 11.9m である。140・141 溝に切られる。

142 畦畔 幅 0.4 ~ 0.6m、西側はほぼ東西正方位、東側は E → 3° → N まで曲がる。137 畦畔との芯芯距離は 9.7 ~ 10.8m である。136・140 溝、144・145 ピットに切られる。

146 畦畔 幅 0.3m、方位性は N → 4° → W で、142 畦畔との交点で 138 畦畔から 0.1m 西にずれる。

147 畦畔 幅 0.3m、方位性は N → 5° → W で、142 畦畔との交点で 139 畦畔とのずれはない。146 畦畔との芯芯距離は 11.8m である。

135 溝 134・137 畦畔を切る北西～南東方向溝で、平面形は肩部の細かい屈曲が多い。最大幅 0.9m、長さ 12m、深さ 0.04m ほど、埋土は粗砂混じりシルトに踏み込みで第 9b 層が入る。底部レベルはわずかに北西が低い。方位性は N → 39° → W である。人為的な溝と言うより侵蝕痕の可能性はある。

136 溝 135 溝の 0.8m ほど南西に、平行に走る。138・142 畦畔を切る。幅 0.4 ~ 0.6m、深さ 0.09m ほど、

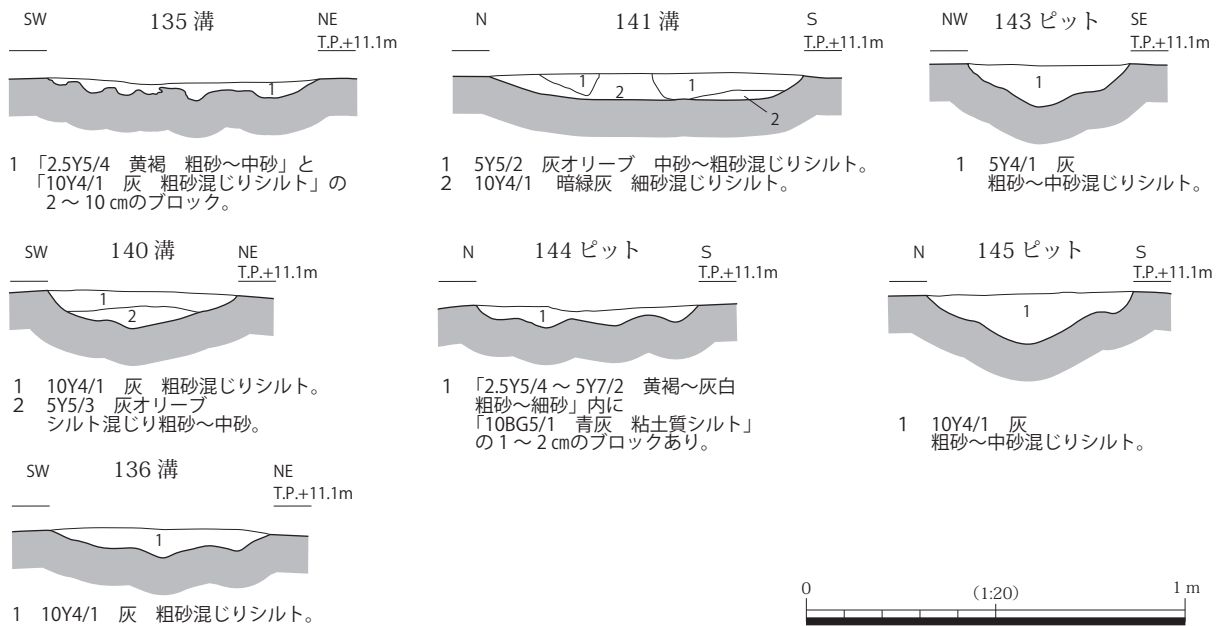


図 28 1 区第 10 - 1 a 面遺構断面図

埋土は粗砂混じりシルトである。底部レベルに一定の傾斜はない。溝付近の平坦面は南東側が低い。方位性は $N \rightarrow 39^\circ \rightarrow W$ と 135 溝に同じ。埋土の粗砂は第 9b 層由来のようで、第 9b 層堆積後の復旧作業で掘削されたと推測できる。水抜き溝か。

140 溝 136 溝の南西 6.0～6.7m に平行し、139・142 畦畔・141 溝を切る。幅 0.4～0.7m、深さ 0.1m ほどで、埋土は上層が 136 溝と同じで下層はシルト混じり粗砂～中砂である。位置は 141 溝南東側の高い部分を越える形で、底部レベルは北西に下がる。方位性は $N \rightarrow 38^\circ \rightarrow W$ である。水抜き溝か。

141 溝 140 溝に直交して切られ、139 畦畔を切る。平面形は肩部の細かい屈曲が多い。最大幅 1.1m、深さ 0.08m ほど、埋土は細砂混じりシルトで、踏み込み内に第 9b 層が入る。底部レベルに明確な傾斜はなし。方位性は $N \rightarrow 47^\circ \rightarrow E$ である。形状から侵蝕痕の可能性もある。

143 ピット 短径 0.48 m、長径 0.65m の楕円形に近い。深さ 0.11m ほどで、粗砂～中砂混じりシルトである。混じる砂粒は第 9b 層由来のようで、洪水後の復旧作業の際に掘られたものか。

144 ピット 140 溝の西隣で 142 畦畔を切る。径 0.6m ほどの不整形で、底部凹凸し、深さ最大 0.06m で、埋土も粗砂～細砂内に第 10a 層のブロックが若干なので、踏み込みが集中したものか。

145 ピット 144 ピットより 0.4m ほど西で 142 畦畔を切る。径 0.54m ほどの不整形で深さ 0.13m、埋土は粗砂～中砂混じりシルトで 143 ピットと同じである。

各耕地区画平坦面の高さ 120 畦畔北側の 3 区画は東から T.P. + 11.04m・11.03m・11.02m ほどとほとんど差はない。120・123 畦畔間 3 区画は東から T.P. + 10.99m・10.99m・10.97m ほどとほとんど差はなく、北よりやや低い。123・126 畦畔間 3 区画は東から T.P. + 11.05m・11.04m・10.94m ほど、西側のみやや低く、中央と東側は北よりやや高い。126・129 畦畔間 3 区画は東から T.P. + 11.11m・11.09m・11.08m とほとんど差はなく、北側より高い。129・132 畦畔間 3 区画は区画内で北が高い傾向があるが、東から T.P. + 11.09m・11.08m・11.06m ほどとほとんど差がなく、北よりやや高い。132・137 畦畔間 3 区画は東から T.P. + 11.02m・11.07m・11.04m ほどと、中央がやや高く、北側よりわずかに低い。137・142 畦畔間 3 区画は東から T.P. + 11.04m・11.09m・11.06m ほどと中央がや

や高く、北側より若干高い。142 畦畔より南の 3 区画は、検出面積が狭いが、東から T.P. + 11.06m・11.09m・11.09m ほどとほとんど差がなく、北よりわずかに高い。全体に若干の凹凸がありながら南に高くなる形と言える。

出土遺物 第 10 - 1 a 面の遺構出土遺物は、140 溝の土師器高坏 3 片のみで、1 片は飛鳥時代小型高坏の破片である。包含遺物は第 10 - 1 a 層から第 10 - 2 b 層を一括して取り上げた。内容は以下の通り。

黒色土器 B 類碗 1 片・土師器 148 片（皿 3・坏 17・甕 24（布留式 10）・羽釜 1・高坏 2・竈 1・甑 7・小型丸底 5）・須恵器 105 片（坏 92（6 世紀 40・5 世紀 30）・鉢 7・甕、内面すり消しなし 4・壺 2）・弥生土器 16 片（壺 2・水差し 1・高坏 1・甕 1）・砥石 1 片・石製埴 1 片・木製品 18 片（棒状 10・札状 4・付け木 2）・石器 2 片（石包丁 1・サヌカイト剥片 1）・炭 1 片・桃核 3 片である。

図 29 - 88 は土師器高坏身部片、残存率 20%、内面ヨコナデ、外面タテナデ後上半ヨコナデ、古墳時代前期～中期中葉有稜高坏である。89 は弥生土器高坏脚部片か、内面上端刺突痕、上半ヨコナデ、下半ヨコケズリ、外面上半ヨコナデ、下半斜めナデである。90 は土師器高坏脚部片、内面脚柱部絞り痕、裾部ユビオサエ、外面身部近くユビオサエ、その直下ヨコナデ、その下タテナデ、裾部ヨコナデ、古墳時代か。91 は土師器小型鉢、残存率 20%、内面磨滅だがヨコナデか、外面胴部ユビオサエ、下部ヨコケズリ後、全面ヨコナデ、8 世紀末葉頃か。92 は土師器皿片、残存率 10%、口縁内外面ヨコナデ、9 世紀前葉～10 世紀前葉頃か。93 も土師器皿片、残存率 10%、口縁内外面ヨコナデ、平城 V 期、8 世紀後葉頃か。94 は土師器高台坏片、残存率 25%、内面煤付着、剥離多し、外面ヨコナデ後ヨコミガキ、ミガキ残るが器形は 9 世紀末葉～10 世紀初頭か。95 は須恵器壺口縁片、平瓶か、内外面回転ナデ、7 世紀頃か。96 は須恵器壺蓋片、残存率 10%、内外面回転ナデ、7 世紀後半頃か。97 は須恵器坏蓋片、残存率 40%、天井部外面回転ケズリ、他回転ナデ、千里窯跡群産か、5 世紀後葉頃か。98 も須恵器坏蓋片、残存率 50%、調整は 97 に同じ、内面に縄の圧痕二つあり、6 世紀後葉か。99 も須恵器坏蓋片、残存率 30%、天井部外面回転ケズリ、内面一定方向ナデ、他は回転ナデ、6 世紀後葉頃か。100 は須恵器坏身片、残存率 15%、体部下半回転ケズリ、他は回転ナデ、6 世紀前半頃か。101 も須恵器坏身片、残存率 15%、調整は 100 に同じ、6 世紀後葉頃か。102 も須恵器坏身片、残存率 20%、調整は 100 に同じ、6 世紀中葉頃か。103 も須恵器坏身片、残存率 20%、調整は 100 に同じ、6 世紀中葉頃か。104 は須恵器鉢片、残存率 20%、内外面回転ナデ、肩部はその前ケズリか、鉢 B で 9 世紀末葉頃か。105 は凝灰岩製砥石片、図下部と上端の一部を欠く、4 面平滑で、直線的傷が散在する。106 は弥生土器壺底部片、残存率 10%以下、生駒西麓産胎土、弥生時代後期頃か。107 は緑色片岩製石包丁片、残存率 40%、孔は両面穿孔、刃部両刃造りである。図 35 - 121 はサヌカイト製調整剥片、やや強く風化、重さ 1.98g である。

土師器では「て」の字状口縁皿類がなく、小皿もなく、9 世紀末葉～10 世紀初頭頃のやや身の浅い高台坏がある。須恵器は 9 世紀末葉頃の鉢 B が存在する。ほとんどの遺物が第 10 - 2 b 層出土で、この層は長期の止水堆積と考えられ、その下限が 9 世紀末葉～10 世紀初頭となる。第 10 - 1 a 層の耕作期間は 10 世紀前葉～後葉頃、条里型地割の施行時期は 10 世紀前葉頃と見る事ができる。

他に、古墳時代中期～奈良時代の遺物が増え、上層にほとんどない古墳時代前期・弥生時代の遺物もある。第 11 - 1 a 面の時期を反映か。しかし平安時代前期、8 世紀末葉～9 世紀後葉頃の遺物が極端に少ない。その時期が第 10 - 2 b 層の堆積が進行する、水域化していた時期の可能性もある。

小結 この面の格子状耕地区画は、条里型地割施行の際、東西長地型地割としつつ、以前の自然地形の

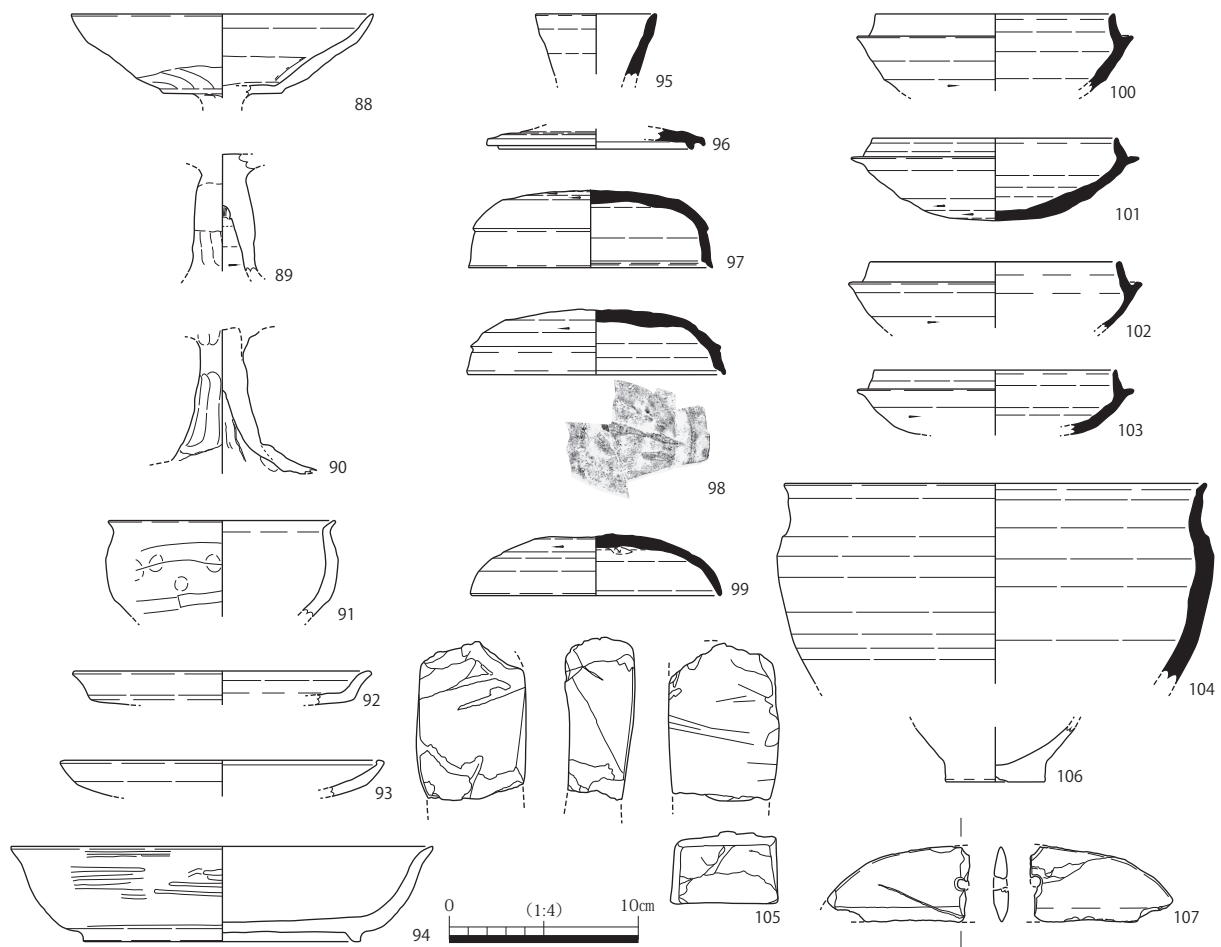


図 29 1区第10層出土遺物

高低差を解消しきれず、南北方向畦畔により長地型地割内を分割したと考えられる。大勢として、南が高く、東が高い傾向だが、南北方向では137畦畔から北へ下がるが、129畦畔付近に一つのピーク、そこからまた北に下がり、120畦畔以北もまた上がり、波打ちながら下がる。また、南から132畦畔までは中央の区画に舌状高まりが張り出し、その北の129畦畔まで南北方向畦畔の間隔が以北より長く、10.9mを越える。その点で見ると南北方向畦畔の交点でのずれは、高い地形が張り出す部分で西にずれ、低い部分では東にずれる傾向がある。そして北側ほど間隔が狭くなる。東西方向畦畔の間隔は多くが10.9mに近いが、137畦畔が南に寄り、142畦畔の方向が他と違う事で、132・137畦畔間が広すぎ、137・142畦畔間が狭すぎ、南側高所の耕地区画はやや不均等である。方位性は、142畦畔以外は東が南に振る方向で統一され、これが当初の条里型地割の方位性で第7-1a面まで踏襲されると判明した。南側で畦畔を切る4本の溝は、洪水侵蝕痕や洪水後の復旧作業関連と推測される。既往の調査で弥生時代～奈良時代とされる溝群と似た方位性を持つが、遺構面は異なる。

第10項 第11-1a面(図30・図版9-26・27)

縄文時代晩期末葉～奈良時代頃の長期に形成された古土壌層の上面である。第11-1a層は付近が水域化して堆積した第10-2b層に覆われ、そのシルトが降下、有機分が溶脱したため古土壌・暗色帯と見えないほど明色化している。また、面の遺構の多くは埋没後の土壌化進行のため層内で輪郭が失われていた。その内、流路や溝などの細長い遺構は輪郭のない不明確な形で見えたものもある。それら

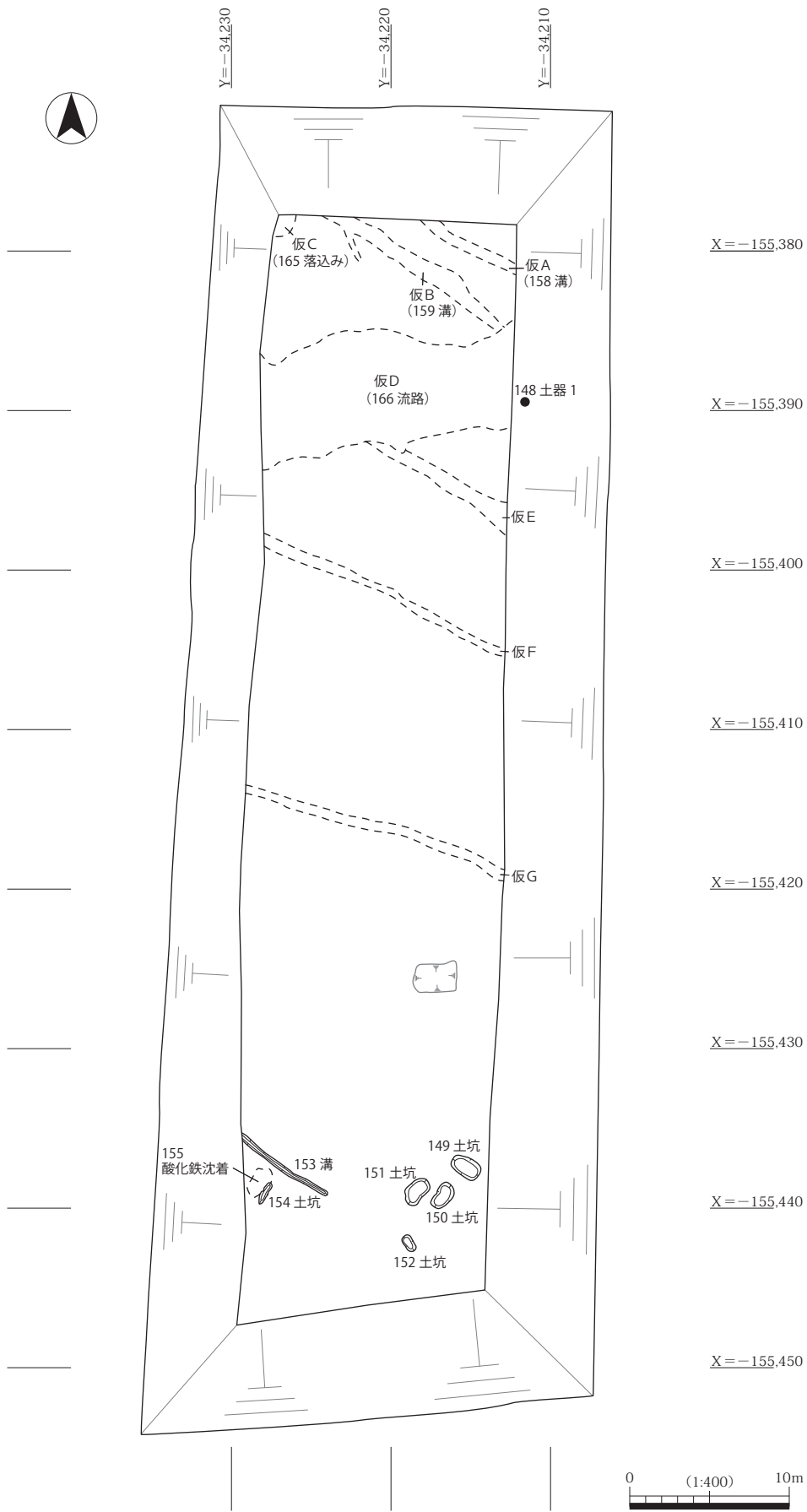


图 30 1区第11-1a面全体图

を仮 A～G とし、その部分の包含遺物を分別し、第 12 面で対応遺構が検出された時、分別遺物をその遺構の上層遺物とした。他に、調査区南端付近で、第 10 - 2b 層が埋土として入った土坑や溝を若干検出した。

仮 A～G 第 12 面で対応遺構が検出できたのは仮 A が 158 溝、仮 B が 159 溝、仮 C が 165 落ち込み、仮 D が 166 流路、である。158 溝はこの面では 157 溝との合流が見えない。159 溝は第 12 面で北西側が途切れるが、この面での形と西壁北端付近断面でも確認でき、北西へ伸びる事が判明した。166 流路はその東側側溝から 148 土器 1 (図 31 - 108) が出土し、位置と高さからこの遺構内の可能性もあるが別遺構の可能性も否定できない。仮 E～G は第 12 面では痕跡すらない。この部分は第 11 - 1・2a 層が厚く、深さ 0.3m 程度の遺構でも第 12 面に達さない。可能性を指摘するに留める。

149～152・154 土坑、153 溝・155 酸化鉄沈着 南端の遺構群はこの面では最新の遺構で、第 10 - 2b 層堆積時点まで開口していたものである。149～152 土坑は長楕円に近い不整形で、深さ 0.1m 弱ほど、149～151 土坑は長径 2m 弱で 152 土坑は長径 1.2m ほど。150・151 土坑と 149 土坑の長軸方向は直交し、149 土坑は 153 溝の方位性に近い。153 溝は幅 0.3～0.4m ほど、深さ 0.05m ほど、底部レベルに明確な傾斜はない。方位性は北西側がやや北に曲がるが N→57°→W ほど。54 土坑は 153 溝南西側で長軸方向が直交する。長径 1.5m ほど、深さ 0.05m ほど、これのみ埋土に微細な炭化物と焼土塊が混じる。その北西辺に密着し、長径 2.2m 短径 1.1m の範囲で酸化鉄分沈着が激しい部分があり 155 酸化鉄沈着とした。

面の微地形 北端は T.P. + 10.81m ほど、仮 D (166 流路) 南肩部付近では東は同じ高さだが、西は T.P. + 10.75m まで下がる。そこから南に少し高くなり、仮 F・G 間では西が T.P. + 10.86m、東が T.P. + 10.82m ほどになる。そこから南は徐々に下がり、調査区南端付近は T.P. + 10.65m ほどとなる。北側で一旦低くなるのは仮 D (166 流路) の影響であろう、全体的には南に下がる地形である。

出土遺物 第 11 - 1a 面確認の遺構では、150 土坑から弥生土器甕口縁 1 片が出土したのみである。第 11 - 1a 層と第 11 - 2a 層の包含遺物は一括して取り上げた。先述の通り、包含遺物と言っても本来第 11 - 1a 面切り込みの遺構内遺物である可能性が高い遺物群である。その内容は以下の通り。

土師器 45 片 (坏 1・布留式甕 37・高坏 1)・須恵器 8 片 (6 世紀坏 3・5 世紀坏 5)・弥生土器 53 片 (壺 9)・縄文晩期刻み目突帯 7 片・サヌカイト製石器 5 片 (剥片 3・チップ 2)・桃核 1 片である。

図 31 - 110～117 が第 11 層出土遺物である。110 は土師器甕片、口縁は 25% 残存、肩部内面磨滅するがヨコハケ、口縁内外面ヨコナデ、肩部外面磨滅、4 世紀～5 世紀前葉か。111 は須恵器坏身片、残存率 15%、内外面回転ナデ、体部外面に降灰痕、胎土に黒色粒あり、5 世紀後半頃か。112 も須恵器坏身片、残存率 15%、内外面回転ナデ、体部外面自然釉、胎土に黒色粒あり、5 世紀末葉頃か。113 は弥生土器壺底部片、残存率 15%、底部 25% 残存、内面磨滅、外面ヨコナデか、生駒西麓産胎土である。114 は縄文土器片、残存率 10% 以下、口縁端部に内外に拡張した凸面あり、その外側に刻み目、内面棒状工具によるヨコナデ、生駒西麓産胎土、縄文晩期末葉長原式か。115 も縄文土器片、残存率 10% 以下、内面ユビオサエ・ユビナデ、外面突帯に刻み目、生駒西麓産胎土、縄文晩期末葉か。116 も縄文土器片、残存率 10% 以下、外面突帯に刻み目、生駒西麓産胎土、縄文晩期末葉か。117 も縄文土器片、残存率 10% 以下、内面ユビオサエ、外面突帯に刻み目、生駒西麓産胎土、縄文晩期末葉か。図 35 のサヌカイト製石器では 119・120・122・127・128 が第 11 層出土である。119 は二次加工のあ

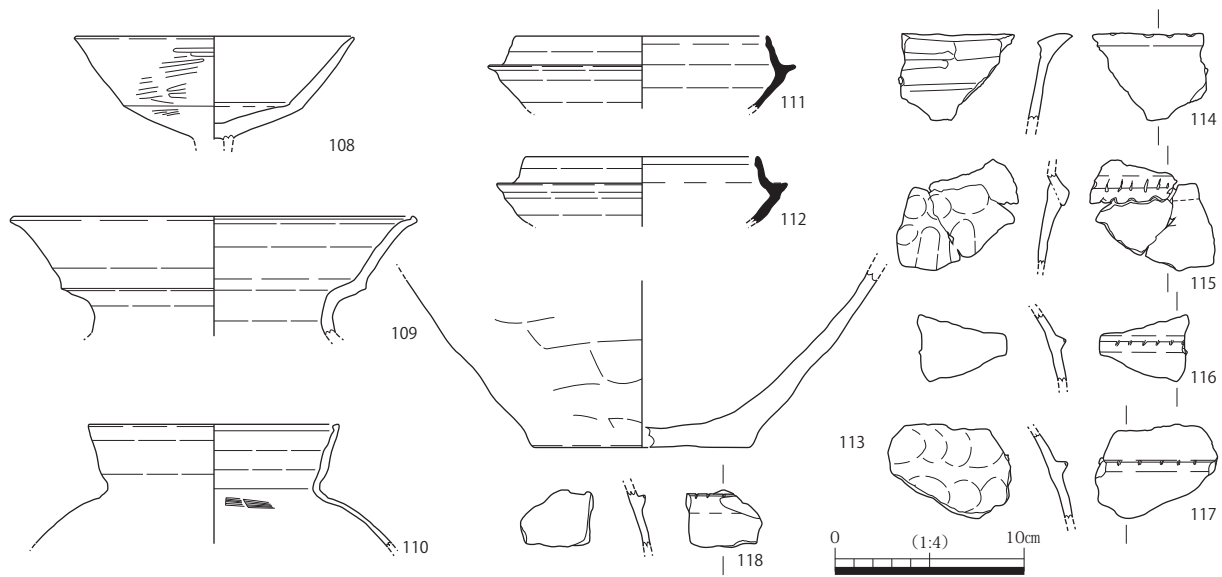


図 31 1区第12面遺構・第11層出土遺物

る剥片、0.95g、風化弱い、図下辺に表裏から押圧剥離あり。120は目的剥片、0.94g、風化やや強い、薄すぎ、打点から左右に割れる。122も目的剥片、5.22g、風化強い、右図左が折れて廃棄か。127は二次加工のある剥片、20.51g、風化弱い、上辺はツブシ、下辺は刃部形成、搔器か。128は二次加工のある剥片、99.06g、風化弱い、右図左片に刃部形成、右下辺はツブシ、左下辺の剥離で先端が折れたか、形態的には石鎌製作中か。

飛鳥時代～奈良時代の遺物がわずかで、弥生時代と古墳時代のものが多い。第11-1a面の人的活動の中心がその時期か。また、縄文時代晩期末葉の土器が見られ、古土壌層の形成開始時期の下限を示す。第11-1a面が地表面で第11層の土壌化が進行した時期は縄文時代晩期末葉から奈良時代と言える。

小結 この面本来の状況は第12面の調査によるが、面の微地形は第10-1a面以降と異なり南が低い。多くの遺構の輪郭が確定できなかった。深さが第12面に達せず、どちらの面でも検出できなかった遺構も多いだろう。むしろ南端付近の遺構群の検出が予想外であった。

第11-1・2a層のような古土壌は、堆積層ではなく、層の上下で時期差を示さない。土壌化の進行が遺構を壊していくので、検出は堆積層に準じ上下面である必要があるが、本来は同一面の遺構と認識すべきである。古土壌層出土遺物も、消滅遺構にあった可能性を否定できない。また、薄い堆積層が存在していても、それも土壌化で堆積単位が消滅する可能性も考慮しなければならない。

第11項 第12面 (図32・図版10-28・29)

今回の調査での最終遺構面である。前述の通り、検出された遺構は本来第11-1a面から切り込まれていたと見てよい。本来の遺構の深さや規模はこの面で検出したより大きいはずである。流路状の侵蝕痕・溝・土坑・ピット (図33・34) の他、遺構痕跡と思われる帯状の酸化鉄分の沈着も検出された。

148 土器1 調査区東側側溝を掘削中に出土した (図版8-25)。X = -155,3895、Y = -34,2116の地点で、166流路の南肩部近くになる。脚部を欠く土師器高坏身部が正置状態であった。周囲の第12面はT.P. + 10.73m、166流路東端底部はT.P. + 10.37m、土器口縁の高さはT.P. + 10.68mで、166流路内遺物なら下層に属するが底部からは浮く。土器周辺を精査し、直下を半割もしたが、埋納遺構は確認されなかった。図31-108がその土師器有稜高坏の坏部片、坏部の残存率は100%、内

面は磨滅、底部周辺に凹線が巡る。外面はわずかにヨコミガキが残るが、稜はやや不明確、4世紀～5世紀前葉か。

158 溝 調査区北東隅を北西から南東に抜ける。北側から157溝が合流するが、切り合いなく埋土も連続する。北壁断面で両溝間は2.3m離れて、157溝は真北から来て側溝内で東に曲がり158溝に合流すると思われる。幅0.8～1.0m、深さ0.23mほど、断面形は二段掘りで下半は逆台形である。底部レベルは明確に南東に傾斜し、南東端付近で急に深くなる。埋土は第11-2a層に似たオリーブ黒～灰色シルト質粘土でわずかに炭化物を含む。方位性はN→59°→Wである。

159 溝 やや蛇行するが、158溝から南西1.8～2.8mでほぼ平行する。12面検出時に溝北西付近を若干掘りすぎ検出できなかったが、西壁断面北端付近に達するのは確認できた。幅0.4～0.8m、深さ0.15cmほど、断面形は逆台形、埋土は灰色シルト質粘土で、両肩部分にやや明色の層がある。部分的に第12層のブロックあり。底部レベルは明確に南東に傾斜する。方位性はN→57°→Wである。

161～163 土坑 159溝と166流路の間に分布する不整形土坑である。どれも深さは0.1m以下で壁は緩く下がり、底部は不定形に凹凸する。埋土は第11-1a層に第12層のブロックが混じる。

165 落ち込み 深さは0.05m弱だが、壁が立ち、底部は平坦、平面形も直線的な2辺が直交する。しかし西壁断面で見ると南北長が0.7mしかない。埋土は第11-1a層と第12層が混濁した質である。

166 流路 調査区北側を東西方向に横切る。幅4.0～6.4mで、セクション設定位置は浅く深さ0.1mほどだが、東西の南肩部寄りが深く、東最深部は0.38mほど、西最深部は0.22mほどである。西壁断面で第11-1a層を切るのが分かり、埋土は上下2層ある。上層は暗緑灰色シルト混じり粘土で、上部は第11-1a層に似る。下層は暗オリーブ灰色シルト混じり粘土で上層より暗色である。形状から水流は西から東へ流れたと思われる。方位性はE→5°→Nである。上層から土師器二重口縁壺1片、布留式甕8片、弥生土器2片、砂岩礫1個、下層から弥生土器小片9片が出土した。二重口縁壺の破片は大きく、148土器1もこの流路の遺物なら、古墳時代前期頃には埋没していない可能性が強い。図31-109は上層出土の土師器二重口縁壺片、残存率10%、口縁は20%残存、内外面ヨコナデ、4世紀頃か。

167・168 ピット 166流路底部で検出された。西側深い部分の比較的平坦な位置である。167ピットは平面円形に近く径0.6m、壁は垂直に近く底部は平坦で深さ0.3mほど。埋土は166流路下層より暗い暗オリーブ黒～灰色シルト混じり粘土内に第12層のブロックが若干ある。168ピットは不整な楕円形で長径0.8m、短径0.6m、深さ0.05mほど。埋土は166流路上層に似た緑灰色シルト質粘土で、わずかに炭化物を含む。これら二つのピットは166流路が常時滞水する状況ではなかった事を示す。

170～175 ピット 166・176流路間にある。170～172・174ピットは、直線的には並ばず、等間隔でもないが、二つの流路からほぼ等距離の位置に並ぶ。埋土は174ピットのみが第11-2a層に似たブロック土である以外は、第12-1a層のブロック土間に第11-2a層が入る。どれも柱痕などは認められない。

170ピットは径0.32m、深さ0.11mである。171ピットは径0.40m、深さ0.20mである。172ピットは径0.50m、深さ0.10mである。173ピットは径0.33m、深さ0.17mである。174ピットは径0.44m、深さ0.07mである。175ピットは径0.38m、深さ0.08mである。

柱痕などが確認できず、柵列とは言い難いが、流路に沿う何らかの施設が存在した可能性がある。

176 流路 西側が途切れる形で検出されたが、第11層中を西壁まで続く。西壁では第11-1・2a

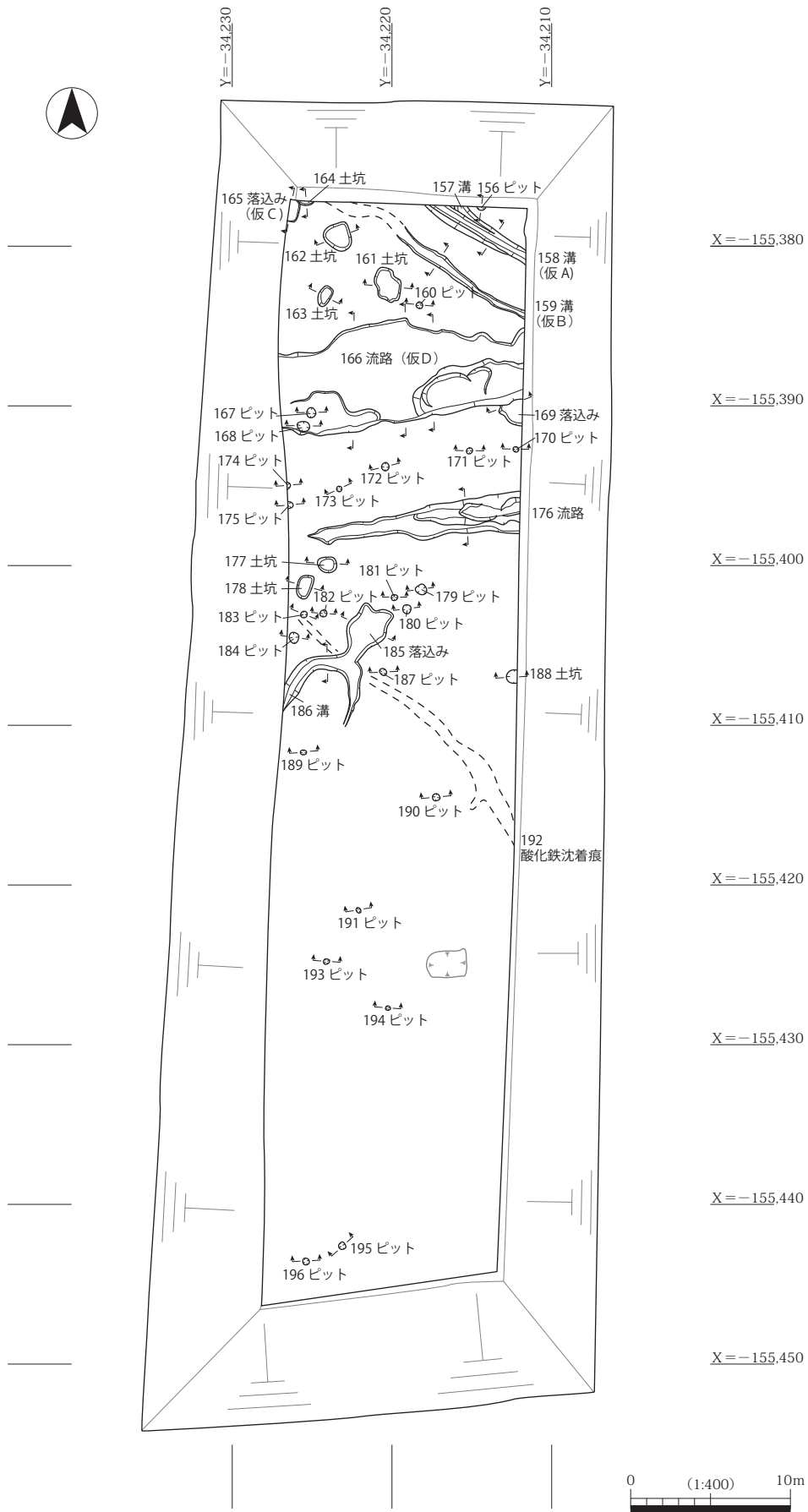


図 32 1 区第 12 面全体図

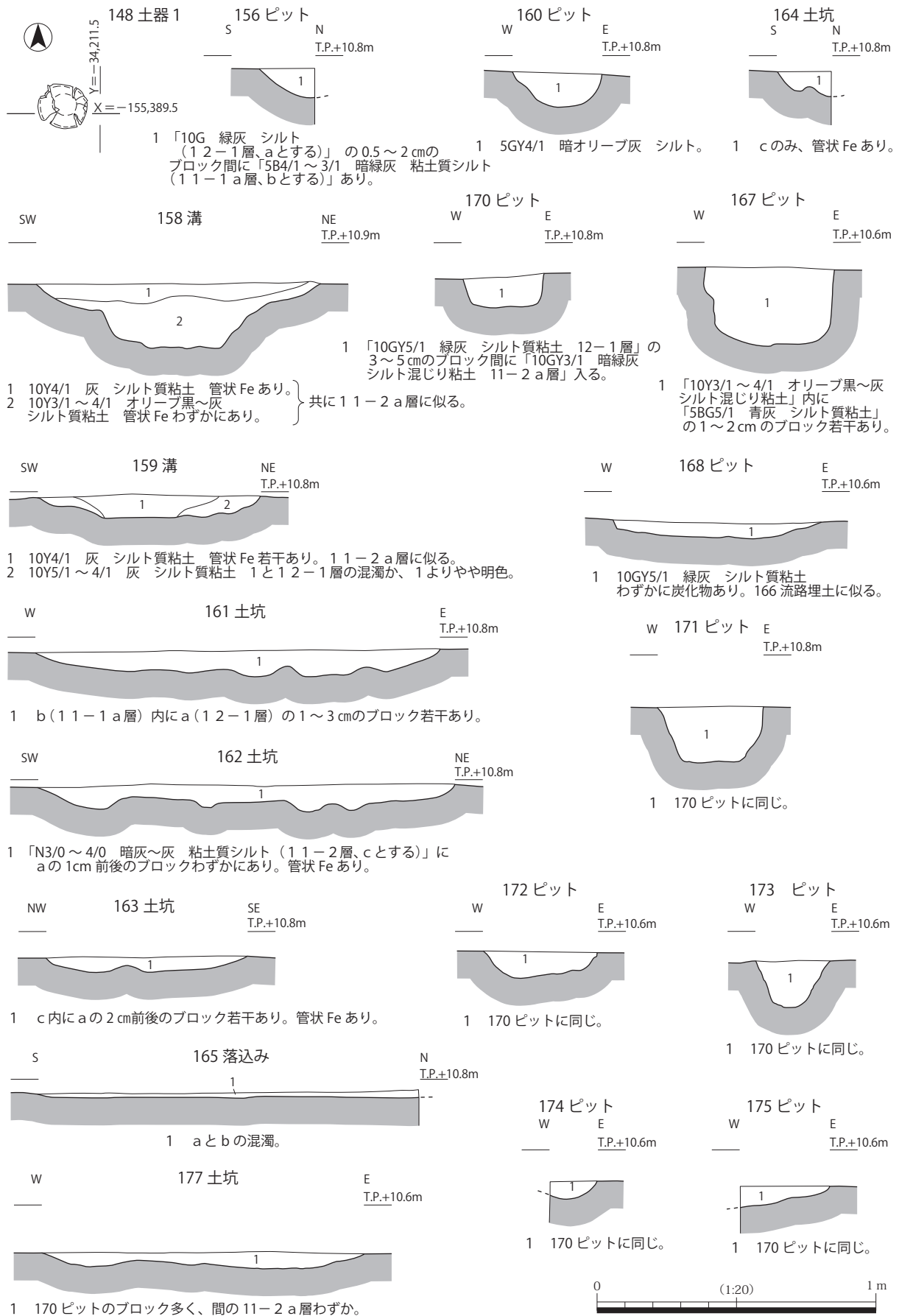


図 33 1 区第 12 面遺構断面図 (その 1)

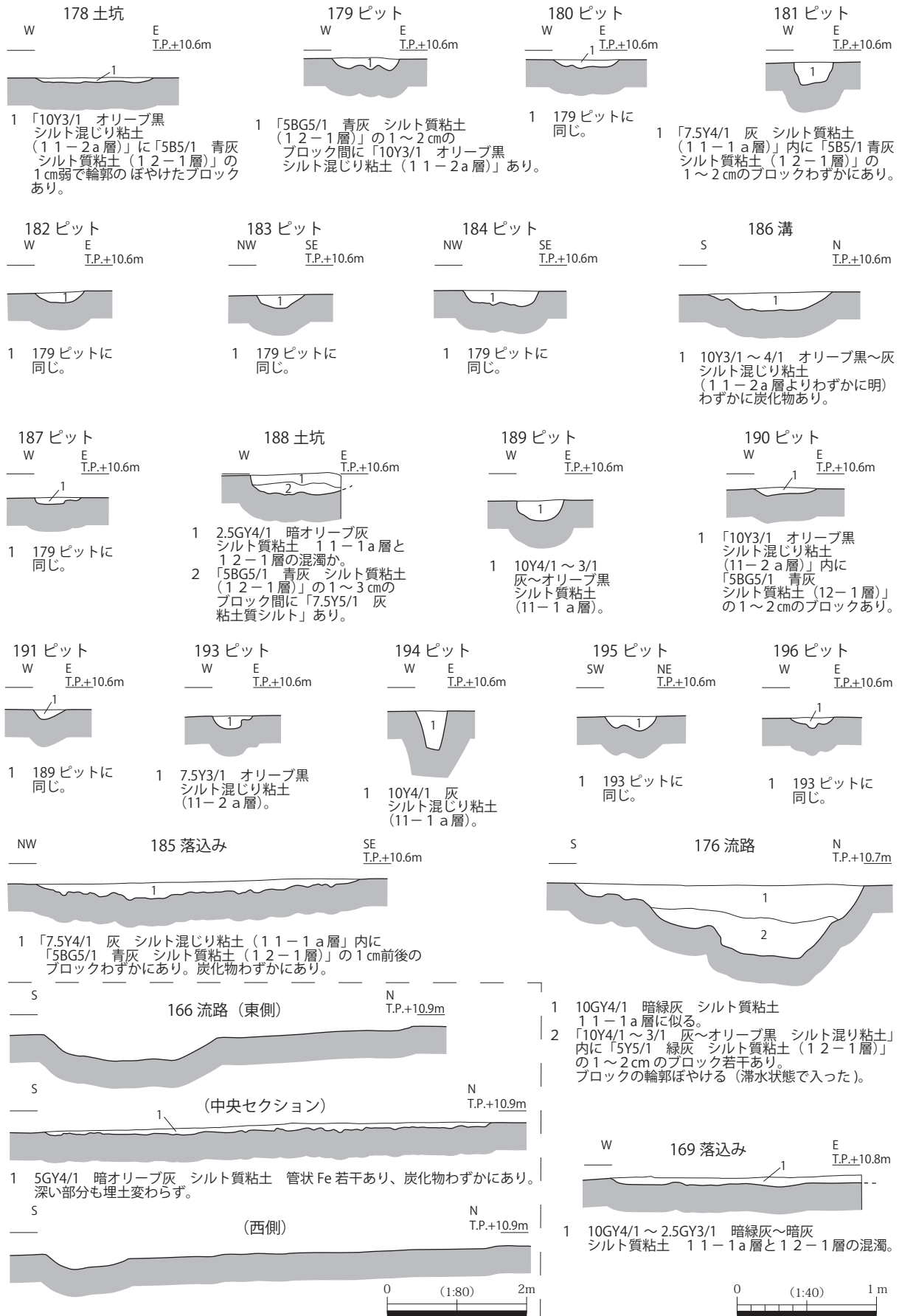


図 34 1区第12面遺構断面図 (その2)

層を切るのも見え、断面での規模は幅 1.5m、深さ 0.14m ほど、11 - 2a 層上部をやや削る深さで止まる。東へ次第に大きく深くなり、最大幅 2.6m、深さ 0.52m ほど、埋土は 2 層で、上層は第 11 - 1a 層に似た暗緑灰色シルト質粘土、下層はそれより暗色の灰～オリーブ黒シルト混じり粘土内に第 12 - 1 層のブロック若干あり。方位性は E → 7° → N と 166 流路に近い。東へ水が流れた侵蝕痕と思われ、深いが埋土内に砂層はない。土師器 3 片（高坏 1・壺 1）・礫岩 1 個が出土している。図化はできなかった。

185 落ち込み・186 溝 185 落ち込みは幅 2.42m、長さ 3m ほど、南西側は幅 0.98m で 186 溝に開口する。平面形は隅丸長方形に近い。深さは 0.1m 前後で、底部に踏み込み状の凹凸がある。埋土は第 11 - 1a 層に第 12 - 1 層の小ブロックがわずか、炭化物もわずかにある。186 溝は弧状に巡る溝で西壁部分が一番深い。西壁断面で第 11 - 1・2a 層を切るのが見えたが第 11 - 1a 面では確認できず。弧状に巡る内側の形が若干方形か。埋土は第 11 - 2a 層より少し明るいオリーブ黒～灰色シルト混じり粘土で、わずかに炭化物を含む。縄文土器らしき小片 2 片が出土したが、遺構の時期を示すものではなからう。この二つの遺構は、可能性としては水路と絡む小区画水田の痕跡かも知れない。

なおこの遺構から南は遺構密度が低く、植物根痕かもしれないピットがわずかにあるのみである。

192 酸化鉄沈着 186 溝の北西から南東方向へ、酸化鉄分が濃く沈着した部分が帯状に続く。南東側で太く最大幅 1.18m である。南東端付近では南に枝状に分かれる形もある。第 11 - 1・2a 層内に存在した溝の痕跡と考え記録した。それなら、形状から南東に水が流れる溝の可能性が高い。185 落ち込み・186 溝との併存は考えにくいだが、前後関係は不明である。方位性は N → 38° → W である。

面の微地形 調査区北端から 166 流路までは T.P. + 10.75m ほどで平坦である。166 流路・176 流路間は東が T.P. + 10.66m ほど、西が T.P. + 10.46m ほど、南に下がり、X = - 155,410 付近で東が T.P. + 10.61m、西が T.P. + 10.41m ほど、X = - 155,420 付近では東が T.P. + 10.53m、西が T.P. + 10.37m となり、西側は南端もこの高さである。東側の南端は T.P. + 10.47m ほどである。北が高く、東が高い傾向にある。

小結 第 11 - 1a 面が縄文時代晩期末葉～奈良時代頃の面で、その時の遺構がこの面で検出できたと言える。当時、北側（その 1・2）付近が縄文時代流路を埋積した微高地で、この付近はその裾部に近い。既往の調査で竪穴建物が検出されたが、今回は居住域的な遺構はない。耕作地の痕跡も、可能性を指摘できる遺構がわずかにある程度である。北西～南東方向溝は、微高地上も裾付近でも微高地長軸方向に平行して掘削されていた。しかし今回検出の溝は南東に水が流れる形で、既往の調査の、南東山裾から微高地を通じ北西平野部に導水する溝とは逆方向である。さらに 166・176 流路の二つの流路状侵蝕痕は、面的に低い西側から東へ水が流れた形態を成す。これは縄文時代流路埋積後、1 区より西に洪水を起こす流路が存在した事を暗示する。調査区南半で極端に遺構密度が減るのは、低く人間の活動に適さない湿地だったためと推測される。微高地と低湿地が散在する環境が復元できる。遺構の時期を特定する要素は、166 流路が古墳時代前期頃に埋没していない事が分かるのみである。176 流路も併存した可能性が高く、その間に並ぶピットも同時期であろう。また、158・159 溝は 166 流路と 1 区より東側で交差するはずで、そこでの切り合いから前後関係がつかめる可能性が高い。

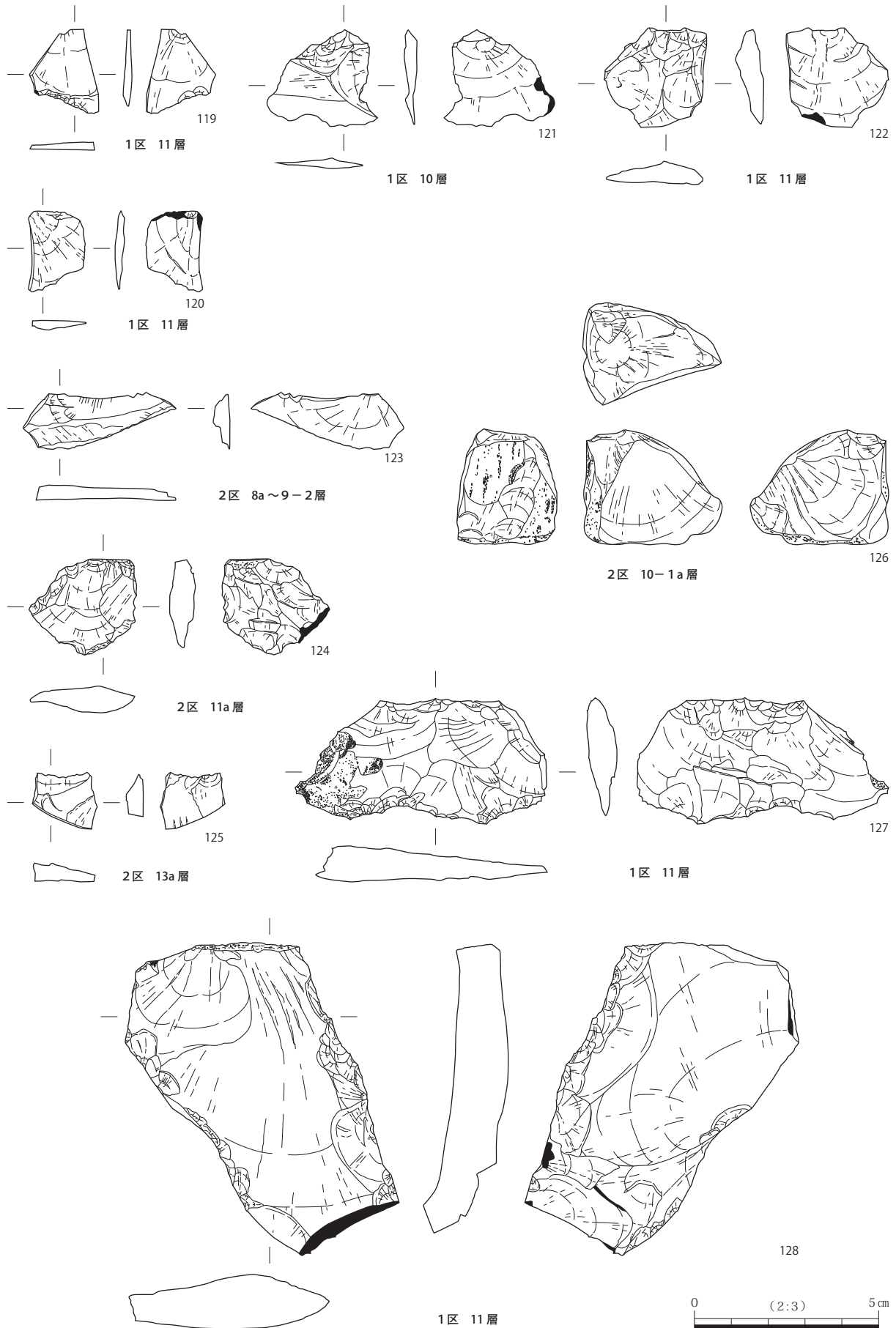


図35 1・2区出土サヌカイト製石器

0 (2:3) 5cm

第4章 2区の調査成果

前章の冒頭で述べたとおり、章を変えて2区の調査成果を報告する。

第1節 基本層序 (図36・37、図版14-49～52、表3)

a・b層の定義、層名の付け方、既往の調査での層名には鍵括弧を付するのとも1区と同じとする。

2区は東辺を(その1)と矢板を隔てて隣接する。そのため(その1)の基本層序と比較した。しかし(その1)各層の土色・土質は広い調査区内の代表的なものであり、2区では異なる質となる場合もあった。さらに、幾つかの層は2区まで広がらない。また、(その1)で耕作土層とする層の幾つかは、今回の調査で洪水堆積層と考えられた。それらを踏まえ、2区の基本層序としてまとめる。

2区は現在、恩智川右岸堤防だが、旧恩智川は北上の後、2区の位置する坪南側で東へ直角に曲がっていた。堤防は1m以上の盛り土の他、築造時の攪乱があった。機械掘削は1区と共通する中世末期頃の第2-4b層上部が攪乱されていたのでそれを掘削し、第3a面から人力掘削で調査を開始した。

断面図は、堤防を切った北側法面(北壁断面とする)と、東辺矢板際に土層観察用セクションを設定し(東壁断面とする)作成した。現恩智川は北側が東に振る方位で流れ、両断面も正方位ではない。

第2層 第2層のうちa層は北壁断面にわずかに残るのみである(図36の1)。5Y4/2 灰オリーブ色中砂混じり細砂質シルトで、島島上耕作土である。近世以降の層で(その1)「第2-2a層」の可能性が高い。ただし(その1)では島島上でもマンガン沈着が激しく粘質である。

直下のラミナのない砂層は島島盛り土で、(その1)では「第2-2a層」の一種とするが、今回は第2-4b層に含める。その下にラミナのある第2-4b層があり、上から最大厚40cm強の2.5Y5/6～7/2 黄褐色～灰黄色粗砂～中砂、厚さ10cm弱の10Y5/1 灰色細砂～中砂、厚さ5cm前後の5Y4/3 暗オリーブ色シルトとなる。最下部のシルト層には灰白色シルトが挟まる。

第3a層 上部2.5Y5/3～5Y5/2 褐色～灰オリーブ色、下部5B4/1～5GY4/1 暗青灰～暗緑灰色細砂混じりシルトの耕作土層で、(その1)の「第3-1a層、5Y4/1 灰色細砂混じりシルト」にあたる。だが「7.5Y3/1～5Y3/1 オリーブ黒色シルト混じり細砂」の「第3-2a層」や「第3-3a層」はない。その2層は(その1)でも北側では「上層の攪乱を受け遺存状況が悪い」とされる

第3b層は2.5Y7/3～7/4 浅黄色細砂～中砂、ラミナありの下層と、それが人為的な攪拌を受けた上層に分かれる。第3b面から踏み込まれた足跡が第4a面に残る。第3b層上層は(その1)「第3-3b層」の「上部は溝状に粘質ブロックを含んでおり」の部分に該当すると思われる。

第4a層 上部10YR4/1 褐灰色、下部5GY4/1 暗オリーブ灰色の粘土質シルト、細砂若干あり、微小な炭化物わずかにあり、炭酸カルシウムの結核もわずかにある。耕作土層である。(その1)の「7.5Y4/1 灰色細砂混じりシルト」とされる「第4a層」であり「炭化物を含む」とされるのも同じである。

第5a層 7.5GY4/1 暗緑灰色シルトで細砂若干あり、微小な植物遺体わずかにあり。炭酸カルシウムの結核もわずかだが第4a層よりは多い。耕作土層、(その1)「第5a層」である。「第4層に比べて砂質が強い」点も同じ。ただ「下部にわずかに砂層が点在する部分があり」という砂層は認められなかった。

第6層 酸化部分は5Y4/2～10Y4/1 灰オリーブ～灰色、還元状態は10BG4/1～5/1 暗青灰～青灰色のシルトで、わずかに細砂を含む。炭酸カルシウムの結核が下半に多い。上下層より明色である。上

面はかなり細かく凹凸する。下面を緩く侵蝕した痕跡があり、比較的明色でもあり洪水堆積層の可能性が高く、今回は第6層とした。上面の凹凸は1区と同じ人為的攪拌と思われる。上面の面的調査はしていない。

(その1)「第6a層」「5B5/1 青灰色細砂混じりシルト」に対応する。炭酸カルシウムの結核が多いのも共通する。上面の凹凸を「火炎状」として「地震による地層の変形の可能性を指摘」するが、それは否定してよい。(その1)「第6a層」もかなり明色だが、2区の成果をもって(その1)全体でも洪水堆積層となるかは疑問である。(その1)「第6a面」が無遺構なのは調査区北西部で、東側・南側では「疑似畦畔」(直上層の畦畔基部か)がある。耕作土層である「第6a層」が東側・南側に残り、北西部から2区にそれを侵蝕した似た質の洪水堆積層が同レベルで堆積している可能性も考えられる。

第7a層 酸化状態で5Y5/3 灰オリーブ色、還元状態で10GY4/1 暗緑灰色のシルトで、細砂を若干含む。炭酸カルシウムの結核は部分的でわずかである。(その1)の「5B4/1 暗青灰色細砂混じりシルト」の「第7a層」にあたる。しかし「第7b層」はない。(その1)でも北側では「点在するのみ」とある。

第8a層 酸化状態で5Y4/1 灰色、還元状態で5B4/1 暗青灰色の粘土質シルトで、わずかに細砂を含む。耕作土層である。(その1)で「10BG5/1 青灰色細砂混じり粘質シルト」とされる「第8a層」である。

第9層 (その1)では「変色が著しい」「植物遺体を多く含んだ」「2.5Y4/2 暗灰黄色～7.5Y4/2 灰オリーブ色細砂混じり粘質シルト層」であり、「第9-1a層」とそれより「砂質の強い」「第9-2a層」に分かれるとするが、東西方向断面で2区に接する西端では「7.5Y4/2 灰オリーブ色細砂混じり粘質シルト 粘性高い 変色著しい」と色・質共に同じ記載の「第9-1a層・第9-2a層」が重なる。

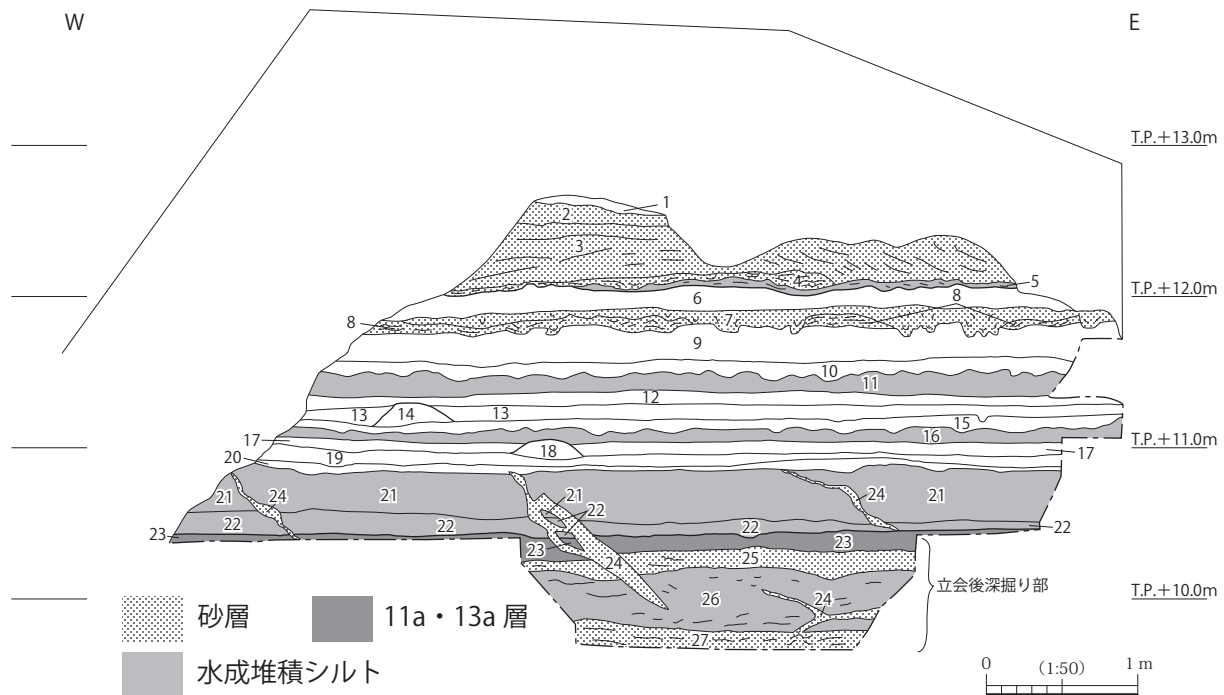
2区でも第9層は2層になる。上層は酸化状態で7.5Y4/2 灰オリーブ色、還元状態で5B4/1 暗青灰色粘土質シルトである。若干土壌化しただけに見える、耕作土層には見えない。(その1)「第9-1a面」でも「変色帯」しか検出されていない。水成堆積層の可能性が高く、第9-1層とする。

下層は南北に二つの層がある。どちらも第9-1層直下だが、切り合いでは南側が上層となる。南側は酸化状態5Y5/2 灰オリーブ色、還元状態5B4/1～5/1 暗青灰～青灰色の粘土質シルトで、炭酸カルシウムの結核あり、包含植物遺体に長さ5cm以上の木片や加工木片があり、洪水堆積層と考えられる。北側の下層は酸化状態5Y4/2～5/4 灰オリーブ～オリーブ色、還元状態5G5/1 緑灰色粘土質シルトで、炭酸カルシウムの結核あり。この層は第10a面侵蝕痕の埋土に入り、明色で、洪水堆積層と見られる。この二つの層は第9-2層とした。その方が(その1)の基本層序とも対応が取れる。しかし(その1)「第9-2a層」と同じ層ではない。そのため(その1)「第9a層」全体が洪水堆積とは言えない。(その1)南側では「第9-2a層」の下に「わずかに砂が点在」し、1区の第9a層・第9b層の關係に似る。

現時点では2区と(その1)のつながりには疑問が多く、(その1)の「第9-1a層」と「第9-2a層」は1区の第8-2a層と第9a層に、2区の第9-1層と第9-2層は1区の第8-2b層に対応し、(その1)東西断面図の西側の層のつながりに誤りがある可能性が強いとしか言えない。

第10a層 5B4/1～3/1 暗青灰色粘土質シルトで、わずかに細砂～中砂を含む。(その1)の「5PB5/1 青灰色細砂混じり粘質シルト」の「第10-1a層」である。(その1)の「5PB4/1 暗青灰色細砂混じり粘質シルト」の「第10-2a層」は東側にしかない。この層は遺跡内で最古の条里型地割の耕作土層である。1区で、水域化した環境で堆積したと考えられた第10-2b層は2区になく(その1)でも相当層はない。この付近が微高地で、隣接地が水域化しても冠水しない立地であったからだろう。

第11a層 N3/0～4/0 暗灰～灰色粘土質シルトで、部分的に粗砂～中砂を若干含む。古土壌層であ



- 土色・土質
- 1 5Y4/2 灰オリーブ 中砂混り細砂質シルト、管上Feあり。島島上耕作土、2-2a層?
 - 2 5Y6/1 灰 粗砂混り細砂質中砂 シルト若干あり、ラミナなし、2-4b層 島島盛土。
 - 3 2.5Y5/6 ~ 7/2 黄褐~灰黄 粗砂~中砂 ラミナあり。洪水堆積層、2-4b層。
 - 4 10Y5/1 灰 細砂~中砂 ラミナあり。洪水堆積層、2-4b層。
 - 5 5Y4/3 暗オリーブ シルト「5Y5/1 灰 シルト(白色系)」のラミナあり。洪水堆積層、2-4b層、(その1)では3a層上部としている。
 - 6 上部 2.5Y5/3 黄褐 下部 5B4/1 暗青灰~7.5Y5/2 灰オリーブ 細砂質シルト わずかに中砂あり。3a層、耕作土層。
 - 7 10Y5/1 ~ 5Y7/3 灰~浅黄 細砂~中砂「N5/0 シルト」の1~3cmのブロックあり、乱れた短いラミナ部分的にあり。3b層、人為的に攪拌された砂層。
 - 8 2.5GY6/1 ~ 5Y7/3 オリーブ灰~浅黄 細砂~中砂 ラミナあり。洪水堆積層、3b層。
 - 9 10Y4/1 灰 シルト わずかに細砂・微小な炭化物あり。4a層、耕作土。
 - 10 7.5GY4/1 暗緑灰 シルト わずかに細砂~中砂あり。Caの結核わずかにあり。耕作土、5a層。
 - 11 7.5GY4/1 ~ 5/1 暗緑灰~緑灰 シルト Caの結核あり、下半に多し。水成堆積層、6層、上面人的攪乱。
 - 12 7.5GY4/1 ~ 3/1 暗緑灰 シルト 細砂若干あり、Caの結核部分的にわずかにあり。7a層、耕作土層。
 - 13 酸化 5Y5/2 灰オリーブ 還元 5B4/1 暗青灰 シルト わずかに細砂あり、細かい根痕あり。耕作土層、8a層。
 - 14 13と同質、切り合いのみ見える。8a層耕作土時点畦畔盛土。
 - 15 酸化 5Y4/2 ~ 5/2 灰オリーブ 還元 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト 縦根痕内に細砂降下。水成堆積層? 9-1層、やや土壌化(「B層」的土壌化)。
 - 16 酸化 7.5GY4/1 暗緑灰 還元 5B4/1 暗青灰 粘土質シルト Caの結核あり、植物遺体わずかにあり。洪水堆積層、9-2層。
 - 17 酸化 10Y4/1 灰 還元 5B4/1 ~ 5/1 暗青灰~青灰 シルト わずかに細砂あり、網状の細かい根痕あり。耕作土層、10-1a層。
 - 18 17とほぼ同質、若干ブロック状構造。10-1a層耕作土時点畦畔盛土。
 - 19 酸化 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 還元 N4/0 灰 粘土質シルト わずかに中砂あり。土壌層、11a層。
 - 20 21が2~8mmの粒状になり、その間に19が入る。11a層の土壌化と12b層の漸移的变化帯。
 - 21 5BG5/1 青灰 粘土質シルト 植物根痕多く、この中に19(11a層)降下。下層はやや細砂混じる。12b層。
 - 22 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 21より植物根痕減り、Fe若干あり、Caの結核わずかにあり。12b層。
 - 23 5B5/1 ~ 4/1 青灰~暗青灰 細砂質シルト 上面からの植物根痕若干あり。13a層。
 - 24 中砂~粗砂に周囲のシルト巻き込む。噴砂脈。
 - 25 5BG5/1 青灰 シルト質細砂 斑状にFeあり(5Y5/3 灰オリーブに染まる) 細砂のラミナ若干あり。水成層、13b層? (その1)では13a層とする。
 - 26 「10GY5/1 緑灰 シルト」内に「N7/0 灰白 細砂」のラミナあり。水成堆積、14b層。
 - 27 N6/0 灰 細砂質中砂 ラミナあり。縄文中~後期流路埋積層、14b層。

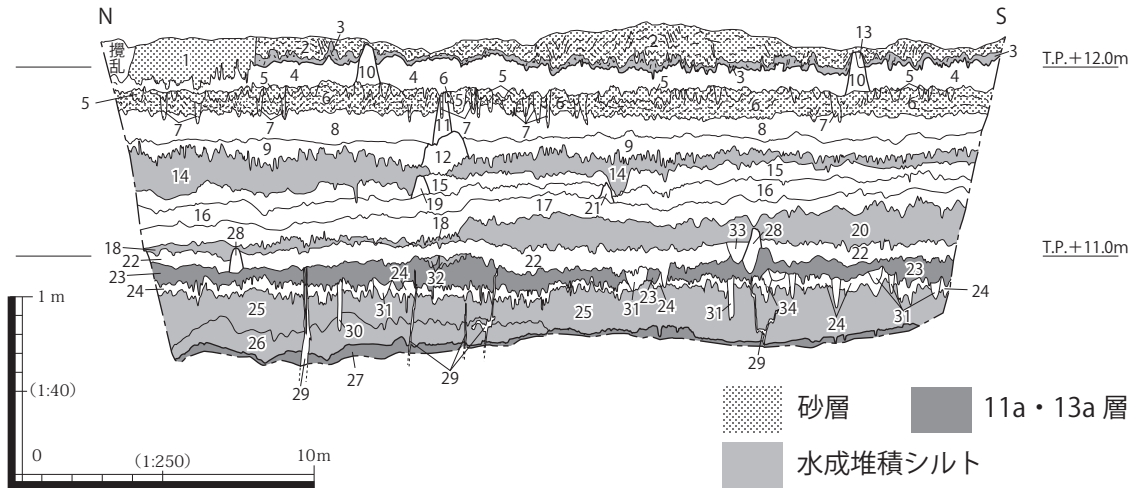
図 36 2区北壁断面図

る。(その1)では「5PB3/1 ~ 5P4/1 暗青灰~暗紫灰色細砂混じり粘質シルト」で「第12a層」と共に「暗色の強い土壌化層」とされるが、さほど暗色ではない。「第12a層」と合わせ1区の第11-1a層・第11-2a層と同じ土壌化層と比定できる。「第12a層」は残りが悪く、2区には広がらない。

第12b層 2区には(その1)「第12a層」はなく、第11a層直下が第12b層となる。青灰色系の水成堆積層で、下層は異なるが1区第12層と良く似る。二つの層に分かれる。上層は5BG5/1 青灰色粘土質シルト、下部に細砂若干含み、植物根痕多く、そこに第11a層が降下する。下層は上面に土壌化の痕跡なく、10G5/1 緑灰色シルトで、わずかに酸化鉄が沈着する。細砂若干あり。植物根痕は上層より少ない。

第13a層 10BG5/1 青灰色細砂質シルトで、土壌化しても明色なのは直下が砂層で、有機分が溶脱したためか。上面が縄文晩期中葉単純の遺構面となるので、面的調査は上面第13a面を最終面とした。その後北壁沿いで下層確認の深掘り部を90cmほど掘り下げ北壁断面図に断面を追加した。

(その1)では「2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂混じりシルト」の「第13-1a層」と「7.5GY4/1 暗



土色・土質

- 1 「10YR5/6 ～ 2.5Y7/2 黄褐～灰黄 中砂～極粗砂」内に3・4の5～1cmのブロックあり。1b土坑埋土?
- 2 2.5Y7/4 ～/1 浅黄～灰白 中砂～細砂 ラミナあり。洪水堆積層、2-4b層、大半は機械掘削。
- 3 「2.5Y5/2 暗灰黄 粘土質シルト」内に「2.5Y6/2 灰黄 シルト」のラミナあり。洪水堆積層、2-4b層、(3a層巻き上げ)。
- 4 上部5Y5/2～5/1 灰オリーブ～灰、下部7.5GY4/1 暗緑灰 細砂混じりシルト。上部Feあり。3a層耕作土。
- 5 6内に1cm前後の4のブロック。3a層の形成、復旧時の攪拌層、3b層。
- 6 2.5Y7/3～7/4 浅黄 細砂～中砂 ラミナあり。3b層、洪水堆積層。
- 7 6のラミナなし、3a層成立復旧時の踏み込み。
- 8 上部10YR4/1 褐灰、下部5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト。細砂若干あり、上部Feあり、微小な植物遺体とCaの結核わずかにあり。4a層、耕作土。
- 9 7.5GY4/1 暗緑灰 シルト 細砂若干あり(4a層より多し)、微小な植物遺体とCaの結核わずかにあり(4a層より多い)。5a層、耕作土。
- 10 色・質ほぼ4に同じ「2.5Y6/2 灰黄 シルト」のブロックあり、全体にブロック状構造。3a層時点畦畔盛土。
- 11 色・質共に8に同じ 上部砂粒の降下多し。4a層時点畦畔盛土。
- 12 色・質共に9に同じ 締り良し。5a層時点畦畔盛土?
- 13 10内に「5Y6/1 灰 シルト」の1～2cmのブロックあり。畦畔補修盛土か。
- 14 酸化 5Y4/2～10Y4/1 灰オリーブ～灰、還元 10BG4/1～5/1 暗青灰～青灰 シルト わずかに細砂あり。水成堆積層、6層、上面人為的攪乱。
- 15 酸化 5Y5/3 灰オリーブ、還元 10GY4/1 暗緑灰 シルト 細砂若干あり。7a層、耕作土層。
- 16 酸化 5Y4/1 灰 還元 5B4/1 暗青灰
- 17 酸化 7.5Y4/2 灰オリーブ 還元 5B4/1 暗青灰色 粘土質シルト 根痕に細砂の降下あり、Caの結核あり。水成堆積層?少し土壌化?9-1層。
- 18 酸化 5Y4/2～5/4 灰オリーブ～オリーブ 還元 5G5/1 粘土質シルト Caの結核あり。洪水堆積層、9-2層。
- 19 14と同質、切り合いのみ見える。7a層耕作土時点畦畔盛り土。
- 20 酸化 5Y5/2 灰オリーブ 還元 5B4/1～5/1 暗青灰～青灰 粘土質シルト Caの結核あり、植物遺体わずかにあり。洪水堆積層。
- 21 16と同質、切り合いのみ見える。8a層耕作土時点畦畔盛り土。
- 22 5B4/1～3/1 暗青灰 粘土質シルト わずかに細砂～中砂あり、管状Fe若干あり。耕作土層、10a層。
- 23 N3/0～4/0 暗灰～灰 粘土質シルト 部分的に粗砂～中砂若干あり(噴砂脈周辺)。11a層、自然土壌。
- 24 25(12b層)が粒状になり、その間に23(11a層)降下。自然土壌の漸移的变化帯。
- 25 5BGS/1 青灰 粘土質シルト 下部細砂若干あり、生痕(ほとんど植物根痕)多く、そこに23(11a層)降下。水成層、12b層。
- 26 10GS/4 緑灰 シルト 細砂若干あり、Feわずかにあり、植物根痕25よりは少ない。水成層、12b層。
- 27 10BG5/1 青灰 細砂質シルト 上面から始まる植物根痕(草本)あり。有機分が溶脱し、明色化した自然土壌か、13a層。
- 28 ほぼ22(10a層)と同じ、切り合いのみ見える。10a層耕作土時点畦畔盛り土。
- 29 「7.5Y5/2～N5/0 灰オリーブ～灰 中砂～粗砂」内に周辺の層のブロック。噴砂脈。
- 30 「N4/0 灰 粘土質シルト 23(11a層)に似る。」内に25(12b層)のブロック若干。12b面遺構埋土(本来は11a面切り込みか)。
- 31 N4/0 灰 粘土質シルト 12b面遺構埋土(本来は11a面切り込みか)。
- 32 5B4/1 暗青灰 粘土質シルト 10b層か、水成堆積。
- 33 18にほぼ同じ、9-2b層、侵蝕痕内埋土。
- 34 23・24のブロック。遺構埋土?植物の攪乱?

図37 2区東壁断面図

緑灰色細砂混じりシルト」の「第13-2a層」に分かれるとされ、それが2区境まで続く。「13-2a層」相当は第13a層直下の5B4/1～3/1暗青灰色粘土質シルトの層で斑な酸化鉄の沈着も共通するが、この層にはラミナがありa層ではない。第13b層とすべきだろう。北壁沿い深堀部では、その下に厚さ40cmほどのシルト～細砂の流水堆積層があり、さらに下、T.P. + 9.88～9.80mで中砂主体のラミナのある砂層が見え、湧水が激しくなった。この2層は縄文時代流路の埋積層である「第14b層」である。基本層序まとめ 面的調査開始の第3a面はT.P. + 12.00～12.08mほどの高さで、人力掘削はT.P. + 12.2mほどから開始した。最終面の第13a面の高さはT.P. + 10.44～10.64mほどである。

多くの層が(その1)の基本層序と対応したが、質は微妙に異なる。また従来耕作土層と考えられてきた第6層・第9層がシルト系の洪水堆積層と判明した。第6層は(その1)の中で耕作土層と洪水堆積層の2種に分かれる疑いがある。洪水堆積層である第6層は(その1)北西付近に広がる部分的なものの可能性が高い。第9層も(その1)南側の「第9層」の状況が1区の第9a層・第9b層と似るので、洪水堆積層の2区第9層も部分的なものか。対応する1区の第8-2b層に似た状況か。

さらに第11a層は1区の第11-1a層と同じ自然の古土壌層であると判明した。

今回の調査1区	(その1)	今回の調査2区
第0層	第0層	
第1a層	第1a層	
第1b層	第1b層	
第2-1a層	第2-1a層	
第2-2a層	第2-2a層	第2-2a層
第2-2b層	第2-2b層	
第2-3a層	第2-3a層	
第2-4a層	第2-4a層	
第2-4b層	第2-4b層	第2-4b層
第3a層	第3-1a層	第3a層
	第3-2a層	
	第3-3a層	
	第3-3b層	第3b層
第4-1a層	第4a層	第4a層
第5a層	第5a層	第5a層
第5b層	わずかに砂層	
		第6層洪水
第6a層	第6a層	
第7-4a層	第7a層	第7a層
第7-4b層	第7b層	
第8-1a層	第8a層	第8a層
第8-2a層	第9-1a層	
第8-2b層		第9-1層土壌
第8-2b層		第9-2層洪水
第9a層	第9-2a層	
第10-1a層	第10-1a層	第10a層
第10-1b層	第10-2a層?	
第11-1a層	第11a層	第11a層土壌
第11-2a層	第12a層	
第12-1層	第12b層	第12b層上層
第12-2層	第12b層	第12b層下層
	第13-1a層	第13a層土壌
	第13-2a層	第13b層
	第13b層	
	第14a層	
	第14b層	第14b層

2区の「土壌」は耕作土ではない土壌、「洪水」は洪水堆積らしきもの。

表3 2区と(その1)調査区の基本層序対照表

の1-4畦畔につながる。

209 畦畔 南側の東西方向畦畔である。幅0.5～0.6m、頂部突出は0.08mほど、盛り土は202畦畔と同じだが、部分的に補修盛り土がある。方位性はE→3°→Nで、(その1)の1-5畦畔につながる。

208 畦畔 南西端で検出された南北方向畦畔である。幅0.5～0.6m、頂部突出は0.08mほど、盛り土は第3a層と同質のブロック土である。検出長3mほどだが、方位性はN→2°→Wで、(その1)の1-2畦畔との芯芯距離は11.4mほどである。

畝溝 各耕地区画内に南北方向畝溝が並ぶ。1本の幅は0.3～0.8m、溝同士の間隔は0.5～0.7m、溝底部は凹凸するが深さ0.1mほど。溝間の面も若干盛り上がり、耕作土層上面の畝立てである。

出土遺物 第2-4b層からはミガキのない瓦器1片、外面ハケのない土師器甕1片、板材1片が出土した。第3a～b層からは内面ミガキが粗い瓦器椀1片、土師器2片(小皿1・小型鉢1)、角材1片

第2節 各遺構面の調査成果

2区は9面の調査をした。

(その1)の調査面の内、「第2-1・4a面」は遺存しない。「第3-3a面・第3-3b面」は「第3-3a層」がない。「第6a面」は2区隣接部分が無遺構で調査しなかった。「第9a面」は無遺構なので調査しなかった。「第12a面」は「第12a層」がない。第13a面で面的調査を終えた。

第1項 第3a面(図38、図版12-38)

洪水堆積層の第2-4b層に覆われ、畦畔頂部も削平されずに遺存していた。南北方向の畦畔1本、東西方向の畦畔2本と耕地区画内には南北方向の畝溝が並ぶ。

202 畦畔 北側の東西方向畦畔である。幅0.5～0.7m、頂部突出は0.1mほど、盛り土は第3a層と同質の土に2.5Y6/2灰黄色シルトのブロックあり。方位性はE→3°→Sで、209畦畔との芯芯距離は16.1～16.7mである。(その1)



Y = -34.230

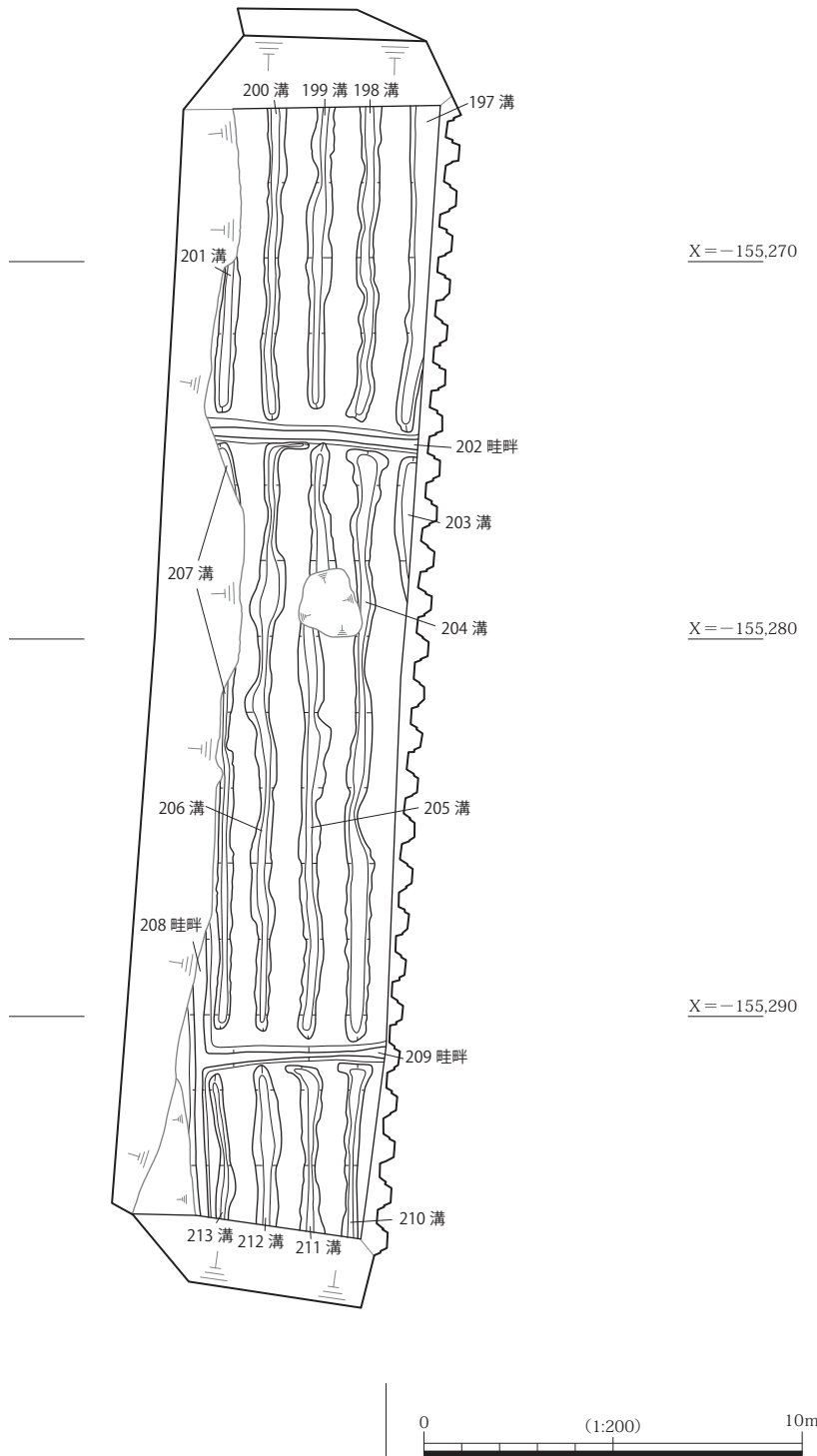


図38 2区第3a面全体図

にずれる。(その1) 同面1-9畦畔との芯芯距離は10.9mである。

215 畦畔 調査区中央北寄りで検出された東西方向畦畔である。幅0.5～0.6mで、頂部は0.05mほど突出する。埋土は214 畦畔と同じ。方位性はE→2°→Sである。第3a面202 畦畔からは芯芯距

が出土した。図化できるものはない。出土遺物はわずかだが、第2-4b層には近世遺物は含まれていない。1区の調査成果からしても中世末期の洪水堆積層と見てよいだろう。

小結 平均的な面の高さはT.P. + 12.06mほどで、顕著な高低差はない。基本南北方向長地型地割でその中を東西方向畦畔で区切る。今回の調査でも南北方向畦畔の芯芯距離が10.9mに近く、東西方向畦畔の芯芯距離が長い。畝立ては坪のほぼ全面にある事が判明し、島島以前の畑作の状況として貴重である。

第2項 第4a面(図39、図版12-39)

洪水堆積砂層の第3b層に覆われ、畦畔も頂部が突出した形で検出できた。南北方向畦畔1本、東西方向畦畔1本その他、第3b面から踏み込まれた足跡が、埋土を砂として平面や畦畔上に残る。

214 畦畔 調査区西端で検出された南北方向畦畔である。幅0.3～0.5mで、頂部が0.05mほど突出する。埋土は第4a層と同質だが、上部の砂粒の降下は若干多い。方位性は南北正方位である。第3a面208 畦畔より芯芯距離で0.5～0.6m東

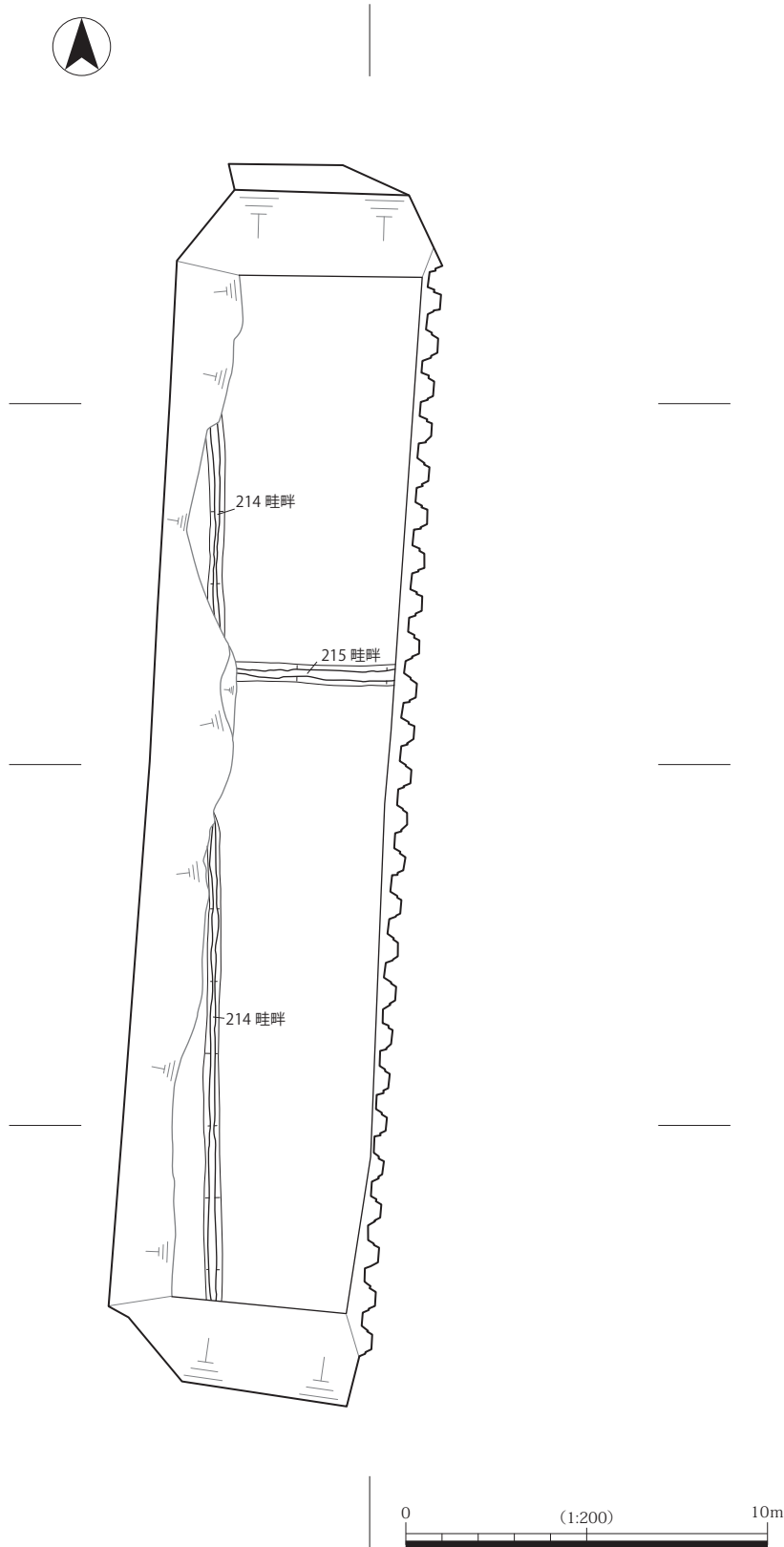


図39 2区第4a面全体図

10.9mに近く、2区もその間隔である。東西方向畦畔は(その1)1-11畦畔が南の2-10畦畔との芯芯距離が19.4mほどで、1区画は長方形になる。2区では耕地区画内に溝はないが、(その1・2)同面では部分的に南北方向の畝溝・鋤溝が見られ、上層床面の畝溝・鋤溝と、この面の畝立てが混在する。

離で2.8mほど南にずれる。(その1)同面1-11畦畔につながる。

面の高さ 215畦畔北側はT.P.+11.76mほど、そこから214畦畔西側はT.P.+11.73mほど。215畦畔南側はT.P.+11.75mほどと北側とほとんど差はない。その214畦畔西側はT.P.+11.71mほどである。西側が低いが堤防工事以降の沈下か。全体に顕著な高低差はない。しかし、215畦畔付近がやや高く、その部分では、南が北より若干高い。それが本来の高低差で、洪水で緩い侵蝕を受けたか。

出土遺物 第4層包含遺物は瓦器碗34片(内面ミガキ、非常に粗~なし)・白磁碗1片・瓦質土器羽釜1片・須恵器壺1片・土師器18片(小皿6・碗1・甕3・鉢1・坏5)・炭4片・付け木2片あり。土師器の特徴から遡っても14世紀以降の耕作土層と考えられる。15世紀代が妥当であろう。

図40-131は瓦器碗片、残存率10%、内面底部一定方向ナデ、口縁ヨコナデ後非常に粗いミガキ、外面上半ヨコナデ、下半コビオサエ、和泉型IV-4期、14世紀前葉のもの。

小結 (その1)「第4a面」は南北方向畦畔の間隔は多くが

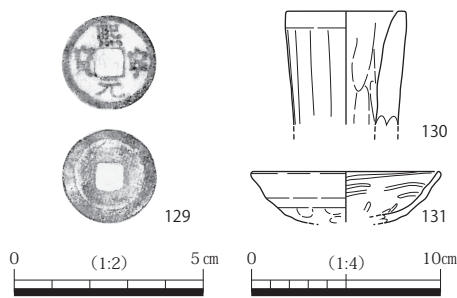


図40 2区出土遺物

2区近辺西側では直上層床面遺構の鋤溝のみだが、東側には畝立てが残る区画もあり、「水田と畠が同時におこなわれていた」とされる。

第3項 第5a面 (図41、図版12-40)

第4a層の耕作で削平を受けている。畦畔も頂部を削平されるが、耕作土との切り合いは確認できた。南北方向畦畔1本と異様に太い東西方向畦畔1本を検出している。

216 畦畔 西端付近検出の南北方向畦畔である。幅0.2～0.3mで、盛土は第5a層と同質である。攪乱に切られるが、北側残存部分は面が攪乱に向かい傾斜し、畦畔の方向も南側と変わる。後発的な変形か。南側の方位性は南北正方位で、第4a面214畦畔と芯芯距離では0.1mほど東にずれるが、ほぼ重複する。(その1)で東側に西に落ちる南北方向段差があるが、それとの芯芯距離は11.0～11.2mである。

217 畦畔 中央北寄りの位置にある東西方向畦畔である。幅0.9～1.0mと小畦畔としては異例の幅を持つ。盛土は第5a層と同じだが、締まりは良い。方位性は東西正方位だが、(その1)での続きは若干東が北に振る。第4a面215畦畔とは芯が合い、重なる。

この畦畔が太い理由が推測できた。畦畔北辺直下に第7a面220畦畔がある。第7a面は第6層堆積時に面的な侵蝕を受けるが、220畦畔より南に6mほどの所から少し高くなり、220畦畔を北に越してまた低くなる。南からの洪水の水流が、一旦220畦畔に阻まれ下方侵蝕を弱めた後、畦畔を越え、北に流れ落ち、畦畔北側を強く侵蝕したと見られる。それで第7a面は220畦畔を北辺としてその南側に高い地形が残った。洪水堆積の第6層もそれを踏襲する。その高い地形を削平して耕作地を復旧すると運搬土量が増える。それで、現地でも太い畦畔の盛土として解消したと考えられる。その地形が完全に解消されるのは第4a面で、この畦畔と同じ位置に通常サイズ小畦畔の215畦畔が作られる。

面の高さ 第4a層耕作による削平を受けた面ではあるが、217畦畔北側はT.P. + 11.59mほど、南側はT.P. + 11.62mほどと若干南側が高い。216畦畔より西は後発的な変形があり本来の高さ不明である。

出土遺物 第5a層から第6層の包含遺物は以下の通り。

瓦器碗30片、全て内面ミガキ粗・土師器49片(小皿12・碗8・坏7・甕4・ミニチュア羽釜?1・塩壺?1)・瓦質埴1片・炭3片・付け木4片・曲げ物底板4片・北宋銭1片である。

図40-129は北宋銭「熙寧元寶」(1068～1077年)である。130は土師器塩壺片か、口縁は25%残存、内面タテコビナデ、外面口縁ヨコナデ、体部タテナデ、時期は限定できない。

14世紀前半以降なのは確実で、第7a層も耕作期間の下限が14世紀前半にあるので、第6層の堆積が14世紀中葉前後、第5a層の耕作期間はそこから15世紀前半頃までか。

小結 (その1)同面では畦畔が突出した形で検出され、「第4a面の疑似畦畔」とされるが、今回は畦畔に突出はなく、断面で第5a層内に畦畔盛り土を確認し、第5a層時点の畦畔である。(その1・2)で東西方向畦畔は217畦畔の続きのみだが、「変色範囲」として幾つかの東西ラインが記録されている。(その2)ではこの面相当の第3面から、層位的つながりが不明確になる。

第4項 第7a面 (図42、図版12-41)

第6面は遺構が検出できないと見て平面的調査をおこなわなかった。この面はその第6層堆積の際に



Y=-34,230

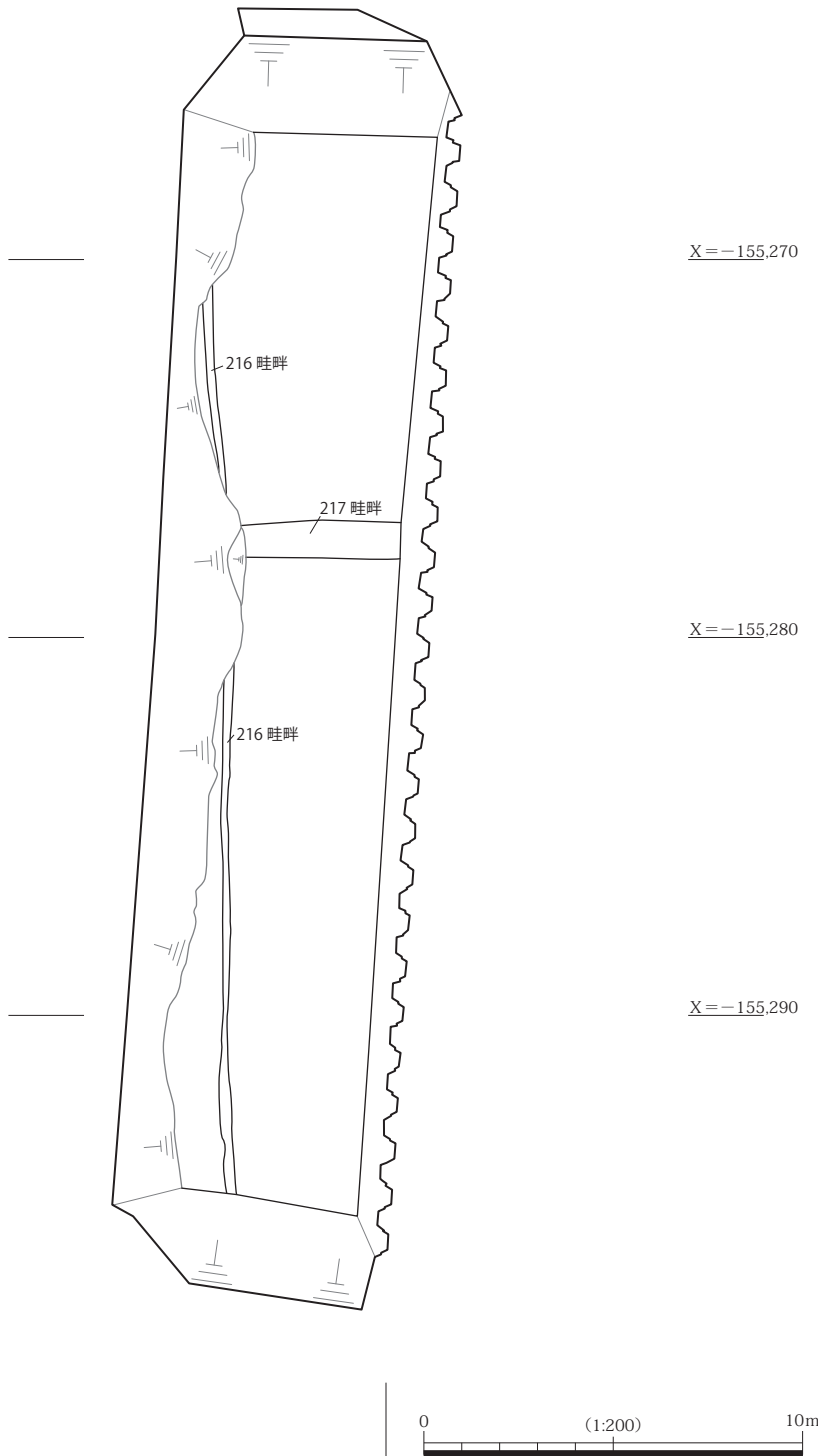


図41 2区第5a面全体図

かなり侵蝕を受けたと思われる。高まりと南北方向・東西方向各1本の畦畔を検出した。

219 高まり 中央付近で東西に伸びる。先述のとおり侵蝕され残った地形である。北側は220 畦畔を肩部として短い距離で0.1mほど北に下がる。南側に畦畔はなく、緩い傾斜で南に0.05mほど下がる。

220 畦畔 219 高まり北側肩部を成す。頂部は突出していない。平面形は若干蛇行するが、本来の形かは不明である。幅0.2mほど、盛土は第7a層と同質である。第5a面217 畦畔の北側肩部とほぼ同位置である。(その1) 同面で続きは検出されていない。

218 畦畔 北西側で検出した南北方向畦畔である。頂部の突出はない。途切れる付近は第7a層が残らないほど侵蝕されている。第5a面216 畦畔南側部分を延長した通りと合う。幅0.2mほど、盛土は第7a層と同じである。(その1) の東の畦畔との芯芯距離は10.0～10.4mである。

面の高さ 侵蝕を受け、本来の高さに近いのは219 高まり上面と思われる、その部分はT.P. + 11.46mほど、その北側はT.P. + 11.35mほど、南側はT.P. + 11.41mほどである。

出土遺物 第7a層の包含遺物は以下の通り。瓦器碗7片(内面ミガキ密3(外面ミガキ1)・内面ミガキ粗4)・土師器小皿2片・木製品6片(杭1・扁平角材1・付け木4)である。図化可能なものはない。第7a層の耕作期間は13世紀前葉～14世紀前半頃の中にとまると思われる。

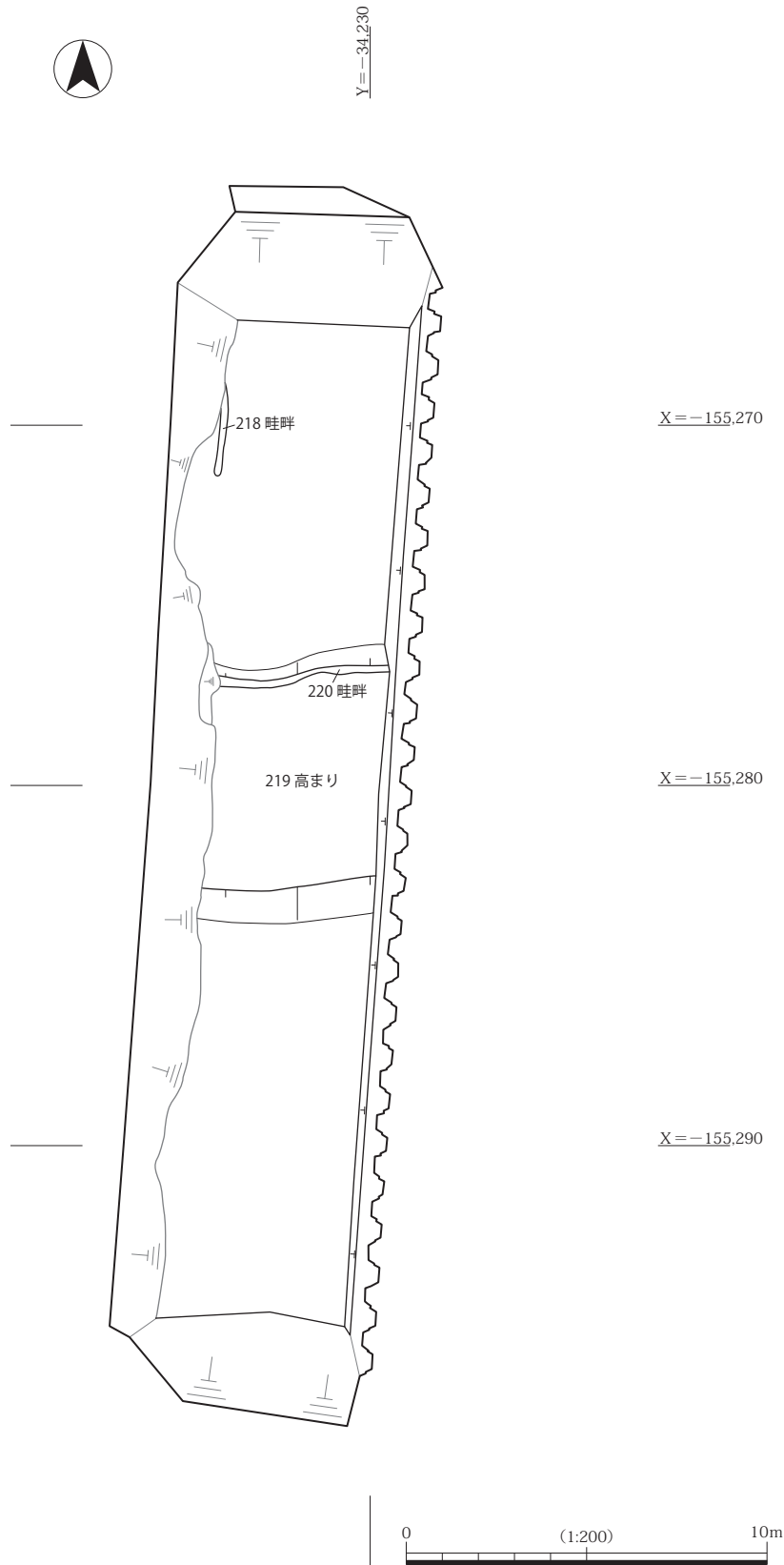


図42 2区第7a面全体図

土は第8a層と同質、検出長が短いが方位性は東西正方位か。221畦畔との交点で222畦畔より0.1mほど南にずれる。第7a面218畦畔から芯芯距離で南に3.6mほどずれる。

面の高さ 4区画あるが第7a層の耕作で削平を受ける。北東側区画の第7a面220畦畔以北はT.P. +

小結 侵蝕を受け、第6層に覆われても耕地区画は第5a面に踏襲された。それは(その1)「第6a面」北西部が侵蝕されても、他に残る耕地区画があったからだろう。今回この面と第8a面で東西方向畦畔が確認でき、2区の位置する坪では条里型地割施行以後、東西方向畦畔の空白期はないと言える。

第5項 第8a面 (図43、図版13-42)

第7a層耕作の削平を受け、畦畔は切り合いのみ検出した。南北方向畦畔1本、東西方向畦畔は南北方向畦畔との交点で東西にずれがあり2本の畦畔とした。東西畦畔には水口が一つ開く。

221 畦畔 幅0.2~0.3mで、盛り土は第8a層と同質、方位性はN→2°→Eで、第7a面218畦畔から芯芯距離で東に0.9~1.1mずれる。(その1)同面で東の1-28畦畔との芯芯距離は8.3~8.9mである。

222 畦畔 幅0.2mほど、盛り土は第8a層と同質、東西正方位で、第7a面220畦畔から南へ3.3~3.8mずれる。221畦畔交点から東に0.2mに幅0.3mの223水口が開く。(その1)同面に続きはない。

224 畦畔 幅0.3mほど、盛り

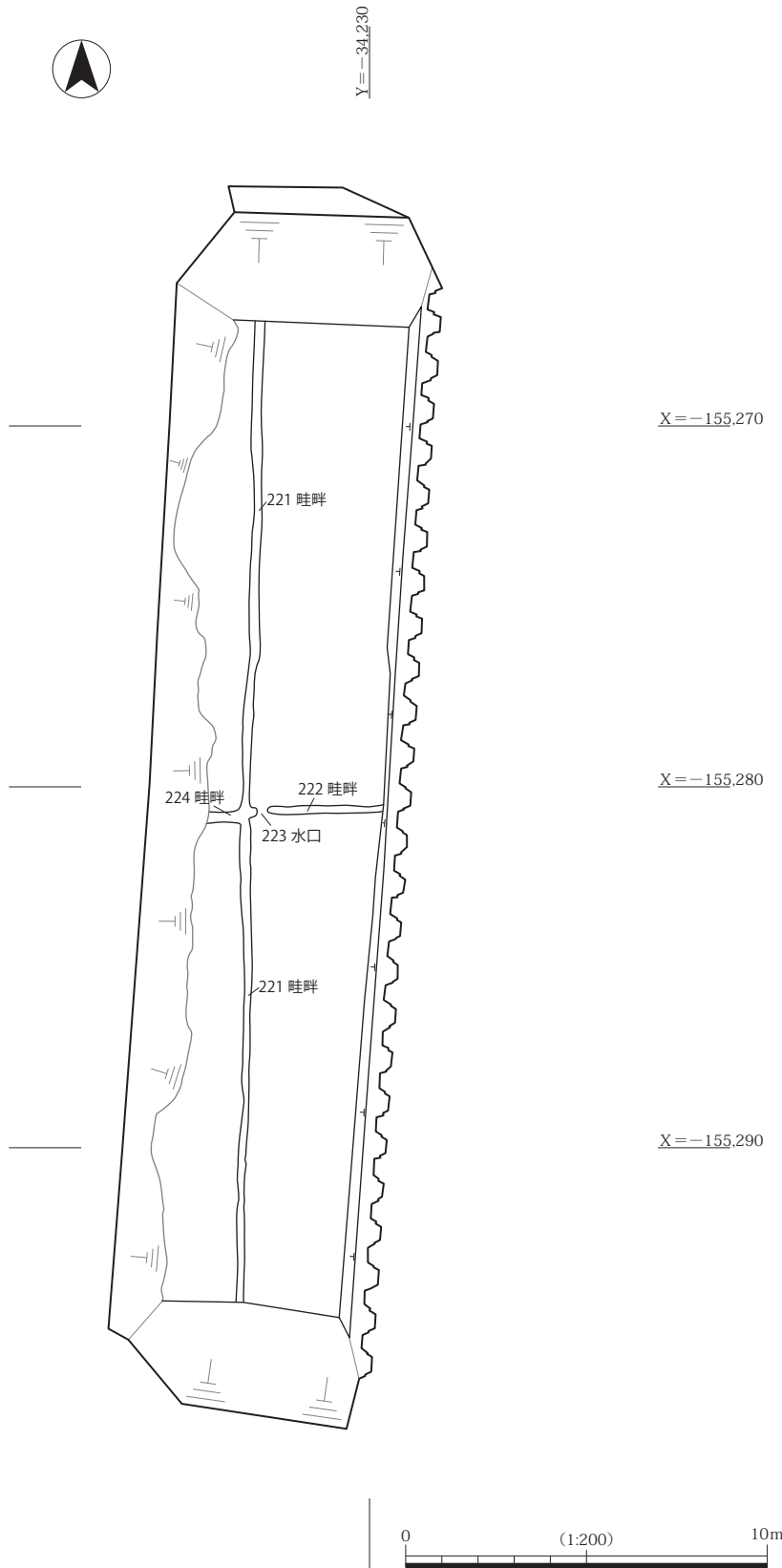


図43 2区第8a面全体図

して堆積したなら、古い時期の遺物はそこに由来する可能性が高く、堆積時期は12世紀代頃か。そこから13世紀初頭あたりまでが第8a層の耕作期間と推測できる。(その1)では「第8a層の時期」を12世紀後半～13世紀としている。

11.26mほどだが、南側はT.P. + 11.35mほどで、ここには第8a層と第7a層の間に炭酸カルシウムの結核が多い薄層がはさまる。第7b層相当の水成堆積層である。第7a面220畦畔北側は第7a層耕作の削平で、222畦畔北側付近が本来の高さに近いだろう。北西側も同傾向で、224畦畔北側付近は、T.P. + 11.39mほどで北東側より高い。南東側区画はT.P. + 11.34mほど、南西側区画はT.P. + 11.32mほどとなる。全体的には、削平などの凹凸以外は、北西が高い傾向はあるもののかなり平坦だと言えよう。

出土遺物 包含遺物取り上げは第8a層から第9-2層までを一括した。瓦器碗外面ミガキあり2片・土師器10片(小皿2(「て」の字1)・坏3・甕1)・須恵器甕1片・壁土、二次的被災1片・木製品8片(棒状3・角栓状1・へら状1・木端1)・サヌカイト剥片1片である。実測可能なものはサヌカイト剥片のみ。図35-123はサヌカイト製調整剥片、重さ2.58g、風化弱い。

第10-1a層以下は瓦器が見られず、この遺物群は11世紀中葉～13世紀初頭頃の時期が考えられる。第9-2層が(その1)「第9-2a層」を侵蝕



Y=-34.230

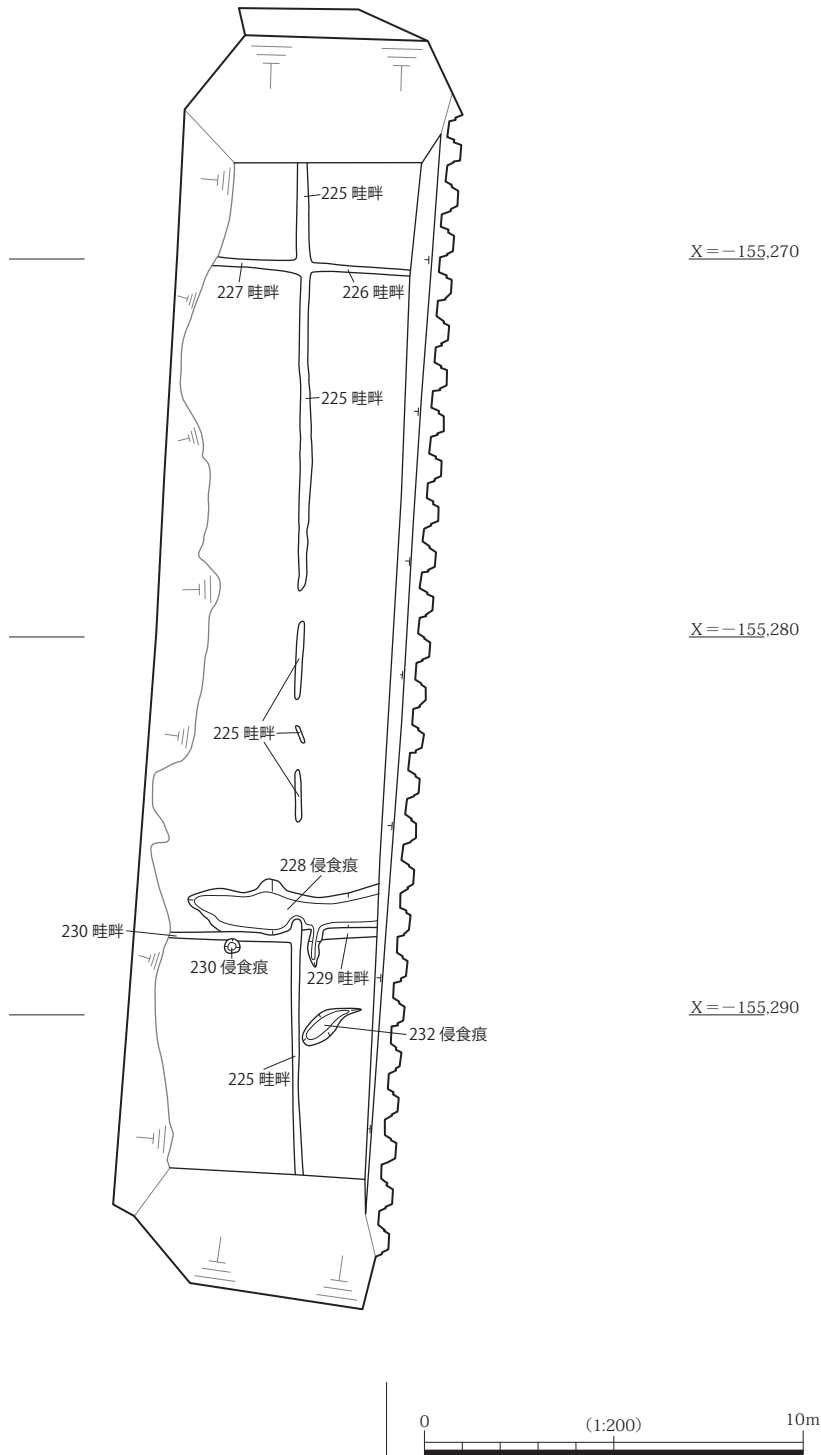


図44 2区第10a面全体図

で、方位性はE→3°→Sである。第8a面222畦畔から芯芯距離で北に10.3～10.4mの位置にあり、南の229畦畔との芯芯距離は17.5mほど、(その1)同面の1-42畦畔につながる。

227 畦畔 226 畦畔の西に続く畦畔である。幅0.2～0.3mで、盛り土は第10a層と同質である。検

小結 この面から第7a面への変化は、畦畔が南から北へ、東から西へ動くのが注目できる。(その1)「第8a面」と「第7a面」にそのような変化はなく、局所的な変化である。

第6項 第10a面(図44、図版13-43)

第9-2層に覆われ、北・東壁断面で畦畔頂部の突出を確認したが、平面では判然としなかった。検出遺構は南北方向畦畔1本、東西方向畦畔2本と侵食痕である。東西方向畦畔は南北方向畦畔との交点で若干ずれるので、東西に別遺構名を付与した。

225 畦畔 調査区中央付近を南北に貫く畦畔である。幅0.2～0.4m、北壁断面では頂部が0.04mほど突出する。盛り土は第10a層と同質で、方位性は南北正方位である。第8a面221畦畔から芯芯距離で東に0.8～1.3mずれる。(その1)同面一つ東の1-40畦畔との芯芯距離は10.9～11.5mである。229・230畦畔との交点の北側で途切れるのは、洪水による侵蝕か。

226 畦畔 北側東西方向畦畔東側部分で、幅0.2m、東壁断面では頂部が0.06mほど突出する。盛り土は第10a層と同質

出長が短いが方位性は E → 2° → S ほどか。226 畦畔より芯が 0.1m ほど南にずれる。第 8a 面 224 畦畔から芯芯距離で北へ 10.7m ほど、南側の 231 畦畔との芯芯距離は 17.8m である。

229 畦畔 南側の東西方向畦畔の東側部分である。幅 0.2 ~ 0.3m で、東壁断面では頂部が 0.08m ほど突出する。盛土は第 10a 層と同質で、方位性はほぼ東西正方位か。西側 225 畦畔との交点付近を 228 侵蝕痕の枝に切られる。(その 1) 同面 1 - 43 畦畔につながる。

230 畦畔 229 畦畔の西側につながるが、芯は 0.2m ほど南にずれる。幅 0.2 ~ 0.3m で、方位性はほぼ東西正方位である。230 侵蝕痕に切られる。

228・231・232 侵蝕痕 埋土は二つの第 9 - 2 層の、北側の層が入る。228 侵蝕痕は 229・230 畦畔北沿いを伸びる幅 1m ほどに 229 畦畔を切る形が合流する。深さ 0.05m ほどである。230 侵蝕痕は 231 畦畔を切る径 0.4m ほどのピット状で、深さ 0.05m 弱である。232 侵蝕痕は 225 畦畔東の長さ 1.9m ほどの不整形なもので、深さ 0.05m ほどである。(その 1) 同面でも畦畔沿いに同様な溝が幾つかある。

面の高さ 耕地区画は 6 区画ある。北東の区画は T.P. + 10.97m ほど、北西の区画も T.P. + 10.97m ほど、中央東側は T.P. + 11.05m ほど、中央西側は T.P. + 11.08m ほど、南東側は T.P. + 11.05m ほど、南西側も T.P. + 11.05m ほどである。全体的には北側の 2 区画が低く他はかなり平坦だと言える。

出土遺物 遺構では 228 侵蝕痕から弥生土器らしき土器片が 1 片のみである。第 10a 層包含遺物は以下のとおり。土師器 12 片 (椀、内外面ミガキ密 1・坏 3 (漆附着 1)・甕 6 (ナデ甕 2・布留 4))・須恵器 6 片 (甕、内面すり消しなし 2・坏 2 (杯 A 1・杯 H 1)・壺 2)・弥生土器 4 片・縄文土器 1 片・サヌカイト石核 1 片・木製品 2 片 (札状 1・付け木 1)・桃核 1 片である。図 35 - 126 はサヌカイト製石核、重さ 36.67g、やや風化、上図中央の打撃で打撃面全体が剥離した後廃棄か。

量的に不安はあるが、瓦器出現以前の時期であろう。ミガキのある土師器椀は、10 世紀後葉以降のもので、第 10a 層の耕作期間の初めは 10 世紀後葉前後、終わりは 11 世紀前半頃と見られる。

小結 最古の条里型地割耕作土層上面である。畦畔位置が第 8a 面とかなり違うのは (その 1) 同面と共通する。(その 2) で (その 1) 「第 10 - 1a 面」につなげる「第 6 面」は南北方向畦畔の間隔がまちまちで、雑然とする。今回の基本層序の整理から (その 2) 「第 7 面」が相当面と分かり、その方が整然とする。この坪の条里型地割の施行時期は 1 区の成果に近い 10 世紀代と考えたい。

第 7 項 第 11a 面 (図 45、図版 13 - 44)

最古の条里型地割の耕作土層床面でもあり、縄文時代晩期末葉~奈良時代に形成された古土壌層の上面でもある。後者の時期の遺構は土壌化の進行で輪郭が消滅したと思われる。1 区の第 11 - 1a 面の状況と同じである。結果的に第 10a 面で検出した畦畔の基部と、地震痕跡の噴砂脈を検出した。

233 畦畔基部痕跡 調査区の中央を途切れながら南北に伸びる。0.02m ほど突出していたようだが、形を出せず、痕跡のみを検出した。第 10a 面 225 畦畔の基部である。東西方向畦畔の基部は不明であった。

噴砂脈 この面で初めて検出した。断面でも、この面に達したものは止まり、この面が地表だった期間に形成されたと分かる。噴出した砂は面上にないが、第 11a 層は噴砂脈周辺で上部に粗砂が多い。噴出した砂が、土壌化で層内に降下したか。噴砂脈形成後、一定期間第 11a 面が地表のままだったようだ。噴砂脈は北端付近でのみ検出され、北西から南東方向に伸びる。

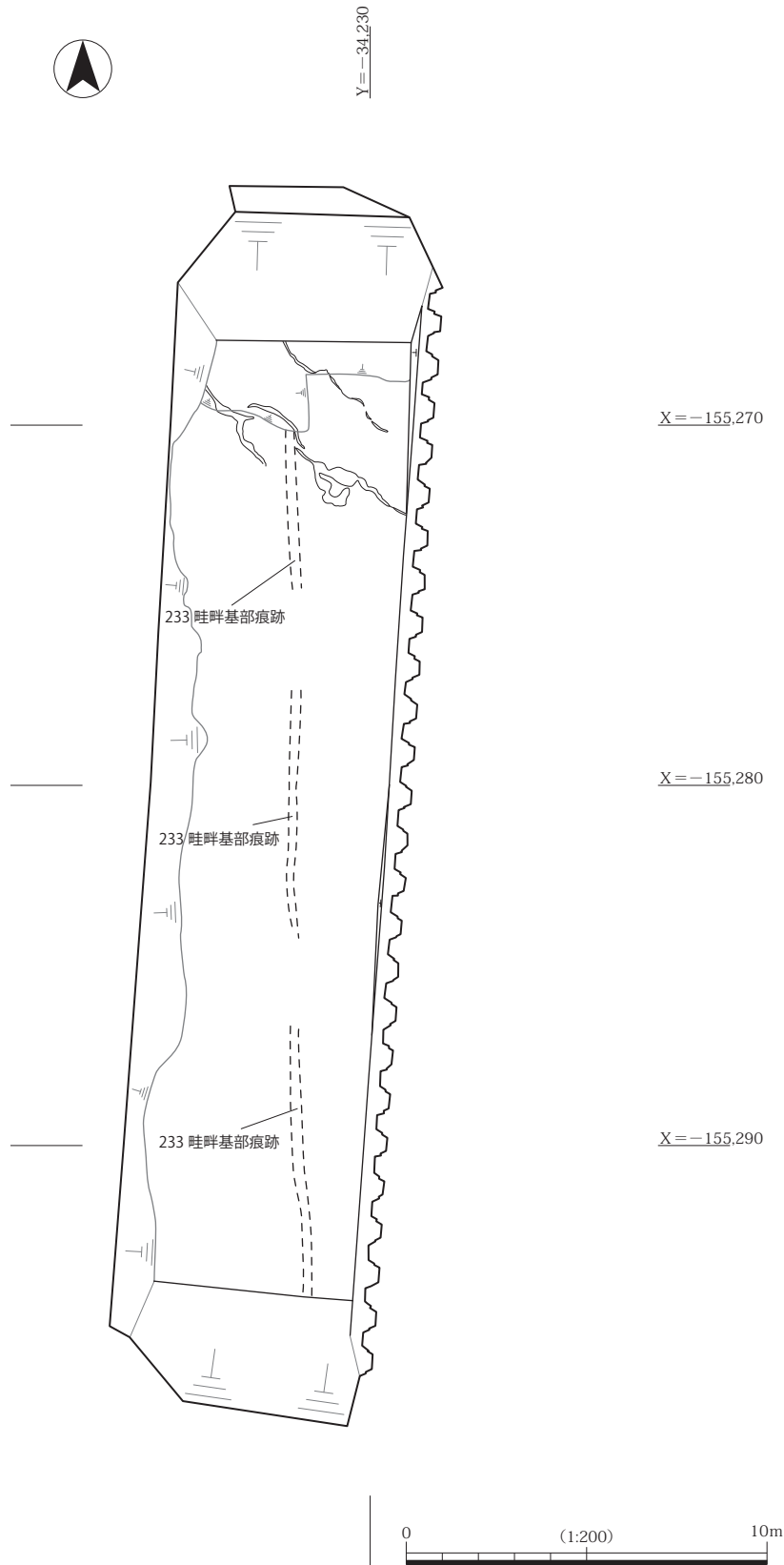


図45 2区第11a面全体図

り込みであろう遺構が検出された第12b面から推測するしかない。ただし、噴砂脈がこの面が地表であった時期に形成された事は確定できた。

面の高さ 第10a面の東西方向畦畔の位置に対応して北側・中央・南側で高さが増える。北側はT.P. + 10.94mほど、中央はT.P. + 11.01mほど、南側はT.P. + 10.95mほど、と中央がやや高い。

出土遺物 第11a層包含遺物は、土壌化の進行で切り込みが失われた遺構の遺物の可能性がある。つまり条里型地割床面となる以前の第11a面の時期を示す。出土したのは、土師器18片（坏13・小皿1・甕1）・須恵器3片（提瓶1）・弥生土器7片（壺1・生駒西麓産胎土1）・縄文土器4片・炭1片・付け木2片・サヌカイト、二次加工のある剥片1片である。図35-124はサヌカイト製二次加工のある剥片、重さ5.00g、風化弱い、ポジ面がほとんど残らないほど二次加工されるが、原礫面も残る。

第11a面の下限は奈良時代頃か。第10a層以前なら9世紀頃の可能性もあるがその時期の遺物はない。上限は第13a面が（その1）の成果から縄文時代晩期中葉と考えられ、縄文時代晩期後葉以降であろう。

小結 第10a層床面としての特徴は畦畔基部の痕跡や面の高さなどである。古土壌層上面としての特徴は、この面からの切



Y=-34,230

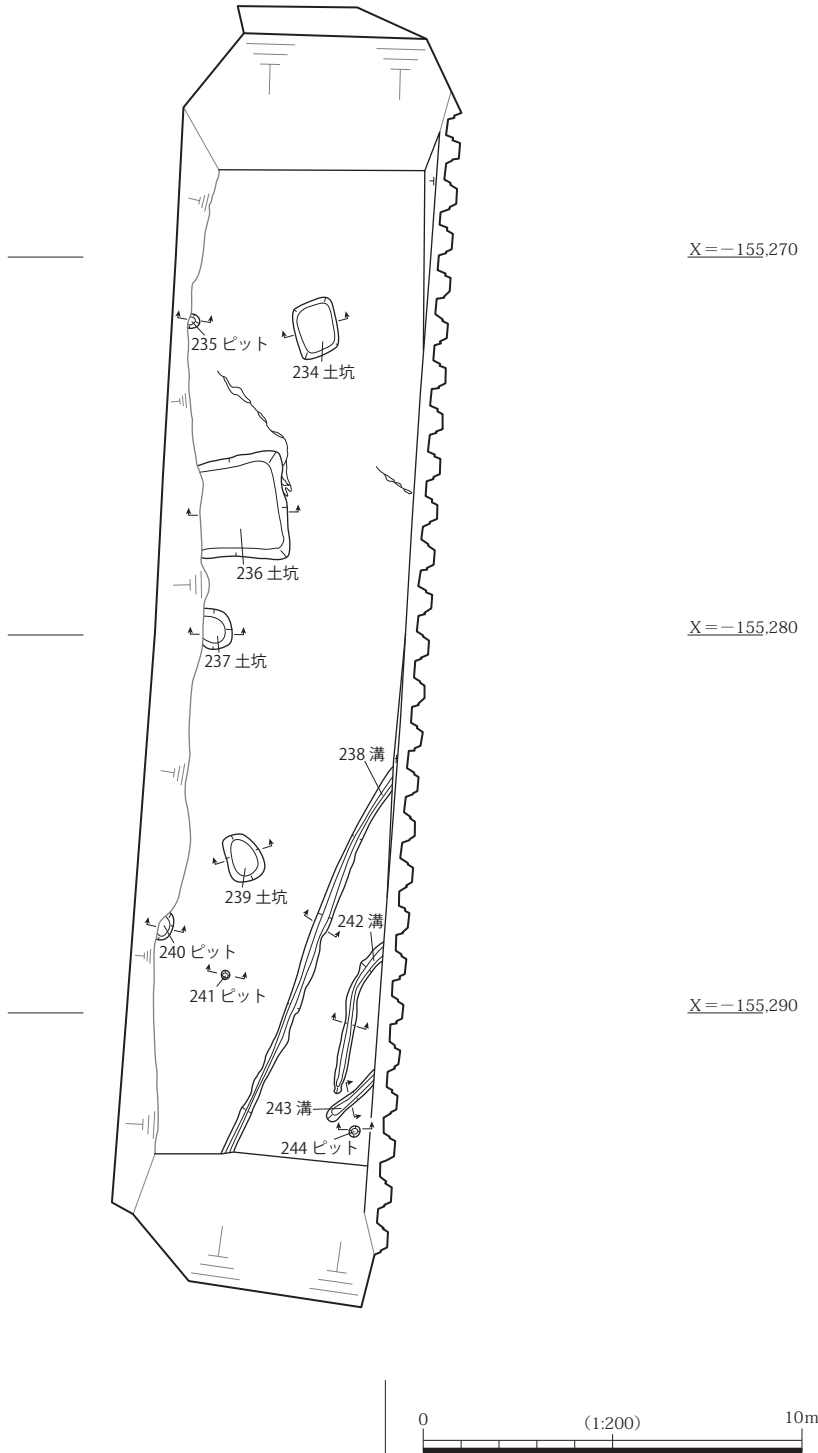


図46 2区第12b面全体図

部のレベルは若干南西に下がる。方位性は $N \rightarrow 22^\circ \rightarrow E$ である。(その1)「第12a面」1-57溝につながり1-56溝も一連のものであろう。

239 土坑 短径 0.9m ほど、長径 1.3m ほどの不整楕円形で、壁は緩く落ち、底部は平坦、深さ 0.07m

第8項 第12b面(図46、図版13-45)

検出遺構は、ほとんどが本来第11a面からの切り込みと考えられる。土坑・ピット・溝が検出された。全ての遺構埋土は、若干明度が違う他は、ほぼ第11a層と同質である。ここで図化した噴砂脈は第11a面で未検出のものである。以下、北から順に各遺構について述べる(図47、図版14-46・47)。

234 土坑 短辺 1.2m、長辺 1.4mの隅丸長方形土坑である。深さ 0.05m ほどで壁は立たず、底部は平坦である。長辺の方位性は $N \rightarrow 15^\circ \rightarrow W$ ほどである。

235 ピット 直径 0.4m ほどの円形か。深さは 0.22m とこの面の遺構で最も深い。埋土は第11a層に似たものに第12b層のブロックが入る。

236 土坑 南北 2.9m ほど、東西規模は不明だが 2.4m 以上、平面形は隅丸方形か。深さ 0.12m ほどで、壁は緩く下がり、底部は平坦だが西側は若干凹凸あり。

237 土坑 径 1.1m ほどの、隅丸方形に近い不整円形か。断面形は皿状で、深さ 0.08m である。

238 溝 幅 0.3 ~ 0.4m、深さ 0.05m ほど、断面皿状で、底

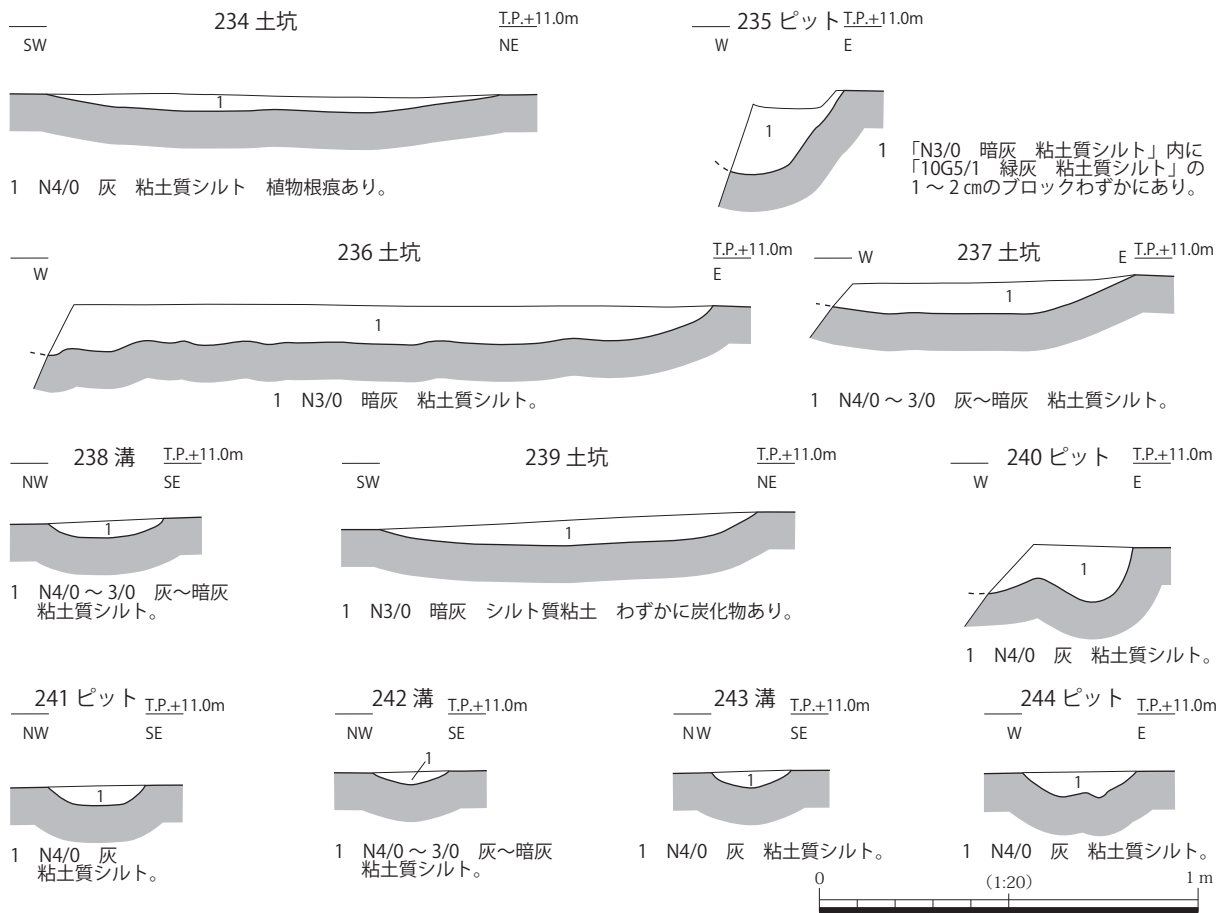


図47 2区第12b面遺構断面図

で、埋土は第11a層に似るが、わずかに炭化物を含む。

240 ピット 円形か。残存部分の長さ0.9m、壁はやや立ち底部は凹凸する。

241 ピット 径0.25mの円形、断面は皿状で、深さ0.05mほどである。

242 溝 幅0.3~0.4m、東壁から南西方向に伸び南側に曲がって終わる。断面皿状で深さ0.03mほど、底部のレベルに明確な傾斜はない。(その1)にこの溝に続く遺構はない。

243 溝 幅0.3mほど、東壁から南西に1.8m伸びて終わる。断面皿状で深さ0.05mほどである。(その1)「第12a面」1-58溝・「第12b面」1-96溝に続く。そちらでは底部がピット列状に凹凸するが、2区ではそのような形はない。

244 ピット 径0.3mの円形、壁は緩く落ち、底部は平坦、深さ0.07mである。

面の高さ 北側はT.P. + 10.82mほど、236土坑周辺がやや高くT.P. + 10.86mほど、X = -155.280ラインは東西とも最も高くT.P. + 10.93mほど。238溝北東端付近から南西に徐々に下がり、南西隅でT.P. + 10.81mほどとなる。全体的に南西側が低いのは微高地の稜線から遠くなるからだろう。

出土遺物 遺構出土の遺物はない。第12b層掘削中に若干の遺物が出土したが、ほとんどは上面近くで、幾つかは第11a層が入る植物根痕内からの出土を確認している。おそらくは全て第11a層に帰属する遺物であろう。出土遺物は土師器坏1片・須恵器2片(甕、内面すり消しなし1・壺1)・弥生土器? 1片である。図化可能なものはなし。土師器片・須恵器片は第11a層の下限、奈良時代のものである。

小結 236土坑は隅丸方形でほぼ正方位の形が、奈良時代頃の印象があり、溝では242溝の屈曲する形が古い印象がある。しかし新旧関係を考える材料は皆無に近い。

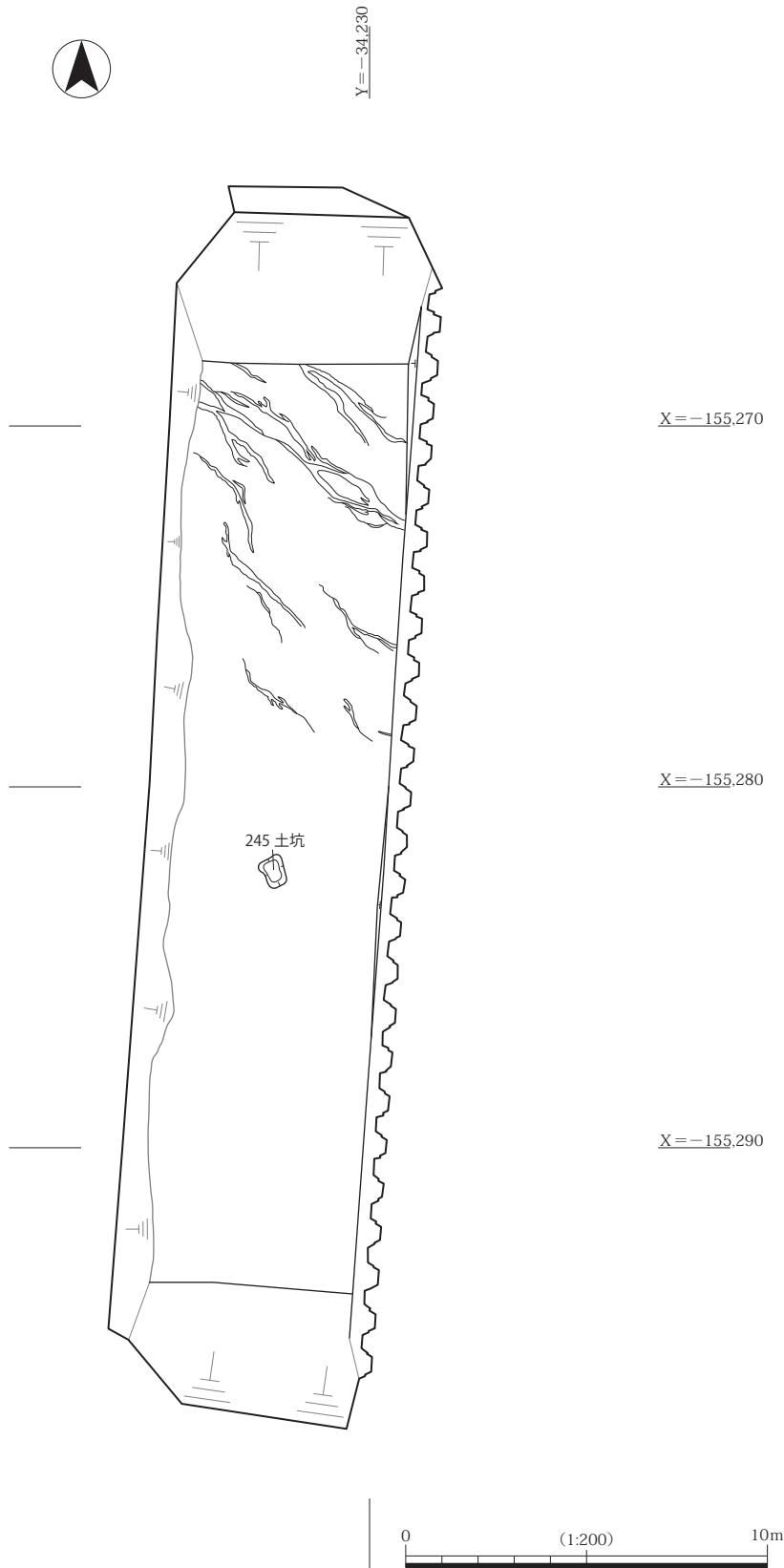


図 48 2区第13a面全体図

炭化物を含む土坑やピットを検出、ほぼ完形の滋賀里Ⅲ式の浅鉢が出土し、縄文時代晩期中葉の面と判明した。第13a層は土壌化痕跡を残すが、有機分溶脱で明色化している。植物の擾乱か人為的か判別困難な土坑一つと、噴砂脈を検出した。面的な調査の最終面である。

同一遺構面としての状況は(その1)では「第12a面」と「第12b面」に分けて検出された。「第12a層」は2区になく(その1)でも部分的で、「第12b面」は古土壌上面切り込み遺構を下面で検出した状況で、遺構面として一つにしても支障ない。事実両面で重複する遺構も多い。(その2)「第8面」北側は南側と遺構のつながりがほとんどなく、正方位の畦畔などがあり、同一面ではない疑いが強い。「第8層」が第11a層や(その1)「第12a層」相当の古土壌層のようで、「第8面」南側と「第9面」が同時期面で今回の第12b面に相当するだろう。

2区南西近くには、(その1)「第12a面」を南東～北西に横切る、大きめの溝が4本平行する溝群が続くはずである(2-56～61溝、7世紀頃)。微高地の南西側中腹を走る幹線的溝群で、2区238溝はそれに合流する方向性である。その溝群より北東側の2区は(その2)で縄文時代晩期末葉とされる竪穴建物が検出された居住域の続きだが、居住域的な要素はまったく見られなかった。

第9項 第13a面(図48・図版14-48)

この面は(その1)で埋土に

245 土坑 短辺 0.6m、長辺 0.8m、深さ 0.05m ほどの隅丸方形に近い土坑としたが、輪郭・断面形も判然としない部分があり、植物の攪乱の可能性もある。埋土は第 13a 層のブロック間に第 12b 層が入る。

噴砂脈 第 11a 面の検出範囲より分布域を南西へ 5m ほど広げる。第 11a 面から続くものもある。新たに見つかったものは長さが短いものが多い。方向性は北西から南東に伸びる事に変化はない。

面の高さ 北壁沿いが一番低く T.P. + 10.40m ほど、そこから噴砂脈分布の中心がやや低いままで T.P. + 10.46m ほどである。噴砂による陥没か。そこから南西に高くなり、245 土坑付近に T.P. + 10.61m ほどのピークがある。そこから南に下がり T.P. + 10.55m ほどになるが、南西隅付近は高く T.P. + 10.66m ほどの最高所となる。全体的にうねるような地形で、一定の傾斜は見られない。

出土遺物 2 回目の精査前の掘削でサヌカイト製チップが 1 点出土した。図 35 - 125 はそのサヌカイト製チップ、重さ 1.33g、風化激しい。上辺打撃面以外の辺は 3 辺とも折れである。

小結 縄文時代晩期遺構面であるが、今回は顕著な成果はなかった。この面で検出した噴砂脈は（その 1）同面ではさらに南東に伸びた後、細くなり終わる。（その 1）でもこの面は明確な傾斜傾向がなく、複雑な凹凸を成す。ただ、断面では、南北断面では北寄り部分に最高所があり、南に下がり、東西断面では基本西へ下がる傾向がある。これ以下は北壁沿い深堀部で、洪水堆積層の第 13b 層があり、その下は直接縄文時代流路を埋積した第 14b 層となる。

第5章 まとめ

今回の調査では、1区が位置する条里型地割の坪における基本層序を立てる事ができ、それを元に既往の調査の基本層序との整理もつける事ができた。1区の坪より北側の坪に位置し、かつ旧恩智川の対岸でもある(その1・2)調査区とも、(その1)の成果を、そこに隣接する2区で検証しつつ、対照する事ができ、1区の坪と南側の坪との坪境に位置し、(その1・2)とのつながりが分かりにくかった(その3・4)の層序とも対応ができた。また、出土遺物の量は少ないものの、それを元に、ある程度各遺構面の時期を確定していく作業も前進を見た。ただし、遺跡内の堆積環境が複雑な事も判明してきており、残された課題も多い。

ここでは把握できた環境変化を段階的にまとめていきたい。

(その1・2)で確認された縄文時代後期末葉～晩期中葉の流路が埋積して微高地が成立した後の2区第13a面では今回は顕著な成果がなかった。しかし、1区では縄文時代晩期末葉まで低湿地的な水平堆積が繰り返されている事が分かった。それらの堆積を切って縄文時代流路が成立し、それが埋積して(その1・2)や2区が位置する微高地が成立し、1区付近はそれに隣接する低地のような環境になった。両部分で確認できる最古の同時期面は1区第12面と2区第12b面、そしてその上部に長い期間で形成された古土壌層の上面、1区第11-1a面、2区第11a面である。ここでは、古土壌層は堆積層とは異なり、その上下面を単純に時期差と考えられない事と、包含遺物として取り上げたものに、土壌化により切り合いを失った堆積層や遺構の遺物が含まれる可能性を前提とする必要がある。

この時期は縄文時代晩期末葉～奈良時代と長期で、期間の長さに比較して堆積が少ない事が特徴である。(その1・2)で多く検出された溝群と竪穴建物はこの期間内のものであるのは確かである。竪穴建物2棟とその可能性のある遺構は切り合い関係から溝群より古く、縄文時代晩期末葉のものと考えられているが、それは少数の土器片による推測とは言え、周辺に同時期の遺構も散在するので、可能性は高いと言える。溝群は古いものを弥生時代とする意見もあるが、これも少数の遺物からの推測で、既往の調査でも弥生土器の総数が少なく、かつ周辺に同時期遺構がないので疑問である。今回の調査での遺物の量的割合からすれば、古墳時代前期～奈良時代、特に古墳時代中期～後期にこの期間の人的活動の中心があると思われる。

(その1・2)で2面に渡って検出された溝群の性格は従来から南東の山裾から北西の平野部への導水施設と考えられ、微高地上で北に向かう幹線と北西に向かう幹線、そこからの分水路に分けられ、一部にはそれらに沿った形で耕作地が開発されていたようである。しかし今回、1区で南東へ水が流れる形の溝が確認された。さらに東西方向の流路状侵蝕痕が見られ、1区より西側に洪水を起こす河川が存在した可能性が考えられる。さらに1区には南が低い微地形があり、遺構密度からその南端付近は湿地の可能性が高い。おそらくは1区南側には低湿地、西にはそれに連なり取水できない河川があり、古墳時代頃、遺跡内にそれを迂回するように南東山裾の扇状地から流路埋積微高地を通じて北～北西の平野部へ導水する水利体系が作られ、一部には耕作地も作られた。それは掘り直しや改変を重ねながら奈良時代頃まで維持された可能性が高い。1区のような微高地に隣接する低地では、それらの溝群から分水されたものを行き渡らせ、最終的には河川や低湿地に排水する水利体系があり、微高地上とは逆方向に水の流れる場合もあったのであろう。

その次の画期は1区第10-2b層の堆積である。これは遺跡内の低地部分が水域化して止水堆積した可能性が高い。それにより、1区周辺は南下がりの微地形から北下がりの微地形となり、微高地との比高差も縮まった。それが条里制地割施行の下準備的な変化となる。水域化は排水不良によって引き起こされたと考え、遺跡よりやや北側の地形に注目した。そこには恩智の古くからの集落がのる、この付近では最大の扇状地が西に張り出し、そこに西から東へ向い、自然堤防を伴う玉串川が蛇行してきており、その狭い間を恩智川が抜けていく。洪水や土石流などで恩智の扇状地と玉串川の自然堤防がつながる地形が形成されると、恩智川流域のそこから上流の一定の範囲は、微高地が島状に浮かぶ湖沼のような水域になる事もあると考える。その状態で堆積が進行し、再び陸化した時には以前より平坦化が進んだ地形となっていたのであろう。今回の調査でも遺物が極端に少ない9世紀頃の出来事と推測される。

その後、条里型地割が施行される。その施行時期は今回、10世紀前葉頃にまで特定できるようになった。これは、奈良県国中平野以外で発掘調査により確認できる最古の条里型地割が、全国規模で10世紀頃のものが多く事と整合する。

当遺跡付近に現代の道路や水路として残る条里型地割の坪境には一つの特徴がある。南北方向坪境(阡線)は正方位より北が東に3度ほど振る方向性を持つが、東側で直線的に走る東高野街道の角度よりは浅い。そして東西方向坪境(陌線)は逆に正方位より東がやや北に振るものが多い。つまり一つの坪は正四角形ではなく、わずかだが菱形になっている。

当初の条里型地割は1区側の坪は東西長地型、2区側の坪は南北長地型を基本としつつ、それに直角に交わる畦畔を加える形で始まった。1区側坪では整然とした碁盤の目状の耕地区画となっているのに対し、2区側坪では東西方向畦畔の位置がランダムである。これは2区側坪には微高地上立地としての複雑な凹凸が残っている事に由来する違いであろう。坪境の方向性は不明だが、1区東西方向小畦畔の方位性がE→2~4°→Sである事からすれば、当初は坪全体が均等に国土座標よりN→3°→E前後の傾きを持った正方形であった事が分かる。

この付近の条里型地割は遺跡名のごとく古代には大県郡条里として統一的な地割であったと思われ、その北端は八尾市神宮寺と恩智南町の境付近と考えられているが、坪名など不明な点が多い。さらに、平安時代には南海道となった東高野街道や、条里地割施行時に流路が整備された可能性が高い恩智川とも方向性が異なり、施行の基準となったラインが不明である事も分かってきた。

1区では10世紀後葉~11世紀前葉頃の第9a層まで碁盤の目状の耕地区画が踏襲されるが、その後東西方向畦畔のみとなる。対して2区の坪では継続的に、南北長地型地割の中に、ランダムな位置ながら東西方向畦畔も存続する。地割施行以前の立地環境の差が長く影響していると言える。

その後、1区第7-4a面(12~13世紀初頭頃)の、小畦畔2本一組でその間に溝がある特異な耕地区画などがあるが、洪水堆積層でも砂層は1区南側に限られる事が多く、強めの侵蝕があっても砂層が堆積しない洪水もあり、シルト~粘土系の堆積が続く。洪水は南側から来て、砂粒が供給されるのは少ない段階と言える。

次の画期は1区第5b層の堆積である。15世紀初頭頃の事と思われる。この洪水砂層は隣接する恩智川から直接供給されたようで、厚みもあり、1区全体に広がり(その1・2)の南半まで到達する。そしてその直下の第6a面には既往の調査全てにおいても激しい凹凸が確認されており、地震による変形や耕作に伴う踏み込み等と推測されていたが、今回、第5b層の下から耕作土層を掘り出す、洪水後の復旧作業の痕跡である事が確定できた。人為的な痕跡ではあるが、坪を越えて広い範囲に広がり、各

部分でこの面のみの特徴を持つため、遺跡内での共時性を示す鍵層として重要なものである。

これ以降、耕作土層に含まれる粗砂～中砂が増加し、広い範囲に広がる洪水砂層も多くなる。それはおそらく恩智川の天井川化が進行し激しい洪水を起こすようになったためと考えられる。

注目されるのは、この洪水後再建された耕地区画である 1 区第 5a 面では、東西方向畦畔の方向性が変わり、平均して E → 3° → N と東が北に振るようになり、以後の面もこの方向性になる。この時点で、東西方向坪境も同じような方向性になり、現代に残るやや歪な条里型地割になった可能性が高い。大きな洪水後に、東西方向の区画のみの方向性を変えているので、東西方向坪境沿いを生駒山地から西に流下する小河川を制御するための工夫がなされた可能性が高いと考えられるが、具体的にどのような効果を意図したのかなどは不明で、今後の課題と言える。

次の画期は両区の第 4 層の時期、15 世紀後半頃である。1 区では南側の高い耕地区画で第 4 - 2a 層・第 4 - 1a 層床面に多くの東西方向溝が掘られていた。2 区では畦畔のみだが（その 1・2）で畝立ての痕跡が確認されており、第 3a 面では 2 区側の坪ほぼ全面に畝立てが為されている。畑作の痕跡と考えられ、1 区側の坪では高い位置の耕地区画が畑作に利用されるようになった可能性があり、2 区側の坪では二毛作がおこなわれるようになったと考えられる。砂粒の堆積が増え、畑作に適した水はけの良い環境ができてきた事と、商品作物栽培が盛んになる経済的な背景が重なった結果と推測される。

中世最後の画期は 16 世紀初頭頃、遺跡内で最大の厚さを持つ洪水堆積砂層である第 2 - 4b 層が堆積し、島島が成立する事である。これ以降、近世でも洪水の度に島島が拡張されていく様子が調査区断面で見て取れた。この砂層は長らく上層からの攪乱に入る近世遺物から近世の層と考えられてきたが、今回、中世の堆積と判明した。中河内地域で島島が出現するのが中世の段階である事は東大阪市と八尾市の境にまたがる池島・福万寺遺跡でも立証されており、広く中河内地域で共時的に起きた現象と言えよう。中河内地域に広がった島島は、近世には河内を代表する商品作物である河内木綿の栽培に利用され、その景観は名所図会にも掲載されるようになった。

今回出土した遺物に関しては、遺構出土のものがほとんどない、完形率の低い破片がほとんどである、供膳器の破片が圧倒的で、調理器・貯蔵器が少ない、などから現地性・共時性の低いものがほとんどと考えざるを得ず、層包含遺物の内、最新の時期を示すものを見つけ、それらを上下層と比較して、水成層の堆積時期、耕作土層の耕作期間を判断するしかない状況であった。

サヌカイト製石器では石核・目的剥片・調整剥片・チップが揃い、製品はない、近くに石器製作址が存在するのは確実であろう。縄文土器は晩期末葉の小片のみである。弥生土器は壺の破片が極わずかしかない。古墳時代のものは須恵器蓋坏が圧倒的だが、今回、布留式甕など前期のものも若干出土し、全期間のものが揃う。古代は土師器坏が多く、飛鳥時代から奈良時代全期間はあるが、9 世紀の遺物が非常に少ない。瓦器はほぼ全時期のものがあるが、ミガキ粗が 63% を占め、13～14 世紀に中世集落が拡大か調査地に接近している事を感じさせる。厚みのある瓦や下駄・刀子木型・漆壺・墨書土器などは周辺寺院との関連を感じさせるが、最も近いとされる平野廃寺（三宅寺跡）は存在自体が未確定である。轆の羽口や鉄滓は寺院関連か古墳時代の大泉遺跡との関連かは区別できない。

遺物の量も少なく、個々の残存率も低かったが、包含遺物の取り上げをできる限り厳密におこなった結果、各層の時期を確定していくのにはある程度有効であった。

写 真 图 版



1、1区第2-4a面全景（南東から）



2、1区第2-4b面23土坑断面（西から）



4、1区西壁第4-1a~6a層（東から）



3、1区東壁断面第0~3a層17土坑断面（西から）



5、1区西壁第7-1a~9b層（東から）

図版 2



6、1区第3a面北側全景（北東から）



7、1区第3a面全景（南東から）



8、1区第4-1a面全景（南東から）



9、1区第4-1a面全景（北東から）

図版4



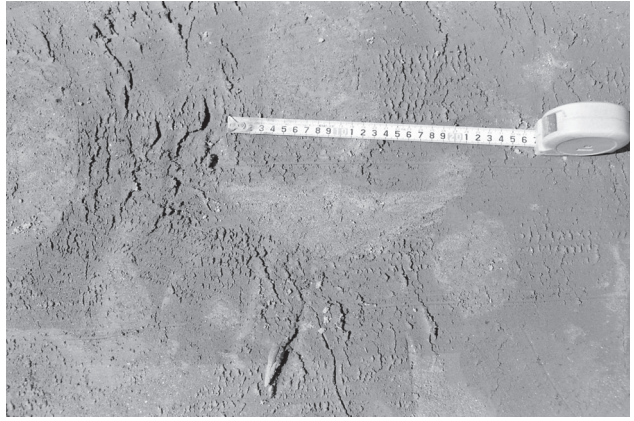
10、1区第5a面全景（北東から）



11、1区第6a面中央付近耕作具痕（東から）



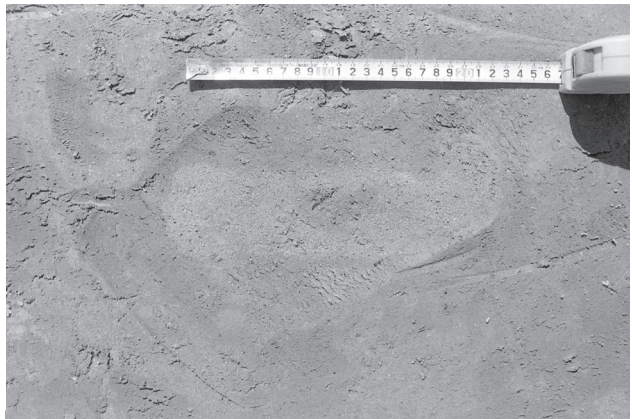
12、1区第6a面足跡・耕作具痕（東から）



14、1区第6a面掘削具痕個別



13、1区第6a面掘削具痕個別



15、1区第6a面掘削具痕個別



16、1区第7-1a面全景（南東から）

図版6



17、1区第7-4a面全景（南東から）



18、1区第7-4a面北側全景（北東から）



19、1区第9a面南側残存部全景（北東から）



20、1区第10-1a面全景（南東から）

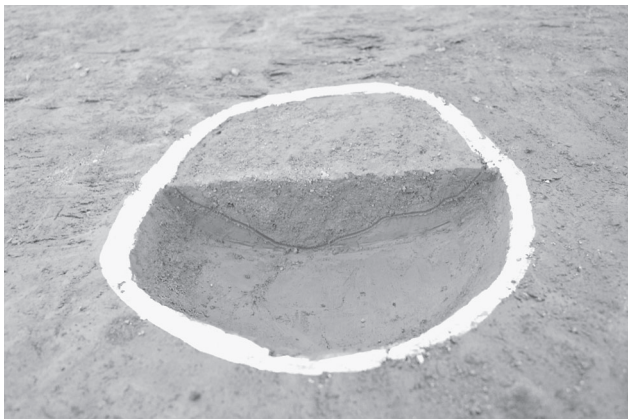
図版8



21、1区第10-1a面北側全景（北東から）



22、1区第10-1a面145ピット断面（西から）



24、1区第10-1a面143ピット断面（南西から）



23、1区第10-1a面140溝断面（南東から）



25、1区第11-1a面148土器1出土状況（東から）



26、1区第11-1a面北側全景（北東から）



27、1区第11-1a面全景（南東から）

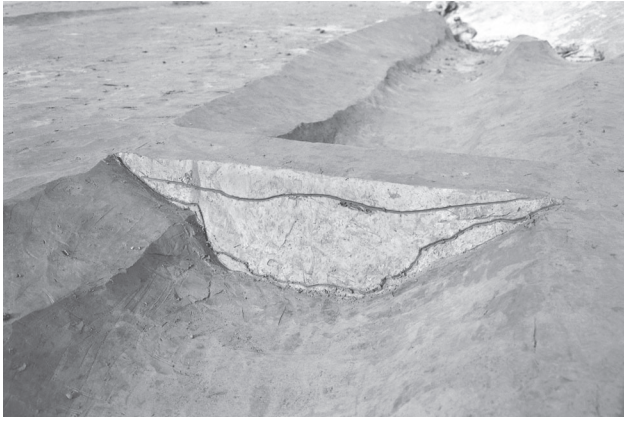
図版 10



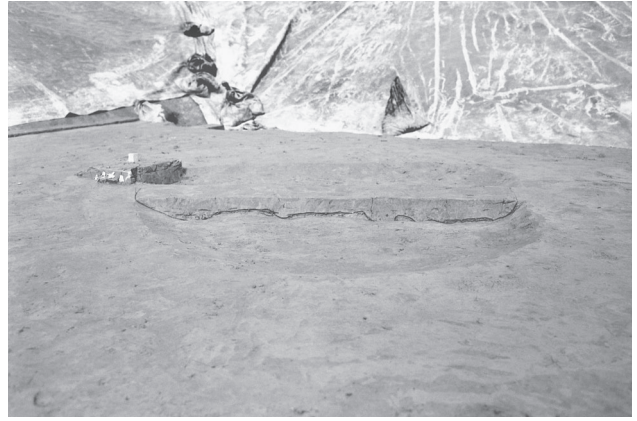
28、1区第12面北側全景（北東から）



29、1区第12面全景（南東から）



30、1区第12面158溝断面(南東から)



34、1区第12面162土坑(南東から)



31、1区第12面159溝断面(南東から)



35、1区第12面167ピット断面(南から)



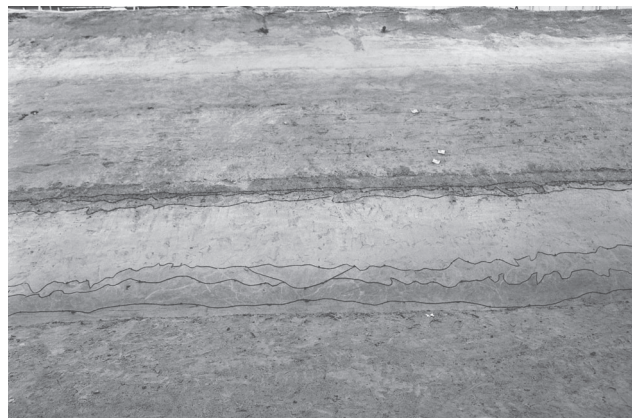
32、1区第12面186溝断面(東から)



36、1区西壁第10～12層166流路断面(東から)



33、1区第12面176流路断面(東から)

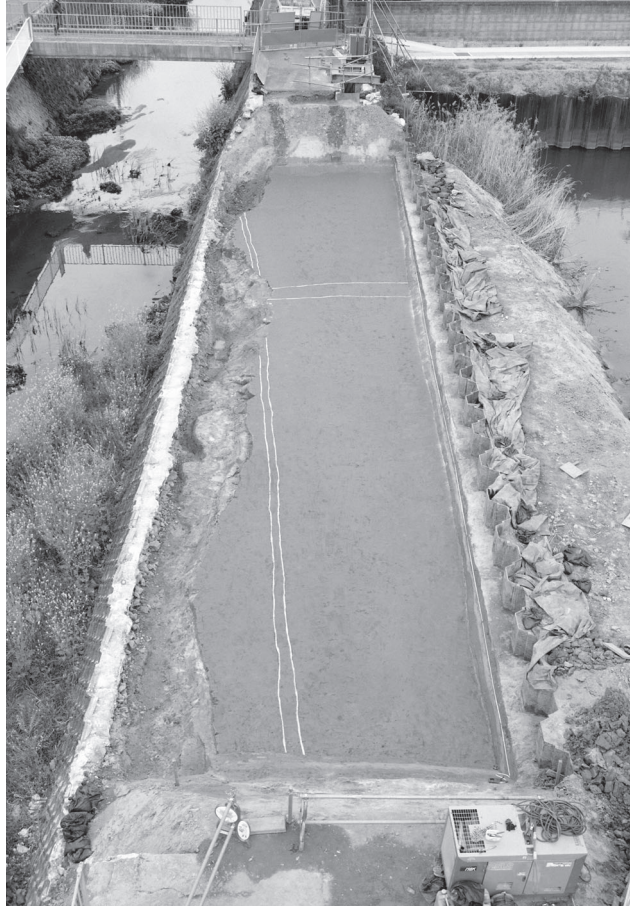


37、1区西壁第10-1a～12-1層

図版 12



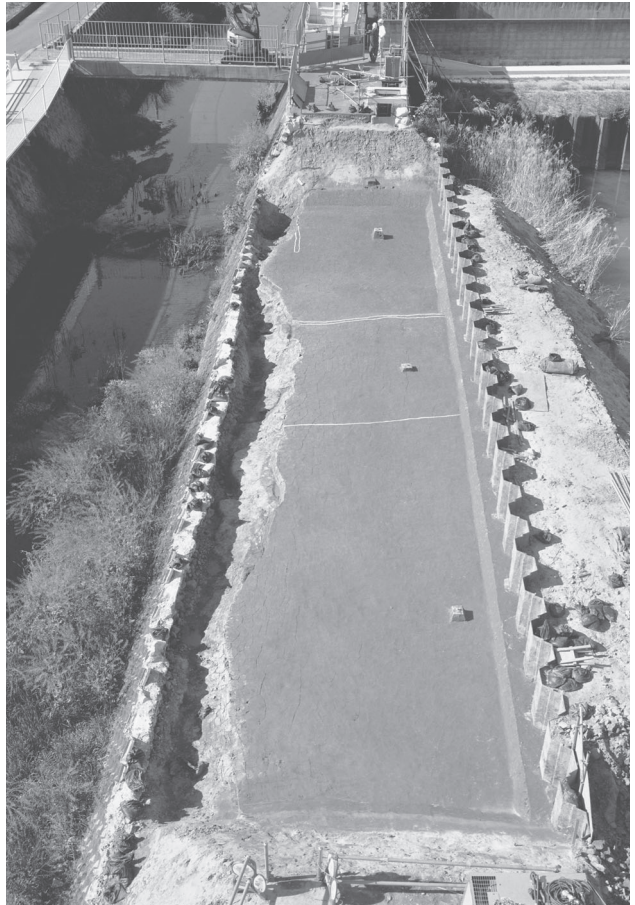
38、2区第3a面全景（南から）



40、2区第5a面全景（南から）



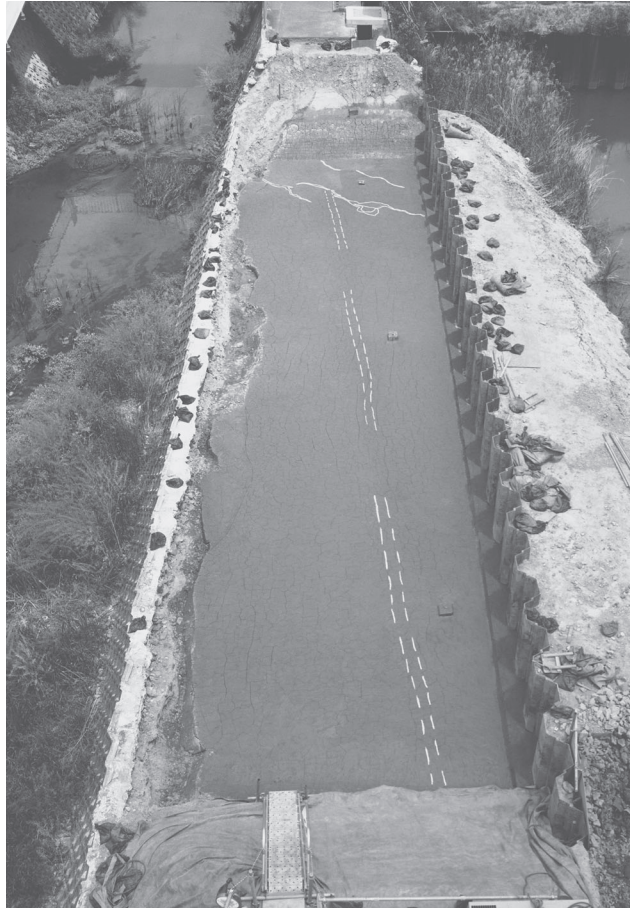
39、2区第4a面全景（南から）



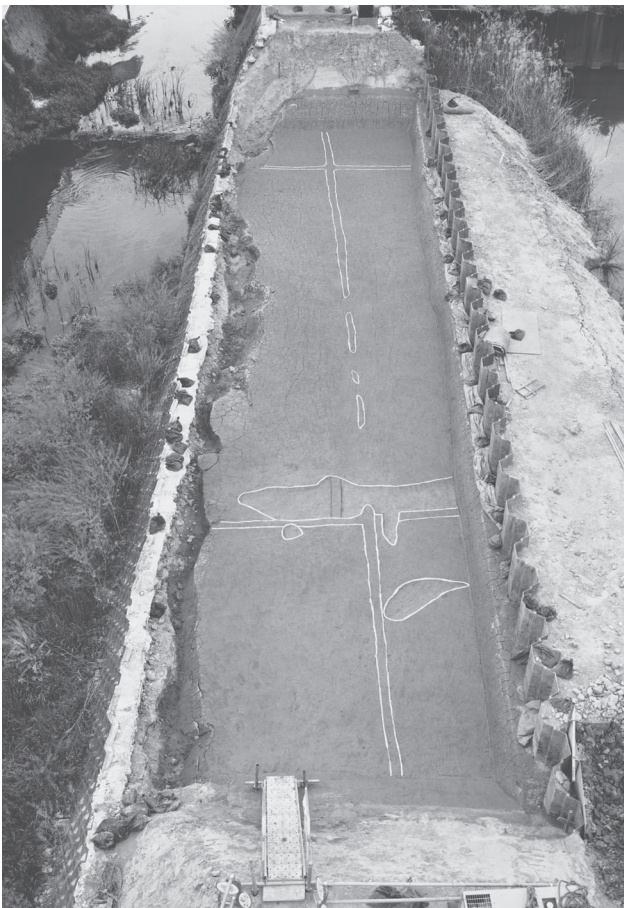
41、2区第7a面全景（南から）



42、2区第8a面全景（南から）



44、2区第11a面全景（南から）

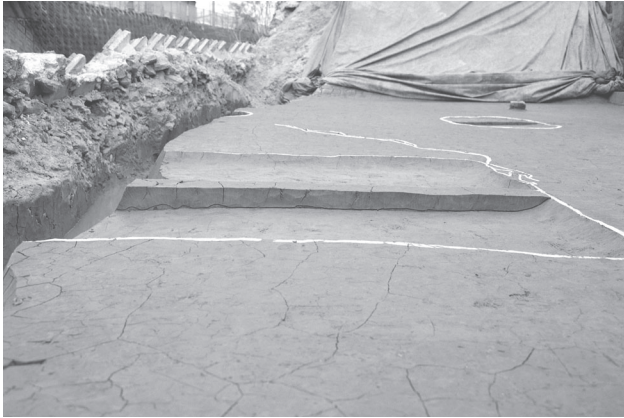


43、2区第10a面全景（南から）



45、2区12b面全景（南から）

図版 14



46、2区第12b面236土坑断面（南から）



49、2区北壁第2-4a~7a層（南から）



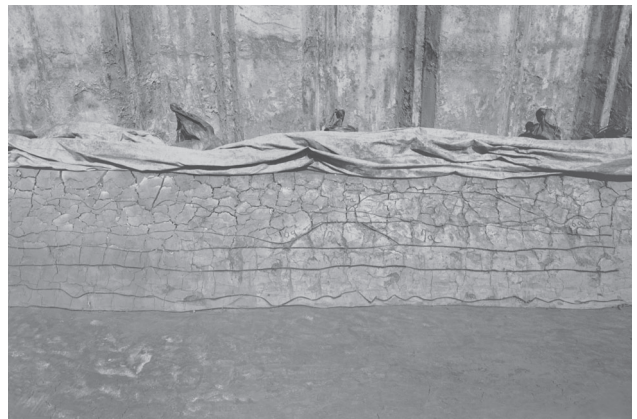
47、2区第12b面238溝断面（南西から）



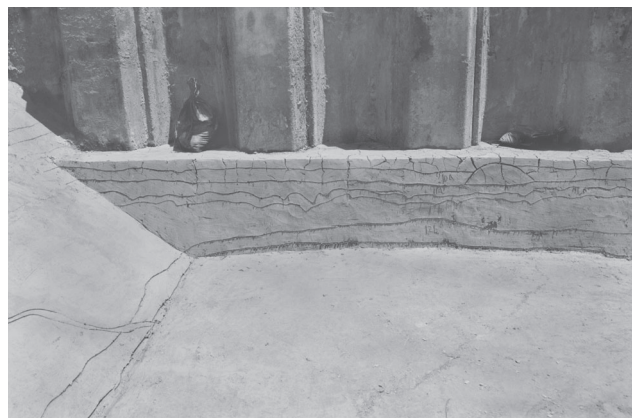
50、2区東壁第2-4b~4a層（西から）



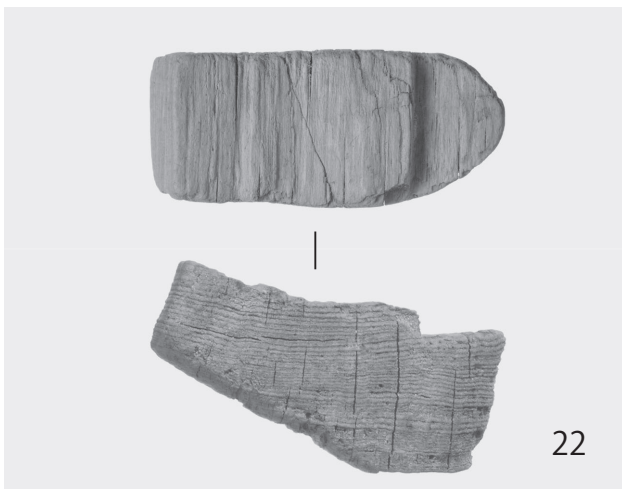
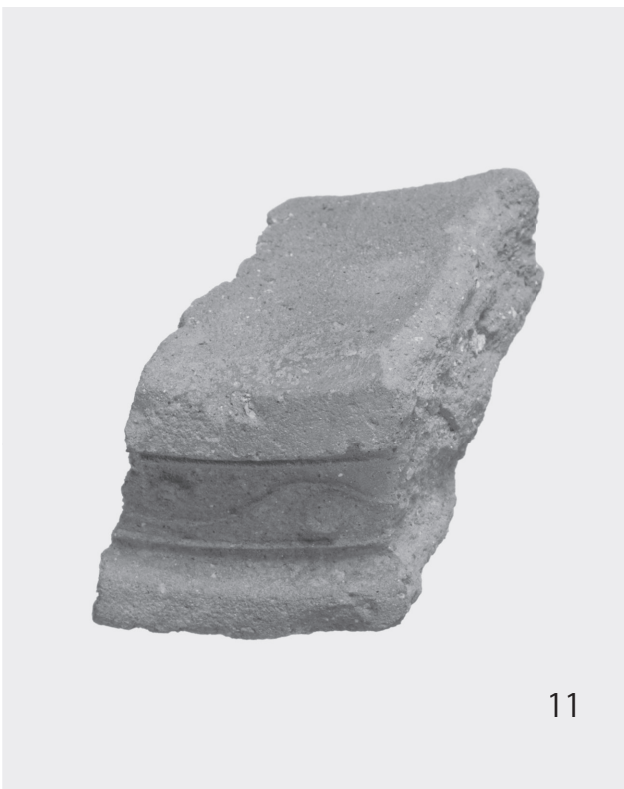
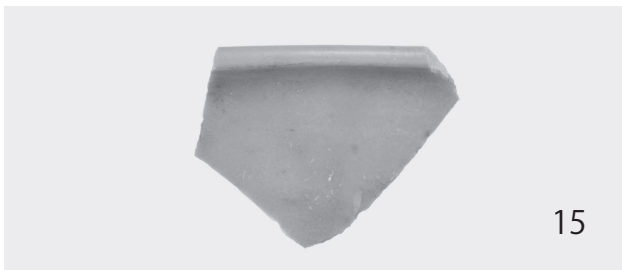
48、2区第13a面全景（南から）



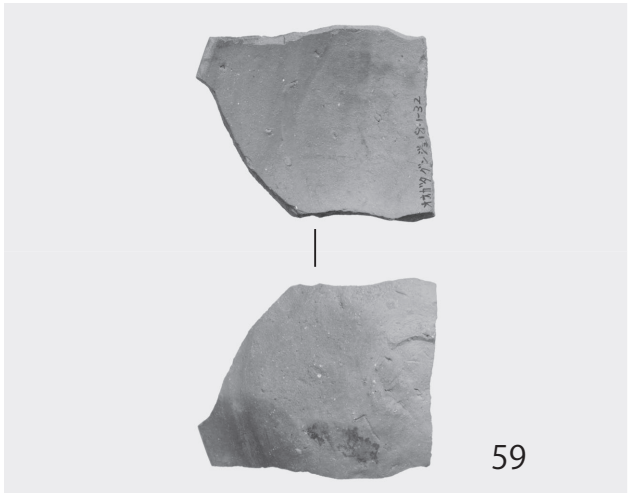
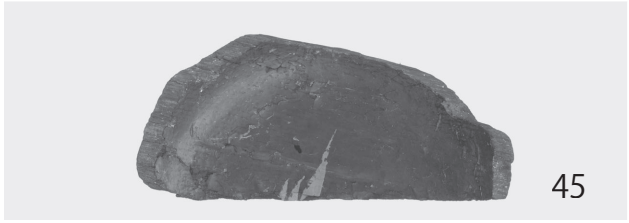
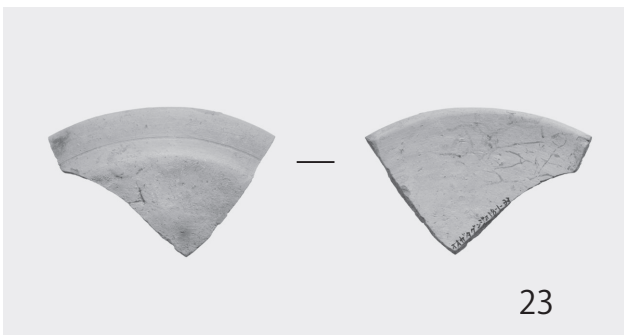
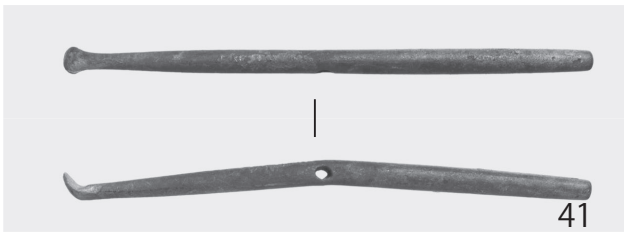
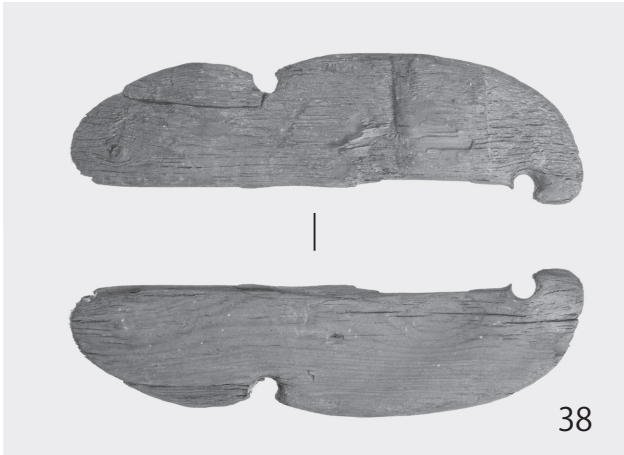
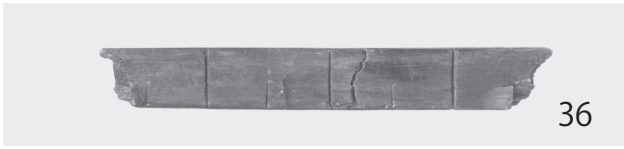
51、2区東壁第5a~9-2層（西から）

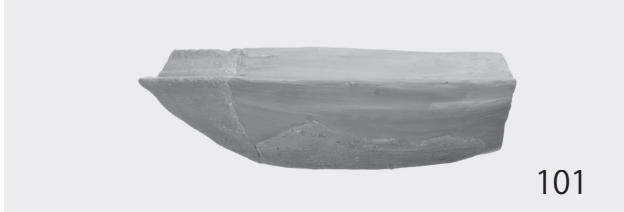
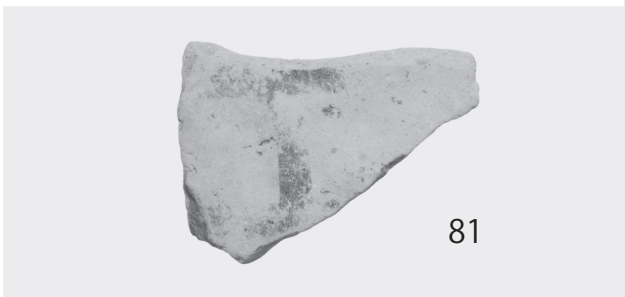
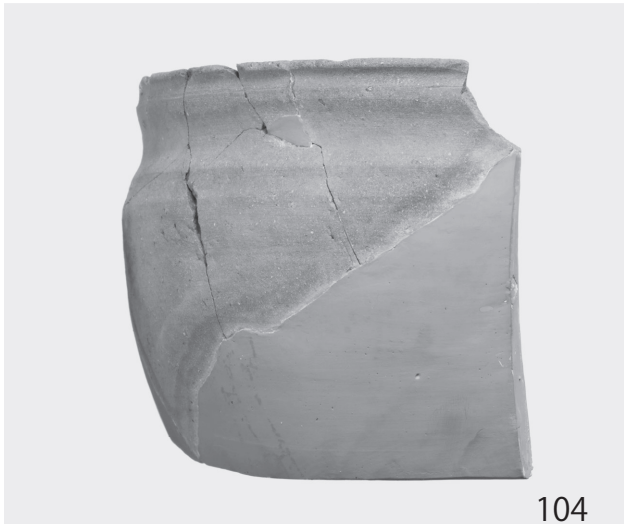
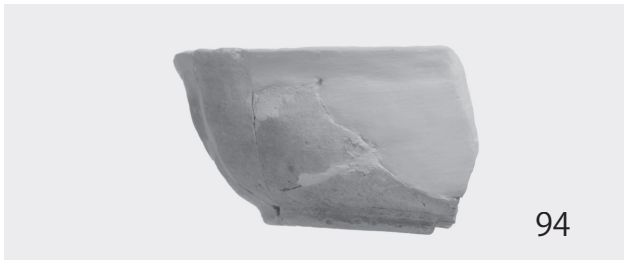
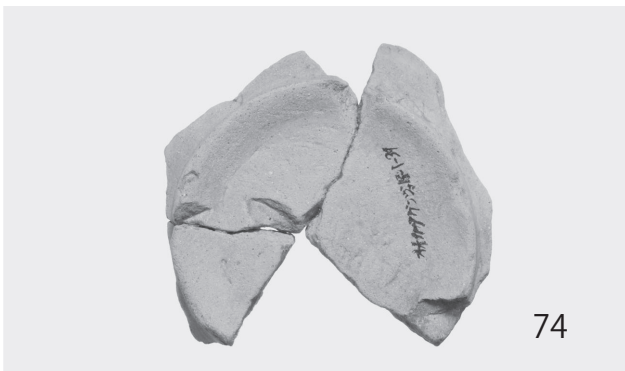
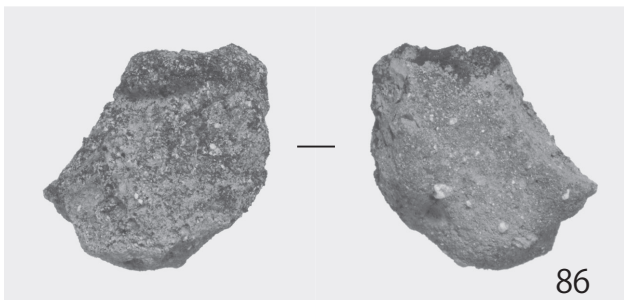


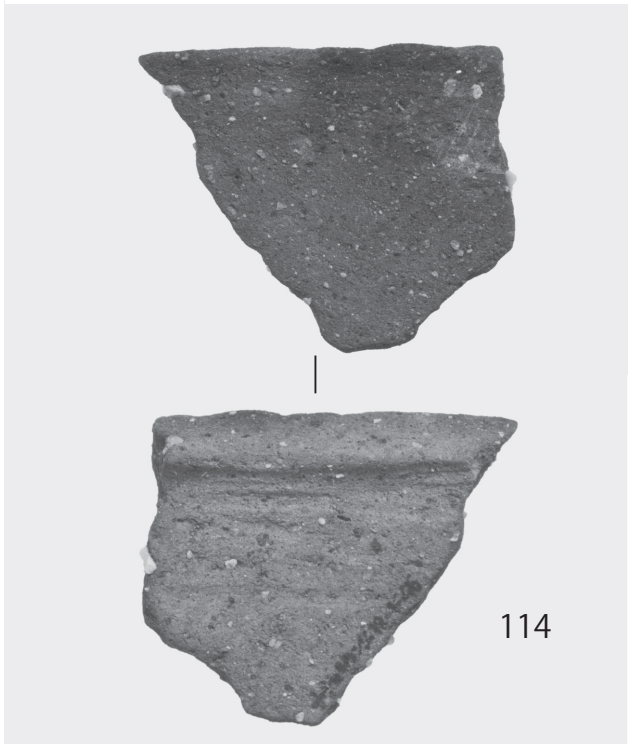
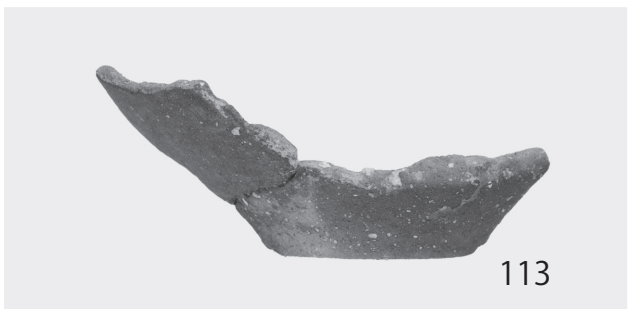
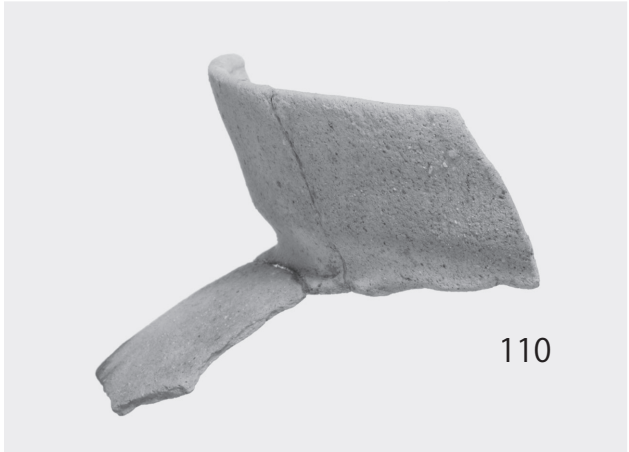
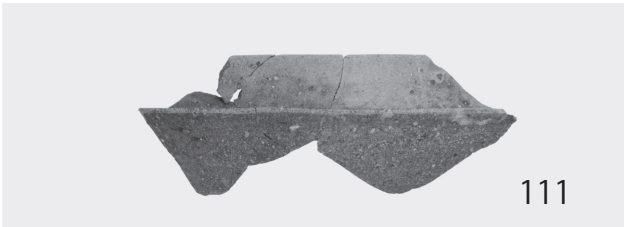
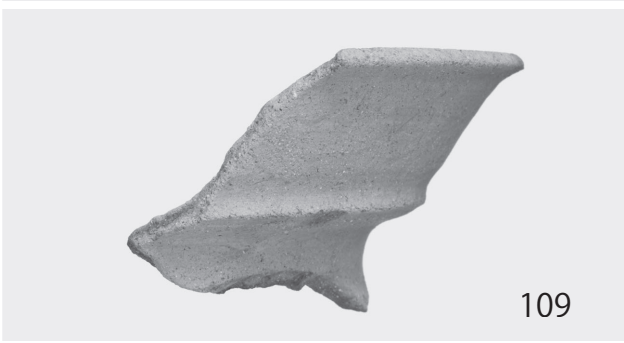
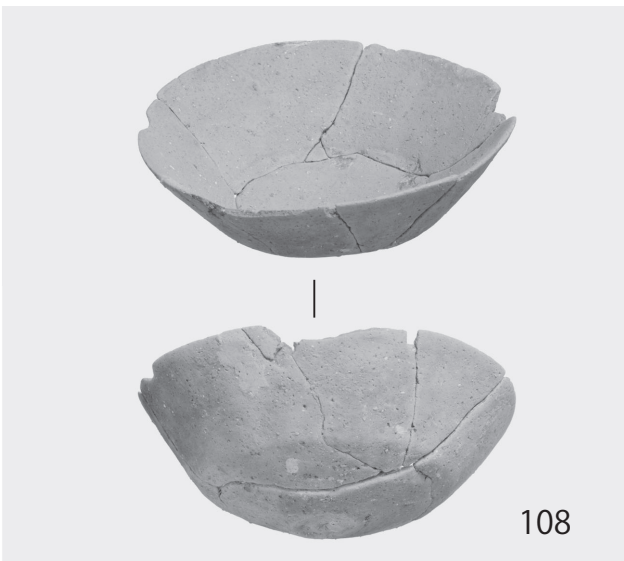
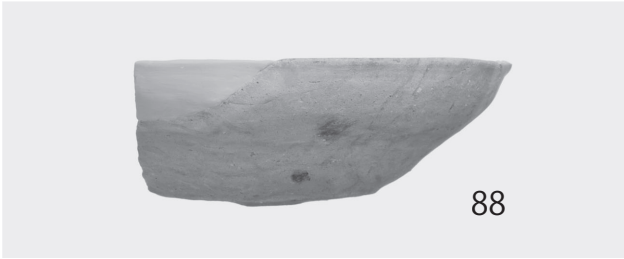
52、2区東壁第10a~13a層（西から）

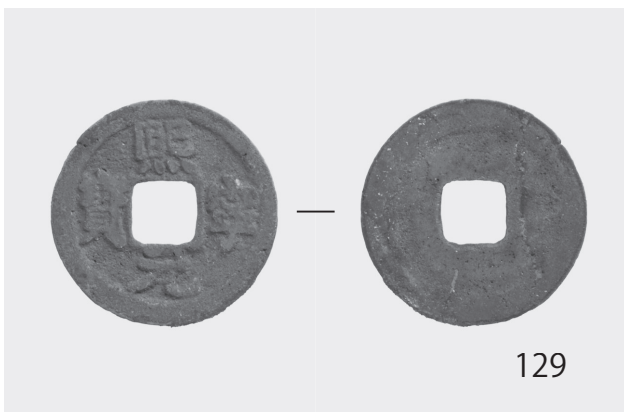
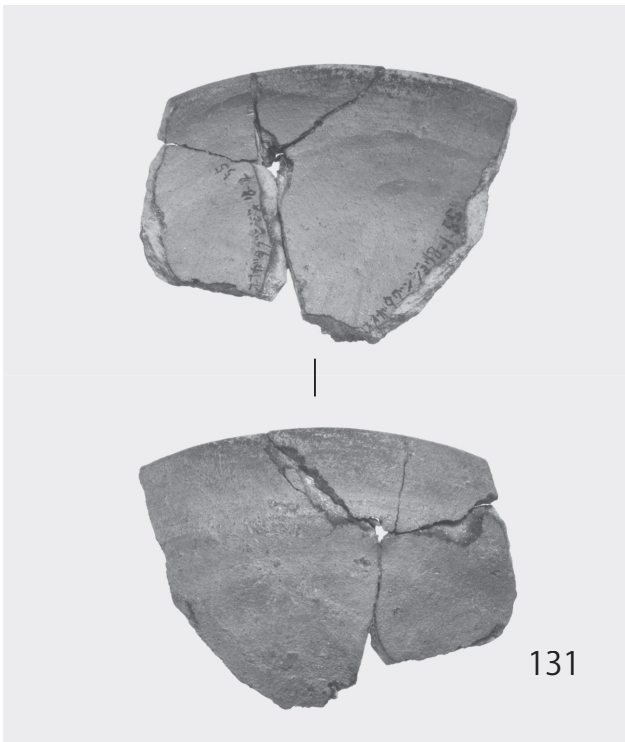


图版 16

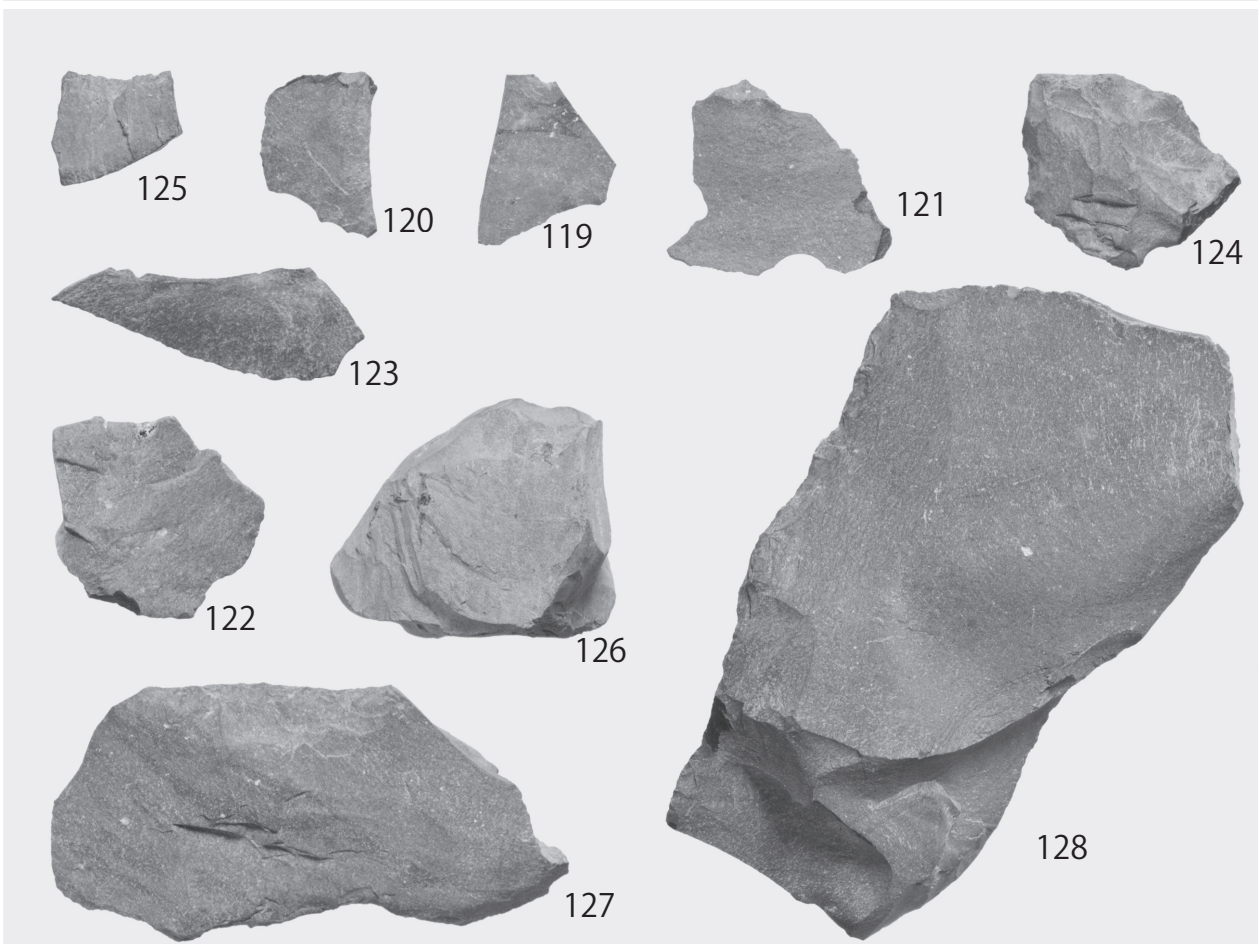
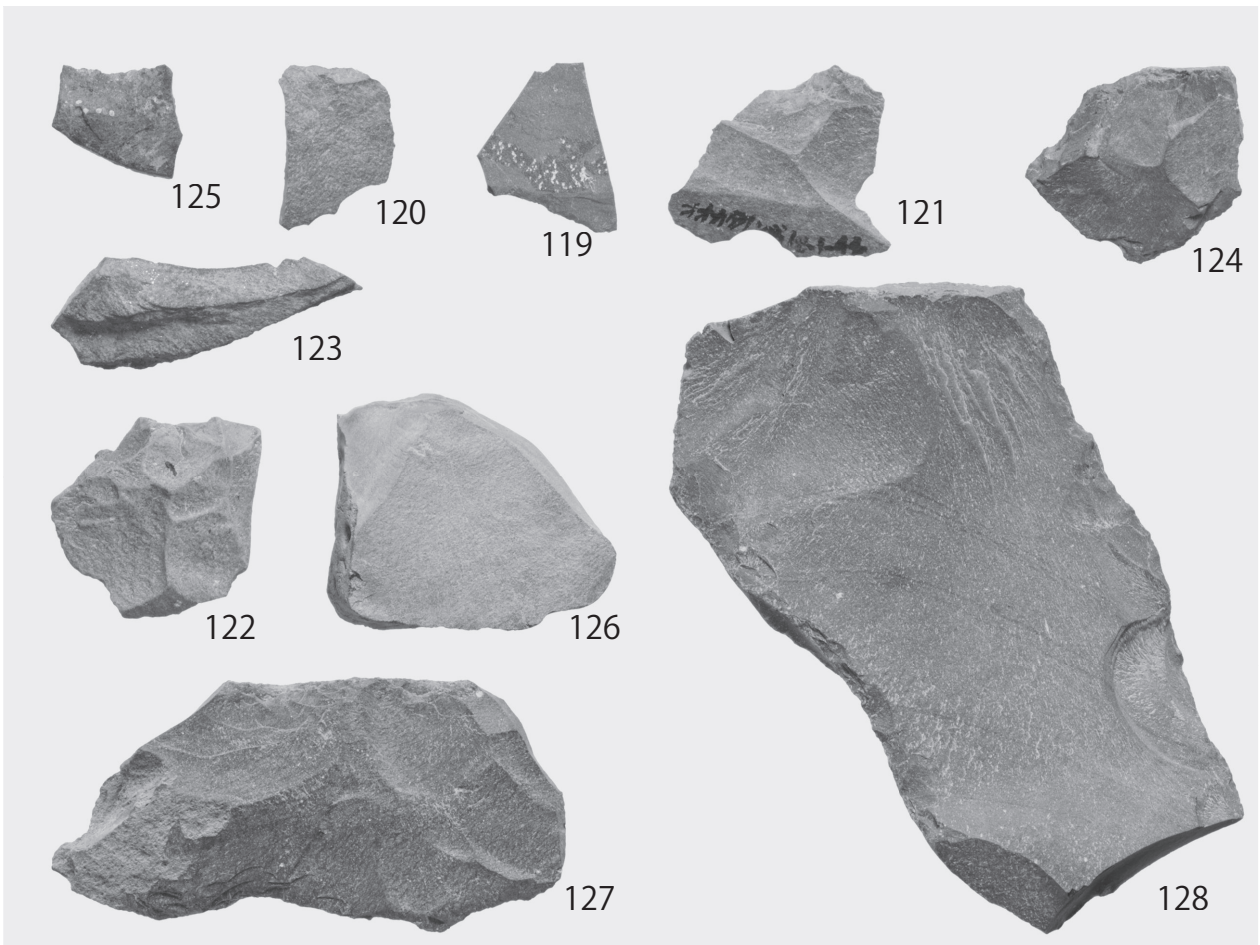








图版 20



報 告 書 抄 録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき5							
書名	大県郡条里遺跡5							
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第299集							
編著者名	三宮昌弘							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2020年1月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おおがたぐんじょうり 大県郡条里 いせき 遺跡	おおさかふかしわらし 大阪府柏原市 ほうぜんじよんちようめ 法善寺4丁目 ちない 地内	27221	69	34° 35' 58"	135° 37' 37"	20180402 ～20190531	1299㎡	恩智川法善寺 多目的遊水地
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大県郡条里 遺跡	生産	古代～中世	条里畦畔・溝・畝 土坑・ピット	陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師 器・須恵器・黒色土器・鉄製品・ 石製品・木製品		古代から中世にかけて条里型 地割に基づく水田及び畠を 検出		
	集落	縄文時代晩期 ～古代	溝・土坑・ピット	須恵器・土師器・墨書土器・瓦・ 転用硯・漆附着土器・製塩土器・ 鉄製品・弥生土器・縄文土器・ 打製石器・サヌカイト剥片		縄文時代晩期末～古代 の集落縁辺部の状況		
要約	<p>今回の調査では、2区の位置する縄文時代河川埋積により形成された微高地に対し、1区がその縄文河川が切り込み、微高地成立後はその後背湿地となる水平堆積が重なる低地に立地している事が判明した。また、2区で検出された噴砂脈が形成された時期の遺構面も確定できた。縄文時代晩期～奈良時代の微高地と低地の状況の対比もできるようになった。</p> <p>その後、低地部分が水域化して堆積が進む時期があるのが判明したのも大きな成果である。</p> <p>条里型地割の施行時期についても10世紀前葉頃とまで限定できるようになった。その後の耕地区画の変化でも、当初の地割から東西方向坪境のみ方向が変わり現代の歪な地割になる時期も判明した。それ以外にも時期ごとの洪水の変化も把握できた。</p> <p>また、既往の調査で地震変形説もあった第6a面の激しい凹凸が人為的な痕跡と確定でき、この形態は坪を越えて広がり、同時期層の把握にも有効である。</p> <p>最大の成果は、1区の坪の基本層序を確定でき、それにより、既往の調査の基本層序との詳細な比較ができた事である。</p>							

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第299集

大 県 郡 条 里 遺 跡 5

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2020年 1月 31日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号